Kのブルー

螺子（ねじ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｋのブルー

【Ｎコード】
Ｎ４１２９Ｕ

【作者名】
螺子（ねじ）

【あらすじ】
たった一年で大きく変わってしまった日本の地で、戦いの天才の血を受け継いだ男が、最強と謳われた者たちの眼前に舞い降り、戦いが始まる。

過去の記憶、戦うことの意味、命の重さ、憎悪。
彼らはただ戦い続けることでしか、それらを理解していくことができない人間なのだった。

息子

神奈川警察署の地下５階に隠された、特殊凶悪犯罪者用の取調室の扉の前に、罪人と警察官が並ぶ。
「中川陽太容疑者１５歳！南西神奈川中学校３年生！中川容疑者は２０１１年５月４日午後３時ごろ、複数の男子生徒に暴行をふるい、重軽傷を負わせたとされます！」

「うむ、入りたまえ。」
取調室の重たい扉が開く。
開いた扉の前には複数の警官と、容疑者の中川陽太が立っていた。
陽太は頭の上から黒い布をかぶり、両足にはそれぞれ６０ｋｇの逃走防止鉄球がついた鎖が巻きつき、両手にはアクリル製の手錠が３つ重なった状態でかかっていた。
そして警官とともに鉄球をゆっくりと引きずらせながら取調室に踏み入ってくる。。
「さっさと歩け！！」
警官が陽太に怒鳴る。
すると、取調室の中で待っていた中年男性が、たくさんの拘束器具をつけられた陽太の姿を見て不思議そうな顔をする。
「そんなに拘束する必要があるのか？」
この中年男性は、神奈川県警の署長　南浦大輔。
髪は白くなり、シワも増え、メタボにもなってしまった大輔は今年で６０歳。近々定年を迎えることとなっていた。

「はい！先ほど大暴れされたんで、拘束器具を増やしました！」
この声がでかくて若い男は、山崎健也。
きっちりとした服装。やや短めで清潔に洗われた黒い髪の毛。モノをまっすぐ見つめる鋭い目つき。まるで絵に書いたような新米刑事

だ。

「そうか、だがこれではまともに話も出来まい。手錠以外のものはすべて外せ。容疑者の顔を私に良く見せなさい。」

「はい！」

新米刑事の健也は大先輩の大輔が言ったとおりに行動する。鎖をはずし、陽太に覆いかぶさっている黒い布を取った。

大輔は陽太の顔を拝見する。大きいながらも鋭くとがった目。ちょうど耳が完全に覆い隠されるぐらいまで伸びた黒い髪の毛。スッと高い鼻。どちらかと言えば薄い唇。もし犯罪者で無かったのだとしたら陽太はそこそこ顔立ちの良い美男だったのかもしれないと大輔は思った。

「さて、質問に答えてもらおう。君はどうしてクラスの友達を傷つけたんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

陽太は何も答えない。

「ひどいイジメを受けていたと君の担任教師から聞いているが？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

静かに大輔の目を睨む陽太。陽太はまるで石像のように動かない。

石像の題名（タイトル）は『睨む少年』ということにしておこう。

チッチッチと時計の秒針の動く音が取調室に響き続けている。

「まぁイジメを受けるのも無理はないだろうね。君の父親は大量殺人の罪を犯して死刑になった中川清（なかがわきよし）だからな。君をイジメる生徒の気持ちも分からんではないがな。」

と大輔が言ったときだった。陽太は突然、目が覚めたかのように大声でしゃべり始めた。

「俺の父親は・・・・・・・・・・・殺人鬼なんかじゃねぇ!!!」
陽太の大きな声は取調室の外にある広い廊下まで響いた。

「同じクラスの人たちからイジメを受けたんだね？だから傷つけた。違うかね？」
「・・・ああ・・・・・・・・・・そうだよ。俺は父親が警察に捕まってからずっと『殺人鬼の息子』って言われつづけてたんだ！クソ！あいつら・・・・・・・あいつら!!!クソ!!クソ!!」

「はいはい分かった分かった。いったん落ちつけ！落ちつけ！」
少し興奮しかかっている陽太を健也と一緒に落ち着かせる大輔。

３０秒ほどで取調室は静寂を取り戻す。

「陽太君。君はクラスにいた男子生徒１５人を全員病院送りにした。全員一命はとりとめたが１５人中１０人はまだ意識が戻らないそうだ。残りの５人は意識はあるが恐怖でまともに会話もできない様子だ。本当に殴っただけでそうなったのか？」
「・・・・・・・・・・・ああ・・・・・・。ただ殴っただけだ。」
「ただ殴っただけ？お前のその拳で１５人も半殺しにしたのか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
陽太はまた黙りこむ。
「・・・・・・・・・・・・・１５人も傷つけといて、君は何とも思わないのか？」
と大輔が質問したとき、陽太の様子が急変する。
なんと突然笑い始めたのだ。
「・・・・・・・・ククククク・・・・・・フフフハハハハハハハハ！！！！」

「・・・・・・・ん！？」
大輔も健也も驚きで言葉を失った。

「あいつらを傷つけた時になんて思ったかって？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・最高だったね。最っっ高ぉぉぉだったよ！！あいつらの苦しむ顔が！あいつらの死にそうな面（つら）が！！！！ヘハハハハハハ！！！！！」
狂ったように笑う陽太。爆発する１５人の男子生徒に対する憎悪。
その憎悪があるがゆえに浮かび上がる笑み。
取調室にいる警察官は全員こう思った。
『こりゃぁ殺人鬼の息子とか言われても仕方がないな・・・・・・・・・・』
恐怖でまともに会話が出来ない男子生徒たちの気持ちがなんとなくわかったような気がした大輔たちだった。

６年前・・・・・・・・・・

２００５年の１１月１日。

肌寒い朝。たくさんの報道陣に囲まれながら、神奈川県警察署に入っていく凶悪犯罪者を乗せた車。

その凶悪犯罪者こそが陽太の父親　清（きよし）。当時は３４歳。
『謎のスナイパー』『殺人鬼』などと呼ばれていた清が人を殺した数は約３００万人にも及ぶ。とんでもない無差別殺人犯が現れたと日本中が騒いだ。しかし当時１０歳だった陽太にとって清はこの世にたった一人しかいない大切な父親だった。
「いいか陽太？あの人たちを殺さないとこれから日本は大変なことになるんだよ？」
「どうして？どうして人を殺すの？」

「お前がもう少し大人になったら分かる。」
清はそんなことを毎日毎日陽太に言っていた。
『あの人たち』とはいったい誰なのかは陽太の記憶には無い。
だが当然どんな理由があろうとも人殺しが許されるわけがない。最終的に清は横浜の高層ビルの屋上でたくさんの自衛隊のヘリコプターに囲まれ、捕まり、死刑台へ送られることになってしまった。

２００６年１２月１８日。死刑執行
「父さん！父さん！」
強化ガラス窓の向こうにいる父を呼ぶ陽太。
「どんな理由があろうとも人殺しは悪だ！殺された人と、その人の遺族の気持ちを考えろ！」
と一人の警察官が電気椅子に座った清に怒鳴りつける。
すると清はその場にいた人たちに意味深長な言葉を投げかける。
「・・・・・・・・これからこの国が崩壊していくっていうのに、いったいどうしてそれを黙って見ていられるんだ！！」

しかし、その言葉に対する世間の反応は冷たいものだった。

「君の妄想世界の事情につき合っているつもりはない。さぁ、スイッチを入れろ！死刑執行だ！」
電気椅子に高圧電流が流れ、清は他界する。
死に際に言い放った清の言葉は結局『妄想世界の事情』とされ、国民に届くことは無かった。

「父さん・・・・・・父さん・・・・・」
自分の父が目の前で死刑になった悲しみで、世の中にいる清の言葉を哀れんだ奴らが憎かった。だから陽太は清の言った最後の言葉を信じた。理由は淡々としているが、これが陽太が清の求めていたものについて真剣に考えようと思ったきっかけである。

清の行ったこの行為は重い犯罪だ。人を殺しても良い理由なんてひとつもない。死刑になるのは当然だ。

しかし・・・・・

『これからこの国が崩壊していくっていうのに・・・・・・・』

清のこの言葉がさすものとは一体何なのだろうか・・・・・・真剣に考えた。真剣に、真剣に。清が人殺しをしていたその背景にあるものを陽太はひたすら求め続けた。

しかし、そんな陽太を学校のクラスメイトは『殺人鬼の息子』などと呼び、ひどいイジメ行為を繰り返しおこなった。

答えが分からないことからくるストレス。クラスメイトから受けるイジメ。イジメっ子に対する憎悪。

それらに耐えられなくなった陽太はいつの間にか何の答えを求めているかすら分からなくなり、周りにいる人間を傷つけるようになっていった。そして落ちるところまで落ちていき、現在の状態に至るのだった。

『殺人鬼の息子』と呼ばれ続けている１５歳の少年陽太は１年間北東京特別少年院で不自由な生活をすることとなってしまった。

息子（後書き）

どうも螺子（ねじ）です！

「小説家になろう」に登録してからもう半年立つ頃でしょうか。私にとって二つ目の連載小説の執筆が始まります。

今回はバトルシーンに加えて、ミステリーをとりいれる予定なのですが、複雑すぎてわけ分かんない作品にならないように気をつけたいです。

前作「アーサーハンド」がイマイチな出来だったので反省し、改善しながらこの作品に挑みたいです。

どうかよろしくお願いします！！

ギャップ

２０１２年5月5日午後１7時ごろ。
北東京特別少年院
今日は陽太出所の日。
「中川陽太１６歳！出所（パイ）だ！１年間ご苦労だった。」
「・・・・・・・・はい。」
陽太は１年間、何事も無く少年院の不自由な生活を過ごすことが出来た。１年間で身長は急激に１５センチも伸び、１８５センチになった陽太。１年ぶりにまたシャバの空気を吸うことが出来るということに喜びを感じていた。
「今までありがとうございました。」
無表情でお礼を言う陽太。
「おう。しっかり社会復帰できるように頑張るんだぞ！」
と看守が陽太を元気づける。
「では、さようなら。」
陽太は北東京特別少年院の正門を後にし、街に続いている林へ入っていった。

陽太には両親も親戚もいないので、父親の友人である土井（どい）と言う男に引き取ってもらう予定だった。しかしその友人の個人情報がのっている書類には『神奈川在住』としか書かれていなかったので、陽太はどこに行けばよいか分からなくなった。

「神奈川のどこだよ。横浜か？鎌倉か？箱根か？・・・・・こんな大雑把な情報じゃ分かるわけねぇよ。」
愚痴を言いながら林の中を歩き続ける陽太。
この林を抜けた先には東京の街がある。陽太はすでに車の走る音が聞こえてくるところまで来ていた。１年間ずっと暗い地下で頭のお

かしい連中と一緒に暮らしていた陽太は、一秒でも早く街を見たいと胸を膨らませていた。

１０分ほどで木々は完全に無くなり、どこかの住宅街へ出た。豪邸が並ぶ住宅街だった。

「どれもみんなデケェ家だなぁ。もしかしてこの辺は土地が安いのかなぁ。」

キョロキョロしながら住宅街をゆっくり歩く陽太。どこまで歩いても豪邸しかない住宅街だった。そこには幸せそうに暮らす人々の姿があった。広い芝生の庭を笑顔で走り回る子供たち。庭園に向かってホースで水をまきながら子供たちに注意する母親。テラスで新聞を読みながら紅茶を飲む父親。

（平和すぎるな。なんて平和なんだ。俺はどうしてこんな生活が出来なかったんだ？どうしてこんなにのんびりと暮せなかったんだ？）

陽太は平和そうに暮らす家族がうらやましかった。

豪邸が建ち並ぶ住宅街をひたすら南へ歩いていくにつれて、だんだん通行人の数も増えてきていた。豪邸の数も次第に減っていき、オフィスビルなどが増えてきていたりと、周りが都会になっていくにつれて街の雰囲気は陽太の知らないものになっていった。３０分ほど歩くと、陽太は新宿に到着した。陽太は何回か新宿を訪れたことがあったのだが、現在の変わり果てた新宿の姿に陽太は驚きを隠せなかった。

「ど、どこだここは！？」

陽太は思わずそう言ってしまう。見たことも無い形の車が道路より３０センチほど浮いた状態で走っていたり、道路はまるで高級ホテルのロビーの床のように綺麗になっていたり、街のあちらこちらに『ワープ装置』と書かれた看板があったりもした。そんな街を歩く人たちはなぜか全員全身黒いスーツ姿で、陽太のジャージ姿を横目で見てクスクスと笑っている。ここは確かに新宿だった。しかし新

宿は陽太の知っている新宿ではなくなっていた。

（この5月の蒸し暑い時期にあんな暑そうなスーツ着てるやつに、俺のジャージを笑われるなんて・・・・・・・クソが。）

陽太は嫌そうな顔をしながら変わり果てた新宿の街中を歩きまわる。

確かに都会を代表する街新宿でジャージ姿は非常識だが、全員が全身黒スーツというのも非常識だ。陽太は混乱する。

（なんだよここ。本当に新宿か？まるで未来都市じゃねぇか。）

誤ってタイムマシーンにでも乗ってしまったのか不安になる陽太は街の人々に話しかけてみることにした。

「すいません。」

「はい？」

陽太が話しかけた人は３０代後半ぐらいの男だった。

「あの、俺久しぶりに東京に来たんですけど、ずいぶん変わったんですね。いったい何があったんですか？」

「・・・・・・・・・」

男は陽太の目を見つめたまま質問に答えない。

「あ、あのーーー」

「悪いが今忙しいんで他をあたってくれ。」

「は、はい・・・・・すいません。」

男は明らかに何か知っていそうだったが、陽太の質問に答えることは無く、不機嫌そうな顔をしてどこかへ行ってしまった。

その後も陽太は他の人たちにここ一年で何があったのかを聞きまくってみたが、質問に答えてくれた人は一人もおらず、なぜか冷たい目で陽太を見てくるようになってしまった。

（クソー！何でみんな答えてくれねぇんだよ！明らかになんか知ってんだろ！）

怒っていた陽太は電柱を力いっぱい蹴飛ばす。

変わり果てた東京の雰囲気について行けない不安といらだち。知りたいことを教えてくれない人々に対する不満。落ち着きを取り戻したい陽太はとりあえず生まれ故郷である神奈川県の秦野市に行くことにした。

（神奈川へ帰ろう。東京はダメだ。）

都会の空気に失望する陽太。

陽太が今いる場所は新宿。

東京新宿から神奈川へ電車でいく方法は、新宿駅から小田急線に乗るのが無難だろう。

陽太はまず徒歩で新宿駅に向かい、小田急線の改札口を探した。しかしどこを探しても『小田急』と書かれた文字が見あたらないので、陽太は優しそうな人を探して小田急線の改札口の場所を教えてもらうことにした。

「す、すいません・・・・」

「はいはーい。」

２０代半ばぐらいの元気な女性に話しかけた。笑顔で陽太の顔を見てくれているこの女性ならいろいろと教えてくれるのではないかと思った陽太。

しかし・・・・・・

「あの、小田急線の改札口がどこだか分りますか？」

「・・・・・・・・・・なんでそんなこと聞くの？」

突然女性の顔が暗くなる。

「え！？いや！俺、ここ1年間東京に来ることなんて無かったんで、なんも知らないんですよ。」

「すいません、私何も知らないんで他に聞いてください。では。」

女性は何かとても汚いものを見るかのような目で陽太を見てから立ち去って行った。

「あの人も絶対になんか知ってたな。なんで答えてくれないんだ？」

あんなに優しそうな女性ですら陽太の質問に答えてくれないのだとしたら、いったい誰が答えてくれるのだと言うのか。陽太は考え込む。

（小田急線無くなったのか？いやもしかしたら名前が変わっただけなのか？もう少し探してみるか。）

陽太はとりあえず神奈川へ行くことだけを考えることにした。新宿駅の隅から隅まで歩きまわった。たくさんのお土産店。たくさんの鉄道会社の改札口。コンビニ。ブランド店。人。人。人。人！・・・・・まもなく帰宅ラッシュを迎える時間帯なので人が多い新宿。

するとたくさんの人ごみで埋め尽くされはじめている新宿駅のターミナルで陽太は不思議なことに気付いた。陽太の目線の先にある『K』と書かれた看板。そのすぐ近くにある小さな改札口だけは全く人が寄り付いていなかった。

「あれは・・・・改札口か？『K』ってなんだ？」

不思議そうな顔をして陽太はその看板に近寄った。

Kと大きく書かれた看板の下には小さな文字でこう書かれてあった。

『南神奈川行き。電車賃は５０円です。電車は一時間ごとにまいります。』

久々に目にした『神奈川』という文字。陽太はまず電車賃の安さに驚いた。

（５０円！？安！！子供料金じゃねぇよな？でもこんなにお得な電車に誰も人がいないってのがなんか怖いな。まぁいいや。これで故郷に帰れる。）

陽太の全財産である２００円のうち、５０円を切符代に費やし、残りの１５０円でペットボトルのコーラを買い、改札口を通る。

「まもなく各駅停車南神奈川行きが参ります。黄色い線の内側までお下がりください。ホームと電車の間が一部広く開いております。足元に十分ご注意ください。」

駅のホームに流れるアナウンスを陽太は眠そうな顔で聞いていた。
駅に入ってきた真っ白い電車の中に乗客はいなかった。
「お！貸切だ！」
ドアが開き、陽太は乗車する。そして一度伸びをしてからシート上で仰向けに寝転がり、眠りについた。
しばらくすると陽太は、いびきをかいて眠っていた。
「んごー・・・・・・んごー。」
少年院での生活は自分との戦いが続いていた。精神力が無くては１年間ではなかなか出所できない。やっとの思いでその苦難の生活から解放された陽太は、溜まっていた眠気を一気に開放していたのだった。

陽介が眠りについてから3時間がたったころ。

「終点ですよ。起きてください。」
無表情な駅員が眠っている陽太を起こす。
陽太は目を覚まし、ゆっくりと起き上がり、コーラを少しだけ飲み、電車から降りた。
電車の中で3時間以上も眠ったにもかかわらず、眠気が収まらない陽太は、駅のホームにある木でできたベンチを見つける。
「くっそー眠い・・・・・・今日はここで寝るか。」
睡魔に負けた陽太は吸い込まれるようにそのベンチに寝転んだ。そしてまた深い眠りについた。

翌日5月6日朝8時。
陽太はすがすがしい気持ちで目を覚ます。
「うーん良く寝た。」
大きく伸びをしてから駅のホームを歩き、改札口へ向かう。

（にしても、ずいぶんと静かな駅だな。もう朝の8時だろ?通勤通学ラッシュの時間帯じゃねぇのか?）
陽太は不思議そうに無人の駅構内を見渡す。

そして駅の外に出る。

駅の外には陽太が1ミリも予想していなかった光景が広がっていた。
陽太は思わず大声をあげてしまう。

「はぁぁぁぁぁ!!?・・・・・・こ、ここは本当に神奈川なのかぁぁぁ!?・・・・い、いったい何があったって言うんだ!」
予想外な自分の故郷の姿と、驚きでふるえている自分が信じられなかった。1年ぶりに見た神奈川の姿はあまりにも変わりすぎていて、変わりすぎていて・・・・・・・・・

逃走

陽太は変わり果てた神奈川の姿を目にして、唖然とする。ほとんどの建物が黒く焦げていて、窓ガラスが割れていた。電柱はすべて倒れ、道路は砂ぼこりで完全に覆われていた。まるで大空襲があったかのような荒れた姿になってしまっていたのだ。

（せ、戦争でもあったのか！？神奈川と東京都のこの差はいったい何だ？なんでこんなに荒れてんだ？）

東京にいた時よりも混乱してしまう陽太。もはやここは『神奈川』と呼べるような場所ではなかった。

すると陽太の右後ろから薄汚れた髪の長い中年男性が機関銃を構えて近寄ってきた。陽太は驚く。

「な・・・・・銃！？本物か！？」

「・・・・・・・・・・・・」

中年男性の目はイカれていた。銃を構えた状態でニヤニヤと笑っている。何日も体を洗っていないのだろうか、垢（あか）の汚れが体中にこびりついてしまっていた。

銃口を向けられた陽太は両手をあげて、命乞いをする。

（おいおい冗談じゃねぇぞ！やっとの思いで出所して故郷に帰ってきたっていうのに、なんでこんなホームレスみたいなおっさんに殺されなきゃならねぇんだ？）

陽太は周りを見回して、この状況の攻略法を探した。するとその男が突然陽太に話しかけてきた。

「・・・・・丸腰で、K地区に来るとはいい度胸だ。俺達は外から来た人間をぶっ殺す役目があるんでね。死んでくれや！」

「ま、待てよ！俺は元々この辺に住んでたんだぞ！？1年前に少年

院に入れられて、昨日やっとの思いで出所してきたんだ！だからいま日本がどんな状況になってるかなんてわかんねぇんだよ！・・・・・なぁ頼む！いろいろと俺に教えてくれねぇか！？」

「・・・・・・・・・・・・」

じっと黙ったまま動かない男の後ろから次々と機関銃を持った男たちが集まってくる。

（まずい！奴らの仲間か？このままじゃ殺される・・・・・・・）

焦る陽太。体中から汗が染みでてくる。

中年男性がニヤリと笑いながら陽太に話す。

「そんな嘘を誰が信じるんだね？フン！見苦しいなぁ。」

「嘘じゃない！助けてくれ！」

「ダァメだ！死ねや！」

ついに男たちの機関銃が陽太に向かって鳴り響く。銃弾は陽太の体に向かって飛んでいく。陽太は死を確信した。

（クソォ・・・・・）

そのときだった。そこに1人の少女が陽太の目の前に立ち、銃弾をすべて体で受け止めて、陽太の盾になった。

「え！？」

陽太は一瞬何が起きたのか分からなかった。驚くことにその少女にはほとんど銃撃が効いていなかった。銃弾はその少女の皮膚にはじかれて、威力を失う。

（今・・当たったよな？もしかして服の下に防弾服着てんのか？）

「私が奴らを引き付けるからあんたはあっちに速く逃げて！」

「お、おう！」

陽太はその少女の言うとおり、荒れ果てた街に向かって走って逃げた。

少女は陽太が遠くへ逃げたのを確認した後、煙幕爆弾を爆破させ、陽太に続くように逃走した。

1キロほど逃げた陽太は廃墟ビルと廃墟ビルの間にある狭いゴミ捨て場に隠れた。
「はぁはぁはぁ・・・・疲れた。・・・・・なんで俺が・・・・こんな目にあわなくちゃいけねぇんだ！」
呼吸を整えながら怒る陽太の背後から、先ほどの少女が歩いてくる。
「大丈夫！？怪我はない？」
体中傷だらけの少女だったが、自分の心配よりもまず陽太の心配をした。
「君こそ傷だらけじゃないか！」
「この傷なら心配無いですわ。ちゃんと防弾剤は塗ってありましたから。」
「防弾剤（ぼうだんざい）？」
「あ、知らないの？防弾剤は体に塗るだけで防弾になる薬よ。」
「へ、へぇー。そんなものあるんだ。でも怪我してるじゃないか。早く手当てしないと。」
「うん。防弾剤は衝撃を完全に吸収するものじゃないからね。何発も何発も食らったら命を落としかねないわ。でもこれぐらいなら大丈夫よ。布でちゃんと止血してあるから。」
幼児体型で幼児顔で短髪のその少女の姿が陽太にはとても凛々しく見えた。この人ならいろいろと教えてくれるのではないかと思った。

「あの。俺北東京特別少年院から昨日出所したんですけど、ここ1年間で何があったか教えてもらえませんか？」
「うん。いいよ。」
あっさりとした返事を聞いた陽太は心の底から喜んだ。
「ありがとう！」
「じゃあここから2キロくらい離れたところにある喫茶店で少し話しましょ？」
「え！？いやいや、今ここで話してよ。」

「ここはさっきの奴らの領土だからすぐ見つかっちゃう。そこに私の自転車があるからあんた漕いでよ。2人乗りだよ2人乗り。」
自転車を漕ぐのはめんどくさいと思ったが、せっかく情報を提供してくれる人が現れたのだから我慢しようと陽太は自分に言い聞かせながら自転車にまたがった。
「はいはい漕ぐ漕ぐ！！」
少女を後ろに乗せた状態で必死に陽太はペダルを踏んだ。
「あ、そこ右ね。」
「はいよ。」
「それからそこまっすぐ行ったら、突き当たりを左ね。」
少女に言われるがままに陽太は自転車を漕いだ。

5分後。
陽太と少女は自転車から降りる。

『喫茶ねこばば』

廃墟ばかりが建ち並ぶ街の一角にある奇妙な名前の喫茶店は最近建ったばかりの新築のようだった。
2人はこの喫茶店の中に入り、カウンター席に座った。
「この喫茶店はね、両親が経営してるの。ほとんど客なんて来ないから貸切だよ。」
「そ、そうか。」
「あ、そう言えば自己紹介がまだだったね。私の名前は土井友恵（どいともえ）ね。14歳なの。」
「よろしく。俺は中川陽太だ。16歳。」
すると陽太の背後から1人の男が近寄ってくる。
「やっぱり陽太君だったか。」
「はい？」
「あ、紹介するね。この人は私のお父さんなの。」

「土井誠（どいまこと）だ。よろしく」
誠は今年で４０歳。真っ白な髪を７：３で分けていて、白い髭（ひげ）を鼻の下に生やしているとても優しそうな男だった。体型は陽太と大体同じくらいの長身だ。
陽太は『土井』と言う苗字に心当たりがあった。
「もしかして、土井さんって俺の身元引受人の・・・・・・」
「そうだ。君の父親とは中学時代からの友人だ。今朝ここに『K鉄道に一名客が乗った』って聞いたから友恵を駅に向かわせたんだ。君も運がいいね。駅の近くにいるあの人たちに銃を向けられたらほとんどの確率で死ぬんだ。友恵に感謝するんだな。」
「は、はい。でもなんかいろんなことありすぎて混乱してるんで、まずは今の状況について説明してもらえませんか？」
「おうおう。まぁこれでも食いながら聞きな。」
陽太の目の前に、特盛りカレーがおかれる。腹が減っていた陽太はそのカレーに食いついた。

そして、陽太がいなかったこの１年間で日本にあったさまざまな出来事についての話が始まった。

豪牙

“今から約半年前２０１２年の1月1日。
日本全土にロチェル病という恐ろしい感染症が広まった。ロチェル病の原因となるロチェル菌は血流を止めてしまう作用があり、感染した人間はすぐに死に至る。その上感染能力が非常に高く、短時間で日本全土に広まっていき、たった1週間で全人口の半分が感染したという。”

「俺たちは偶然感染しなかった。運が良かったんだ。」
と誠は言う。

“２０１２年1月１０日。海外の先端医療でも感染をとめることが出来なかったロチェル病。絶望の地に置かれた日本国民はもう神にでも祈るしかなかったのだ。するとその祈りにこたえるかのようにある一族が『神の力』を降臨した。その一族の名前は『豪牙（ごうが）』＞ｉ３０２４２―２４７９＜
当時は奇妙な魔法を使う組織として活動していたらしい。そこの長男、豪牙将（ごうがしょう）はとても優秀な魔術師だったらしく、『神の力』とも称される魔法でロチェル菌をすべて殺菌し、日本国民を救ったのである。”

「ま、魔法がこの世にあるのか？」
陽太は驚く。
「そうだ。」

“豪牙家の一族は他にもたくさんの魔法で人々を幸せにした。病気を治すのはもちろん、死んだ人間を生き返らせることもできるのだという。その結果・・・・・・・・

『豪牙の魔法のおかげで私たちは生きていられているのだ』
『豪牙に感謝しろ』
『豪牙は神だ』
こんな言葉が全国に広まった。
すべての日本国民が豪牙を尊敬し、豪牙を中心に行動する。そして日本は豪牙国家という新しい国家を完成させたのだった。”

「東京があんなにすごい街になってたのは・・・・・」
「そうだ。豪牙家のおかげなんだ。豪牙家の人が何らかの方法で急激に科学を進歩させたんだ。」
「へぇーほんなこともできるのか」
陽太はカレーを口いっぱいに詰めた状態で納得する。
「だがな。俺たちはそれが気に入らなくて、ここに来たんだ。」
「なぜ？」
「豪牙が人を幸せにする神だってのは表の顔。でも裏の顔は金に汚ない悪魔なんだ！」
誠の顔が急に恐ろしくなる。
「あ、悪魔？」
「そうだ！豪牙国家になってからは金持ちしかまともな生活が出来なくなったんだ。幸せなのはごく一部だけ。豪牙を敬う心と金の両方がない奴は殺されるんだ！」
「こ、殺される！？ちょっと大袈裟じゃないんですか？」
陽太は驚く。
「数ヶ月前、俺の兄は長年務めた会社を辞めさせらちまったんだ。いわゆるリストラだ。あいつに残された道は３つ。１つは豪牙一族に頭下げて、助けを求めて、一生豪牙一族のために生きる道。２つ目はギャンブルとかで大金持ちになる道。３つ目は死だ。兄は絶対に豪牙に助けを求めようとはしなかった。一生不自由に暮らすなんて嫌だったのだろうし、俺もそれでいいと思った。そしたら・・・・・」

「殺されたのか・・・・・」
「ああ」
「・・・・・・・・・。他にもたくさん生きていく方法はあったはずなのでは？」
「あいつらはバカなんだよ。そういう発想は無いんだ。だから俺たちはあいつらが嫌いなんだ。」
「・・・・・・・・・」

“豪牙のやり方が気に入らないと思っている人は土井一家だけではなかった。土井家と同じようなケースで身内を殺された人、豪牙の裏事情を知ってしまった人たちは神奈川県に集結し、『K』を結成する。＞ｉ３０２４１―２４７９＜
Kというのは神奈川の頭文字をとったものであり、日本国からの脱退を意味するものだった。もともと神奈川県の人口は約９００万人。東京に次ぐ第二位だった。しかし『K』を神奈川に結成してからは、ほとんどの人が他の都道府県に移動し、現在は１０万人程度まで減少したのだった。豪牙に縛られない国家を目指して、日本国との縁を切った『K』は日本国民から非難されるものとなったのだ。”
「ちょっと待て？なんでたった１０万人しかKに集まらないんだ？」
「日本国民のほとんどは豪牙にロチェル病から救われた人なんだ。その恩が大きすぎるんだろう。」
「そ、そういうことか・・・・・」
大量にいたロチェル病患者を助けてくれた豪牙一族に対する日本国民の感謝の気持ちはあまりにも大きすぎて、豪牙の裏の顔には目もくれず、表の顔に惹かれていったのだ。だからKにはたった１０万人しか集まらなかったのだ。

「ここは日本じゃない。Kっていう１つの国なんだ。俺たちは豪牙を潰すために結成されたんだよ。まぁ豪牙にケンカを売ってるわけだからものすごい攻撃を受けたよ。爆撃、毒ガス、銃撃。」

「戦争があったのか。」
「いや、こちらからはまだ何もしていないがね。豪牙が一方的に攻撃しているだけだ。だからランドマークタワーも、赤レンガ倉庫も、箱根温泉も、鎌倉の大仏も今は燃えカスだ。」
「何で反撃しねぇんだ?」
「俺たちは人口が少ない。だから正面からぶつかっていくようなバカなマネはしない。俺たちは豪牙家一族をこっそりと暗殺する予定なんだ。こっそりとな!」
「暗殺・・・・・・・・」
「奴らの城を潰すためには技術のある殺し屋が必要なんだ。そう、陽太君。君だよ。俺たちは君を待っていた。」
と言うと、誠は陽太に向かって真っすぐと指をさした。
「・・・・・・・・・・・えええ!?」
少し間をおいてから驚く陽太。
「駅前で攻撃してしまった件はKの国民の代表として謝ろう。だが君にはKの切り札としてここにいてもらいたい。暗殺隊の隊長になってもらいたいんだ!」
「は、はぁ・・・・・でもどうして俺なんだ?」
「君には才能がある。殺し屋としての才能がな!」
「なんでそう分かるんだ。」
「オーラ・・・・・かな。」
誠は腕を組んでじっくりと陽太を見つめる。
「オーラ?」
「そうだ。見ただけで目の前の人間を震え上がらせることが出来そうなその人間じゃねぇみてぇな目が醸(かも)し出している殺気に満ちたオーラ。君の父さんにそっくりだ。それに・・・・・・」
「ちょっとお父さん!言いすぎだよ!ご、ごめんね陽太君?」
友恵が誠の言動を注意し、あわてて陽太に謝る。陽太は無表情のまま誠を睨む。
すると突然誠が不気味な笑みを浮かべて友恵の方を見た。

「友恵。お前自分の銃どこにやった？」
「え？」
腰にあるポーチの中にしまっておいたはずの拳銃がなくなっていることに気付いた友恵。
「友恵。まさかさっき丸腰で外に行ったのか？」
「い、いえ、確かにこのポーチの中に入れといたはずなんだけど・・・・・・・」
友恵は焦る。すると誠は陽太のジャージを指さした。
「陽太君。君の尻のふくらみは何かね？」
「・・・・・・・・・・・」
陽太はジャージの下にはいていたボクサーパンツの中に手を突っ込み、隠し持っていた拳銃を取り出した。その拳銃は友恵のものだった。
「わ、私の拳銃！！なんでパンツの中に隠してんのよ！」
友恵は顔を赤くして拳銃をとり返す。
「友恵さんには申し訳ない事をした。だが俺にも警戒心があるんだ。こんな荒れ果てた地で突然見ず知らずの人の家に来たんだ。銃ぐらい持ってないと不安になるんでね。」
陽太はうっすらと笑みを浮かべていた。
「いつ友恵のポーチから盗んだんだ？」
「ここに来る時、自転車で二人乗りしてきてたんです。その時にこっそりとパクりました。」
「ううううう私のデザートイーグルがぁ・・・・・・・・・こんな男のケツの・・・・ケツの・・」
友恵は陽太のパンツの中に入ってしまった拳銃（デザートイーグル）を悲しい表情で磨いていた。
「その先読み能力も父親ゆずりだな陽太君。頼む！暗殺をするのは明日なんだ！暗殺隊の隊長になってくれ！」
「・・・・・・・・人殺しは犯罪ですよ？」

「K地区は無法地帯だ。ここに逃げ込めば人殺しは犯罪じゃない。」

陽太は考え込む。

（どうせもう逃げ場なんてねぇしな。土井さんを信用する気になんてならねぇが、豪牙家はどうやらとても悪い集団のようだ。入隊するべきか、しないべきか・・・・）

ここでの答え方一つで自分の運命が大きく変わることを確信した陽太。目を閉じて集中し、ひたすら考え込んだ。

そして、答えが出る。

「いいでしょう。暗殺隊に入隊します。ただし条件があります。隊長にはなりません。」

「おおお！いいだろう！隊長で無くても入隊してくれるだけでうれしいよ。」

誠は大いに喜んだ。

「あともうひとつ。」

「なんだね？」

「父さんが人殺しをしていた理由を教えてください。」

「え！？」

陽太の質問に驚く誠。

「父さんのこと知ってますよね？」

「あ、ああ・・・・・・・。殺しをやっていた理由はよくわからんが、私の知っている範囲ならすべて教えてあげよう。友恵、店番頼むぞ。陽太君、ついてきなさい。」

誠は陽太を連れて、店の外に出る。

「ついてきなさい。」

２人はボロボロになった建物が立ち並ぶ街道を歩き始めた。

（いったいどこへ連れていくつもりなんだ？）

誠に対してまだ半信半疑な感情を持っている陽太はまたボクサーパンツの中に友恵の拳銃（デザートイーグル）を隠していた。

豪牙（後書き）

『ちょっとしたワードの説明』

“ボクサーパンツ”⇒フィット感に優れた男性用の下着。スポーツをする方などにはお勧めです。

“デザートイーグル”全長２６，９センチ。重量２０５３ｇかなり強力な拳銃。撃った時の反動がものすごいので、女性にはあまりお勧めしません。

“ロチェル病”　全身の血管が機能しなくなる病気。ロチェル菌が原因とされている。感染能力が非常に高い。

クズ

自分の父親のことが知りたい陽太はひたすら誠についていく。

「土井さん。いったいどこに向かっているんですか？」

「・・・・・・・・まぁ黙ってついてきなさい。君にはとっておきのプレゼントもあるんだ。」

「プレゼント？それは父さんと関係あるものなのか？」

「もちろんだ。」

「・・・・・・・・・」

荒れた街道を１５分ほど歩く。

そして、２人は『中川清』と刻まれた大きな墓の前まで来た。

「清の墓だ。」

墓標は一辺が３ｍほどの立方体の形をした岩だった。

「この岩の下に父さんがいるのか。」

「そうだ。君の父さんは立派な人間だったよ。勉強も運動神経もルックスも完璧だった。」

誠はどこか悲しそうな顔でその墓標を見上げていた。誠と清は中学生のころから良き友であり、良きライバルでもあった。何もかもが天才的に優れていた清に対し、不器用だった土井は血のにじむような努力を重ねて、清を追い抜こうとしていたのだ。

「どうして父さんは殺し屋なんかになったんだ？そんなにすごい人だったなら他にもっとやれることがあったんじゃないのか？」

と陽太は質問する。

「・・・・・・・・俺はいつだってあいつの近くにいた。遊びに行くときだって、勉強するときだってな。だからあいつがどういう思考を持っていたかは大体知っているつもりだった。だがな・・・・・」

誠は突然下を向き、暗い表情になる。
「土井さん？」
いったいどうしてしまったのかと陽太は心配する。
「悪い陽太君・・・・・・。なんであいつが殺し屋なんかになったかは俺にも分からねぇ・・・・・・。答えたくないわけじゃない。本当に分からないんだ。あいつは１０年前に突然変わったんだ。おそらく何かに目覚めたんだ。きっと何かを見つけたんだ。」
「変わった！？突然殺し屋になったのか？」
「ああ、何か理由があったみたいなことを言ってたが、俺から見ればあいつはただの『殺人鬼』だった。その時あいつは人間のクズになっちまったね！」
殺し屋＝クズ
「人間の・・・・・・・・クズ・・・・・・・だと！？」
陽太はパンツの中にしまっていた拳銃（デザートイーグル）を取り出し、誠の後頭部に突きつけた。陽太は怒っていた。
「俺はな、ずっと『殺人鬼の息子』っていう肩書きを背負って生きてきたんだ。だからたくさんイジメを受けた。・・・・・・・・・・・・・・なんで俺の親父はクズなんだ！？何か理由があったから殺し屋になったんだろ？なんで何も知らないくせにクズって言えるんだ！？答えろ！！」
「クックックックックックック・・・・・・・・・・・・・・。」
誠は突然笑い始めた。
「何がおかしい！」
「クックック・・・・・・・・・・俺のことを知っていてその銃をこちらに向けているのか？」
「なに！？」
ピシッ！！！

太い糸が切れたような音がしたかと思うと、陽太の持っていた拳銃が真っ二つになり、ゆっくりと静かに地面に落下した。
何が起きたか分からない陽太。分かっていることと言えば、誠の腰にある４０?ほどの刀が一瞬だけ光を反射させて陽太の目をくらませたことだけだ。

「銃が・・・・・。」
真っ二つになった拳銃（デザートイーグル）を驚いた表情で見る陽太。
「俺はそんな人間のクズを信用してこの短刀を手に取ったんだ。それで俺もクズになったんだ。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・なぜ?」
「・・・・・・・・なんでだろうな。信頼、友情。あいつについていけば間違えないと思ったんだ。おそらくあいつはあの時すでに日本が今の状況になることを予知していたんじゃないかな。」
「そんなことができるのか?」
「あくまで推測だ。他に何か理由があったのかもしれないがな。」
ほんのり雑草の匂いがする清の墓の前。涼しい春の風が吹く中、２人はただ呆然と墓標を見つめていた。

すると陽太が思い出したように話し始める。
「そういえばさっき言ってたプレゼントって何だ?」
「・・・おお!そうだ!この墓の後ろに引き出しがあるからそこから鉄の箱を取り出してきなさい。ホレ!これが鍵だ。」
大きな銀色の鍵を渡された陽太は清の墓の後ろに回り込み、その引き出しを開けて鉄の箱を見つける。
「なんだこの箱。」
「いきなりその箱に触れると高圧電流が流れるから気をつけろ。慎重にその鍵を使って電流をとめるんだ。」
「はいはい。（もっと早く言えよ・・・）」
陽太は鍵の端をつまみ、鍵穴に挿入し、ロックを解除する。

「よし！開いた！」

鉄の箱の中には青色の巨大な拳銃があった。

「清の使っていた拳銃『ハングリーブルー』だ。」

「はんぐりーぶるー？」

「そうだ。通称『ハンブル』。１４ミリ専用弾使用の大型自動拳銃。重量２５ｋｇ、長さは３５ｃｍだ。」

＞ｉ２７０１８―２４７９＜

陽太はまずその拳銃の重量に驚いた。

「２５ｋｇ！？重すぎだろ！・・・・・・・うわっ重い！」

片手用の形状にもかかわらず、片手ではとても持てないような重さがあるハングリーブルー。

「それはエメネレウソンっていう南米で発見された特殊金属でできているんだ。強度は世界一だが、その重さはお前の筋力でカバーするしかない。」

「そ、そんな無茶な・・・・・・・」

２０ｋｇのダンベルを想像してもらいたい。並の筋力では片手で持ち上げることは困難だ。なのにハングリーブルーは２５ｋｇ。

「こんな重い銃使えねぇよ！」

「でも清はそれを使いこなしてたぜ？」

「うーん。」

渋々ハンブルを手に取る陽太。あまりの重さに一度落としそうになる。

「足に落としたりしたら大変だな。」

全力でハンブルを握り、腕の筋肉をプルプルと震わせながら構えのポーズをとる。陽太はその日、何度も何度もその練習を繰り返した。

「大事に使えよ？世界に二つとない代物だ。」

「そりゃぁこんなに重ければ威力も半端ねぇだろうな。」
「ああ。」
翌日、陽太は強烈な筋肉痛に襲われた。

獣

5月6日の夜11時。豪牙一族の屋敷。

ジリリリリリリリリリ

ヨーロッパ風で、まるでどっかの王国の城のような形をした豪牙一族の屋敷中の警報が鳴る。

「侵入者だ!!侵入者だ!!旦那様と将様を優先的に避難させろ!」

豪牙一族の屋敷の敷地面積は約1100000?。警備は万全。たとえ侵入したとしても何もできずに捕まってしまうのがオチだ。しかし・・・・・・

「大変だ!敵はゴールドです!敵はゴールド!!」

「な、なんだと!?」

偉大なる豪牙一族を守るために、あらゆる訓練をこなしてきた百戦錬磨の警備員たちが怯えてしまう『ゴールド』という単語(ワード)。

「旦那さまは別館に避難しました。しかし将様はゴールドと戦うと言って武器庫に行ってしまいました。」

「何!?はやく連れ戻すんだ!」

「し、しかし・・・・・・」

すると銃声が二発鳴り響く。

「うわっ!」

「ぐあっ!」

2人の警備員は1発づつ銃弾を食らい、赤い絨毯(じゅうたん)の上に紅(あか)い血を散らして倒れた。そしてそのすぐ横を身長2mほどの大男が歩く。

「我が名はジュラバヌア・エデル。我は今夜豪牙将を殺しに来た!姿を現せ豪牙将!!」

コントラバスのように音程の低い声。グレーのロングジャケットを着ていて、髪は黒く長めで、顔中に黒いひげを生やした、肉食獣のような中年男性はひたすら豪牙将を探していた。するとそこに・・・・・・

「お望み通り参上いたしたぞエデル。」

エデルの背後に銃を構えた２０歳ほどの男が立つ。その男こそが豪牙家の次期跡取り、豪牙将だ。将の肩まで伸びた銀色の髪は屋敷の照明でキラキラと輝き、顔や体はエデルとは正反対で、まるで乙女のように美しかった。

「背後に現れるとは、卑怯なのではないか？」

と言いながら振り返るエデル。

「ぬかせ！他人の屋敷にこっそり忍び込むのも卑怯だろ！」

と言い返す将。

「我々ゴールド隊は正面玄関から突入したのだがな。まぁいい。我の目的は貴様を殺すことだ。いざ尋常に勝負。」

「望むところだ。・・・・・・・と、言いたいところだがもうお前死ぬぞ！？」

と言った直後に将はエデルに向けて銃弾を放った。

銃をすでに構えていた将に対して、ただ棒立ちになっていたエデルが先手攻撃を食らってしまうのは当然だ。しかし防弾剤を全身に塗っていたエデルには、ほぼ無傷だった。

「防弾剤か・・・・・・・」

「デザートイーグルでも突破できない高級防弾剤だ。そんな安物のベレッタの弾が効くわけ無かろう。」

エデルはロングジャケットの内ポケットの中に手を伸ばし、二つの拳銃を取り出し、将に向かって構える。

「なんだその銃は？」

「この銃は、グロック１７Ｌだ。威力は低いが、命中率に長けた銃だ。」

「悪いが私も防弾剤を塗っているのでね、そんな小型の銃は効かな

いのだよ?」
「フハハハハハ。たとえ防弾剤を塗っていたとしても何発も何発も食らえば、ダメージを受ける。」
「そうか、ならこちらも攻撃を仕掛けさせてもらう。」
将はまた銃をエデルに向けて撃った。
屋敷の中に響いた銃声は4回。すると将はあることに気付いた。
(待てよ!?今銃声4回だったよな。確かに俺は今4回撃った。なのに・・・・・なのになぜエデルの銃口からも煙が出ているんだ?あいつも撃ったのか?だったら銃声は5回以上あるはず・・・・・まさか!)

たった4回撃っただけでエデルを倒すことは出来ないということぐらいは分かっていた将。しかし、将の銃弾は一発もエデルには命中してはいなかった。なぜなら、エデルは驚異的方法で銃弾を回避していたからだ。
「ま・・・・・・・まさか・・・・・・貴様!」
将の額から汗が流れ出る。膝も震えていた。
「フフフフフ。」
不気味な笑みを浮かべるエデル。
「お前は『ミラーのエデル』か。」
「そうだ。」

相手とほぼ同時に発砲し、飛んでくる銃弾と自分の銃弾を正面衝突させる技を、まるで鏡に向かって発砲しているように見えることから『ミラー』と呼ばれている。エデルはグロック17Lでミラーを使いこなす、世界に2人といない超優秀なスナイパーなのだ。当然のことだが、彼に驚異的な反射神経と運動神経が無くては『ミラーのエデル』という通り名はつかないだろう。

「悪いが君に勝ち目はないぞ豪牙将。」

「ク、クソ・・・・・・・クソォォォォ！！！」

再びエデルに向かって発砲し始める将、しかし鏡（ミラー）の中にいる人間に対して傷をつけることが出来ないのと同様、エデルの体に傷をつけることはできない。ミラーを繰り返しながら近づいてくる2メートルの巨体。まるでバケモノだ。

カチッカチッ。

銃弾がなくなってしまった将はあわてて内ポケットから新しい銃をとりだそうとした。しかし、エデルはその隙をついて、両目を銃弾で撃ち抜いた。

「ぐわぁぁぁ！！！」

防弾剤を塗った人の弱点は目だ。なぜなら目に防弾剤を塗ることはできないから。将の眼球は砕け、大量の血が吹き出る。

するとエデルが将に質問する。

「お前、魔法を使うんだろ？なのになんで今ここで魔法を使わない？」

「ううう・・・・・・・・・うううううう痛ぇぇ！！！」

激痛に耐えられない将は床を転げまわる。

「答えよ！豪牙将！」

「魔法を使うには道具が必要なんだよ！クッソーォォォ痛ぇぇぇぇ！！」

「フハハハハ！！道具が無くては魔法が使えないとは、つまり道具が無くてはまともに戦うことすらできないということか。銃弾がなくなればもはやお前は的（まと）だ。」

「ううううう！」

血まみれの将の脳を銃弾で撃ち抜き、とどめをさした。

「フン！所詮こんなものか。・・・・・・・日本を征服するのは豪牙じゃない。我々だ！！」

優秀な魔術師であり、これから日本を動かしていく人間であり、Kにとっての強大な敵だった豪牙将をまるで虫のように殺す者『ミラーのエデル』
この事件が陽太たちの耳に入るのにそれほど時間はかからなかった。

同日深夜0時。喫茶ねこばば。

「どうして私の銃をパンツの中に入れるの！？そこが考えらんないのよ！ねぇ聞いてる！？っていうか反省してるの！？」
「はい・・・・・・十分反省しております。」
デザートイーグルを勝手に持ち出して、壊してしまった陽太は硬い床の上に1時間以上正座させられ、友恵に怒られているのだった。

（壊したのは俺じゃねぇのに・・・・・・・。大体友恵は俺の方が年上なの分かってんのかな。足しびれるし土井さんはいないし・・・・・もう寝たいよ。）
「ねぇ聞いてるの！？」
「はいはい聞いてます！！」
ひたすら説教する友恵。ひたすら謝り続ける陽太。
そんな騒がしい喫茶店にあわてた様子で誠が飛び込んでくる。
「大変だ大変だ！！！」
「あ、土井さん！あんたが友恵の銃壊したんだから、ちゃんと説教受けろよ！」
「そんなもんどうだっていいだろ！！大変だ！豪牙将が死んだんだ！」
その情報を聞いた友恵と陽太は大いに驚いた。

「な、なんだって!?」
「豪牙将って、あの豪牙一族の?」
「そうだ!殺されたらしい。」
「いったい誰に?」
「分からん。しかしKの国民の仕業では無いはずだが・・・・・・」

豪牙将が死んで驚いたのは喫茶ねこばばにいた人たちだけではない。
Kの国民が、日本の国民が驚き、騒いだ。

「また日本が大きく変わるぞ・・・・・・」

獣（後書き）

『ちょっとしたワードの説明』

“ベレッタ”⇒全長２１７ｍｍ。重量９５０ｇ。やや小型で見栄えが良く、映画とかでも良く使われる銃。女性にお勧めです。

“グロック１７Ｌ”⇒全長２２５ｍｍ。重量６７０ｇもともと射撃大会用に作られた銃なので、威力はイマイチ。しかし命中率に長けているので、人気が高い銃だ。エデルが愛用している。

“ミラー”⇒敵とほぼ同時に発砲し、飛んでくる敵の銃弾を自分の銃弾で正面衝突させ食い止めるエデルが生み出した技。

銃のことは、ｇｏｏｇｌｅで検索した方が効率が良いと思います。ちなみにハングリーブルーは私が独自に作り出した銃です（笑）

プライド

豪牙将が殺されてから3日がたった5月9日午前１０時。現在の豪牙家当主、豪牙龍(ごうがりゅう)はたくさんの報道陣の前でこう発言した。

「5月6日、豪牙一族の次期当主であり、ロチェル病から日本国民を救った若き英雄、豪牙将が何者かに射殺されるという大変悲しい事件が起こりました。３日間かけてさまざまな調査をした結果、今回の事件の犯人はKの人間であることが判明しました。我々は豪牙一族のプライドのため、日本国民のため、極悪犯罪集団であるKに対し、復讐することを明らかにします。」

こんな発言があった会見の映像は日本だけでなく、海外や、Kの放送局にも流れたのだった。

これを見た誠たちは驚いた。

「なんでだ!?俺たちは何もしてねぇはずだ!確かに暗殺計画は練っていたが、まだそれは実行されていねぇはず!」

誠は抑えられない怒りをテーブルにぶつける。

「・・・・・・・土井さん。もしかしたら駅前らへんにいた奴らが勝手に殺ったんじゃないんですか?」

先日駅前で陽太を襲ったホームレスのような連中なら、勝手な行動を起こしかねないと思った陽太。

「いや、そんなはずはねぇ。Kの領地から豪牙一族の城に侵入する方法は地下にある秘密通路を通る以外はねぇはずだ。しかもそこには見張り役が何人もいて、許可が無くてはそこは通れねぇんだ。」

「じゃあいったい誰が豪牙を殺したんだ?」

「分からんがこれだけは言える。豪牙一(あいつら)族は俺たちに濡れ衣を着せようとしている!」

「は!?」

豪牙一族とKの関係は言うまでもない。しかしゴールド隊と名乗る集団に襲撃されたことを知っていながら、その罪をKに押しつけるといった豪牙一族の行為はあまりにも卑怯だ。これは間違えなくKに対する豪牙一族の挑発なのだ。陽太たちもそのことには気づいていた。

「今回の事件は俺たちは何も関わっていない。おそらく他に豪牙一族を攻撃した奴がいるはずなんだ。候補としては、ゴールド隊か小笠原組だな。」

「ゴールド隊？小笠原組？なんだそれ？」

「ゴールド隊は俺たちKのやり方と、豪牙一族のやり方両方に反対する集団だ。『日本を支配するのはKでもなければ豪牙でもない。ゴールド隊だ。』という考えを持った攻撃的な集団だ。そして、小笠原組は東京を拠点に活動しているヤクザ集団だ。そいつらはとにかく狂っていてね、『人を殺す』という行為に快感を持っちまってる変態集団なんだ。だからそいつらっていう可能性もある。」

「豪牙を狙う集団はKだけではないってことか。」

「そう！なのになぜKという名前があの会見で出てきたか分かるか？」

「豪牙一族にとっての最大の敵はKってことか。」

「そういうことだ。」

豪牙一族の持つ軍事力に比べれば、明らかにKの軍事力は劣っている。しかしKにもプライドというものがある。くだらないプライドなのかもしれないが、絶対に譲れないものというものがそこにある限り、売られたケンカは買わずにはいられない。

「どうやらあいつらはどうにかして俺たちと戦争をするきっかけがほしいらしい。おそらく今夜にでも攻撃が来るだろう。・・・・・・・」

「マジかよ！じゃあはやく非難しないと！」

「バカ言うんじゃない。もう俺たちは我慢の限界なんだ。先手を取られると厄介だから俺たちから攻撃を仕掛けるんだ。食われる前に

食うんだよ！」

「そんな！戦争始めるのか！？」

「その通りだ陽太君！Ｋにも戦闘機がある。それで城を襲撃してやるんだ。とにかく先手をとることが勝利への第一歩だ。」

「・・・・・・・・・・・・・」

濡れ衣を着せられて黙っていられないＫ。豪牙一族とＫの『プライド』をかけた戦争が始まるのだった。

「陽太君。暗殺隊の隊長は俺だ。今から俺の命令には必ず従ってもらう。いいね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・はい。」

「Ｋの軍事力はすべてこの俺が仕切っている。だからこれから起こることには一切口出ししないでくれ。」

５月９日深夜１１時。Ｋ豪牙戦争勃発。真っ暗な日本の夜空にＫの戦闘機が２機現れる。

そして『豪牙城』とも呼ばれるほど巨大な豪牙の屋敷に大量のミサイルが撃ち込まれた。鼓膜を破りかねない爆音ともに、真っ赤な炎が舞いあがり、夜空を赤く染め上げる。しかし・・・・・・・・・

「豪牙城には傷一つ入りません！効果なし！効果なし！」

という通信が土井のいる作戦司令室に伝えられた。

豪牙城はそう簡単に壊れてしまうほど脆(もろ)い構造では無かった。一度は龍のように舞いあがった炎も一瞬にして消え去り、まるで何の攻撃も受けていなかったかのような姿に戻ってしまう豪牙城。その姿を見たパイロットは失望する。

「豪牙城はミサイルも効かないのか・・・・・・・・・」

そして、豪牙一族も反撃を開始する。ヨーロッパ風の作りをした豪牙城にくっついている、３００ｍほどの高い塔のてぺっんから、緑色のレーザー砲がまるで刀のように２機の戦闘機を斬りきざんだ。

「報告します！２機とも撃墜されました！」

「ちっ！思っていた以上にレーザー砲の威力がある。こりゃあ陽太

の出番だな。」
と言うと誠は懐から携帯電話をとり、豪牙城につながる地下通路にいる陽太に連絡する。
「もしもし。」
「もしもし陽太か？作戦実行だ。そこから３００ｍ位歩いたところに石の壁がある。それを破壊して城に侵入しろ！奴らは今からハングリーブルーの餌になるんだ！」
すると陽太は突然戸惑い始めた。
「おいおい待ってくれよ！俺一人なのか？」
「そうだ。」
「豪牙城にはいったいどれくらいの敵がいるんだ？」
「さぁね。３万人くらいかな。」
「そんなにたくさんの敵を俺一人で相手するのか？そんなのいくらなんでも・・・・・・・」
「無理じゃねぇだろ？」
誠の声が突然恐ろしくなる。
「・・・・・・・・・・・・・」
陽太は言葉を詰まらせた。
「ハングリーブルーがあるだろ？いいから行け。」
「で、でも・・・・・・・・・・・・・」
「行け！！」
しまいには陽太に怒鳴ってしまう誠。
『これから起こることには一切口出ししないでくれ』という誠の言葉を思い出した陽太は、黙り込み、何も言わずに地下通路を走り始めた。豪牙城に向かって。

ちょうどその頃、東京新宿の街中に小笠原組が集結する。
「戦争が始まりやがった。クッフフフフフ！」
と奇怪な笑みを浮かべるのは小笠原組の組長、小笠原怜次（おがさわられいじ）４５歳。
髪は金色で七三分け。顔には無数の傷があり、目つきは斜め上につ

りあがっていて鋭かった。身長は大体１８０?ほど。
たくさんの小笠原組の組員が怜次を囲む。
「組長。私(わたくし)どもはどんなことがあろうともついてゆきます。いつでもご指示を!」
「うん。そうする。でも、まだ俺たちの出る幕じゃないよ。」
「は、はぁ・・・・・・」
組員たちは戸惑う。
「まぁ、Kは豪牙にはかなわないでしょうし、勝負は見えていますな。」
と1人の組員がそう言うと、突然怜次はその組員に強烈なパンチを食らわせた。

「ぐお!!」
怜次のパンチはまるで光のように速かった。殴られた組員は空中で体を1回転半させてから、地面にたたきつけられた。
「お前は何も分かって無いね。」
「は・・・・・はい!?」
殴られた組員は地面に倒れ込みながら怜次を見上げる。
「数だけで言ったら明らかに豪牙なんだがな、質と殺気だけで言ったらKなんだ。・・・・・・良く見ていろよ、Kの切り札が現れるぞ。」
「Kにはそんなに強えー奴がいるんですか?」
「ああ。クッフッフッフフフフフフフフ。殺人鬼の息子がいるんだ。」
遠くで赤く染まっている豪牙城を小笠原組は望遠鏡を使って観戦していた。
すると怜次の背後に機関銃を持った男たち４人が現れる。
「ついに見つけたぞ小笠原怜次!!貴様を殺人の容疑で逮捕する!!」

「・・・・・・・・・豪牙の戦闘員か。」
小笠原組はたくさんの人間を殺している凶悪な殺人集団だ。当然新宿の真ん中で集結したら通報されてしまう。
「手をあげてこちらに来い！！」
「・・・・・・・・・嫌だ。」
まるで子供のような対応をとる怜次。
「貴様！！撃つぞ！？」
「撃てよ。」
「は！？」
機関銃を持った男たちは驚き戸惑う。
「撃てよぉ！」
「・・・・・・・・・・おう。撃ち殺してやるよ！！」
機関銃の音が新宿中に鳴り響く。しかし・・・・・・・・・
「クフフフフフフ！！」
特徴的な笑い声は機関銃で撃たれてもなお消えることはなかった。
「銃弾が・・・・・・効いていない！防弾剤か！？」
「ちがうね。僕は防弾剤は使わないよ。」
豪牙の戦闘員たちは一度発砲をやめる。
「ならなぜ銃弾が効かんのだ！」
「そんなの決まってるさ。僕の体は君らとは違うからだよ。」
怜次は右足を大きく後ろに振り上げ、地面に転がっている銃弾を蹴飛ばした。
「ぐわぁ！！」
音も無く、ものすごいスピードで直線を描いた銃弾は、一番前に立っていた戦闘員の心臓を貫く。それを見ていた他の戦闘員たちは大いに怯えた。
「な、な、なんなんだよぉぉ！！」

また発砲を開始する。しかし結果は言うまでも無いだろう。戦闘員たちの銃弾はすぐに無くなってしまった。

「そんな銃じゃ僕は殺せないよ。僕の体を貫いた銃はただ一つ。『ハングリーブルー』だけなんだから。」

怜次はネクタイをとり、ジャケットとワイシャツを脱ぎ捨て、上半身裸になった。怜次の左胸には小さな銃弾の傷跡があった。

「さぁ、さぁ、かかってこい。さぁ、さぁ！！」

体をユラユラとさせてタイミングをうかがっている怜次に向かって、3人の戦闘員は腰からナイフを取り出し、一斉に襲いかかった。

怜次はナイフとナイフの間を華麗にすり抜け、まるで爆弾が炸裂したかのような強烈な回し蹴りでその3人を頭上に吹っ飛ばし、浮いた体に強烈なパンチを1人1発づつ、素早く、じっくり、正確に顔面に食らわせた。人並み外れた格闘技術を持っている怜次の手足はもはや殺人兵器だ。当然ながらもろに食らえば一撃で死んでしまう。

「ナイフじゃなくて拳で来いよ。まったく・・・・・・」

3人の戦闘員は地面に落ちる前にすでに息絶えてしまっていたようだった。彼らの遺体はこの後小笠原組の若い組員によって処理された。

そしてまた、遠くで行われているKと豪牙の戦争を眺めているのだった。

「・・・・・・クフフフフフ。」

突入

膝の位置まで丈がある黒いロングジャケットを着た陽太はハングリーブルーを構える。
そして、ハングリーブルーの重々しい銃声が、豪牙城の中に響いた。
（重い・・・・・しかもすごい反動。）
石でできた分厚い壁を一撃で破壊してしまうほどの威力と引き換えに、重さと扱いにくさがあるハングリーブルー。
すると陽太の携帯電話が懐で鳴る。誠からの電話だった。
「もしもし。」
陽太は不機嫌そうな声で電話に出る。
「陽太。お前の標的は豪牙家の当主、豪牙龍だ。おそらくその城の最上階にいるはずだ。さっさとぶち殺してこい。」
「はいはい。」
「あともう一つ。ハングリーブルーは決して無駄に発砲するな。その銃の一発一発を大事にしろ。失敗は許されない作戦だからな。」
「へーい。」
陽太は適当な返事をして電話を切り、重たい銃をゆっくりと持ち上げて、真っ暗な長い廊下を走り始める。
そのときだった・・・・・・・・
「止まれ！」
暗闇の中から数十人の豪牙の戦闘員が現れた。どうやら待ち伏せしていたようだ。
「これより先は通すわけにはいかぬ。おとなしく銃を捨てて、降参し・・・・・・うぐぅぅ！！！」
陽太は瞬時に間合いを詰めて、ぺらぺらと話しかけてくる戦闘員のわき腹に強烈なフックを食らわせる。そして、戦闘員の体がよろめいた隙を逃さずに、ハングリーブルーを撃った。戦闘員は右胸にその銃弾を食らい、上半身が砕け散る。

「た、隊長！」
怯え始める戦闘員たち。それとは正反対に、蔑むような笑顔を見せる陽太。
「クハハハハハ！！・・・・・・さぁさぁ、どんどん行くぜ！」
まだ戦闘態勢が整っていない豪牙の戦闘員たちに、陽太は素早くかつ慎重に銃弾を撃ち込んでいった。戦闘員たちは全員防弾剤を塗っている上に、防弾着まで着ているというのに、ハングリーブルーの銃弾は、軽々とその防弾システムを突破する。屋敷の廊下にハングリーブルーの銃声が響き続ける。しかし豪牙の戦闘員たちも素人では無いので、少しずつ態勢を立て直し、反撃に出る。

「こいつに銃を撃たせるな！撃て撃て撃て！」
声のでかい一人の戦闘員があわてて他の戦闘員たちに命令を送る。
大量の機関銃の銃弾が放たれる。
陽太は体勢を低くして、まるで光のようなスピードで銃弾と銃弾の間をすり抜けていく。そして一発も銃弾を食らうこと無く、陽太は戦闘員たちの前に立ち、笑う。
「クハハハハハ！」
陽太はまるで踊り狂い、舞っているようにハングリーブルーを振り回しながら発砲する。そう、これはハングリーブルーという巨大な銃を使った一つの『舞い』なのだ。銃弾を華麗にかわしながら、観衆に微笑みかけ、最後はしっかりと決める。驚異的な身体能力、メンタル、状況判断。素人とは思えない『センス』。陽太はごく稀に見る『戦いの天才』なのだ。

その頃、喫茶ねこばばでは・・・・・・
誠と友恵が2人でコーヒーを飲んで会話をしていた。

「ねぇお父さん。本当に陽太一人で大丈夫なの！？」
と友恵が陽太のことを心配する。

「大丈夫さ。あいつにはハングリーブルーがある。もはや無敵だ。だれも止められない。」
誠は一気にカップ一杯のコーヒーを飲み干す。
「む、無敵!?そんなにすごいの!?あの青い銃。」
「まぁ銃がすごいのは当然なんだが、やっぱり本当にすごいのは陽太君なんだよ。彼は強い。間違えなく強い。」
「陽太が戦っているところなんて見たこと無いのに、どうして父さんは陽太が強いって言いきれるの?」
「前にも言っただろ。オーラだよ。あいつの体中から出ているオーラだ。」
「そんなんでわかるわけないよ!」
「人を殺す作戦をすんなりと受け入れるような少年なんてそうはいないよ。お前はあいつの父親を知らないから信じられないのだろうが、あの親子は全く同じなんだよ。頭が良くて、運動神経も抜群。ルックスもなかなかじゃないかね友恵?」
誠は友恵をおちょくるような質問をした。
「そ、そ、そうでもないわよ!」
友恵は少し顔を赤くする。
「あいつはまるで清の生まれ変わりのような奴だ。」
結論を言ってしまえば、誠が陽太を信頼する根拠は『オーラ』『雰囲気』だけなのである。しかしそれだけで戦闘能力を見極めて、たった一人で戦場に送りだすなんてことをするなんて、どう考えても無謀だ。本当は何か他の理由があったのではないだろうかと友恵は推測する。
「・・・・・・・・・・お父さん。」
「なんだ。」
「陽太のお父さんは確かにとんでもない殺人鬼だったのかもしれないけど、息子である陽太を同じように殺人鬼扱いするのは良くないと思うよ。」
「フッ・・・・・・・・・お前もいずれわかる。」

誠は席から立ち上がる。
「え？」
「あいつがどういう人間になるか、よく見ておくといいだろう。」
誠はまるで陽太の将来の姿を完全に知っているかのようだった。

５月１０日朝４時。陽太が豪牙の屋敷に突入してから４時間がたとうとしていた頃、屋敷にはハングリーブルーの餌食となった戦闘員たちが転がっていた。血まみれの廊下をゆっくりと歩く陽太。
「・・・・・・・・・・・・クソ。豪牙龍は・・・・・・・・・どこだよ・・・・・・」
さすがに5時間も走りまわれば体力にも限界が来る。ちょうどそのときだった。陽太は他の扉より3倍ほど大きい扉を見つける。
（なんとなく、この扉の向こうに豪牙龍がいるような・・・・・そんな気がする。）
陽太は銃を構えながら恐る恐るその扉を開ける。するとそこには、予想外の光景が広がっていたのだ。

青いカーペットに大量の血を飛び散らせ、仰向けの状態で倒れている１人の男がいた。
「な、なんだ!?」
驚いた陽太はその血まみれの男に素早く近寄る。その男の右胸には豪牙家当主のマークがあった。
「こ、こいつが豪牙龍なのか!?死んでる・・・・・・・・」
肌はまだ温かかったが、脈はなく、瞳孔も開いていた。体の数か所に銃弾が貫通したと思われる傷口があり、あまり争った形跡がないことから、暗殺されたのではないかと陽太は推測する。
「まだ温かいということはまだこの近くにこいつを殺した奴がいる可能性がある。」
と言ったそのときだった。
「・・・・・・・・・・フフフフフフ。」

コントラバスのように低い音程の笑い声が広めの部屋に響き渡る。
「誰だ！」
陽太はあわてて銃を構える。
不気味な笑顔を見せながら身長２ｍの大男が陽太の目の前に立つ。
「我はゴールド隊隊長、ジュラバヌア・エデル。我はこの明け方に豪牙家およびＫの残存兵を皆殺しにするために参上した。」
豪牙のやり方にも、Ｋのやり方にも従わずに、日本を征服しようとたくらんでいるゴールド隊。当然陽太にとって、敵以外の何者でもない。
「ゴールド隊・・・・・・・・・。豪牙家当主を殺したのはお前か！」
「そうだ。ついでに言っておくが、豪牙家の次期当主を殺したのも我だ。」
「やっぱりな。お前らは豪牙一族が次期当主殺しの犯人をＫに押しつけるってことも想定内だったんだろ！戦争になるってことも。」
「我々の敵は豪牙一族とＫだ。その２つの敵が戦争で殺しあってくれれば、我としてはどんなにうれしいことか。」
エデルのその発言に対して、陽太は鼻で笑う。
「フン！結局その程度か！そういうのはな、自ら戦う勇気が出ない臆病者がやることなんだよ。どうせそんなことやって『計算通りだ』とか言って自己満足に浸ってんだろ！？正面から戦う勇気がない証拠だ！・・・・・・・・・・失せろ！この戦争で、お前らみてぇな臆病者がやる役なんて一つも無い！！」
陽太はエデルに向かって中指を立てた。エデルは無表情を保ったまま、内ポケットからゆっくりと銃を２つ取り出し、陽太に向けた。
陽太も対抗してハングリーブルーをエデルに向ける。
「ゴールド隊への侮辱行為、侮辱発言、挑発。・・・・・・・・・上等だ！」
辺りは異常な殺気に包まれる。

サシ

エデルの周りに１０人ほどのゴールド隊隊員が素早い動きで集結する。
「ゴールド隊を侮辱するとはいい度胸だ。貴様の名はなんだ!?」
「・・・・・・・・・中川陽太だ!」
陽太は青い銃を構えたまま名乗る。
エデルは陽太に指をさし、隊員たちに命令する。
「かかれ」
「うおおおおおお!」
獲物を前にしたハイエナのように、陽太に向かって突撃する隊員たち。
すると陽太はピョーンと大きく飛びあがり、その隊員たちの頭上を通過して、エデルの前にたった。
「・・・・・・・・・」
無表情のまま陽太を睨むエデル。
「男ならサシで勝負しろよ!」
陽太はエデルの頭に向かってハングリーブルーを撃ち放つ。

しかし・・・・・・・・・
「無駄だ」
エデルはグロック１７Ｌの銃弾でハングリーブルーの銃弾を止めたのだった。ミラーを発動したのだ。
「な、何!?」
何が起きたか分からず、驚き戸惑う陽太。そんなことをしている間に、背後からゴールド隊の隊員たちが銃を構えながら近づいてくる。
だがしかし・・・・・・
「邪魔だ!!」
陽太は素早く反転し、その隊員たちに向かってハングリーブルーを

数発撃つ。
「ぐわぁぁ！！」
ハングリーブルーの威力は半端なものではない。陽太から見て、手前側にいた隊員たちの体を貫通した複数の銃弾は、後ろにいたたくさんの隊員たちにも命中する。
ゴールド隊の隊員は３０秒でほぼ全滅。残るはジュラバヌア・エデルただ一人となった。
「おいおい！ザコにもほどがあるぜ！」
「・・・・・・・・・・」
少し笑いながら銃を構える陽太に対して、全く表情を変えずに２つの拳銃を構えているエデル。
エデルは陽太の出方をうかがっているようだ。しかしそんなことは気にせずにどんどん攻撃に出ていく陽太。
「終わりだ！！」
ハングリーブルーの銃声が響く。だが当然というべきだろうか、銃弾がエデルの体に命中することはない。
そしてようやく陽太は気づく。その銃声とほぼ同時に響いたグロック１７Ｌの小さな銃声に。
「そういうことか。俺と同時に銃を撃って銃弾を回避しているわけか。しかも銃弾の中心をしっかりととらえている。」
グロック１７Ｌの銃弾はハングリーブルーの大きな銃弾に弾かれて、どこかへ飛んでいってしまうが、ハングリーブルーの銃弾の威力を止めることはかろうじて出来てしまうのである。
ついにエデルが反撃に出る。
エデルは陽太に向かって３発の銃弾を連続で放った。
「ぐあぁ！」
３発中、両目を狙って飛んできた２発の銃弾は、なんとかかわすことが出来た陽太だったが、右胸に飛んできた１発の銃弾をかわすことが出来ず、見事に食らってしまう。
「な・・・・に！」

陽太の体がよろめき始める。
「防弾剤をつけていないのか？」
「う、うるせぇよ！」
陽太はひざに左手を置き、バランスを立て直しながら右手で銃を撃つ。しかしミラー。何度撃ってもミラー。さらにミラーの隙間から飛んでくる銃弾は確実に急所をとらえてくるのだった。たとえどんなに威力の弱い銃弾でも、急所に当たれば致命傷を与えることもできる。陽太は必死にかわし続けた。
（両目、心臓、首を狙ってきている・・・・・・・・クソ！このままじゃ殺られる・・・・・・）
どんなに反射神経に優れていたとしても、何発も何発も飛んでくる銃弾をすべて回避するなんてことは、ミラーでも習得しない限り、できはしない。体のあちらこちらに銃弾を食らい、満身創痍になる陽太。エデルは表情一つ変えることなくその姿を見下ろす。
「どうした？先ほどまでの威勢はいったいどうしたのだ？」
エデルはグロック１７Ｌを両手に持ち、ひたすら陽太に銃を撃ち続ける。
（やっべぇ！意識がもうろうとしてきやがった！・・・・・・・・・俺・・・・死ぬ・・・のか？）
青い絨毯の上に、うつ伏せになって倒れ込む陽太。もう完全に戦う気力を失っているかのように見える。
「もう起き上がることもできないか・・・・・・・・・・・・・・・・。ん？弾切れ！？」
エデルはどうやら弾切れの様子だった。
「今だ！」
陽太はその隙をついて、ハングリーブルーの引き金を引いた。
「かは！！」
エデルの表情が初めて変わる。驚きと痛みからくる、苦しそうな表情になった。ハングリーブルーの銃弾はエデルの右肩に命中する。
急所は完全に外れているとはいえ、ハングリーブルーの威力は尋常

ではないので、相当のダメージを与えることが出来たことには違いない。
「ど・・・・どうだ！・・・・・・・」
血まみれの拳をグッと握り締めて、ガッツポーズをとる陽太。
「み・・・・・右肩が・・・・・・・」
右肩が砕けたエデルは右腕を動かすことが出来ない。
「よし！チャンスだ！」
おまけに銃弾がなくなってしまったエデル。形成が一気に逆転する。
が、なんと今度はハングリーブルーに弾切れの合図がでる。
「た、弾切れだと！？」
「フ、フフフフフフ。両者ともに弾切れか。」
「・・・・・・・・・じゃあ次は殴り合うか？」
ハングリーブルーを懐にしまい、拳を握りしめてファイティングポーズをとる陽太。しかしエデルは銃をしまうと同時に、陽太に背を向けてしまった。
「・・・・今回は我の負けを認めよう。本部に帰らせてもらう。」
「なんだよ！逃げるのか！？」
体中傷だらけなのにもかかわらず、エデルに対して挑発する陽太。
「中川陽太か。その名前、よく覚えておこう。」
エデルは部屋の隅にある小さな窓に向かって走り、豪快に窓ガラスを突き破りながら、陽太に向かって微笑んだ。
「な、何！？」
「また会おう。中川陽太！」
エデルは豪牙城の7階からどこかへ飛んでいった。
「ま、待て！！」

陽太はあわててその窓からエデルの後を追おうとしたが、窓の外は真っ暗で何も見えない。エデルは暗闇の中に姿を消してしまい、行方が分からなくなってしまった。
「逃げられたか・・・・・・。クソ！・・・・・銃弾が切れてい

なければ・・・・うぐ！」
先ほど食らった銃弾の痛みが今頃になって突然やってくる。
（く、クソォ！痛ぇ・・・・・・痛ぇよ！）
陽太は全身をめぐっている痛みに耐えられず、その場に倒れ込む。
もはや立っていることもできなくなってしまったようだ。

青い絨毯に赤い血がしみ込んでゆく。陽太はこの時初めて、自分の命の危機を感じたのだった。

憎悪と平和

陽太はゆっくりと目を開ける。そこには白い天井とオレンジ色の蛍光灯があった。

「こ、ここは・・・・・どこだ?・・・・・・・・・痛ぇ・・・・・・・・・」

全身に傷がある陽太。包帯が傷口と擦れて痛い。

キョロキョロと部屋中を見渡す。

「ここは病院か?」

と独り言を言っていると、部屋の隅にある大きなスライドドアの向こうから、１人の男がやってくる。

「久しぶりだな、中川陽太君。」

陽太にとっては見覚えのある男だった。白髪で太っている６０歳くらいのその男。

「あんたは確か神奈川県警署長の・・・・・・」

「南浦大輔だ。正確には元　神奈川県警署長だがな。」

「いったい俺に何の用だ。」

陽太は大輔を睨みつける。

「おいおいそんなに怖い目で見るなよ。これでも私は君たちＫの味方なんだぞ?」

「味方?じゃあここはいったいどこなんだ。」

「ここは私の家だ。土井さんに頼まれて、君をあの城から救出したんだ。感謝してくれてもいいんだぞ?」

「フン!誰がするかよ。」

陽太は素直じゃないので、正面から礼を言うことなんてできはしない。

「ハッハッハ!元気そうで何よりだ。」

大輔は陽気に笑う。

「クソ!まさかあんな奴に、こんな傷負わされるなんて!」

「17か所だ。」
「え!?」
「君の体の17か所に銃弾の傷があった。」
「そ、そんなに!?」
陽太は驚いた。夢中になっていて時間や痛みを忘れていたせいもあるのだろうが、まさか自分がこんなに銃弾を食らっていたとは思わなかった。
「まぁその様子なら大丈夫そうだ。健也に頼んで車で送ってやるよ。」
「・・・・・・・・・・・・」
陽太は黙ってベッドから降り、ロングジャケットを着て外に出る。外はもう真っ暗だった。そして元神奈川県警の新米警察官だった山崎健也のワゴン車に乗り込む。
「では出発します!」
健也の声は必要以上にでかい。
ワゴン車は勢いよく出発する。

車窓からボロボロになった街を眺める陽太。そんな陽太に健也が話しかける。
「さっき陽太さんの荷物をまとめていた時に気付いたんですけど、その銃重たいですね!よくその銃で戦えるなぁって思いますよ!戦いづらくないんですか?」
「ああ。戦いづらいよ　(こいつ声デケェな)」
陽太は窓の外を眺めながら適当に返答する。
「でもあんなにいた豪牙一族の連中を陽太さん1人で倒すだなんてすごいですよ!」
「・・・・・・・・・」
「でも結局豪牙一族は崩壊しなかったんですよねぇ。あんなに戦闘員が死んだのに、まだまだたくさんいるんですから。」
陽太は少しその話に興味を持った。

「豪牙一族の頭首は死んだはずだが？次期当主も死んじまったのに、どうやって立て直したんだ？」
「ああ！君はまだ知らないんですか！豪牙家の二男の豪牙大っていう奴が当主になったんですよ！」
「豪牙・・・・・大。兄弟がいたのか。」
「そうなんですよ！豪牙大は比較的穏やかな性格の人だから、これで戦争が終わるんじゃないかって言っている人も結構いるんですよ！」
「そ、そうなのか。」
「まぁ、それでもKの敵であることには変わりはないんですけどね。」
「お前とかあの署長さんはどうしてKにいるんだ？」
「うーん・・・・・・」
陽太の質問に対して健也は深く考え込む。
「何の理由もなしにKにいるなんてねぇだろ？」
「南浦署長は奥さんを豪牙一族に殺されたからKにいるんですが、僕には大した理由はありませんよ。ただ僕は南浦署長についていきたかっただけです。」
「はぁ？」
「あの人のすごさを俺は知っているんです。だからあの人についていけば間違いないんです。あの人が豪牙を恨み続ける限り、俺は豪牙を恨みます。」
「・・・・・・・・・フーン。そういうもんかね。（どっかで聞いたことあるような・・・）」
なんとなく不機嫌そうな顔をする陽太。
そんな会話をしているうちに喫茶ねこばばに着く。
「それではさようなら！」
「・・・・・・・・・」
健也は元気にあいさつをして、もと来た道へ引き返していった。

陽太は喫茶ねこばばの扉をゆっくりとあけた。
「陽太！」
笑顔で出迎えたのは友恵だった。
「・・・・・・・・・」
喜ぶ友恵の横を陽太は無言で通過する。
「ちょっと！人がせっかく出迎えてあげているのにどうして無視するのよ。」
「そんなに喜ぶことでもないだろ？それにお前俺のこと呼び捨てで読んでたっけ？」
「いいじゃない！いちいち君付けで呼ぶなんてめんどくさいわよ！」
「お前言っとくけど俺の方が年上だからな？もう少し年上の人を敬えよ！」
「精神年齢は私の方が上よ！」
「体は小学生並みなのにぃ。」
「なにぃぃぃぃ？女の子に体のこと言うなんて最低よ！」
そんなくだらない会話を繰り広げている所へ、誠が真剣な表情で歩いてくる。
「その会話はまた今度にしてくれ。そんなことより陽太、いろいろと聞きたいことがある。そこに座れ。」
と言った誠はカウンター席を指さした。
「・・・・・・・・・・ああ。」
一言返事をして上着を脱ぎ、丸い形をした椅子にゆっくりと座る。
「その怪我はどうした。」
「ケッ！どっかの誰かさんが防弾剤もなしに俺を戦場へ放り込んだからこうなったんだよ！」
陽太は誠を睨みつける。
「俺はな、君ぐらいの力量なら防弾剤なしでもいけるんじゃないかと思ったんだ。だがその傷の数はなんだ。いったいどんな奴に遭遇したんだ？」
「・・・・・・・・・ゴールド隊とかいう集団の隊長さんにやられ

たんだよ。」
「なんだと！」
誠は驚いた表情を見せる。
「あ？あんたそいつ知っているのか？」
「知ってるというか、かなりの有名人だぞ？『ミラーのエデル』という呼び名がある。」
「ミラー？」
陽太にとっては初耳だった。
「そうだ。ミラーというのは銃弾と銃弾をぶつけ合って攻撃を回避する技だ。エデルはミラーを使う名スナイパーだ。」
陽太はミラーの瞬間をとらえていた。何度撃っても標的に当たらない感覚が、まだ体中に残っていた。
「・・・・・・・・そんなすげぇスナイパーだったのか・・・・・・・・」
「それで？結局どうだったんだ？」
「両者弾切れで引き分けだ。」
と陽太は少し自慢げに言った。
「・・・・・・・フン。そうか・・・・命拾いしたな。だがその傷では負けたも同然だな。」
「うるせぇよ。このオトシマエはかならずつける！・そのためにも今日は・・・・・寝る。」
陽太は大あくびをしながらカウンターの奥にある階段を上っていった。二階にある7畳ほどの部屋が陽太の部屋だ。そこには大きな窓と2畳分ぐらいのベッドがある。
（やべぇ・・・・・・・・・意識がもうろうとする。）
陽太は吸い込まれるようにそのベッドに寝転んだと同時に、深い眠りについた。
カウンター席には友恵と誠だけが残る。
「ねぇお父さん。戦争は終わるの？」
「無理だ。」

誠は即答する。
「どうして？」
「豪牙一族に対するＫの憎悪はそう簡単に消えるものではないんだよ。」
「でも、今度の豪牙家当主は平和的解決を望んでいるらしいよ？」
豪牙家の新しい当主、豪牙大は穏やかな性格をしているので、Ｋと豪牙の争いは終わるのではないかという噂が広まっているようだった。

「半年前、お前のクラスメイトだったアノ男を許せるか？」
「あ・・・・・・・・・」
友恵は突然下を向く。
「お前を飛び降り自殺寸前まで追い込んだアノ男を許せるか？」
友恵と同級生で同じ中学校の生徒だった『アノ男』は半年前、友恵を精神的に追いこんだ。イジメという下劣な行為を行ったのだ。それはそれはひどいイジメだった。その悪夢が１４歳の友恵のデリケートな心にクッキリと刻み込まれてしまったのだ。
「・・・・・許せない・・・・・・絶対に・・・・・・うっ！」
友恵は突然吐き気を催してしまったので、近くにあった清楚用のバケツの中に顔を突っ込んだ。
「それと同じだ。俺たちが負った心の傷はお前のその傷と同じくらい大きいんだよ。だから俺たちは豪牙を許さないし、平和的解決も望まないんだ。」
「・・・・・・・・うん。よく分かったよ・・・・・・・・・・・お父さん。おやすみなさい。」
友恵は憎悪と悲しみの涙でビッショリと濡れた顔をあげ、寝室へと向かった。
誠は煙草をくわえながら喫茶店の外に出て、夜空の星を見上げる。

「兄ちゃん・・・・・・・・俺ぁお前のために戦ってんだぜ？これからもそうだし、死ぬまできっとこの短刀を手放す日はねぇんだろうさ。そっちに行くときにはなんか褒美がほしいなぁ。・・・・・・・兄ちゃん・・・・・・・・何で死んじまったんだよ。」

気を抜けば、兄が豪牙に殺される瞬間を思い出してしまう誠。機関銃に撃たれ、血を散らし、目を大きく開けたまま棒のように倒れて息絶えるといった瞬間を、誠ははっきりと覚えているのだった。

誠の眼に映る星は、涙で滲(にじ)み、歪み、広がる。

回り始める歯車

東京にはたくさんのヤクザがいる。殺し、盗み、麻薬、密輸など、あらゆる犯罪行為を街の陰で行いながら生活している彼らにとって、豪牙一族は敵以外の何者でもない。暗闇で動く彼らは、敵の情報を手に入れるために、知っていそうな人間を脅し、吐かせ、殺す。それが彼らのやり方なのだ。新宿を中心に行動している小笠原組は、ヤクザの中でも最も攻撃的と言われているヤクザ集団で、恐れている人も多い。数日前にも、豪牙の戦闘員4人を皆殺しにしている。午前5時。西新宿七丁目。6階建てのオフィスビルの4階にある応接室。

「おいコルァ！さっさと吐いちまったほうが楽になるぜ？おい！」

スーツ姿の5人の小笠原組の組員が、白髪で太っている1人のカタギの満身創痍の老人を囲み、顔面に強烈なキックを入れる。

「グフぅ！や・・・やめてください・・・・・・。本当に何も知らないんです！」

変形してしまった顔で、泣きだす老人。しかし組員たちは容赦なくその老人に暴力をふるう。

すると応接室に組長小笠原怜次が入室し、辺りの空気が急激に変わり、組員たちの表情が凍りつく。

「ご、ご苦労様です！組長！」

組員たちは一斉に頭を下げる。

「うん。ご苦労さん。」

怜次はさわやかな顔をしながらガラスに映る自分を見て、金色の髪の毛を7対3にきっちりと分ける。

「豪牙家の関係者の男です。絶対にこのジジイは何か知っているはずなんです！」

「フーン。」

「あ、こ、こちらへどうぞ。」

怜次が恐ろしいからなのだろうか、組員たちは全員オドオドしている。怜次の周りに集まった組員たちは、老人の前まで案内する。
「ほほぉ。ずいぶんとまあボコボコになっちゃったね、お爺さん。吐かないからそうなるんだよ？」
「く・・・・・・クソ・・・・・。本当に・・・・・何も知らないのに！」
もう起き上がることもできないほどまでボコボコにされてしまったその老人。それでもなお自分は何も知らないと言い張った。
「お爺さんは元豪牙家当主の側近護衛役だったそうじゃないか。一番近くで豪牙一族の行動を見てきたはずだよね。それなのに何の情報も知らないなんてありえないんだよ。」
「だから・・・・・・知らないんだって！」
「・・・・・・・・・何があっても吐かないつもりだな？じゃあこいつを見ろ。」
怜次は5歳ぐらいの男の子の写真をその老人に見せつけた。老人はすぐにその男の子が自分の孫であることに気がついた。
「・・・・・ま・・・・・孫・・・・・・・・克也（かつや）にいったい何をするつもりなんだ！」
「それはあえて言わないでおいてやるよ。」
「ま、待ってくれ！克也にだけは手を出さないでくれ！」
老人はうろたえる。
「それはお前の態度次第だ。」
「わ、分かった！話す！話すから助けてくれぇぇぇぇ！！」
ついに白状してしまった老人を、怜次は不気味な笑顔を浮かべながら、鋭く細長い目で見下ろしていた。老人はこの後、豪牙一族のあらゆる情報を小笠原組の人間にしゃべった後、ビルの屋上にある焼却炉でたくさんの生ごみとともに燃やされてしまうのだった。
小笠原組はそういう組だ。女だろうが老人だろうが関係なく暴力をふるい、人をまるで虫のように殺す、クズの中のクズどもが集まったヤクザ集団なのだ。

5月11日午前9時。新宿歌舞伎町。

エデルは先日の陽太との戦闘で負ってしまった右肩の大きな傷を隠すために、黒くて丈の長いローブを着ていた。そんなエデルを先頭にした数人のゴールド隊と、小笠原怜次を先頭にした数人の小笠原組が歌舞伎町のど真ん中で睨みあう。

「こんな朝っぱらにここへ呼び出すってことは、ドンパチはなしってことだな？」

と無表情なエデルがニヤニヤと笑っている怜次に質問する。

「まぁ、君たちを殺すと同時に、このへんの一般人も巻き込むっていうのも悪いシチュエーションでは無いけど、君の強さは僕も知っているからね。出来れば話し合いだけで用を済ませたいところだよ。」

イカれたような表情を見せ続けている怜次だったが、エデルの目線から一度も目をそらすことはなかった。何も考えていなさそうにふるまいつつ、全く隙を見せないぞという心を持っているのだろう。

「お前らのような狂った集団と、まともな会話が出来るとは思えないのだが？」

とエデルは言う。

「僕らは君のような人間を殺す時は、じっくりとこだわるよ。人のいない所へ連れて行って不意打ちを食らわせるなんてやり方はあまりにもつまらなすぎるね。」

「人殺しを面白さで判断している時点で話し合いをしたいとはおもわぬ。」

両者ともに警戒しているようだった。しかしそれは当然と言えば当然のことなのである。なぜならエデルも怜次もこの上ない強さを誇っているからだ。両者ともにその強さを警戒しつつ、自分の強さをアピールし続けているのだ。

「まぁいいじゃん。とりあえず話だけでも聞いてよ。君らにもメリットがある話だからさ。」
エデルの後ろについている護衛役の隊員たちは、いかにも嫌そうな顔をしていた。しかし・・・・・
「いいだろう。話しを聞こうじゃないか。」
「クフフフ！ついてきな！」
交渉が成立し、エデル達は恐る恐る怜次達についていった。
二つの集団はとあるビルの地下にあるバーで集結した。このバーは本来麻薬の売買などを行う場所だった。
「こんな薄暗いところでいったい何をするつもりだ。」
「だから言ってんだろ？話し合いだって。」
「こんな怪しいバーで話し合いをするのか？」
「ここは盗聴も盗撮もできない。外の人間に情報が漏れることが無いから、今回の話をするにはうってつけの場所なんだ。」
「・・・・・・・・・・そうか。」
エデルはようやく納得する。
「本題に入るよ。今日は君らと取り引きをするためにここに集まったんだ。」
「取り引き？」
「そうだ。僕らは今日豪牙一族の様々な情報を入手した。その情報を君らに提供する代わりに、Kへの攻撃を諦めてもらえないか？」
「・・・・・・・・・・つまりKには手を出すなと？」
「そうだ。」
「なぜ？」
「Kは俺たち小笠原組が潰したいんだ。余計な手出しをされると、行動しづらいんでね。君らには豪牙一族の制圧を専門にしてもらいたいんだ。」
小笠原組はなぜかKと戦いたがっている。しかしエデルは即答でその条件を拒否した。
「ダメだ。」

怜次は少し驚いた様子を見せる。
「な、なぜ!?」
「ダメなものはダメなのだ。」
エデルは全く表情を変えることなく、淡々と自分らの主張をした。
その主張に対して怜次は驚きを隠せないでいた。
「この小笠原組が協力してやると言っているのにどうしてそれを受け入れてくれないのさ。君らにとっては絶対に得だろう。」
「貴様らがなぜKと戦いたいと思っているのかは分からんが、豪牙一族もKも俺たちゴールド隊だけの敵だ。貴様らの手を借りたいとも思わないし、借りる気なんて全くない。それでもその条件を強引に押し付けると言うのなら、今ここで貴様らを殺す!」
エデルのこの発言で、バーの中の緊張感が一気に高まる。
すると怜次は笑い始めた。
「クックックックックフフフフフフフ!!そうかそうか、そうかい。どうしても俺たちを信用することはできないか。まぁいいさ、君らしい回答が返ってきたので安心したよ。でも君たちはKの戦闘員に邪魔されて豪牙一族制圧作戦を失敗したんだろ?君のその右肩の怪我がその無様さを物語ってるよ。だから手助けをしてやろうと思っただけなんだけどね。」
エデルは怪我を隠しているつもりだったようだが、怜次だけには完全にバレていたようだった。
「確かに失敗した。Kにいる青い銃を持った少年に邪魔されたんだ。この右肩もそいつにやられたものだ。」
「クフフフ。どうせ君のことだから、またその少年と戦いたがっているのだろう?」
「当然だ。貴様こそ、その少年と戦いたかったからこんな取り引きをしようとしたのでは?」
「クフ!良く分かったね。そのとおりだよ。」
人並み外れた強さを持つ人間は、より強い相手と戦いたがるものだ。
だからこそエデルと怜次は陽太と戦いたがっているのだ。

「では我々はこれにて失礼させてもらう。今回の取り引きは無かったことにしてくれ。」
と言い、エデルは席を立つ。
「うんわかった。でもこれだけは知っておいてね。今この時点で、君らは僕らの敵になったからね。」
「フッ。いいだろう。いずれ皆殺しにしてやるさ。」
エデル達はバーを後にする。エデルがいなくなった後のバーの空気はとても静かなものだった。

「ゴールド隊、ジュラバヌア・エデルか。実に興味深い男を敵に回すことが出来た。いずれ起こるであろう豪牙とKとゴールド隊の闘争。僕たちはそれを大いに邪魔するんだ。そして、この日本を僕たちのものにするんだ。」
豪牙に対する憎悪を持ったK。豪牙とK両方を潰そうとするゴールド隊。そして、それらの闘争を邪魔しようとする小笠原組。
彼らが睨みあい、殺し合う日は、そう遠い日の話では無くなっているのだった。

誰かが、自らの考えを劇的に変えない限り、平和は訪れない。いつまでも自分のプライドをかみしめていては、絶対に平和は訪れない。誰かがプライドを捨てなければ、誰かが思考を変えなければ、この回り始めた運命の歯車を止めることはできないのだ。しかし、いったい誰がそんなことをするだろうか。いったい誰がその歯車を止めるだろうか。ただただ待っているだけで、時間はもうすでに無くなりかけている。

一撃必殺パンチ

「行こうか。」
「はい！」
小笠原組がついに動き始める。
今回の標的はＫだった。怜次はエデルの言い分を完全に無視して、Ｋに攻撃を仕掛けることを決意した。
Ｋの上空にいるヘリコプターの中でニヤニヤと笑っている怜次。
「標的Ｋ！喫茶ねこばばにいる中川陽太を確認しました！組長！準備はいいですか？」
「おう。やれ！」
ガシャン！！

ヘリコプターの床が抜けて、怜次はパラシュートも付けずに、爆弾のようにまっすぐと地面に向かって落下していくのだった。

５月１２日１７時００分。西の空が綺麗に赤く染まってきた頃。

鼓膜を破りかねない爆音と、ガラスを砕いてしまうほどの爆風が喫茶ねこばばまで響いてくる。
「な、なんだ！？」
「爆弾！？豪牙の襲撃！？」
喫茶店の窓ガラスがほぼ全部割れる。
陽太たちはあわてて武器を持って喫茶店の外に出た。街は黒い煙と砂ぼこりに覆われていて、あたりは何も見えない状態だった。するとその砂ぼこりの中から１人の男がニヤニヤと笑いながら現れる。
紛れもなくその男こそが小笠原組組長小笠原怜次だ。
「クフフフフ。」
「・・・・・・・・・」

陽太と友恵は驚き戸惑っていたが、誠だけは冷静な表情で怜次を睨んでいた。
「久しいなぁ土井君。」
「やはりお前だったか。小笠原怜次。お前の登場はいつもコレだな。どうせ爆弾を全身に抱えていたんだろ？」
「クフフフフ。そのとおりさ。」
怜次は全身に爆弾を巻きつけて地面に落下したようだった。だからものすごい爆風や爆音があったのだろう。
「な、なんでそんなことしても死なねぇんだ！？」
と普通の人間らしい質問をする陽太。しかし怜次は普通の人間ではないのだ。
「・・・・・・・・・最強にあこがれて、最強になりたいと思っていればこれくらい人体を改造するのもだ。僕の体は君たちとは違うんだよ。」
「フッ！イカれてやがる。」
誠は鼻で笑う。
「人間は１つの肉の塊にすぎないんだ。僕はただ、君らより少し上質な塊でいたいだけだ。」
「・・・・・・・・・・」
「土井君。君は僕には勝てないよ。それは１０年前に証明済みだろ？」
「黙れ！」
「普通の人間に俺を倒すことなんてできやしないのさ。」
悔しがるような表情をする誠。するとその隣で陽太は不気味に笑い始めた。
「クハハハハハハハ！！！」
「・・・・・・・・？」
誠も、友恵も、怜次も驚いた様子だった。
「クハハハ！小笠原怜次さんだっけ？あんた何言ってんだか全然わかんねぇよ！まあとにかく体改造して優越感に浸ってんだろ！？だ

がそんなの俺たちにしてみりゃどーだっていいんだよ！ペラペラペラペラうるせ～な～！喫茶店のガラス代だけ置いて、さっさと消えろや！」

陽太は素早い動きで懐からハングリーブルーをとりだし怜次に向けて引き金を引いた。銃弾は怜次の顔面に直撃する。

「ぶはぁ！」

「どうだ！」

顔面が砕け散り、よろめく怜次に対してガッツポーズを見せつける陽太。しかし怜次は一瞬で体勢を立て直し、一瞬だけ姿を消し、一瞬で陽太のすぐ目の前まで間合いを詰めてしまうのだった。

「なに！？」

不意を突かれた陽太。

「生意気な小僧だなぁ。お前に人体改造の事を言われる筋合いはねぇ！」

「まずい！！逃げろ陽太！」

一撃必殺の怜次のパンチがえぐりこむように下から陽太の顔面に向けて飛んでくる。生命の危機を感じた陽太は一瞬の判断でそのパンチをかわした。

「ほほぉ、あの状況でアッパーをかわすとは・・・・・・・」

怜次は一度後ろに下がる。

すると陽太は、さきほど砕け散ったはずの怜次の顔面が元に戻っている事に気付いた。

「か、回復している・・・・・・」

「クフフフ、僕は不死身さ。」

「・・・・・・改造人間（バケモノ）が！」

陽太は少しだけ間合いを詰めて、怜次に向かってハングリーブルーの弾を5発連射した。

すべての弾が怜次の体に命中する。体中から大量の血が吹き出し、一度は地面に倒れ込んでしまう怜次だったが、その傷はすぐに回復

してしまい、一瞬で元の姿に逆戻りだ。
「何度も言わせるな。僕は不死身さ。さぁ今度はこちらから行かせてもらうよ！中川陽太君！」
怜次は陽太に向かってゆっくりと歩き始める。
「クソォ！！」
ゆっくりと笑いながら歩いてくる怜次に恐怖を感じた陽太は、また一発ハングリーブルーを撃ち放った。しかし結果は先ほどと同じだ。

不死身の人間などこの世には存在しないと陽太は思っていたが、何発も何発も銃弾を食らっても死なないこの男を目の前にしてしまった陽太は複雑な気持ちになった。

そして・・・・・・
「終わりだぁ。」
怜次の拳が陽太の顔面に直撃する。陽太は体を反らし、大量の血を噴き出しながら後方に吹っ飛んだ。
陽太があのパンチに耐えられるわけがないと思っていた友恵と誠は肩を落とした。怜次のパンチは防弾ガラスや鉄の塊を粉砕してしまうほどの威力を持っている。当然陽太の頭など簡単に砕いてしまうはずだ。

しかしパンチを繰り出した本人は、少し驚いた顔をしていた。
「ん！？」
パンチは陽太の顔面に見事に直撃したはずなのに、なぜか不完全燃焼な気持ちが怜次の頭の中にはあった。
（なにか・・・・・嫌な予感がする・・・・・）
この怜次の予感は、見事に的中する。

なんと、陽太はゆっくりと立ち上がり、怜次を睨んだのだ。鼻から血を出してはいるが、致命傷は負っているようには見えない。

「何だと!?」
ここにいる誰もが驚いた。『一撃必殺』の異名を持つ怜次のパンチを食らったはずの陽太が、何事も無かったかのように起き上がったのだから。まるで、死人が蘇ったかのようにも見えた。
「陽太!?大丈夫なのか?」
と誠が恐る恐る言うと、陽太はコクリと無言でうなずいた。

「なんだと!?ふざけるなよ・・・・・ふざけんじゃねぇ!」
驚きと、戸惑いと、怒りを覚えた怜次は、もう一度陽太に近寄り、強烈なひざ蹴りを陽太のあごに食らわせた。
痛々しい音が響き、陽太は先ほどと同じように後方へ大きく吹っ飛ばされる。しかし・・・・陽太は生きていた。また立ち上がり、怜次の目をまっすぐに睨む。そしてそのとき初めて怜次は陽太の恐ろしさに気付くのだった。
「そうか・・・・・そういうことか。お前はわざと後ろに吹っ飛んでいるんだな。後ろに吹っ飛んで俺のパンチやキックの衝撃を吸収しているのだな!」
「やっと・・・・・・気付いたか。」
「・・・・・・・・・なら、これならどうだ!」
怜次は二度フェイントを入れて、またストレートパンチを陽太の顔面に食らわせる。そしてまた陽太は後ろに大きく吹っ飛ぶ。
「ここだ!!」
怜次は地面にたたきつけられた陽太に素早く近寄り、とどめのパンチを食らわせようとした。仰向けになっている陽太には怜次のパンチの衝撃を吸収できるほどのスペースがどこにもない。怜次はそこが狙いだった。後ろに飛んで衝撃を吸収しているのなら、吸収できないところまで追いかける。怜次の素早い動きがあれば、この程度の戦略は簡単なものだろう。
何もできない友恵は焦っていた。

（どうしよう・・・こういうときってやっぱり助けに入らなきゃだめなのかな。でも何だかわからないけど、陽太はあれだけ殴られているのに、ちっとも劣勢に見えないのよね。）

陽太はまるで『俺は不死身だ』とでも言っているかのようなオーラを出していた。

不死身のオーラ

仰向けの状態で地面に寝転んでいる陽太に向かって、ものすごいスピードで怜次が走ってゆく。とどめをさすために。

「終わりだ！」

怜次にとってはこの時こそが狙い目なのだ。怜次の拳がまっすぐに陽太の顔面に向かって飛ぶ。しかし・・・・・

「かかった！！」

陽太にとってもこの時こそが狙い目だったのだ。陽太は全身を使ってピョンと勢いよく跳ね起き、その拳をすり抜けて、ガラ空きになっている怜次の顔面に強烈なパンチを食らわせた。

綺麗に決まったカウンターパンチが怜次の頭を砕く。１年前１５人の男子生徒を半殺しにした陽太のパンチの威力は半端なものではない。それに加えて、怜次の勢いを完全に跳ね返したのだから、ダメージは非常に大きなものとなった。

怜次は１回転半して３０ｍほど吹っ飛び、地面に転がった。

「なん・・・・・・・だと？この俺が吹っ飛ばされるだと！？」

砕けた頭はすぐに元に戻ったが、怜次は回復することのできない何かを失いつつあった。

「どうだ！」

陽太はハングリーブルーの弾を入れ替えながらドヤ顔を怜次に見せつける。

「く・・・クフフフフ！！面白い・・・・・・・・面白いぞぉぉ！！」

怜次はもう一度、陽太に向かって走り始めた。するとそのとき、怜次の右拳にものすごい速さで３０？ほどの短刀が深々と刺さった。

短刀を握っているのは誠だった。

「いい加減にしろ。」

普段は優しい顔をしている誠だったが、この時だけはまるで鬼のように恐ろしい顔をしていた。怜次は短刀が刺さっている右手をじっと黙ったまま見つめる。

「・・・・・・・・・・・・」

「怜次、お前ら小笠原組がいったいどういう考えを持っているかは分からんがな、俺たちの敵は豪牙一族なんだ。お前らの相手なんてしてらんねぇんだ！」

「クフフフフ、君らの敵は豪牙だけなのかもしれないけど、僕らにとって君たちは敵なんだよ。」

「！・・・・・なぜだ！」

「なぜ？クフフフフ！理由なんてありゃしねぇよ！ヤクザに理由なんていらねぇのさ。まぁ・・・しいて言うなら・・面白そうだったからかな。」

「面白そうだったからだと！？」

「そうだよ。あのジュラバヌア・エデルが苦戦した相手がいったいどんなものかが気になったんだ。そして見てみたくなった、そこにいる中川陽太をな！」

怜次は陽太を強く指さした。

「・・・・・・・・・・・・」

陽太は黙ったままただ怜次を睨み続けている。

すると陽太たちのいる所のすぐ真上に巨大なヘリコプターが現れた。

「なんだ！？」

「僕はいろいろな意味で君に負けたよ陽太君。だけど僕は君をあきらめない。次会うときは必ず殺す。・・・・・・・じゃあな！あとこれ、ガラス代だ。とっておきな。」

怜次は１０万円の札束を陽太に向かって投げてから、刺さっている短刀を手から抜き、一度体勢を低くしてから、ピョーンと飛び、ヘリコプターに乗った。ヘリコプターは旋回して、ぼんやりと明るい西の空に向かって飛んでいった。

それを誠は呆然と見つめながら、少し考え事をする。

（次会う時・・・か。またあいつが来るんだとしたら、準備が必要だろうな。俺たちの敵は豪牙一族だけだったはずなんだが、ゴールド隊や小笠原一族も視野に入れとかなければいけないのかもしれないな。にしても・・・・・・・・・陽太の戦闘能力は天才的だな。パンチの衝撃吸収や、カウンターをあの状況で繰り出すなんてそう簡単にできることじゃねぇ。・・・・・・・・・やっぱりお前の息子だよ・・・・・・清。）

誠は陽太に対して期待のまなざしを向けていた。すると、陽太はまるで棒のように地面に倒れた。

「陽太！」

友恵があわてて陽太に近寄る。

「・・・・・・・・・悪い・・・・・さっきのパンチが今頃になって響いてきやがった。」

「さっきのパンチ？・・・・陽太は衝撃を吸収したんじゃないの？」

「・・・・・まぁな・・・・・だが、ダメージは食らうんだよ。致命傷にならないようにするだけの技だからな。・・・・」

「陽太？陽太！」

「友恵？・・・・お前・・・・・・・・・なんで・・・・・・・泣いて・・・・・・・・・・。」

陽太はゆっくりと目を閉じた。

「友恵、お前は陽太の足を持て。ベッドまで運ぶぞ。」

「・・・・・うん。」

「安心しろ。陽太は死なない。こいつは不死身だ。よくわからんがそういうオーラがある。」

「うん」

友恵が両足を持ち、誠が両腕を持って、陽太を喫茶店の中へ運び込んだ。

陽太は眠っているだけだった、極度の集中と体中に負った傷による疲労が安心したことにより一気に体感するようになったのだろう。

そして翌日。5月13日朝6時。いつも通りの朝がやってくる。

「おはよぉ・・・・・・・・。さ！掃除しなきゃ！」

寝ぼけた様子の友恵は倉庫の扉をゆっくりとあけてホウキをとりだし、そこらじゅうに散らばったガラスの破片を片付け始める。

ホウキを掃く音と、ガラスの破片が転がる音で誠と陽太が目を覚ます。

「おはよう・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

誠も陽太も異常なまでに朝が弱い。なので寝言のように挨拶をかわしていた。そんな二人に元気よく友恵が話しかける。

「おはよう！あっ！陽太！もう歩いて大丈夫なの？」

「ん・・・・・・・・・・・・」

立ったまま眠ってしまう陽太。

「だ、大丈夫そうね・・・・・・・・」

友恵は安心したような、呆れたような気持ちになった。

「友恵ぇ。・・・・・・・・何やってんだ？」

誠もまだ脳は起きていないようだった。

「ガラスの掃除よ。後でガラス買いに行かなきゃね。」

「ふわぁ～・・・・・・・あー、友恵と陽太で行って来いよ。俺は今日、Kの会議があるんだ。」

誠は大きく伸びをして、ようやく目を覚ました。

「え～なんで陽太と二人で行かなきゃいけないの～？」

「ガラス屋の息子にも陽太を紹介しなきゃいけねぇし、そのついでだ。なんだ？まさか恥ずかしいとか言うのか？」

「は、恥ずかしくなんかないわよ！」

友恵は顔を赤くして、ホウキをものすごいスピードで掃きまくった。

「ははは！まるで初デートにでもいくかのようだな。ガラス買いに行くだけなのに。」

誠は完全に友恵をおちょくっていた。
「ふ、ふざけないでよね！」
「まぁいいじゃないか。これからずっと一緒に暮らすわけだから、仲良くしろ。それにな・・・・・・俺もお前もいつ死ぬか分からんしな。仲が悪いまま別れたりすると最悪だぞ？」
「・・・・・・・・縁起でもないこと言わないの！さぁ！そこにフランスパンがあるから食べて！」
「はいはい・・・・・・・・。堅っ！」
誠は長く堅いフランスパンにかぶりつきながら、カウンター席で二度寝してしまった陽太を見つめながら、ふと考え事をする。
（Kの国民に残された道は二つ。勝利して日本国を我がものとするか、死んで朽ち果てるかだ。いつ死ぬか分からねぇ俺たちは、今現在を大切にしなきゃなんねぇんだよ。なぁそうだろ？だから俺は・・・・・）
ただただ長くゆっくりと流れる時間。しかし、Kに残された時間は長いようで、かなり短い。Kを狙う組織が増えている以上、その時間は今もなお、どんどん短縮され続けているのだった。

ちょうどその頃、とあるビルの地下室で小笠原組の幹部らが集まり、円卓の上で会議を行っていた。

「今回の作戦の失敗の原因はすべて僕にある。責めるなら僕を責めてくれ。」
怜次は円卓の上で深々と頭を下げた。すると幹部らが少し焦った様子でしゃべり始める。
「と、とんでもありません！組長は何一つ悪くなんてありません！」
「そうですよ！我々も護衛するべきだったんです。すべて組長に任せてしまった我々が悪いんです！」

「どうか頭をあげてください！組長！」
組員たちも深々と頭を下げた。
「・・・・・・すまない。だが、オトシマエはしっかりつけさせてもらう。・・・・・桐谷！銃を持ってこい。」
組員たちは怜次のこの発言に驚いた。
「お、おやめください！いまどき指落としたりしてオトシマエつけたりするヤクザなんていませんよ！」
そんな組員の忠告を無視して、怜次は銃を手に取った。
「指は落とさないよ。だって僕に銃は効かない。僕は撃っても撃っても回復しちまう体だ。だがな、僕にだって弱点はある。・・・・・・僕は昨日の戦いのときに『絶対に回復できない体のパーツ』を守り続けていたんだ。今日はそれをこの銃で撃って落としたいと思う。さぁ問題です。いったいどこのパーツが回復できないのでしょうか？」
「・・・・・・・・・・・うーん。」
組員たちは全員考え、黙り込んだ。そして誰も答えないまま３０秒が経過する。
「はーい時間切れぇ！正解は舌でした。僕は昨日何回も顔面を撃ち抜かれたが、舌にだけは銃弾が当たらないように気をつけていたんだ。」
「で、では撃ち落とすというのは・・・・・・」
「うん。舌を落とすの。短刀（ドス）で落とすよりも銃で撃ち抜いた方が痛みも軽いしね。」
怜次は自分の口に銃口を入れて、引き金を引いた。
「組長！！！」
怜次の体の唯一の弱点である舌。これをを落とすということは弱点を無くし、今後の失敗を防ぐという意味があるのだ。しかしそれは想像を絶する痛みと、言語の障害を伴うものとなる。
「ぺっ！・・・・・・・、ひりはい（桐谷）。ほんほおまへはおへほふうやふは（今後お前は俺の通訳だ）。」

怜次は口から大量の血とともに舌を吐き出し、意味不明な言葉をしゃべる。
「く、組長・・・・・・・なんでそんなことを・・・・」
怜次の通訳という非常に難しい役目をもらった桐谷。スキンヘッドで髭(ひげ)が多い桐谷は今年で３０歳。怜次の親友でもあり、優秀な部下でもある。
「ふいおはふへんひむへへひばはふはいひ（次の作戦に向けてしばらく待機）。やふはおえはあをうはあう（奴らのでかたをうかがう）」
「え・・・・・ふいお・・・・・・あれ？・・・・・・・申し訳ありません・・・・・通訳できません。」
と言い、深々と頭を下げる桐谷を怜次は非常に残念そうな目で睨む。
結局先ほどの発言はホワイトボードに書きこまれた。

するとそこに１人の組員があわてた様子で怜次の前まで来た。
「組長！豪牙の当主である豪牙大がたった一人でＫの領土に侵入したとの情報が入りました。」
「ほぉ～。」
「どうします？我々も動きますか？」
「・・・・・・・・えや、ほんひふようはあい（いや、そのひつようはない）。」
怜次は不気味な笑みを浮かべながらそう答え、少し考え込んだ。
（豪牙大か・・・・・確か奴はＫとの問題を平和的に解決しようとかぬかしてるやつだったな。いったい何が目的で侵入なんかするんだ？）
豪牙大のこの行動にはいったいどんな意味があるのだろうか。Ｋとの和解を意味するものなのだろうか、それとも敵を誘き寄せる罠なのか。

Ｋの国民たちはまだ大が自分たちの領土に侵入したことすら気付い

ていないのだった。

不死身のオーラ（後書き）

どうも螺子です。

怜次の舌が無くなってしまったので、彼の発言がめんどくさくなりました（笑）

いろいろなガキ

5月13日午後13時ごろ。
陽太と友恵は2人で窓ガラスを買いに行くこととなった。

通販などがあれば、窓ガラスなんてすぐに買い替えられるのだが、Kにはそういった便利なものは存在しない。

ガラスを専門に扱っているお店『天津ガラス』は、喫茶ねこばばから歩いて1時間以上もかかってしまう場所にあるので、陽太も友恵も嫌そうな顔をしながらダラダラと汚い街中を歩き続けていた。
「・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・」
足音がやけにうるさい。会話が全く無いせいだ。もうかれこれ15分以上も会話の無いまま歩き続けているだけなので、友恵は我慢の限界を超えてしまった。
「んもぉぉぉぉ!!ちょっと陽太!なんか面白い話しなさいよ!」
「はぁ?そんないきなり言われても思い付かねぇよ。」
「じゃあもう面白い話じゃなくていいからなんか話しをして!あんたずっと無言のままこうやって歩いているの辛くないの?」
「いや俺はそんなに辛くは無いんだけど・・・・・」
「私は辛いの!」
「じゃあお前がなんか話せばいいじゃんか。」
「それは・・・・・・・ちょっと・・・・・・・」
友恵は突然顔を赤くして、モゴモゴとした話し方になっていってしまう。
(なんなんだよコイツ。めんどくせぇなぁ・・・・・・・・・)
と陽太は心の中で言いながらも、何を話そうか考え始める。
「そうだな・・・・・・面白い話しかぁ。」

「なんかあるの！？」
突然友恵は明るい顔になる。切りかえが早いと言うべきか、分かりやすいと言うべきか。
「俺が小学校６年生の頃の話だ。俺のクラスにすげぇかわいい天使みたいな女の子が転校してきたんだ。頭も良くて、勉強も出来て、すげぇ優しい性格の人だった。クラスメイトの男子はみんなその女の子に夢中になった。もちろん俺もな。」
「あら、恋の話？意外ね。」
「その子はもういろんな人から告白されまくってた。クラスどころか学校中でも噂になるほど超人気者だった。でも誰一人として告白を成功させた人はいなかったよ。だから俺は告白はしないって決めていたんだ。」
「・・・・・・・・・・うん。それで？」
「そう決めていたんだけど、俺はある日の放課後にその子と二人っきりになった時に思わず告白しちゃったんだ。」
陽太はだんだん話しているうちに恥ずかしい気持ちになっていった。
「うんうん！なんて言ったの？」
友恵の表情はかなり真剣だった。
「俺は天使のような君が大好きだ！・・・・・・って言った。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・プッ！」
少し長めの沈黙の後、友恵は口を軽く手で押さえて、陽太をバカにするような目つきで見ながら笑った。
陽太はこの話を友恵にしてしまったことを深く後悔した。というより陽太はこんなことを言ってしまったこと自体を後悔しているのだった。
「・・・・・・・・・・」
陽太は顔を真っ赤にさせてうつむく。
「良くそんなセリフ思い付いたわね！」
「うるさいなぁ。」
友恵は明らかに陽太をバカにしている様子だった。

「でもほんと意外ね。陽太にもそんなこと言う神経があったんだ！フフフフ。」
「あー、普通の俺だったらそんなこと絶対に言わねぇよ。でもあの時は普通じゃなかった。あんなこと言っても大丈夫なんじゃないかなって思ったんだよ。」
「それだけその子が好きだったんでしょ？それで返事はどうだったの？」
「爆笑されてフラれたよ。あの子は優しい性格だったからあのセリフが学校に広まることは無かったけどな。まぁそれがきっかけで少し仲良くなれたりはしたけどな。」
陽太は告白のセリフは後悔しているのだが、告白したこと自体は後悔していないようだった。
「へぇー。面白い過去持ってるじゃない。」
「お前この話誰にも言うなよ？」
「分かってるわよ。」
先ほどまでの沈黙から一転、２人の会話は目的地に着くまで途絶えることはなかった。

それからちょうど１時間がたったころ。

２人は予定よりも少し遅れて『天津ガラス』に到着する。
「ここか。」
和風でボロボロの小さな建物だった。天井に乗っている鉄の看板に書かれた店の名前は錆びてしまってほとんど読むことが出来ない。おそらく相当古い建物なのだろうと陽太は推測した。

その建物の中からスキンヘッドで太った男が一人出てくる。
「と、友恵ちゃんやないか！久しぶりやな！」
「こんにちは！」
その男はマジで太っていた。体重はおそらく１００キロを超えるだ

ろう。
「こ、この人は誰？」
思わず陽太はその男に指をさしてしまう。
「あ。紹介するね。この人は天津佑太君。私と同い年にしてもう一人前のガラス職人なんだよ。」
「お、同い年！？このデ・・・・・・・・・・・・。いやこの人は１４歳ってことなのか？」
「そうよ。」
「まるでおじさ・・・・・・・・・。いやなんでもない。」
天津佑太は見た目ほとんど４０歳ぐらいのおじさんにしか見えない。しかし１４歳というのは事実なのだ。
陽太は『デブ』とか『おじさん』とか言いそうになったが、なんとかこらえることが出来た。
「友恵ちゃん元気か？」
「ええ、もちろん。」
「お！この人があの噂の中川陽太君か。よろしく！」
「あ、ああ。よろしく。」
陽太と佑太はしっかりと握手を交わした。
「ところで友恵ちゃん、今日はどないな用件でここに？」
「うちの喫茶店の窓ガラスが割られちゃったの。だから窓ガラスを買いに来たのよ。」
「おお、喫茶ねこばばのガラスは良く割れるから、この間少し多めに作っといたんや。そこに置いてあるから全部持って行ってええで。値段は１０００円だ。」
陽太はその値段に驚く。
「１０００円！？安すぎないか？」
「心配はいらんて。ワイはガラス作りのプロや。こんなガラス１００円で十分や。」
少し申し訳ない気もしたが、陽太は長方形の形をした窓ガラスを抱えてナップザックの中に入れ、１０００円札を佑太に渡す。

「ほなさいなら～」
「ありがとね佑太君。」
「ありがとうございます。」
3人は軽く挨拶を交わし、陽太と友恵は喫茶店に向けて、もと来た道を歩き始めた。

ちょうどその頃、喫茶ねこばばに一つの電話が入る。
リリリリリリン
「もしもし。」
「た、大変です土井さん！侵入者です！Kの領土のどこかに何者かが侵入したようです！」
Kの情報官からの電話だった。情報官は非常に焦っていたが、誠は冷静に話を聞く。
「落ち着くんだ。こちらも今すぐにでも武装したいんだがな、人がいないんだ。」
「そうですか。ではまた詳しい情報が入り次第連絡します！」
「了解した。」
誠は険しい表情で電話を切る。

「早く帰ってこいよ～。」
誠は中々帰ってこない陽太と友恵が心配でしょうがなかった。

しかしその頃陽太と友恵は、相模川の河川敷でのんびりと座っていた。
「はぁ・・・・・いい感じの休憩所だな。」
「うーん。あと10分ぐらいしたら出発しようか。」
まるで早く帰宅する気の無い2人。そんな2人の背後に、黒い影が忍び寄る。

「誰だ！！」
陽太が素早く振り返る。そこには小柄な中学生ぐらいの黒長髪の少年が1人立っていた。
（なんだこいつ？）
その小柄な少年は陽太たちを見てニヤニヤと笑っていた。
「何か用かガキ。」
陽太は鋭い目でその少年を睨みつけるが、全く気にせずに少年は黙ったまま陽太たちの方へ歩き始めた。すると突然友恵が後ずさりを始める。友恵はものすごい怯えている様子だった。
「いや・・・・・・来ないで！」
（友恵？どうしたんだ？）
怯えている友恵を見るのは初めてだった陽太。相当その少年が恐ろしいのだろうか。少年が1歩ずつゆっくりと友恵に近づくにつれて、友恵が1歩ずつ少年から離れようとする。
陽太は友恵をかばうように立ち、その少年に話しかけた。
「おい！黙ってないで何とか言えよ！」
「・・・・・・・・・ちょっと前までの俺様の名前は春江田大（はるえだだい）、そして現在は豪牙大（ごうがだい）という。」
まだ声変わりすらしていない大。豪牙大という名前に聞きおぼえがあった陽太は警戒心を強めた。
「お前・・・・豪牙家当主の豪牙大なのか？」
「そうさ。」
（ガキじゃねぇか！何でこんなガキが！）
陽太はハングリーブルーを懐から取り出し、大に向ける。すると友恵がハングリーブルーの上に手を置いて、撃つのをやめさせようとする。
「友恵！？」
陽太は驚く。
「よ・・・・・陽太。ま・・・まって・・・・・・」
友恵の声は震えていた。

「やぁ友恵。久しぶりだね。」
「なんで・・・・・どうして・・・・・・・どうして春江田君がここにいるの!?」
どうやらこの二人は知り合いのようだ。しかし誰がどう見ても仲がよさそうには見えないだろう。
「どうしても君の顔が見たかったんだ。」
「嘘よ!どうせまた・・・・・・・どうせまた・・・・・・・・・・・うわあああああん」
友恵は突然地面に倒れ込み、号泣する。陽太は先ほどまで一緒に楽しく会話をしていた友恵が、こんなにも泣き崩れてしまうのが信じられなかった。
「何で泣くの友恵。君は僕の」
「うるさい!・・・・・オ、オエェェェェェ!」
友恵は近くに生い茂っていた草むらの中に嘔吐してしまう。
陽太は驚きながら友恵の背中をさすってあげる。
「おいおい大丈夫かよ!具合悪かったのか?」
「・・・・・・・・・ごめんね陽太。具合が悪いんじゃないわ。ちょっと昔にあった悪い思い出が頭をよぎると気持ち悪くなっちゃうのよ。」
「なんだと!?」
陽太はもう一度大の方を向き、さっきよりも恐ろしい目で睨みつけた。
「なんだよ。俺様は豪牙家の当主だぜ?そんな目で見たらお前すぐに死刑だよ?」
大は相変わらずニヤニヤと笑っていた。
「黙れ!ここは無法地帯だから今ここでお前を殺すことだってできるんだ。次ふざけた真似しやがったらこの銃でお前の頭を撃ち抜いてやるよ!」
銃を突きつけられてもなお、動揺する様子を見せない大。
「ほら友恵、そんなところで吐いてないで、俺様のところへ来てよ。

」
「・・・・・・・・・・・・」
「もしかして覚えていないの？そんなことはないと思うけど。」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「俺様と君は恋人同士だったじゃないか。今もそれは変わらないはずだ。」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「友恵は俺様のものだ。」
「・・・・・・・・・だーまーれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」
陽太の怒りパラメーターがマックスになり、思わずハングリーブルーの引き金を引いた。
河川敷中に鳴り響くハングリーブルーの重々しい銃声。しかし、大は全くの無傷だった。
「アハハハハ！」
大は笑う。
「何！？」
陽太は驚く。
良く見てみると、ハングリーブルーの銃弾が大の鼻の頭らへんで静止しているのだった。
「この間死んだ豪牙家の当主の人たちは、呪具とか使えずに死んじゃったみたいだけど、俺様はそんなバカな奴らとは違う。見ろ！これは俺様の周りの物の動きを止めたりすることのできるスエラの杖だ！この杖がここにある限り君の銃は効かない！」
物の動きを止めることが出来るということは、人の呼吸器官なども止めたりできるということだ。陽太はそれに気付き、素早く後ろに下がる。
しかし、それが失敗だった。その隙を突いて大が友恵に近づき、友恵の背中を杖で強く殴る。そして友恵は気を失ってしまう。
「しまった！！！」
陽太はあわてて銃を撃とうとしたが、大は友恵を盾にしようとする

ので、銃を下げた。しかし接近戦を仕掛ければ殺されてしまう。陽太はどうすればよいのか分からなくなった。そんなことをしているうちに大は『飛行呪具』と書かれた小さな玉をとりだす。

「ま、まさかお前飛ぶ気か！？」

「もう一度言う。友恵は俺様のものだ。」

「待てぇぇぇ！！」

陽太の叫びもむなしく、大は友恵を背負ったまま北の空へ飛んで行ってしまった。

いろいろなガキ（後書き）

どうも螺子です。

やっぱり１４歳ぐらいの生意気なガキが一番憎たらしいですね。だから中二病とか言う言葉が出てきてしまうんでしょうな（笑）

でもそんな私も昔は中二病だったような気がします（＝。＝；）

異常な男

5月13日17時30分。

喫茶店に悪い知らせが入る。

リリリリリリリン

「もしもし！」

誠はものすごいスピードで受話器をとり、あわてた様子で電話に出た。

「土井さんか！？た、大変だ！友恵がさらわれた！豪牙家の当主にさらわれたんだ！」

「・・・・・・・・・・・・クソ！！」

ずっと予感していた出来事が的中してしまった誠。テーブルを強くたたいた。

「土井さん！今そちらに向かっています。武器とか装備を整えて待っていてくれ。」

「早くしろ！友恵が死ぬかもしれないんだぞ！？」

誠はいつになく焦っていた。

「落ち着いてください！おそらく奴らはすぐには友恵を殺さないでしょう。」

「なぜだ！？」

「豪牙家の当主、豪牙大は友恵と同い年ぐらいな上に、知り合いでした。それに、誘拐犯ってのはすぐに人質を殺したりしません！」

「知り合い？豪牙大・・・・・・・・・・まさか！」

「奴の元の名前は春江田大だそうです。土井さんは何か心当たりがありますか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

『春江田大』という名を聞いた誠はショックを受け、受話器を地面に落してしまった。

「もしもし？もしもーし！！」
「あいつだったのか・・・・・・・・・」
誠の目は殺意に満ちて赤く充血していた。受話器をもう一度拾った誠は、何も言わずに電話を切り、二階にある自室に歩いていく。

「・・・・・・・・やっと見つけたぞ。春江田大。」

ニヤリと笑みを浮かべる誠。そんな誠の自室の壁にはなんと、数百本の短刀が大量に突き刺さっているのだった。
なぜこんなことになってしまっているのかと言えば早い話、誠は精神的な病を抱えているからである。大を憎む心があまりにも大きすぎて、毎日のように大を短刀で殺す夢を見てしまう誠。そのストレスを発散するために短刀を壁に突き刺してしまうのだった。
この癖がついて間もない頃は、突き刺した短刀は必ず抜いて回収していたのだが、だんだんめんどくさくなってしまい、刺しっぱなしにするようになっていったのだ。
つまり、この部屋に刺さっている短刀の数は、誠が心にためている春江田大に対する憎悪の量に比例するものなのだ。
「ウヘヘヘヘヘ！！！」
大の写真を机の引き出しから取り出し、不気味な笑みを浮かべる誠。

すると喫茶店に陽太が飛び込んでくる音がした。
「土井さーん！土井さん！どこだ！？」
あわてて陽太は喫茶店内を探し回る。何度も何度も誠を呼んだ陽太だったが、誠は一度も返事をすることはなかった。

「二階か？」
陽太はダッシュで階段を上り、誠の自室の扉を開ける。そして陽太の目に、壁に無数の短刀が突き刺さっている異様な光景が飛び込んでくる。陽太は非常に驚いた。

「な、なんだよこれ!?・・・・・・・・・・土井さんはどこだよ!」

そこに誠の姿は無かった。おそらく1人でどこかへ行ってしまったのだろう。どこへ行ったのかは大体予想がついた。

「まさか1人で豪牙城に行ったのか!?」

陽太のこの予想は当たっていた。誠は先ほど陽太が喫茶店に飛び込んできたのを確認してから、誠の部屋の向かい側にある小さな窓を開けて喫茶店を飛び出したのだった。そしてイカれた顔をしながら、ものすごい速さでKの領土を北上し始めたのだった。

「土井さん・・・・・・・・・・」

陽太はどうすればよいのか分からなくなった。

黒い生地に、白い線で描かれた蛇の模様がある和服を着た誠。この和服こそが誠の戦闘着だった。裾や袖をひらひらと風になびかせながら、街の中を北へ北へと駆け抜ける。

「ずっと殺そうと思っていた奴が最高のタイミング、最高の条件で現れてくれた。このチャンスを逃したら、二度とチャンスは来ないだろうな!ウヘヘヘヘヘ!」

誠の人格は変わり果てていた。この時すでに誠の頭の中には、『K』とか『仲間』とかはかけらも存在せず、ただ大を殺したいという『殺意』だけが存在した。つまりこれは誰のためでもなく、自分のために取っている行動なのだ。

誠は30分ほどで豪牙城の正面門に到着してしまう。

5月13日18時14分28秒。正面門に土井誠出現。

門の両脇に立っていた2人の警備員は、少し焦った様子で銃を構える。

「だ、誰だ貴様は!」

「・・・・・・・・」
誠は下を向いたまま何も答えない。
「ここより先は立ち入り禁止だ引き返ぇ・・・・・・・・・・・・・・・!!」
必死に門を守る警備員の言葉が途中で止まる。
短刀がものすごいスピードでその警備員の体中を駆け巡ったからだ。
そして、3秒ほどのタイムラグの後、警備員の体中から大量の血が噴き出る。
「え・・・・・・・・?」
その警備員は悲鳴をあげる間もなく倒れ、息絶える。
隣にいたもう一人の警備員は何が起きたのか全く理解することが出来ず、腰を抜かして怯えていた。
「な、何をしたんだお前!」
すると誠は鞘にしっかりと納められている全長40?ほどの短刀を、怯える警備員に見せつけた。
「短刀の弱さは長さが無いことだ。逆に短刀の強さは速いことだ。だから弱さを見せず、強さだけを見せつけるために、攻撃の際は素早く斬り、素早くしまう。これは短刀使いとしての基本だ。もう一度、お前の体で手本を見せてやる。」
「・・・・・・・や・・・・・・・やめてくれ・・・・・・・・助けてぇぇぇぇ!!!」
そんな叫びもむなしく、冷たい短刀がその警備員の体を光のような速さで刻んでゆく。そして誠が短刀を鞘にしまってから3秒後、先ほどの警備員と同じように体のあちこちから大量の血を噴き出して倒れる。
この2人の警備員が死んだことにより、何らかのセンサーが反応し、豪牙城全体に警報が鳴り響いた。

「侵入者！侵入者！何者かが正面門の警備員を殺害し、敷地内を暴走中！警戒せよ！警戒せよ！」

この放送は豪牙家当主の部屋にも流された。

当主の部屋には、手足を縛られて、口を粘着テープでふさがれた友恵と、それを眺める大がいた。

「アッハッハッハッハ！この俺様を殺しにやってきたのかなぁ。」

大は友恵の首筋をそっと指でなぞりながら、粘着テープをはがした。

「あんたも今のうちに降伏しといたほうがいいわよ！Kの人たちは強いから、あんたなんかすぐに殺しちゃうんだからね。」

と友恵は怯えている自分を隠しながら必死に強がる。

「アハハハ！それは面白い。でも俺様には君がいる。だからきっと奴らは俺様には手を出せない。」

「・・・・・・・・私みたいな女を人質に取らなきゃまともに戦えないのね！あんたって昔っからそう！あんたはいつも卑怯！卑怯！卑怯！だから私の学校生活は台無しに・・・・・・・・」

友恵の目から大量の涙があふれ出す。すると突然、大は友恵の顔面を力いっぱい殴った。

「痛ッ！！」

手足を縛られた友恵に、そのパンチをかわすことが出来るはずもない。友恵はカーペットの上を転げ回った。

「調子に乗るなよ。君は俺様のものだ。」

大は少し笑いながら友恵の体の上にのしかかり、服を脱がせようとした。

「やめて！」

必死にそれを振り払おうとする友恵。

「ほら、じっとしてなきゃダメでしょ！オラァ！」

大はまた友恵の顔面を殴った。

「痛い！痛いよ！やめてぇぇ！！」

友恵の悲鳴が当主の部屋に響き渡る。ちょうどそのときだった。

部屋の隅に置いてあるスピーカーから放送が流れる。

「ザ・・・・・ザザザザ・・・・・・・大様！お逃げください！・・・・・これは我々のかなう相手ではありません。」
大はもう一度友恵の口に粘着テープを張り、マイクを手に取った。
「・・・・・・ふざけるな！お前らは何のために豪牙家の戦闘班にいるんだ！敵は少数だろ！？総攻撃で一気にしずめろ！」
「そ、それが・・・・・・敵数はたったの一名だけなんです！」
「なんだと！？」
大は驚いた。
「・・・・・・・バケモノです！動きが早すぎてついていけません！早くお逃げください！ウワァァァ！！ザッザザザザザザ」
どうやらこの戦闘員も殺されたようだ。するとそのスピーカーから、また別の声が聞こえてくる。

「弱い・・・弱すぎる・・・・。これが百戦錬磨の豪牙特殊戦闘班の力なのか？本当に笑わせてくれる。」
誠の声だった。
「貴様・・・・・・・」
「よう！久しぶりだな、春江田君。まあ俺は毎日毎日夢の中で君に会っていたけどな。これも夢なんじゃないかって思ったから、頬をつねったりしてみたよ。だがこれは夢じゃなかった。現実だ。待ちに待った現実だ！さぁかみしめろ、そこがお前の死に場所だ！！！」
この言葉の直後、当主の部屋の扉がゆっくりと開いた。

そこには、鬼のような顔をしながら笑い、大を睨みつける誠の姿があった。

「春江田大。俺は貴様を許さない！」

誠が大をここまで異常に憎む理由はいったい何なのだろうか。

当主の部屋にたどり着いた誠。しかし・・・・・
「動くなバケモノ！」
たちまち誠は１００人くらいの戦闘員に囲まれてしまい、銃を突きつけられる。
「手をあげて武器を捨てろ！」
戦闘員たちはかなり警戒している様子だった。それも当然だろう。誠はここに来るまでにたくさんの戦闘員をことごとく斬り倒してきているのだから。
「・・・・・・・・・フン！」
誠はニヤリと笑みを浮かべてから短刀を素早く抜き、真上に放り投げた。
「！？」
戦闘員たちは誠の意外な行動に驚いたりもしたが、短刀を真上に放り投げるというその行動がまるで忠告通りに武器を捨ててくれたかのようにも見えてしまい、ほんの少しだけホッとしたりもした。しかしそんな気持ちはすぐに消えてしまう、つかの間の安心にすぎなかった。

誠は懐から新たに短刀を取り出し、不気味な笑みを浮かべながら、光のような速さで、踊るように戦闘員たちの体を斬りつけていった。
「うわあああああああ！」
１００人以上いた戦闘員たちは床に大量の血を垂らしながら、次々と死んでゆく。そして先ほど放り投げられた短刀が床に落下したときにはもう、戦闘員は全滅してしまっていた。
誠は大に向かってゆっくりと歩き始めながら質問をする。
「春江田君、君には聞きたいことがいくつかある。答えろ。」

「・・・・・・・・・・な、なんだ。」
大の声は恐怖で震えていた。
「お前はなぜ豪牙一族の当主になれたんだ？お前ら春江田一族と豪牙一族の関係は何だ？」
「・・・・・・・豪牙と春江田は血がつながっているんだ。俺様は両親を殺されて、豪牙一族に引き取られたんだ。」
「ほぉ・・・・・・・・お前の両親や豪牙将や豪牙龍が殺されて、当主の座が運良くお前ににまわってきたということか。」
「そ、そうだ！」
「クックックックック・・・・・・・・ハハハハハハハハハ！！！」
誠は大の顔のすぐ目の前で、大きな口を開けて大笑いした。
「・・・・・・・・・？」
大は言葉を失い、戸惑う。
「つまりお前がその地位にいられるのは俺のおかげでもあるってことだな！」
「どういうことだ！」
「ハハハハハ！！お前の両親を殺したのは、この俺なんだよ！この俺、土井誠が、お前の両親をこの短刀で輪切りにしてやったんだよ！」
「・・・・・・・・・・なん・・・・・・・・だと！？」
大はあまりのショックで、立っていることすらできなくなった。急に突きつけられた衝撃の事実を受け入れられない大は、ただただ涙をこぼす。
誠は素早く短刀に手を伸ばした。しかし誠は短刀を鞘からは抜かなかった。
なぜなら、背中にものすごい殺気を感じたからだ。

「誰だ！」
今まさに豪牙大を殺さんとする誠の背後に、１人の黒短髪で白い和服姿の女が立つ。

「アタシは豪牙特別戦闘員のレイシー。神聖なる豪牙の心臓部で、無礼極まる行いをしている者がいると聞き、参上した。我々の敵はあなたですね。」
凛々しい雰囲気のある女レイシー。『特別』がつく戦闘員なのだから実力はそれなりなんだろうと思った誠は、ほんの少しだけ警戒する。

「このクズ男がこの世の神だとでも言いたそうだな？」
と誠は質問する。
「ええ、アタシ達は神につかえるものであります。」
と言ったレイシーは背中にしまってあった２ｍほどの日本刀を抜き、誠へ向かって走り始めた。
「・・・・・・・・・・」
誠は無表情のままレイシーをギリギリまで引き寄せてから弧を描くように素早く短刀を抜きながら反撃し、擦れ違う。

レイシーは、右脇腹に少し深めの傷を負う。しかし誠はレイシーの傷以上に深い傷を左肩に負った。
「何！？」
誠は左肩から流れ出る血をおさえながら、この上なく苦しい顔をしていた。そんな誠にレイシーは追い打ちをかけようと、再び刀を振りあげた。
「死ね！」
誠は振り下ろされた日本刀をかろうじて短刀で食い止め、真っ赤な火花を散らせる。
（この女、ただ者ではないな。）

「まだまだ！」
レイシーは休むことなく日本刀を振り回す。
「クッソーー」
左肩の傷の痛みに耐えながら、レイシーの攻撃を防ぎ続ける誠。
リーチのある日本刀のダイナミックな攻撃に対して、速さとキレのある短刀のコンパクトな動きを使った攻撃。二つの攻撃が正面からぶつかり合い、大きな金属音を部屋中に鳴り響かせた。
どちらも一歩も譲らない緊迫した接戦、真剣勝負が延々と続く。

しかし、そんな彼らに酷く卑怯な邪魔が入ってしまうのだった。
「ぐぁ！」
誠は右肩に奇妙な痛みが走るのを感じた。直後、目の前が真っ暗になり、地面に倒れ込んでしまう。誠の右肩には小さな針が刺さっていた。その針に付着していた毒で誠は意識を失ってしまったようだ。
そして、その針を放ったのは誠の背後で腰を抜かしていた大だった。
「・・・・・・・・・やった！やったぞ！」
震えながらガッツポーズをとる大。
ピクリとも動かなくなってしまった誠を見て友恵は涙を流しながらうろたえ、必死に縄を解こうとする。
レイシーはゆっくりと刀を鞘に戻す。

「アッハッハッハッハッハ！！俺様に背中を向けるなんて甘いぜ！・・・・・・・・・俺様の両親の仇を今ここで討ってやる。死ねや！」
大は意識を無くして地面に倒れ込んでいる誠の頭に、銃を突きつける。
すると友恵が手足を縛られた状態で大の腹に向かって頭から飛び込んだ。
「うっ！」
大の鳩尾（みぞおち）に友恵の頭が入る。
「貴様！なにをするか！」

レイシーは再び日本刀を抜き、友恵に向かって走っていく。
友恵は、ただ白い和服をひらひらとなびかせながら走ってくるレイシーを呆然と見つめているだけだった。

そのとき・・・・・

重々しい銃声が鳴り響くと同時に部屋の窓ガラスが割れて、そこからヘリコプターの照明が差し込んでくる。
「なんだ!?」
ヘリコプターには陽太と佑太が乗っていた。
「今そっちに行くで!」
とノリノリな様子で言い放った佑太は、ヘリコプターからジャンプして、部屋の中に侵入し、友恵の口についている粘着テープをはがした。
「佑太君!」
「助けに来たで友恵!さぁ逃げよう!」
「待って!お父さんがそこで倒れてるの!」
「あ、なら友恵はワイの右腕にしっかりつかまるんや!左手で誠さんを運ぶ!」
佑太はものすごい腕力を持っているので、７０キロ以上もある誠の体を片手で持ち上げることが出来るのだった。
「よーし!逃げるぞ!友恵は右肩から手を離すなよ!」
「うん!」
しかし当然レイシーが簡単に佑太たちを逃がそうとするはずもない。
「逃がさん!」
レイシーは佑太に向かって刀を振ろうとした。すると窓の外から陽太がハングリーブルーでレイシーの日本刀を砕いた。
「よっしゃ!」
陽太はヘリの中でガッツポーズをとる。レイシーは粉々に砕け散っ

ていく刀を驚いた表情で見つめる。
その隙に佑太は友恵と誠を担ぎながら窓に向かって走り、ヘリコプターに向かって思いっきり跳んだ。しかしそれを見た陽太は驚いた。
「うわ！バカ！何やってんだ！」
「あかん！届きまへぇぇぇん」
友恵と誠を担いだ佑太はヘリコプターの手前で降下し始めてしまう。
陽太は素早く佑太に向かってロープを投げた。
「つかまれー！！」
「・・・よぉし！」
佑太は空いている右手でなんとかそのロープをつかむことが出来た。
「よし！このまま逃げるぞ！」
ヘリコプターは佑太たちをぶら下げたまま、南の夜空に向かって飛んで行くのだった。

「しまった！逃がしたか！」
レイシーは悔しい顔をする。すると大がレイシーの顔を木製の杖で殴った。
「ふざけんな！早く追いかけろ！」
よろめきながら床に倒れ込むレイシーに大は容赦なく殴り続けながら怒鳴る。
大の心は恐怖と怒りでいっぱいになっていたので、やり場のないその気持ちをレイシーにぶつけているのだった。
「お、追いかけろと言われましても・・・・・・・・・・・・」
「早く他の隊員たちを集めてあのヘリを追うんだよ！」
「ダメです！今から集まっても間に合いません！」
「くっ！・・・・・・・・・クッソォォォ！！全部お前のせいだ！なぜあの男にとどめを刺さなかったんだ！」
「・・・・・・・・・・・そ、それは・・・・・」
レイシーは意識が無くなるまで大に殴られ続けるのだった。

大は気が付いていない。誠にとどめをさすチャンスを逃したのはレイシーではなく、大だということを。

ヘリコプターはあっという間にKの領土まで到着してしまった。
「救出成功だ。」
陽太は少しほっとした様子だった。
「ごめんね陽太。」
「俺は大丈夫だよ。友恵は大丈夫なのか?」
「うーん・・・・・・・・・あんまり・・・・・・・・・」
「事情を聞かせてくれ。いったい何があったんだ!なんで土井さんがあんなに怒り狂うんだ?」
「・・・・・・・・・・それはお父さんの意識が戻ったら話しましょう。」

誠が豪牙大をあんなにも憎むのはなぜか。

そして、友恵が経験した辛い過去とはいったい・・・・・・

刻み込まれた友恵の心の傷　1

“半年前
まだ日本にロチェル病も豪牙一族もKも無かった頃の話。
友恵は開範(かいはん)中学校という、神奈川県で最も成績が優秀な超名門校の2年生だった。それなりに友達もいて、勉強もできた友恵は、充実した学校生活を送ることが出来ていた。あの事件が起こるまでは・・・・・・・・。

２０１１年１０月３１日。中間テスト前日の放課後のことだった。
学校の図書館に残ってテスト勉強を友人の木下優花(きのしたゆか)とやり終えた友恵は、２人で話をしながら下校している最中だった。
「とりあえず明日の内容は完璧だね。」
「うん！でも数学はたぶん平均点高いかもね。」
この2人にとってのいつも通りの会話。いつも通りの帰り道。すべてはいつも通りに進んでいた。するとそこに、いつもとは違う質問が優花の口から出てくる。
「そういえばさ、友恵って好きな人いるの？」
急な質問に、友恵は驚いた。
「え！？」
優花の顔は比較的真面目だった。
「友恵ってさ、あんまりそういうこと言ってくれないじゃん。好きな人、いるの？」
「え・・・・・えぇ・・・・・・ま、まぁいるけど・・・・。」
友恵は顔を真っ赤にする。
「え！？ほんと！？教えて教えてー！教えてくれなきゃテスト勉強に集中できないー。」
「う・・・・・・・・・・。」
友恵は少し深く考え込んだ。

（まぁ言っても大丈夫かな。）
優花の期待の眼差しに負けて、友恵はこの時、そう思った。
「えーっとね。大君だよ。春江田大君。」
そう、すべてはここから終わっていた。友恵は春江田大に好意を持ってしまっていたのだ。

しかし意外なことに優花の反応は薄かった。
「ああ、あの人か。人気だもんね。」
「うん。」
会話がもっと盛り上がることを予想していた友恵は、なんとなく拍子抜けしてしまったような気持ちになった。

翌日11月1日。テスト1回目の授業が終了した。

今日は3教科やって終わりなので、午前中で下校できる日だった。
「明日は祝日で休みかー。物理が難しいから明日一日で頑張ろう。」
と友恵は独り言を言いながら学校の門を出ようとしていた。すると背後から、優花が友恵に向かって大急ぎで走ってきた。
「友恵！友恵！大変だよ！春江田大君が友恵に会わせてくれって言ってんだよ！」
友恵は驚いた。
「え！？昨日言ったことバラしちゃったの！？」
「違うよ！春江田君の方から言ってきたの！」
「・・・・・・・・」
優花は嘘をつくような人では無いということを友恵は知っていたので、これが事実であることを確信した。
友恵は顔を真っ赤にさせて呆然とする。
「友恵！告白だよこれはきっと！屋上で待ってるってさ！行っておいで！」
「うん！」

好きな人から告白をされるということがどんなにうれしいことか、恋心を知っている人間なら誰だって分かるだろう。友恵はワクワクしながら学校の階段を屋上まで駆け上がっていった。

屋上は風が強くて寒かった。そしてその寒い屋上に1人、髪の長い美しい少年が立っていた。

「君が土井友恵ちゃんだね。」

「は、はい。」

透き通るような少年の声を聞いた友恵の鼓動は一気に高まる。

「俺様の名は君も知っていると思うが春江田大だ。」

「はい。」

「俺様はお前のことが好きだ。付き合ってくれないか。」

友恵は嬉しさで涙が出た。本当に嬉しかったのだ。この時だけは、本当に。

「はい！」

友恵は当然と言うべき返事をした。

２０１１年１１月１日火曜日。この日が友恵と大が出会った記念日だ。

「明日は学校の設立記念日で、学校休みだから、どっかに遊びに行かない？」

友恵を初デートに誘う大。

「ええ！もちろん」

休みの日にはテスト勉強をする予定だった友恵だが、一瞬にしてその予定は変更になった。

翌日１１月２日。

友恵と大は横浜に行き、楽しい一日を２人きりで過ごすことが出来るのだった。

駅に着き、服屋に行って服を買い、ゲーセンに行ってプリクラをとったり、横浜の街をねり歩いたりもした。
中学2年生なので、さすがにホテルにはいかなかったが、とても楽しい一日になったことは確かだった。

あっという間の一日だった。空はもう真っ暗になり、街灯が綺麗に街中を照らし始めた頃。
「ありがとうね友恵。とても楽しかったよ。」
「うん私も。」
そんな自然な会話が行われた直後のことだった。友恵は大に唇を奪われた。
「・・・・・・・・・」
「!!」
突然の出来事で、友恵は驚いたが、大の包容力はとても安心できるものであり、そのキスを受け入れた。
長いキスが終わると、大はこんなセリフを残してタクシーに乗って帰宅していった。
「友恵、お前は俺様のものだ。」

友恵はしばらくこの出来事の余韻に浸っていた。

こんな幸せな毎日がずっと続くならどんなに良いものか。しかし・・・・・・

刻み込まれた友恵の心の傷　1（後書き）

どうも螺子です。

イジメって嫌ですよね・・・・・・・・本当に。

特に女の子のイジメとかは陰湿で嫌です。

刻み込まれた友恵の心の傷　2（前書き）

友恵と誠は半年前、悲しく辛い出来事に遭遇してしまうのだった。

刻み込まれた友恵の心の傷　2

一度大きな幸せを感じてしまった人間は、わずかな不幸も息苦しいものになってしまうものだ。

11月3日。テスト2回目が終了した放課後。

友恵は担任教師に呼び出されて、職員室に行った。

「土井さん。あなたに少し聞きたいことがあります。」

この30歳ほどの女教師が友恵の担任だ。担任は友恵を職員室の奥にある、生徒指導室まで連れていった。

「はい、なんでしょう?」

友恵はおどおどした様子で生徒指導室のソファーに座った。

「土井さん。私はね、あなたはとても真面目で、優秀な生徒だと思っていたの。でもね・・」

「は、はぁ・・・・・」

友恵は戸惑う。

「あなた知っている?不純異性交遊は立派な校則違反よ?」

「ふ、不純異性交遊!?私そんなことしていませんよ!?」

「何を言っても無駄よ。これが動かぬ証拠。」

女教師は内ポケットからハガキサイズの写真をとりだした。

その写真にはベッドの上で裸になって見知らぬ男とイチャついている友恵の姿があった。

「そ、そんな!私全く知らないわよ!こんな写真デタラメよ!」

と言い放った友恵はその写真を真っ二つに破った。

すると女教師が恐ろしい顔で怒鳴り始めた。

「何やってんのよ!!あんた、この写真を見てもまだ、自分の罪を

認めないの？ここですぐに私に謝りなさい！謝れば今回の件は内密にしておいてあげる。」
「そんな！私こんなことしていません！！」
必死に無実を主張する友恵だったが、全く信じてもらえなかった。
「あら、じゃあこの話しは校長に言うことにします。」
「そ、そんな！いや・・・・やめて！！！」
やっとの思いで入学することが出来た開範中学校を退学にされるのは、友恵にとっては非常に嫌なことだった。
「じゃあはやく私に謝れ！土下座しろ！！」

（どうして私が土下座しなければならないの？）

友恵は自分自身の行動が恥ずかしくてしょうがなかった。他人から見れば、友恵は自分の罪を認めようとしないただの悪人だ。しかし、友恵は不純異性交遊なんてしていない。していないのに・・・・・・

「本当に、申し訳ございませんでした！！」
女教師の足元で、友恵は深々と頭を下げて土下座をした。
「フン。やっと罪を認めたか。」
「・・・・・・・・・・・・」
友恵は罪を認めたのではない。罪を認めさせられたのだ。

学校の門を出るのは夕方の6時頃になってしまった。もう外は真っ暗だった。

「どうして・・・・・・・・どうして・・・・・・・・・・・・」
友恵は泣きながら通学路を歩く。すると友恵の目の前に大が立った。
「やぁ友恵ちゃん。どうしたの？」
「春江田君・・・・・・・・。あのね、私・・・・・・・・・・」
「もしかしてさ、コレのこと言われたの？」

「え!?」
友恵は驚いた。なんと大は先ほど友恵が女教師から見せられた写真とまったく同じものを持っていた。
「どうしてその写真を!」
「さぁね。でもまさか友恵ちゃんがこんなことする人だとは思わなかったよ。」
「それ、合成写真よ。私そんなことしていないし!その写真燃やすからちょうだい!」
友恵はその写真を大から取り上げようとした。すると大はそれをかわして、友恵の右腕を強くつかんだ。
「友恵ちゃん。この写真ね、もう学校中に広まってんだよ?」
「へっ!?」
「ちなみにこの写真に友恵ちゃんの顔を貼り付けたのは俺様だ。そしてこの写真を広めたのは君の友達の優花ちゃんだ。」
「・・・・・・・・」
人生最大のショックを友恵は今ここで受けた。もはや声も出なくなった友恵。
これは嘘なのだろうか。夢なのだろうか。嘘だったらどんなにうれしいか、夢だったら早く覚めてくれ。あんなに仲の良かった優花に裏切られてしまったのかと思うと、友恵はいても立ってもいられなくなった。
「どうした?怒ったか?」
「なんで!?なんで私にこんなことするの!?」
「決まってるじゃないか。俺様は友恵ちゃんのことが好きだからだよ。」
「はぁ!?」
「好きだからこういうこともしたくなる。好きだから好きな人の弱みも握りたくなる。分かるだろ?」
「ぜーんぜん分からないわよ!理解不能よ!!」
ついに友恵は激怒する。変態的な大の恋心。弄ばれた友恵の恋心。

この時すでに、友恵は地獄へつながるアリジゴクにはまってしまっていたのだ。

翌日１１月４日。朝。
教室に入った友恵は、自分の机が悲惨なことになっていることに気付き、全身から力が抜けていってしまう。
『死ね』とか『ビッチ』とか『変態女』とかが油性マジックでクッキリと机の真ん中に書かれてしまっていた。

友恵の背後に担任の女教師が立つ。
「あら土井さん。早く落書きを消しなさいよ。」
女教師が友恵にかけた言葉はたったそれだけだった。たったそれだけ。
友恵は嫌になり、学校の屋上へ走って逃げた。１人になりたかったからだ。１人になって現実を遠ざけたかったのだ。
しかし、屋上には大と優花がいた。
「大？優花！？」
２人は何か楽しそうに会話をしている。友恵は２人に気付かれないように、屋上にある煙突のようなものの陰に隠れて、会話に耳をすませた。

「春江田君ってこの間、横浜で友恵とキスできたの？」
「ああできたよ。やっとあいつを俺様のものにできた。全部君のおかげだ。」
「良かったじゃない。あとは友恵が皆に嫌われて、学校をやめることになれば」
「友恵は完全に１人なって、俺様のペットにできるってわけだ。なるべくイジメは陰湿に頼むよ。あと、最後の作戦は慎重にね。」
（そんな、優花と春江田君がこんな関わりを持っていたんだなんて・・・・・・・最後の作戦って何よ！もう嫌だ！！）

友恵は失望した。木下優花という女に、春江田大と言う男に裏切られたのだから。

もう、どうすればよいのか分からなくなった友恵。このままこの学校でイジメられ続けるか、学校をやめて春江田大のペットになるか、それとも死ぬか・・・・・・。

もしかしたら他に何か方法があるのだろうが、精神的に追い込まれた友恵にとっては、選択肢はそれぐらいしかなかった。
そして、『最後の作戦』とは一体何なのだろうか。

友恵に対するイジメは、翌日も翌々日も、延々と続いた。

学校に来るなり黒板消しで体中たたかれたりした。制服はチョークまみれ。
トイレに逃げ込めばバケツの水をぶっかけられる。下着までびしょぬれ。
体操着に着替える時には、下着姿で廊下にたたきだされた。そしてビッチ呼ばわり。
『イジメは良くないよ』とか言ってる糞真面目なインテリどもは口ばかりで行動にはうつさない。見ているだけ。
前髪を切られた。伸ばしていたのに。
財布を盗まれた。お金貯めてたのに。
給食に汚い雑巾を投げ込まれた。お腹すいていたのに。
先生達は見て見ぬふりをする。注意する勇気も無いのだろうか。
もう、いやだ。

毎日毎日毎日毎日毎日！

イジメられ続ける毎日がずっとずっと続く。友恵は今すぐにでも退

学してしまいたかった。しかし退学をすれば大の奴隷（ペット）になってしまう。それだけは何よりも嫌だった。

だがもう、友恵の精神は我慢の限界に達してしまいつつあった。

そして・・・・・・・

１１月１３日。日曜日なので学校には誰もいない。

「死ねば楽になるかもね。」

友恵は屋上から飛び降りて自殺することを決意してしまう。

「もういやよ。こんな毎日。私の日常はどこに行っちゃったの？私の楽しい学校生活はどこに行っちゃったの？全部春江田大と木下優花のせいよ。もう最悪。全部台無し。私をイジメた奴らや、私をおとしいれた奴らをあの世から呪ってやる。」

友恵はフェンスを乗り越えて、大量の涙をこぼしながら５階建の校舎の屋上から飛び降りた。

（これで・・・・・・・苦しい毎日は終わり。）

友恵のすべてが終わろうとしていた。

しかし友恵が落下した先は、アスファルトではなく、とてもプニプニしたところだった。やわらかくて、あったかくて。友恵は一瞬、これが天国なのかと思った。しかしここは天国でもなければ地獄でも無く、現実だった。

「いててて・・・・・・んだよもぉ！」

友恵の下敷きになっていたのは１００キロ以上も体重がありそうな太った他校の男子生徒だった。友恵はどうやらその男子生徒の体の上に落下してしまったらしい。友恵は驚いた。

「え！？だれ？」

「はよワイの腹からどかんかい！！」

と男子生徒は怒鳴る。

「ご、ごめんなさい。まさかここで寝ているなんて思わなくて。」

「ワイは天津佑太っちゅうもんや。すぐそこにある御陀(おだ)中学校の生徒やねん。ここはな、ワイにとってのええ感じの昼寝スポットなんや！昼は誰もおらんし、温かいし、授業もサボれるんやで。」

「は、はぁ。」

友恵はまず、佑太が中学生だったということに驚いた。佑太は４０歳ぐらいのオジサンのような顔をしているのだから。

「そんで？あんたはなんで上から落ちてきたん？」

と佑太が質問する。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

友恵は下を向いて暗い顔をする。

「ま、まさか飛び降り自殺！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・うん。」

佑太は驚いた。

「へぇ！ならワイは人助けしてもうたんか。ワッハッハッハ！！脂肪も付けてみるもんやな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・私、もう一回屋上行きます。さようなら。」

テンションが高い佑太とは正反対の友恵。

友恵はもう一度、屋上へ続く階段に向かって歩き始めた。すると佑太は友恵の手をつかんで、引き止めた。

「待てや！」

「離してよ！あんたには関係ないでしょ！」

友恵は必死に佑太の手を振り払おうとするが、佑太の体重と腕力は半端なものでは無かったので、小柄で小さな友恵はピクリとも佑太を動かすことは出来なかった。

「・・・・・・・・悩み事があるなら相談に乗るぜ？ワイはこう見えてもガラス屋の職人やねん。」

と佑太は言ったが、一度大や優花に裏切られてしまっている友恵は、佑太の言葉を信用することが出来なかった。

「悩みなんて・・・・・・・・・・無いわ。それにガラス屋の職人だから何？」

「ワイはあんたみたいな人をほっとけない性格なんや。それにな、ガラス職人に悪人はおらんで！」

「・・・・・・・・・・・・」

大や優花とは違い、妙な純粋さがある佑太。

「ホレ！言うてみ！」

佑太のテンションは高めだったが、顔は真面目だった。真面目に友恵の話を聞こうとしてくれていた。友恵はついに、心にためていた悩みを佑太に打ち明けることにした。

「イジメよ。」

「・・・・・・・・・・・・」

佑太は突然無言になる。

「好きだった人や、友達だった人に裏切られて、イジメの対象にさせられちゃったのよ。」

「・・・・・裏切られた？」

「そうよ！私・・・・・・・・何も・・・・・・・していないのに・・・・・。」

「うーん。」

泣き始める友恵に対して、佑太は真剣に悩んだ。

「もうどこにも私の居場所がないの。退学すれば私は奴隷になってしまうの。それがまた怖いのよ！」

「ど、奴隷！？」

「うん・・・・・・・・・」

予想以上に状況が深刻だったことを感じた佑太は、一つだけ案を出した。

「よし！ワイがあんたをイジメる奴らをボコしたるわ！」

「え？そんなことしたら佑太君が退学になっちゃうよ！」

「バーロー！ワイは公立中学の生徒やで。退学になんかならんわ！それにワイはケンカが好きなんや。特にイジメをやったりする根が

腐っているような人間をボコすのは最高やで！」

「・・・・・・・・・・・」

友恵は暴力で解決しようとするということはあまり気に入らなかったが、大や優花の憎たらしい表情が脳裏をよぎってしまうので、その案に賛成することにした。

「おっしゃ！じゃあ明日、ワイはここで待っているから、君はここまでしっかりと逃げてくるんやで！」

「分かったわ。」

佑太は友恵のために全力で悩んでくれている。しかし頭が悪いからなのか、解決する方法が『暴力』になってしまうのが彼の短所だ。

１１月１４日、友恵は今日もイジメられた。

今日は４階の男子トイレに閉じ込められた。

「やめてよ！」

「へへへ！やめてほしかったらここで服を脱げよ！このデジカメで３枚だけ写真を撮らせろ！」

ついに男子が嫌らしい目で友恵を見るようになる。

友恵はトイレの窓から校庭を見た。するとそこには佑太の姿があった。

（佑太君！）

もう逃げたって無駄なのかもしれない。しかし、ここで服を脱ぐよりかは、逃げたほうがカッコイイに決まっている。そう思った友恵はトイレの窓に向かって頭突きをしてガラスを割り、４階の窓から校庭に向かって飛んだ。

「あ！」

友恵が窓から飛び降りる姿を見た佑太は一瞬あわてたが、急いで落下地点に立って、友恵の体をキャッチする。同時に、佑太は振ってくるガラスが目に入らないように友恵の目を手で隠してあげた。

「おい！土井が逃げたぞ！早く追うんだ！」
トイレにいた男子生徒たちが階段を下りて、校庭を目指す。

佑太はファイティングポーズをとりながら、ほんの少しだけ笑みを浮かべた。
「なぁ、あんたの名前なんってったっけ？」
「え、土井友恵です。」
「友恵ちゃん。ワイはあんたのために戦うんや。だからあんたも、ワイのために逃げて、生きてくれや。自殺なんかするんでねぇ！！」
「・・・・・・・・・・・・・うん！」
友恵は嬉しくて、涙が出そうになった。自分のために全力を尽くしてくれる人なんて、今まで会ったことも無かったからだ。友恵は必死に逃げた。どこか遠くへ、どこか遠くへ。佑太のために。生きるために。

「うぉらぁぁぁぁぁ！！」
ものすごいダッシュで校庭に飛びだしてくる男子生徒達。１０人ぐらいのその大軍に向かって、佑太はまるでブルドーザーのように突撃していった。
「ぐは！」
１００キロを超える佑太の巨体が、男子生徒たちの体を吹っ飛ばした。
「おいおい貧弱やな！テメェらは結局勉強しかでけへんもんな！ワイが教えたるわ！暴力ってものをな！」
「だ、誰だお前！！」
「ワイか？ワイはなぁガラス職人、天津佑太や！！」
佑太は巨体を生かしたボディーアタックで、攻撃を続ける。男子生徒たちはそれに全く歯が立たず、意識が無くなるまで佑太にボコボコにされた。

そしてその様子を笑いながら屋上から見ている人間が2人。大と優花だ。

「友恵の奴、助っ人を呼んだのか。こりゃ予想外だったな。だが、どんなに逃げようと、友恵は俺様のものだ。さぁ優花、友恵の家に行くぞ。最後の作戦を実行する。」

「はい。」

友恵は、ただひたすら逃げ続けていた。生きるために・・・・・・・・・

刻み込まれた友恵の心の傷　3　そして・・・・

友恵は必死になって走り続け、自宅である、喫茶ねこばばへ逃げ込んだ。
「ただいま！！」
と大きな声で友恵は言ったが、喫茶ねこばばには客もいなければ、店員もいなかった。
「お母さん？お父さん？どこ？」
二階に行っても、裏庭の倉庫に行っても、誰もいない。
「今日は確かお父さんが買い出し言っているだけで、お母さんはいるはずなんだけどなぁ。」
友恵の母親の名は土井裕子（どいゆうこ）。優美で淑やかな裕子は今年で４０歳になろうとしているのだが、見た目は２０代後半ぐらいに見えてしまうほど可愛らしい。
店にはその裕子がいるはずなのだが、どこを探してもいないのだ。
不思議に思った友恵は、ケータイ電話で裕子に電話してみることにした。

すると、裕子の携帯の着信音がカウンターの奥にあるキッチンから聞こえてきた。

「あれ？お母さんいるのかな？」

キッチン全体に携帯の着信音が響いている、そこで友恵はふとあることに気付いた。
「冷凍庫の中からだ！」
魚や冷凍食品などを凍らせておくために設置されている、大型の冷凍庫。携帯の着信音はその中から響いていた。

嫌な予感がした。友恵は恐る恐る冷凍庫の扉を開ける。その扉の向こうには、友恵がもっとも恐れていた光景があった。

冷凍庫の中には血まみれになったまま凍っている裕子の姿があった。

「お母さぁぁぁぁぁん！！！！！」

友恵は悲鳴をあげながら必死に裕子を冷凍庫の中から引きずり出す。

しかしこの時すでに、裕子に脈は無かった。それでも友恵は裕子を揺さぶり続ける。

「お母さんお母さんお母さんお母さん！！！」

友恵の熱い涙が裕子の体にこぼれおちてゆく。しかしその涙は裕子の体の表面についている霜を融かすだけで、裕子の体温を上げてはくれなかった。

するとそこに1人の男が現れた。

「これで一人になっちゃったね。友恵ちゃん。」

「！！！」

友恵は素早く後ろを振り返った。そこにはニヤニヤと笑みを浮かべている大が立っていた。

「今ね、優花ちゃんが君のお父さんを殺しに行っているところだよ。」

「・・・・・・・・・・・・まさか、お母さんを殺したのは！！」

「・・・・・・・・俺様だよ！！」

「うわあああああああああああああああああああ」

友恵は発狂して、包丁を手に取り、それで大を刺し殺そうとした。

しかし大はその包丁をひらりとかわし、友恵の顔面に強烈なパンチを入れた。

「ぐはぁ！！」

友恵は吹っ飛び、大量に積んである食器の山に突っ込んだ。皿の破片が友恵の体のあちらこちらに刺さる。

「友恵ちゃん。君は1人ぼっちだ。君には友達もいない。そして今、両親も消える。そうさ、君にはもはや俺様しかいない！だから君は俺様のものだ！」

もはや大の思考回路はイカれている。

「ふざけないでよ！」

「あん？」

「私から何もかも奪った人間の女になんか絶対にならない！私はあなたの奴隷（おもちゃ）になんかならない！！！」

と友恵は大に向かって叫んだ。

「アッハッハッハッハ！！まだそんなこと言える余裕があったのか。じゃあ少し傷つけてあげるよ。そしたら目が覚めるだろ？」

と言った大は果物ナイフを懐から取り出して、友恵に向かってゆっくりと歩き始めた。

果物ナイフの先端には赤い血が付着している。おそらく裕子の血だろう。友恵は恐怖を感じ、あわてて逃げようとするが、キッチンの隅にいた友恵には逃げ場なんて無かった。するとその時、大の背後に1人の男が現れた。

「友恵ちゃんは一人ぼっちやない！」

「！？」

「佑太君！！」

大は驚きながら後ろを振り向く。そこには砂で汚くなっている学ランを着た佑太の姿があった。

「女しか殴れねぇような奴が、調子に乗るなや！」

「フン！デブが何の用だ！」

「はぁ！？デブ！？それはワイに対する侮辱やなぁ。こう見えても結構気にしてんねぇぇん！！！」

佑太は学ランを脱ぎ捨てて、大に向かって突進し始めた。

すると大は果物ナイフを友恵に突きつけた。
「止まれ。それ以上動くと友恵の体に傷がつくぞ？」
「なにぃぃぃぃ！！？？」
佑太はあわてて止まった。

「いいか？それ以上動くなよ。動いたとたんにやばいことになるからな！」
大は友恵を連れて、裏口から逃げようとしていた。
女性に暴力をふるうという行為、人質をとるという行為、どちらも卑怯者のやることだ。春江田大と言う男に『卑怯者』以外にふさわしい呼び名はあるだろうか。
大はゆっくりと逃げ口へ近づいてゆく。
するとその時、卑怯者の右手に短刀がレーザービームのようなスピードで貫通した。
「痛ぇ！」
右手に痛みが走った大は持っていた果物ナイフを地面に落した。
「た、短刀？」
突然飛んできた短刀に、佑太は驚いた。
「誰だ！誰なんだ！！」
大は右手からどんどん流れ出てくる血を左手で抑えながら、窓の方を見る。
裏口の窓辺には白い髪をなびかせながら立っている誠の姿があった。
誠は死体になってしまっている裕子の姿を見て、怒りの表情を見せた。
「遅かったか・・・・・・・・」
誠は一度優花に殺されそうになった。当然誠は強いので優花のような人間はすぐに返り討ちに会ってしまったのだが、なんとなく誠は家族全員に同じような危険が迫っているような予感がしたのだ。だから大急ぎでここに戻ってきたのだが、時すでに遅し。もうすでに

最悪の事態には突入してしまっていた。
「お父さん・・・・・・・・・」
友恵は大から離れて、誠の後ろに回った。
「優花を殺したのか!?」
「当然だ。あの女はいきなり後ろから果物ナイフで俺を刺し殺そうとした。正当防衛だよ。正当防衛。」
と言いながら、誠は優花の血がついた短刀を大に見せつけた。
「・・・・・・・・・・・俺様も殺すのか?」
「それはお前の行動次第だ。まずは質問に答えろ。なぜ俺たち家族を殺そうとするんだ?答えろ!!」
「・・・・・・・・・友恵ちゃんが好きだからだよ。好きだから友恵ちゃんを俺様のものにしたかった。友恵ちゃんだってもともと俺様のことが好きだったはずだ。なのに・・・・・・・・・・・・・」
すると友恵がしゃべり始めた。
「ええ、確かに私はほんの少し前まではあなたのことが好きだった。告白されるなんて夢にも思っていなかった。でも、あなたの本当の姿を見て、私は失望したわ!あんたは人間のクズよ!あなたなんかを好きになった私自身が嫌になったわ!!」
「・・・・・・・・・でも最終的に君は俺様のものになるんだよ。そういう運命なんだよ!」
友恵の恋心は、大という名の卑怯者に利用されたのだ。
誠は一度大きなため息をつく。
「はぁ・・・・・・・・。」
「お前、勘違い野郎やな。」
大の異常な言動に、佑太も誠も呆れてしまっているのだった。
すると突然、大は煙幕をキッチンにまき散らし始めた。
「何!?」
キッチンは黒い煙で覆い尽くされる。
「アッハッハッハッハ!!友恵ちゃん。また今度会いにくるよ。その時はきっと君を俺様のものにして見せる!アッハッハッハ!!」

憎たらしい笑い声はだんだん遠退いて行く。
「クッソォォォ！！！待ちやがれぇぇ！！」
「換気扇だ！換気扇をつけろ！！」

換気扇を回すと、煙幕は無くなってゆき、やがて視界が晴れていった。しかし、晴れた頃には大の姿は無くなっていた。
「に、逃げられただと！？」
誠はショックのあまり、短刀を地面に落した。すると佑太が誠に文句を言った。
「おいおい！はよその短刀でぶっ殺せば良かったんちゃうの？なんで躊躇(ちゅうちょ)してんねん！！」
佑太のこの発言に誠は反論する。
「うるさい！貴様こそどうして人質を取らせるようなマネをさせたんだ！」
「はぁ！？なんだ？逃げられたんがワイのせいゆうとるのか？」
「お前がもっと早くここに来ていれば、裕子は死ななくて済んだはず！裕子は・・・・・・・・チクショー！！！」
「黙れ！」
佑太は誠の胸ぐらをつかもうとする。誠はとっさにそれをかわして、佑太のワイシャツの袖を短刀で斬った。
2人はケンカを始めてしまったのだ。するとその時・・・・・・・・・・・

ドシャン！！

友恵は突然キッチンの床に倒れた。

「と、友恵！」
「友恵ちゃん！」
友恵は大や優花に裏切られたことや、クラスメイトにイジメられた

ことに加えて、母親を殺されてしまうという最悪な出来事を目の当たりにしてしまったショックで、気を失ってしまった。

「クソォォォ！！友恵～！友恵！！！」

誠は顔中涙まみれになりながら、気を失ってしまった友恵を揺さぶり続けた。

「・・・・・・・・・・・・」

誠も佑太も、友恵が可哀そうで仕方がなかった。なんて哀れな人生なんだ。どうして彼女がこんな目に会わなきゃいけないのか。

気を失った友恵の目からも、涙があふれていた。

そして誠はこの涙に誓ったのだ。

「あの小僧ォォォ！！ゼッテー殺してやる！！指一本一本をゆっくり切り落としてから、体中短刀まみれにして、最後に心臓をバラバラに引き千切ってやる！！！クソォォォォォォ！！！！」

この出来事以来、誠はほぼ毎日、大を殺す夢を見るようになってしまい、朝起きると同時に短刀を自室の部屋に刺してしまうのだった。

そして、大きなショックを受けまくった友恵は、この出来事を思い出してしまうと、反射的に嘔吐してしまうようになった”

２０１２年５月１４日。午前５時。もうそろそろ夜が明ける。――――――――――――――――――――

「これが半年前に俺たちが経験した最悪な出来事だ。」

豪牙城から救出された誠の体調はほとんど回復していた。

「・・・・・・・・・・・友恵にそんな過去があったとはな・・・・・」

陽太は悲しい顔をしながら下を向いて考え込む。

「思えば、あの時ケンカなんかしとったワイはアホやったわな。」
と佑太は少し反省する。
「いいんだ。あのときは俺もどうかしていたんだ。それより許せないのは、何も知らなかった裕子をあんな風に殺した春江田大だ。あいつだけは許さねぇ！」
誠は短刀を右手に取り、壁に向かって投げようとした。すると陽太はその右手の手首を素早くつかんだ。
「！？」
誠は驚く。すると陽太は真剣なまなざしで誠を睨んだ。
「八つ当たりなんかするなよ、みっともない。」
「・・・・・・・・・・・」
「俺もあの春江田大って奴は嫌いだよ。今の話を聞いただけでもムシャクシャしてくるね。でもな、だからってあんた1人で城に突入するなんて間違っていると思うぜ。」
「・・・・・・・・・ああ・・・・・・。」
「もう少し回りを見ろよ。あんたKでは結構なお偉いさんなんだろ？だったらもっと俺たちを使えよ！あんた1人で解決しようと思うなよ！あんたの持っているその恨み、友恵が受けた屈辱、俺たち全員で１００倍にして返そうぜ！！！」
陽太の言い放ったこの言葉は、たいして深いものでもないはずなのに、誠と友恵の胸には良く響いた。そして、自分が暴走していたことにようやく気付く。
「そうだな・・・・・・・」
窓から朝日が差し込み始めると同時に、誠は笑みを浮かべた。

作戦の一致

5月14日午前9時。新宿のとあるビルの地下一階で、小笠原組が会議を開いていた。
会議は小笠原組、組長側近の桐谷龍次（きりたにりゅうじ）の号令で始まる。
「それでは、これよりKを潰すための作戦会議を始める！全員、礼！！」
怜次は舌を落としてしまったので、会議では桐谷を通じて発言しなければならなかった。
「わえわえいはいはんああい（我々には時間がない）。」
当然怜次の言っていることは組員たちには通じない。しかし桐谷は見事にそれを通訳してみせる。小笠原組で、怜次の言語が聞きとれるのは桐谷だけなのだ。
「ご存知の通りKには『青い銃を持った少年』がいる。我々にとっても、豪牙一族にとっても、ゴールド隊にとっても、その少年の存在は非常に厄介だ。そして、彼らはその少年のことを『ブルー』と呼んでいる。」
「ブルー？コードネームみたいなものですか？」
「まぁそんなところだ。あの青い銃の威力は非常に強力だ。どんなに高級な防弾剤を使ったって、あの銃の前では薄紙同然だ。しかも、ブルーは非常に高い身体能力を兼ね備えている。反射神経、体力、筋力、動体視力など、戦闘におけるあらゆる能力がキッチリと備わっている。」
「うーん・・・・・・」
組員たちはどうすればそんな男を倒せるかを深く考える。
「だが、我々にブルーが倒せないというわけではない。どんなに身体能力が高くても、あいつは人間だ。攻撃に攻撃を重ねればひとたまりも無いはずだ！」

「しかし、前回はそうやっても失敗したんですよね？」
「そうだ。だが今回は違う。今回はもう少し、周りにいる奴らを利用するんだ。」
「利用する？いったい何を？」
「分からんのか？・・・・・・・・Kを恨んでいるのは、俺たちだけじゃないんだぜ？特にゴールド隊が持っているKに対する恨みは強大だ。この恨み、利用できるとは思わないか？」
組員たちがざわめく。
「おお！なるほど！」
「ゴールド隊は近々Kを攻撃するだろう。その時こそがチャンスだ。我々が彼らの戦いを邪魔するんだ。先に潰れるのはゴールド隊だ。そのあとにじっくりとKを潰すんだ。」
「豪牙は？」
「あ・・・・・・・・・えーっと。」
桐谷は突然戸惑い始める。どうやら豪牙一族にどのような攻撃をするかはまだ聞かされていないようだった。すると怜次がニヤニヤと笑いながら発言する。
「おうはいひおふは（豪牙一族は）、へをははふほも（手を出さずとも）、はっへいひえう（勝手に消える）。」
「・・・・・・・・・そう、ですか・・・・・・・・・豪牙には攻撃する必要はないそうだ。」
「了解です。」
この会議室で、怜次の今の発言を直接理解できたのは桐谷だけだった。
「さあ、準備だけはしっかりしておけよ。」
戦闘態勢に入る準備はもう万全だった。

その頃ちょうど、ゴールド隊はK制圧作戦の実行を目前に控えていた。

隊長室に1人の若い女性隊員が入室する。
「隊長！そろそろKに攻撃を仕掛けても良いのではないでしょうか？弾薬や武器も揃いましたし、準備は万全です。」
ゴールド隊では最年少の２０歳であり、唯一の女性隊員でもあるリナ・カイベルスは必死にエデルに作戦の実行を提案する。しかし
「いや、まだだ。まだ万全ではない。」
とエデルは首を横に振りながら低い声で言う。
「なぜです！」
「リナ、焦りは禁物だ。今回の作戦は今までとは違い、特に慎重さが求められるものだ。」
「しかし・・・・・・」
「それに、たとえ作戦を実行したとて、K制圧作戦という重要な作戦でリナを前線に置いたりはせぬ。」
「・・・・・・・・・・・」
リナは悔しそうな表情を浮かべ、下を向いて黙りこむ。
他の隊員に比べれば一回りも二回りも体が小さいリナは、ゴールド隊の中では非力な存在だ。それでも負けず嫌いな彼女は、いつも必死に部隊についていこうとするのだった。
リナは黒くて長い髪を後ろでキッチリと縛り、凛々しい表情を見せながら、もう一度顔をあげて、エデルに話しかける。
「隊長、どうしてそんなに慎重になるのですか？」
「小笠原一族が我々を狙っている可能性があるからだ。」
「小笠原一族っていったら、あのヤクザ集団の・・・・・・・」
「そうだ、我の予想ではおそらく小笠原組は我々の作戦の邪魔をしようとするはずだ。だから先にそちらに手をうっておく必要がある。」
エデルは懐からハガキサイズの写真を二枚取り出し、リナに向かって投げた。
リナはそれをあわててキャッチし、その写真を見る。
「この人は？」

「その金髪で七三分けの気持ち悪い奴が小笠原組組長の小笠原怜次だ。そして、スキンヘッドでひげの多い奴が組長側近の桐谷龍次だ。この2人は要注意人物だ。リナ、お前はこいつらを倒す作戦に参加してもらう。」

とエデルが言うと、リナは喜んだ。

「いいんですか！あ、ありがとうございます！」

「K制圧作戦はこの二人を倒してからでなくては実行できぬ。重要な役回りだということを忘れるな。」

「はい！」

普段あまり作戦には参加させてもらえないリナにとって、これは良いチャンスとなるものだった。リナは笑顔を浮かべ、闘志を燃やしながら隊長室を後にする。

「まったく・・・・・・・・・」

エデルは非常にリナのことを心配していた。たとえ非力で足手まといな存在であるリナも、自分と同じ思想を持ったかけがえのない仲間なのだから。それを失うのは、彼のように強い人間でも辛いことなのだ。

すべてはKを倒すために。

二つの組織が動き始めた。

２４６戦闘事件

５月１４日２３時０５分。小笠原組の組員お４人乗せた黒いセダンが新宿の高層ビル街を走る。

セダンは山梨県にあるゴールド隊の基地へと向かっている。しかし車内は戦場へ向かっているとは思えないほど緊張感が低かった。

「なぁ、ゴールド隊の基地ってどこらへんにあるんだ？」

「富士山の近くらしいぜ？だから小笠原組の山梨支部と合流するように言われたんだろ？」

「そうだったな。」

小笠原組は全国に支部を置いている大型のヤクザ集団なので、Ｋの土地以外の都道府県には必ずと言ってよいほど組員たちがいる。１０年ほど前までは小笠原組も含めてヤクザ界そのものを牛耳っている倭将豹弟団（わしょうひょうていだん）という集団があったのだが、小笠原組の権力と武力によって解散させられてしまったので、今となっては日本全国のヤクザを牛耳っているのは小笠原組というわけなのだ。だから小笠原組は支部や金も多く持っているのだ。

「しっかりしてくれよ。こんな夜遅くに防弾性能も無い車に乗っているんだから、もっと緊張感持ってくれよ！俺たちはいつ他の組に襲われてもおかしくねぇんだからよぉ。」

「そうだな。」

運転手の組員はあくびをしながら、信号待ちをする。

「・・・・・・話変わるけどよ、最近組長はおっかねぇな。」

「ああ、何しゃべっているか分からねぇから一層恐ろしいよな。」

「よく桐谷さんは組長の言葉聞きとれますよね。」

「そうだなぁ。まぁ２人ともバケモノだからわかるんじゃねぇの？」

組長である怜次がほとんど言葉をしゃべらなくなってしまったので、『沈黙の威圧感』といったものが組員たちに大きなプレッシャーを与えるようになっていた。なので組員たちは以前よりも一層行動力

や気遣いが必要になった。
今日は珍しく交通量が少ない２４６号線を軽快に走るセダン。すると運転手の組員が、前方５０メートル先で銃を構えて、横一列に並んで道路を封鎖している３０人ほどの人たちを確認した。
「なんだ!?警察か!?自衛隊か!?」
「いや・・・・・・・あれは・・・・・・・・ゴールド隊だ!!」
全員黒いオーバーコートを着ているあの集団は紛れもなくゴールド隊だった。
「武器を捨てて投降せよ!」
リナ・カイベルスの高くて綺麗な声がメガホンから辺りに響いた。
「ク、クソォ!待ち伏せしていたのか・・・・・・・」
「どうする?投降するか?」
「うーん・・・・・・・」
この状況をどう打開するか、組員たちは悩んだ。しかしそんなことをしているうちに、ゴールド隊の戦闘員たちは少しずつ迫ってくる。するとその時、小笠原組員４人を乗せたセダンとゴールド隊戦闘員たちの間に、ミサイルのようなものが落下した。
「!?」
地面を震わせるほどの爆発音とともに、道路のアスファルトのかけらが大量に宙に舞った。辺りにいた人たちは皆驚く。
「なんだ!?」
「き・・・・桐谷さん!」
ミサイルのようなものの正体は小笠原組組長側近役の桐谷龍次だった。
「だ、誰だ!」
ゴールド隊の戦闘員たちは全員警戒し始めた。
桐谷はゴールド隊の方を向き、恐ろしい表情を浮かべながら大きな声でしゃべり始めた。
「この状況、我に一片の不利なし!故に我、ここにあり!!」
「・・・・・・・・・なんなんだこいつ!?」

ゴールド隊戦闘員は驚き戸惑う。
「お前ら俺たちにケンカを売るとはいい度胸だな。その覚悟、努力、素晴らしいじゃないか！」
と言いながら、桐谷は拍手をする。
「・・・・・・・・・・・・き、桐谷龍次・・・・・・・・・」
リナはエデルに渡された写真を思い出す。
すると、桐谷は奇声を発しながら、体を変化（へんげ）させ始めた。
「ぬをおおお

しかし銃弾は桐谷の体に触れることすらできない。桐谷は手足の爪を振り回しながら次々と戦闘員たちの体を切り裂いていった。

その様子を少し離れた所から、怯えながら見ているリナ。

「あ・・・・・・ああああ!!」

リナはただ、怯えることしかできなかった。

ひざが震えて動けない。手が震えて銃が構えられない。頭が混乱して言葉もろくにしゃべれない。

そしてリナは痛感した。これが戦闘の恐ろしさなのだと。

（どうしよう!どうしよう!死にたくない!死にたくない!）

慌てふためきながらリナは後ずさりを始める。

しかし、もうこの時すでに、リナの身に逃げ場など無かった。

「スウィィィィィ!!キッシャァァァァ!!!!」

目にもとまらぬ速さで、桐谷はリナの目の前まで飛んできた。

直後、リナの左胸に深々と桐谷の爪が刺さった。

「あ・・・・・・・・・」

リナは悲鳴をあげることもできずに意識を失い、その場に倒れた。

「クカカカカカカカ!!!!!!」

地獄と化した２４６号線に大量の死体が転がった。桐谷はそんな死体たちの中心で、狂ったような笑い声を響かせた。

５月１５日０時０１分。２４６戦闘事件。小笠原組桐谷龍次の勝利。

その様子を怜次は、近くに建っている高層ビルの上から見学していたのだ。

「あんあ（なんだ）、ほーうおあいおへんほうふうひまんまんあっはおは（ゴールド隊も戦争する気満々だったのか）。ひょうほいい

（ちょうどいい）。ヒュハハハハハハハハハ！！！」

２４６戦闘事件（後書き）

ほうほへひえふ（どうも螺子です）。

今さらなんですが、舌を落としてしまった設定は少しミスったかなぁ、とか思ったりしていますが・・・・・・・・・（笑）

まぁいいでしょう。

火の海を駆け抜ける狂人たち

5月15日、ゴールド隊と小笠原組は日本を舞台に戦争を始めてしまうのだった。

軍事力はゴールド隊の方が若干上回っているのだが、戦闘力では小笠原組の方が上だった。

小笠原組の組員たちには、底知れぬ根性がある。

＞i302431—2479＜

命を惜しまずに、自分の組を守るためだけに戦い朽ちる。まるで、特攻隊のような奴らばかりだ。

それに対してゴールド隊は軍事力にモノを言わせて、キッチリと方陣を組んで、お手本のような戦い方をする。

＞i3074431—2479＜

日本国内だけでなく、海外からも戦闘員を派遣できてしまうほどの資金力も兼ね備えているので、そう簡単に潰れたりはしない。

両者とも全く違うタイプの攻撃や防御の技術を持っているのだ。それらがぶつかり合い、戦いの火花を新宿のど真ん中で散らすのだった。

新宿駅に集まった30人ほどのゴールド隊たち。辺りにいた一般人達は騒然とする。

「なんだ？映画の撮影か？」

「軍オタクじゃね？」

平和ボケした日本人たちは注意力や警戒心に欠ける。武装している

怪しい集団が駅の真ん中に現れても、戦争の始まりを予感したりする者はだれ一人としていなかった。

5月15日午前10時32分。
ゴールド隊が集まっている新宿駅の上空から、人がものすごスピードで落下してくる。そして、ゴールド隊のすぐ目の前に落ちて、爆破した。
「うわあああああああ!!」
「な、なんだ!?」
辺りにあったガラスなどは粉々に砕け散り、一般人たちは逃げ惑う。この時初めて危険を感じる日本人。危険は自分の身に降りかからなければ分からないものだった。

落下してきた人の体は粉々に砕け散ってしまっていたが、まるで逆再生でもされているかのように、身体が元の形に戻っていき、正体を現した。
「お、小笠原怜次だ!!」
「ヒュッフッフッフ!!!」
その人は紛れもなく、小笠原怜次だった。完全に体の傷は回復し、いつも通りのスーツ姿に戻っていた。
ちなみに、そのスーツも怜次の体と同様に、破れたりしたら回復する仕組みになっている。
怜次はゴールド隊の方を向き、ゆっくりと歩き始めた。すると・・・
・・
「今だ!爆破しろ!!」
と1人のゴールド隊戦闘員が言うと、怜次の足もとにあったゴキブリほどの大きさの黒い金属の塊が爆破し、怜次の体を砕いた。
「まだだ!さらに銃撃を仕掛けろ!再生させるな!」
今度は機関銃で怜次の砕けた体に向かって追い打ちをかける。しかし・・・

「ヒュッフフフフフフフフハハハハハ！！！！！」
怜次の不気味で滑稽な笑い声は響き続けていた。
撃っても撃っても回復してしまう怜次。ゴールド隊戦闘員たちは一度銃撃をやめる。
「こいつ・・・・・・・・不死身か！？」
怜次はまた先ほどと同じように、元の姿に回復してしまう。
「ほうは（そうさ）！ぼふはふいみは（僕は不死身だ）！」
「な、何を言っているか分からんぞ！」
ゴールド隊の戦闘員たちにも、怜次の言語を理解することはできなかった。というより理解する必要はなかった。どうせここで殺されるのだから・・・・・・・・・・。
「ぬわあああああああ！！」
怜次の動きをとらえることは誰もできなかった。

追い風もなく、助走もないはずなのに、怜次の一歩は銃弾よりも速く、大きかった。間合いを詰めるのは一瞬。怜次のパンチは一撃必殺。

ゴールド隊は手も足も出ないといった状態だった。
３０人もいたゴールド隊の戦闘員は、たった１人の怜次を相手に、１分で全滅させられてしまったのだ。

山梨県にあるゴールド隊基地にはたくさんの被害報告が届いていた。
「新宿駅に待機していた３０人の戦闘員が全滅しました！」
「西新宿の事務所に襲撃しましたが、先ほど全滅しました！」
次々と口にされる『全滅』という言葉。しかし、ゴールド隊は誰一人としてうろたえることはなかった。

「うむ、奴らの稼ぎから潰せ！歌舞伎町だ！歌舞伎町を攻撃するぞ！」

とエデルは言う。

「はい！５０人ほど送り込み、援護にもう５０人を用意します！」

「いいだろう。」

エデルは納得すると指令室を後にして、治療室へ向かった。

治療室には２４６戦闘事件の唯一の生存者リナ・カイベルスがいた。桐谷に心臓を貫かれてしまったリナだったが、奇跡的に傷が回復し、一命を取りとめたのだ。

「隊長、状況はどうですか？」

「・・・・・・あまりよくはないな。相手はバケモノだ。そう簡単に倒せるはずも無かろう。」

とエデルが言うと、リナは不安そうな顔をする。

「申し訳ありませんでした・・・・・・・・私が未熟なばっかりに・・・・・・・」

「いいんだ。桐谷龍次は生まれながらにしてバケモノだったやつだ。よく生きて帰ってこれたと思うさ。今はゆっくりと休むがいい。」

「・・・・・・・・・はい。」

リナは自分の胸の傷に手を置いてみる。自分の未熟さの象徴となってしまっているその傷は、リナの体によく染みて痛い。その感覚が嫌で嫌でしょうがなかった。

「隊長！」

治療室から出ていこうとするエデルにリナは話しかけた。

「なんだ？」

「ありがとうございます！」

「・・・・・・・うむ。」

リナの目には大粒の涙があった。

5月15日17時00分。ゴールド隊は劣勢でありながらも戦闘スタイル変えずに、海外から軍を派遣したりして、小笠原組の猛攻に耐え続けていた。

「撃ちまくれ!!」

「殺せ殺せ!!」

戦闘機や戦車も登場した。東京の街はもはや炎の海になっていた。

そんな火の海の中を、駆け抜ける小笠原組の組員たち。

「オルァアアア!!!」

複数の組員が日本刀と手榴弾を持って戦車の操縦席に飛びこんだ。

戦車に乗っていたゴールド隊の戦闘員たちも必死にそれを振り払おうと、短刀でその組員の脇腹を刺した。すると、組員は手榴弾からピンを抜いて、戦車ごと自爆してしまう。

いったい小笠原組の組員たちを動かしているものは何なのだろうか。

狂っているとしか言いようがない。

火の海、崩壊する高層ビル、汚染された大気、大量の死体。

被害者となる人々は次々と増えていくのだった。

誠の予想

ゴールド隊と小笠原組の戦争の情報は喫茶ねこばばにもしっかりと届いていた。
「今のところ小笠原組が優勢か・・・・・・・・・」
誠はペン回しをしながらノートと睨みあっていた。
「土井さん？何やっているんですか？」
ハングリーブルーの手入れを終えた陽太はカウンター席に座りながら誠に質問する。
「ゴールド隊と小笠原組の戦況とかをノートにまとめて分析しているんだ。」
「へぇ。意外にマメなんですね。」
「この戦争に俺たちKがどういう絡み方をするかが今後の戦況を大きく左右すると俺は思っているからな。ここはしっかりしないといけないんだよ。」
「そうなんですかねぇ・・・・・・・・・・」
陽太はぐったりとしながら返事をする。
「そろそろ豪牙一族がこの戦争に絡んでくるぜ。俺たちはそこをうまく利用しなければ。」
「この戦争に豪牙が関わるのか？俺はそうならないと思うけどなぁ。」
「豪牙の信者である日本国民が次々と被害にあっているんだぞ？豪牙一族もそれを黙ってみているわけにはいくまい。」
「豪牙（あいつら）はどういう手を使うんでしょうかねぇ。」
「豪牙大が当主になった豪牙一族がやることなんて卑怯なことに決まっている。どうせどちらか衰退してきた方に攻撃を仕掛けるつもりなんだろう。」
誠の予想は的中していた。

5月15日豪牙城会議室。

大は戦闘員達を集めて、作戦を発表した。

「この戦争が行われている場所は俺様達の庭だ！被害者のほとんどは俺様を崇拝する人間たちだ。当然見ているだけでは豪牙の名が廃る。そこで、我々は小笠原組に攻撃を仕掛けようと思う！」

「どうして小笠原組なのですか？」

「ゴールド隊の兵力は世界規模だ。だから今は優勢な小笠原組もそのうち衰退していくはずなんだ。だからゴールド隊の味方をして小笠原組を潰すんだ。」

要は強いほうの味方をして弱い方を潰すということだ。恐ろしく卑怯だ。

「しかし、ゴールド隊は我々の敵でもあります。そんな簡単に味方になれるとも思いませんが・・・・」

「いいんだ。ゴールド隊はあくまで俺様達の道具にすぎない。利用するだけなんだ。」

「利用する？」

「ゴールド隊が小笠原組の組員どもを殺している間に、俺様たちが小笠原組の主戦力である小笠原怜次と桐谷龍次を爆弾とか戦闘機とか使ってぶっ殺せばいいんだ。」

「で、でも小笠原怜次は不死身ですよ！？爆弾程度では死にません！」

「そこは俺様の魔術で何とかするさ。」

「な、なるほど・・・・・・・魔術ですか。」

作戦会議は1時間以上にも及んだ。そして、一つの結論に達するのだった。

「俺様が魔術を使って小笠原怜次を倒す！そして、君たちは桐谷龍次を倒せ！」

「了解！」

戦闘員たちは返事をして、一斉に立ち上がる。
すると大はレイシーに指をさした。
「レイシー！今回の作戦では貴様が最前線に立て！この間友恵を逃がした罰だ！」
「・・・・・・・・・はい。・・・・・・ではみなさん、行きましょう。」
レイシーは暗い表情で返事をし、戦闘員たちを引き連れて会議室を出ていった。

「レイシーさん！桐谷龍次の情報をお伝えします！」
声のでかい戦闘員がレイシーの横でケータイを見ながらしゃべる。
「・・どうぞ・・・」
「桐谷龍次は先ほどゴールド隊の基地を破壊したそうです！！」
それを聞いたレイシーは驚いた。
「ゴールド隊の基地！？富士山のふもとにあるやつか！？あの巨大な基地を潰したのか！」
「はい、たった１０分で崩壊したそうです。」
「・・・・・・・・・アタシが思っている以上に手ごわい相手だな。桐谷龍次は。・・・・・・・・・それで？桐谷龍次は今どこにいる。」
「詳しくは分かりませんが、おそらくまだ基地の近くにいるかもしれません。行きましょう！！」
「ああ！！」
レイシーたちは富士山のふもとにあるゴールド隊の基地を目指して、動き始めるのだった。

しかし誠は豪牙一族のその動きさえも予想していた。

誠は喫茶ねこばばのカウンター席でコーヒーを飲みながらノートを

見てニヤリと笑い、陽太を呼んだ。
「おい陽太！」
「な、何ですか？」
いつもと違う雰囲気をだしている誠に陽太は恐る恐る近づいた。
「出撃命令だ。さっきニュースでやっていたゴールド隊基地爆破事件は知っているな？そこの現場に行け！」
「ゴールド隊と戦うんですか？」
「いや違う！もうそこにゴールド隊はいないはずだ！違う場所へ移動しているだろう。」
「じゃあ基地を攻撃した小笠原組ですか？」
「いやいや、小笠原組ももうすでに帰還しているだろう。」
「じゃあ誰と戦うんだよ。早く言えよ。」
陽太は誠のコーヒーを少しだけ口にした。
「おそらくこの後、豪牙一族の連中がその基地に現れるはずなんだ。だからお前はその連中と戦ってもらう。」
「豪牙一族と戦うのか？」
「そのとおりだ。俺の予想では、チョルカトラ・レイシーが現れるはずだ。」
「レイシー？」
「そうだ。この間俺と戦った女だ。太刀を使う非常に強い奴だ。だがお前なら大丈夫だろう。」
「・・・・・・・・・分かった。準備してくる。」
陽太は急いで準備を整えるために、喫茶店の2階へ走っていった。

すると友恵がキッチンの方から誠に話しかける。
「お父さん。私も陽太の護衛役として出撃してもいい？」
「いやいや、あいつに護衛なんて必要ないよ。」
「どうして？」
「小笠原怜次とエデル以外の敵なんてあいつにとってはただの『ザコ』だ。そんな奴らと戦うのに、護衛なんて必要ないだろう。」

「・・・・・・・・・・・・・」
友恵は少し心配そうな顔をする。
「そんな顔をするな。お前にもそのうち分かるさ。」
「でも陽太だって人間です。深い傷を負えば死ぬことだってありま
す！」
「フフフフフフ。あいつを人間と思わん方がいいぞ友恵？」
「え！？」
「あいつは一応人間だが、戦闘力はバケモノだ。完全に人間の域を
超えているんだ。」
「そ、そんな・・・・・・・・・・」
驚いた表情になる友恵。

陽太は２０分ほどで準備を完了させた。陽太はいつもと違い、黒い
オーバーコートを身にまとっていた。
「準備完了です。」
「防弾剤塗ったか？」
「はい。」
「新型の戦闘用オーバーコートはどうだ？」
「暑い。」
「ふはは！まあそう言うな。さあ、外にパトカーがいるからそれに
乗って行け。」
喫茶店の外には、日産スカイラインのパトカーが一台とまっており、
運転席には元神奈川県警署長の南浦大輔が座っていて、助手席には
元刑事の山崎健也が座っていた。
「じゃあ、行ってくるわぁ！」
「おう！行って来い！」
陽太は後部座席に乗り込み、スカイラインはものすごいスピードで
富士山に向かって走り始めるのだった。

傭兵レイシーのプライド

5月15日17時30分。夕日に染まった富士山がすぐ目の前に見えるゴールド隊の基地の跡地に豪牙一族の戦闘員たちが集結する。

「小笠原組はもうここにはいないようです。レイシーさん、どうします？」

「うーん。このまま何もせずに帰ることもできない。とりあえずがれきを調査して情報を集めよう。」

辺り一面に広がる黒こげのがれき。そのがれきをかき分けていろいろと情報を集めようとするレイシー達。

「何もありませんね・・・・・・・」

「全部黒こげです。書類やコンピュータはもう跡形も無くなってしまっているでしょうな。」

「うーん・・・・・・・・・」

何も収穫なしに帰るわけにはいかないと自分に言い聞かせていたレイシーだったが、もうどうすることもできないので、やむおえず城へ戻ることを決意した。

「帰ろう・・・・・・みんな済まない。一度帰って作戦を練り直そう。」

「レ、レイシーさん・・・・・・」

戦闘員たちはレイシーを心配そうな顔で見ていた。

「みんな、大丈夫だ。当主に殴られるのはもう慣れている。」

レイシーは先日の作戦失敗以来、大からたくさんのイジメを受けてしまっていた。戦闘員たちもそれを止めてあげたいとも思っているのだが、当主である大に逆らうことが出来るはずもなく、レイシーは延々と殴られ続けるのだった。

このまま城へ帰れば、作戦失敗とみなされて、またレイシーはイジ

メを受けるだろう。

それでもレイシーはまっすぐに背筋を伸ばして車に乗り込んだ。

するとそのとき、辺りに重々しい銃声が響いた。

「だ、誰だ！？」

レイシーはあわてて車から降り、身を低くして周りを見渡した。

「レイシーさん！あそこ見てください！！」

1人の戦闘員が基地の近くにある森の方を指さす。するとそこにはスカイラインのパトカーがとまっており、その横に青い銃を持った陽太がいた。

「俺の名は中川陽太！お前らをぶっ殺すためにやってきた！」

と陽太は無表情のまま言う。

「・・・・・・・・・・フン・・・・・・望むところだ！」

レイシーはゆっくりと刀を抜く。

「みんな！戦うぞ！」

戦闘員たちも一斉に銃を構えて陽太を囲む。

辺りにものすごい殺気が漂う。

そして、陽太の雄叫びとともに戦いが始まった。

「うおおおおおおおお！」

「撃てぇぇぇぇぇ！！！」

戦闘員たちが機関銃を撃ち始めると同時に、陽太もハングリーブルーを撃ち始めた。

両者ともに防弾剤を塗っているので、相撃ちになれば威力がある銃を持っている陽太の方が断然有利だ。

「のわあああ！！」

貫通しなら爆裂するハングリーブルー弾で体が砕けていく戦闘員たち。それに対して陽太は少し体をよろめかせるだけで、全く傷を負わない。
重々しい銃声が何度も何度も響き、何発も何発も銃弾が飛んでゆく。
すると、その銃弾をヒラヒラとかわしながらレイシーが、陽太に向かって走る。
「ちっ！銃弾かわせる人かお前。」
陽太は一度銃撃をやめる。
「銃弾など効かぬ！アタシは絶対にお前を斬る！」
「・・・・・・・・・・銃弾が効かないか。じゃあこういうのはどうなんだよ！」
陽太は突然体勢を低くして力を溜めてから、ミサイルのようにレイシーに向かって飛んでいった。
「何！？」
レイシーは驚き、立ち止まる。陽太はレイシーのすぐ目の前で着地し、レイシーの腹に強烈なパンチを入れた。レイシーは刀から手を離しながら地面にたたきつけられた。
「へぇ・・・・。銃弾かわせるのに、俺のパンチはかわせないんだ。」
と言いながら陽太は余裕の表情を見せる。
「ク・・・・・・クソォ！！」
レイシーは腹をおさえ、刀を拾いながらゆっくりと立ち上がる。そこに陽太はハングリーブルーを撃ちこんだ。
「食らえ！」
「・・・・・・・・・」
ハングリーブルーの弾がレイシーに向かって飛ぶ。
さすがのレイシーでも弱っていて身動きがとりずらくなっていれば銃弾をかわすことなんてできはしない。この時点ではすでにレイシーの敗北は確定したかのように見えた。しかし、レイシーは銃弾を

食らわなかった。
「何！？」
レイシーは銀色に輝く長い日本刀を両手で持ちながら上に振り上げたまま静止している。そして、レイシーの背後には真っ二つになっているハングリーブルーの１４ミリ弾が落ちていた。
「アタシの動体視力、ナメんじゃないわよ。」
レイシーの顔が強気な表情に変わる。
「刀で銃弾を斬ったのか！」
「そのとおりよ！」
レイシーの日本刀の斬れ味は抜群だ。ハングリーブルーの堅い弾も美しく２つに割れていた。
「・・・・・・そうかい。あんたはそこらへんで死んでる戦闘員とかと違ってそんなに弱い奴じゃねぇみてぇだな。」
「あたりまえでしょ。アタシはね、そこらへんの奴とは違ってタフなのよ。」
「ずいぶんとまぁ自信アリアリなんだなお前。」
陽太はレイシーをバカにするような目で見る。
「黙れ！お前なんかにアタシの何が分かる！アタシはアンタと違って、背負っているモノの大きさが違うのよ。」
「背負っているモノ？」
「そう！この任務は豪牙一族の未来がかかっているのよ！」
とレイシーは必死に言う。しかし陽太は笑いながら答えた。
「クハハハハ！豪牙一族の未来だと！？じゃあ俺はＫの未来のために全力でお前を殺さなきゃいけねぇわけだ！上等だ！行くぜぇ！」
陽太はまたレイシーに向かって間合いを詰めてゆく。レイシーは刀を振り上げて走り、向かってくる陽太の頭にそれを振り下ろす。陽太はその刀を素早くよけて、レイシーの顔にアッパーを食らわせようとする。しかしレイシーはそのアッパーをかわして、陽太の体を刀の先端で貫こうとする。その瞬間、陽太は素早くハングリーブルーを構えて、レイシーの心臓を狙って銃弾を放った。

「何!?」
レイシーは不意をつかれた。その銃弾をかわそうと努めたがかわしきれず、左の腕をハングリーブルーの銃弾に持っていかれた。
「痛ぁぁ!!」
レイシーはよろめいた。
「まだまだぁ!」
陽太のハングリーブルーによる攻撃は容赦なく続く。左腕の激痛で完全にペースを崩してしまったレイシーは、次々とその銃弾を食らってしまう。
「ぐあああああああ!!!」
レイシーは致命傷を負い、地面に倒れ込み、再び立つことは出来なくなった。
陽太はゆっくりとそのレイシーに近寄った。
「豪牙一族最大戦力だって聞いたからもっと強ぇかと思ったけど、がっかりだ。」
「・・・・・・・・・フッ・・・・・・・。」
レイシーの全身は血まみれになっていた。そんなレイシーに陽太は質問をする。
「お前、豪牙大なんかの手下で、不満はなかったのか?」
「・・・・・・・・・あったわよ。あったに決まってんじゃない。作戦が失敗すればボコボコにされて、女である私は体をおもちゃのように遊ばれたりもした。」
「じゃあどうして豪牙に仕えたんだ?」
「・・・・・・・・・アタシは傭兵家業の家に生まれたの。そして豪牙に雇われた。金が払われている限り、決して雇い主の命令に背くことはできないのよ。」
「お前はそれで良かったのか?」
「・・・・・・・・・・・・」
どんなに大に嫌なことをされていても、大金が払われている限り、

レイシーは大の駒で無くてはならなかった。そんなレイシーを哀れに思った陽太は、助けの手を差しのべた。

「なあレイシーさん、Kに来ないか？お前、大に毎日イジメられる生活から断ちたいだろ？今こそ寝返る時だと俺は思うぜ？」

と陽太は言った。しかしレイシーは口を大きく開けて笑い始めた。

「アッハッハッハッハ！！！あんた馬鹿ね！アハハハハハ！！！」

「な、なんだと！？」

「ほんと馬鹿よ。アタシはね、傭兵という職業に誇りを持っているの。だから、寝返ったりする真似は絶対にしない。確かに今の当主は性格も悪くて、卑怯者。だけど傭兵であるアタシは死ぬまで豪牙と契約することを決めてしまった。だから最後は豪牙の傭兵として死ななきゃいけない。それが傭兵の義務なのよ！だから情けなんかいらない。殺して、アタシをここで殺して！」

レイシーのプライドに、自分の意志は存在しているのだろうか。ただ単に傭兵であることに誇りを持ち、自分の命よりも雇い主の命を重んじるレイシー。

陽太は舌打ちをしてからゆっくりと銃を構えた。

「・・・・・・・・・・・・チッ。分かったよ。じゃあな！」

ハングリーブルーがレイシーの頭を砕く。返り血が陽太の顔に少しだけ飛び散った。

陽太は悲しそうな顔をしながらゆっくりと後ろを振り返り、大輔たちの乗るパトカーに向かって歩いた。

「哀れな女だ・・・・・・・・。豪牙はやはり、金で動いているんだな。」

と、独り言を言ってから、陽太はゆっくりとパトカーの後部座席に乗り込んだ。

「陽太、任務完了か？」

と運転席にいた大輔が陽太に言う。

「ああ。」
「じゃあ、帰るぞ。」
「ああ。」
陽太を乗せたパトカーは喫茶ねこばばに帰っていった。

5月15日18時32分。チョルカトラ・レイシーを含む30人の戦闘員が全滅。
この知らせを聞いた大は激怒し、この出来事をKの宣戦布告ととらえた。
戦争の規模はますます広がってゆくことが予想されるのだった。

戦火燃え上がる

東京は火の海になっている。ゴールド隊の持つ爆弾があちこちで爆破する。
その爆弾の爆風をよけて、カミカゼのように突っ走る小笠原組の組員たち。

小笠原組が所有する西新宿7丁目のオフィスビルも、倒壊してしまったので、怜次達はそのオフィスビルから2キロほど離れたところにある静かな路地に入口が隠されている地下シェルターに身を潜めていた。

静かで快適なシェルターの中。煙草をふかしている怜次に桐谷が話しかける。
「池袋に行った連中がもう間もなく全滅します。増援を出しますか？」
「・・・・・・・・・・・・」
怜次は腕を組んで考え込む。
「どうしますか？」
「ぞうへんは（増援は）おまへあ（お前だ）！」
「わ、分かりました。」
桐谷は深くお辞儀をしてから、準備を始める。

（僕ら小笠原組の衰退も時間の問題だ。だが衰退と敗北は別だ。衰退したからといってこの戦争に負けるわけではない。この戦争に組長である僕がいる限り、絶対に小笠原組の敗北は無い！）

桐谷がシェルターから出ていった直後、怜次もスーツ姿で外に出て

いこうとする。そんな怜次に1人の組員が話しかける。
「組長、どこに行くんですか?」
「・・・・・・・・・・むひほいあ（虫取りだ）。」
「・・・・・・・・・・虫取り?」
「ほうあ（そうだ）。」
不気味な笑みを浮かべる怜次は『虫取り』というものに出かけた。

『虫』が指すものとは一体・・・・・・・。

5月16日豪牙城。
「レイシーが死んだだと!?」
「はい!中川陽太の仕業です!」
「クソォォォ!あの役立たずめ!」
大は怒っていた。Kがレイシーを殺したことよりも、レイシーが何の役にも立たなかったことに怒っているのだ。
「基地にはゴールド隊も小笠原組もいなかったらしく、全く収穫はナシとのことです。」
「ケッ!あんな女にこの作戦を任せたのが間違いだったんだ!だが、これを理由にしてKを攻撃することが出来るぞ!豪牙戦闘員を全員ホールに集めろぉ!出陣宣言を行う!」
「は、はい!」
と返事をしてから、その戦闘員は放送室へ走り、全ての戦闘員にその命令を告げた。
「全豪牙戦闘員に次ぐ!地下3階の演説ホールに集結せよ!繰り返す!早急に、全豪牙戦闘員は地下3階の演説ホールに集結せよ!!」

1時間後・・・・・
10万人の豪牙戦闘員が地下3階にある巨大な部屋に集結する。そして、その部屋の中央にある講壇に大が立ち、演説を始める。

「我々は今、衰退しかかっている小笠原組を潰すという作戦を練っている。しかぁし！！・・・昨日、同志がＫの殺し屋に殺害されるという大変残念な事件が起こった！これは許されるべきものではない！そこで、急遽作戦を変更し、Ｋに総攻撃を仕掛ける！」

「おおおおおおおお！！！！」

「あれは我々に対する挑発だ！受けて立たなければ豪牙の名が廃る！！」

「そうだそうだぁぁぁ！！！行くゾ行くぞおおお！！！」

「やっとあいつらを皆殺しにするきっかけを作ることが出来たのだ！今殺さずにいつ殺すぅ！？小笠原組とかゴールド隊とかの目など気にするな！早急にＫを潰せぇぇぇ！！！」

「うおおおおおお

ろ？お前も行くのか？」
「もちろんよ！私はね、春江田を殺さなきゃいけないの！」
「・・・・・・・・・そうだな、お前にあんなひどいことをする男を生かしておくわけにもいかんしな。」
「私が負った心の傷は、そうすることでしか癒せないのよ！」
「そうかい・・・・・・」
陽太は感心する。友恵にもしっかりと大きな闘志が備わっているのだということに。

すると喫茶店の中から破裂音のようなものが聞こえてくる。
「ブァクション！！！」
「お父さん？どうしたの？」
友恵は屋根からベランダに飛び降りて、1階のホールに走っていく。
誠はコーヒーを口に含んだままくしゃみをしてしまったようだった。
カウンター席に大量のコーヒーが散乱している。
「ああ！お父さん何やってんのぉ？」
友恵が呆れた顔をしながら雑巾を持ってきて、そのコーヒーを拭き始める。
「・・・・・わ・・・・・悪い・・・・・・」
「もう！どうしちゃったのよ！」
「いや・・・・今突然、ものすごい寒気がしたんだ。殺気・・・・・みたいな・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・だからってコーヒー噴き出すこと無いじゃない！」
「悪い悪い・・・・・・・・・・・・」
誠の脳裏をよぎる予感、悪い予感。

そのとき、屋根にいる陽太は遠くから何かがこちらに近づいていることを予感した。
「！？」

あわてて飛び起きて、辺りを見渡す。

すると北の空に、黒い点があることに気付いた。

「なんだ!?」

黒い点は近づくにつれてだんだん大きくなり、少しずつその姿を明らかにする。

「あ、あれは・・・・・・・・・」

黒い物体は細長かった。そして、ものすごいスピードで飛んでいた。

そう、これは・・・・・・・。

「ミサイルだああ!!!!」

中型のミサイルが喫茶ねこばばの上を通過する。

「いったいどこに向かってんだ?」

ミサイルが通過した時に発生した突風に吹き飛ばされそうになる陽太。

誠と友恵も喫茶店の中から出てくる。

「陽太!どうしたんだ!?」

「ミサイルです!中型の遠距離ミサイルです!」

「何!?」

そして、喫茶店から3、4?離れたところでそのミサイルは爆破した。陽太たちは大きな炎が空に高く上がるのを確認した直後、ものすごい爆音を聞きとった。

「な、なんてことだ・・・・・・・・・」

空を見渡してみれば、たくさんの中型ミサイルが飛んでいた。

「これはいったい・・・・・・・・」

まるで流星群のように、ミサイルが地面に向かって飛んでゆく。

そしてそれが地面にぶつかるたんびにものすごい爆音と炎が地面を揺らした。

陽太たちは混乱し、走り始める。
「とにかく逃げるぞ！この近くに地下避難所があるんだ。そこまで逃げるぞ！」
「お、おう！・・・・・・・・うわあああ！！」
すぐ近くにあった建物などに、次々とミサイルがぶつかり、爆音をあげる。

陽太たちは頭を手で覆いながら必死に地下避難所を目指して走った。

「もうすぐだ！急ぐぞ！」
「ま・・・・・・待って・・・・・・・」
誠と陽太に比べて、走るのが遅い友恵。疲れきってしまって置いていかれそうになる。
「友恵！急げ急げ！」
「わ・・・・分かってるわよ！」

そのときだった・・・・・・
ミサイルが友恵に向かって飛んできていることに陽太と誠は気がついた。
「友恵！逃げろ！」
「え！？」
友恵が振り向いたときにはミサイルはすぐ目の前まで来ていた。そして、ミサイルは友恵のすぐ近くにあるアスファルトにぶつかり、真っ赤な炎をあげて爆発した。
「うわああ！！！！」
陽太と誠は爆風で吹っ飛ばされたが、大した怪我もなく無事だったのだ。しかし友恵は・・・・・・・・
「友恵ぇぇぇぇ！！！」

炎よりも赤い血が、地面に倒れた友恵の体から流れ出る。

友恵は無事なのだろうか、いや無事なはずがない。無事なわけがない・・・・・・・

怒らせちゃいけねぇ奴

“断ち切りたい過去・・・・・・・・・・・・・
「おい陽太！オメェの親父は超極悪の殺人鬼なんだろ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「だったらお前も親父と一緒に死刑にされろよ！」
「・・・・・・・・・・・・・・・」

あんなことを言われた中学時代。

あんなことを言った男子生徒。

俺はいろんなものを失った・・・・・・・・・・・・友達・・・・・・恋人・・・・・・。

だから殴り倒してやったんだ。あの男子生徒たちを全員半殺しにしてやったんだ。”

５月１６日１５時ごろ。Ｋに大量のミサイルが降り注いだ。

陽太たちはなんとか地下シェルターまで逃げきることが出来たのだが、友恵がミサイルの爆風によって飛んできたがれきなどで頭部を強打してしまい意識不明の重体となった。

シェルターにある応急処置セットだけでは、止血と消毒くらいしかできないので、友恵の怪我を治すことはできない。ミサイル攻撃が終わるまでこの地下シェルターから出ることはできないし、出るこ

とが出来たとしても、ボロボロになってしまっている街に高度な医療技術なんてものは存在しないだろう。友恵は非常に危険な状況下に置かれていた。

「友恵・・・・・友恵!!」

意識が戻らない友恵に必死に話しかける誠。

「・・・・・・・・・・・・・・」

陽太は目を大きく開けたまま何もしゃべらない。何か考え事をしているようだった。

すると、シェルターに10人ほどの調査班が入ってきた。

「土井さん!我々の調査の結果、あのミサイルは豪牙城から発射されたものと思われます!」

「なんだと!?豪牙が俺たちに攻撃を仕掛けてきたということか!」

「はい。おそらく先日レイシーという女を殺したことが原因です。」

「そうか・・・・・・・・・。」

「あ、あとこんなものが届いておりました!」

調査員の1人がビデオテープを取り出した。

「・・・・・・・・再生してみるか。」

シェルターの中にある小さなテレビの後ろにあるビデオデッキにそのビデオテープを入れて、再生ボタンを押す。

するとテレビには、笑みを浮かべた大の顔が映った。

「豪牙・・・・・大だ・・・・・・。」

大は突然中指を立てた右手を見せつけながら話し始めた。

『先日はよくも俺様の手下を殺してくれたな。仕返しだ!貴様らに総攻撃を仕掛けさせてもらった。アハハハハハハハハ!!!』

声変わりしたばかりの中学生っぽい声で笑うその声が陽太たちの怒りを呼び覚ます。

「ク・・・・クソ野郎・・・・・・・・・」

『お前たちみたいな未熟者の集まりはな、未熟者らしく日陰でビクビク過ごすのが似合ってんだよ！調子に乗った真似するんじゃねぇぞ！そのミサイル攻撃を存分に浴びて死ね！』

「・・・・・・・・・・・・」

陽太たちは何もしゃべらずにただ怒りを溜めこんだままそのビデオを見続ける。

すると大は突然とろけたような表情になりこんなことまで言ってくる。

『友恵、君は俺様のモノだぁ～俺様だけのモノだぁ～！早くこっちに戻ってこ～い。俺様の友恵、俺様の友恵・・・・・・。友恵をこちらによこしてくれればそのミサイル攻撃をやめてやってもいいぞ？さあどうする？その気になったらこのビデオに書いてある携帯番号にかけてみろ。待ってるよぉん！』

友恵に大けがを負わせたその本人が、神経を逆撫（さかな）でするような口調と声で誠と陽太に話しかけてくるビデオレター。

反吐（ヘド）が出そうになるほど最悪な気分になった。

陽太と誠は同じことを思った。

（ぶっ殺す！）

陽太は不気味な笑みを浮かべながら誠に話し始める。

「土井さん。この間あんたが暴走した時の気持ちがなんとなく今は分かる気がするぜ。」

「・・・・・・・・・・・・そうか。だが今の俺はあの時よりも怒っている。」

「・・・・・・・・・・だったら？」

すると誠は口を大きく開けて笑い始めた。

「クハハハハハハハハ！！大暴れしようぜ！豪牙（あいつら）に、誰を怒らせた

のか教えてやろうぞ！」
「ああそうだな。やろうか。殺ろうぜ！！！」
陽太と誠は同じ感情、同じ殺意を持っていた。そして二人はハイタッチをしてから、素早い動きで準備を始める。
そんな二人を調査員はあわてて止めようとする。
「お、おやめください！現在、日本全土でゴールド隊と小笠原組が激戦を繰り広げています！激戦区になっている東京の豪牙城なんかに突撃なんてすれば間違えなく巻き込まれてしまいます！それに、このビデオは明らかに挑発です！もしかしたら罠があるかもしれません！」
「知るか！そんなもん知らん！！じゃあ小笠原組もゴールド隊も豪牙と一緒にぶっ潰せばいいじゃねぇか！！罠！？罠なんかにひっかかって死ぬなんてこの俺にはありえねぇ！！卑怯者なんかに俺は殺されたりしねぇ！！」
誠のその言葉に、調査班の人たちは皆驚いた。
「・・・・・し・・・しかし・・・・・」
「このミサイル攻撃が終わったら、豪牙の戦闘員たちがここに攻め入ってくるはずだ！お前らはそいつらを返り討ちにしろ！その間に俺と陽太が豪牙城を潰す！分かったか！！」
「は、はいっ！！！」
「行くぞ陽太！」
「・・・・・・・・・・」
陽太は意識が戻らない友恵を見つめていた。そんな陽太に誠はゆっくりと近づき、肩にポンと手を乗せた。
「友恵の仇を討つんだ。行こう陽太。」
「・・・・・ああ。そうだな！行こう！」
決心のついた陽太は、黒い戦闘用オーバーコートを着て、誠と一緒にシェルターの外に出ていった。

大切な人を傷つけられたこの怒り。誠にはもちろんだが、陽太にも身に覚えのある感覚だった。昔、同級生にイジメられた時にも、似たような感覚を味わったような覚えのある陽太。あの時も、何か大切なものを傷つけられた。何か大切なものを・・・・・・・・。

「ヘリを使おう！ヘリで城に突撃する！」
「分かった！でもヘリなんてどこにあるんだ？」
「佑太の裏庭にも地下シェルターがあるんだ。そこにある。行くぞ！」
「よし！」
誠と陽太にとってミサイルをかわすことなど容易いことだ。というより怒り狂っているこの二人に何をしても無駄なのではないだろうか。

2人はただひたすら走り続ける。走り続ける。

するとそんな2人の前に3人の男が立ちふさがった。
「中川陽太さんと土井誠さんですね。」
「なんだテメェら！」
「私たちは豪牙一族の者でございます。」
「ほぉ・・・・・・・」
「あなた方の命を奪いに参りました。」
「そうかい。」
誠と陽太は『喜んで』と言わんばかりの顔をしながら武器を取り出した。

豪牙戦闘員の3人も銃を構える。

先手を取ったのは豪牙戦闘員だった。誠に向かって銃弾を放った。
しかし誠は素早く上に飛んでその銃弾を回避すると同時に、戦闘員との間合いを一気に詰める。
「なに！？」
突然目の前まで近づいた誠に、思わず声をあげて驚いてしまう戦闘員。
「終わりだ！」
誠の短刀の光が一瞬だけ戦闘員たちの視界に入った。その刹那の光を見たが最後、戦闘員たちは3人ともほぼ同時に血を噴き出して、倒れた。

「ふぅ・・・・さあ行こう。」
陽太たちは再び走り始めた。

２０分後・・・・・・・・・・

陽太たちは佑太の経営している『天津ガラス』の裏庭に到着した。
そこには大きな畑があり、その畑のすぐ近くにある倉庫にシェルターへの扉が隠されていた。
その扉の中に入っていく陽太と誠。シェルターの中には佑太と、たくさんの子供たちがいた。
「佑太！」
「おお！陽太君に土井さんやないか！無事でよかった。・・・・・・どうせヘリを使うんやろ？用意はできとるで！」
「気が効くじゃないか佑太。ありがたい。お前も行くか？」
「いや、それはできん。ワイはここにいる子供らを守らなアカンねん。」
「・・・・・・・・・・ここにいる子どもたちはいったい・・・・・・・」
「近くにある孤児院の子たちや。みんな親がいないかわいそうな子

たちなんや。せやからワイが守らな！行くわけにはいかん！」
「そうか、頑張るんだぞ！」
「おうよ！あんたらも死なんでくれよ？」
「当然だ！じゃあな！」
陽太は佑太にグッドサインを出してから、ヘリに乗り込んだ。
１６時０２分。シェルターの一部が開放され、ヘリは飛び立った。
戦場に向かって。日本に向かって。豪牙城に向かって。

５月１６日１６時３０分。ゴールド隊千葉基地。以前富士山のふもとにあった基地が破壊されたので、今は千葉にあるこの基地が本拠地となったゴールド隊。

「隊長！大変です！ブルーが動き始めました！」
「なん・・・だと？」
エデルは驚き、椅子から立ち上がった。
「おそらく標的は豪牙一族です！豪牙城を潰しに行くんだと思われます！」
「そうか・・・・・」
「どうしますか？彼らはヘリで移動しています！撃墜することもできますが。」
「いや、おそらくブルーはその程度では死なない。もう少し様子を見よう。」
とエデルは冷静になる。
「なにもしないのですか？」
「ああ。ブルーを狙っているのは我々だけでは無い。小笠原組だっているんだ。慎重にならなくては。」

夕焼けの色と街の炎が一体化している日本。
その首都の東京にある豪牙城に攻め込もうとする陽太（ブルー）に誰もが注目した。

「ほれでやっほおもひおふあう（これでやっと面白くなる）。ヒュッフッフッフッフッフッフッフッフッフッフッフ！！！！！」

怜次はメチャクチャになってしまった東京の街を歩きながら、遠くにそびえたつ豪牙城を眺めながら不気味な笑みを浮かべていた。

意識が戻らない友恵。

目をつぶったままただベッドの上で眠る。

ミサイル攻撃はもう終わったらしく、友恵を看病するために、佑太がたくさんの子供たちを連れて、シェルターにやってきた。

「・・・・・・・・・・・・・」

苦しそうにしている友恵を見た佑太は、胸が潰れた。

ただ眠る友恵。

友恵は夢を見ていた。どこか懐かしいぬくもりを感じる、悲しい夢だった。

“真っ白な壁に包まれた広い空間に友恵が立つ。目の前には友恵の母、裕子の姿があった。

「お母さん・・・・・・・・・」

「ん？どうしたの友恵？そんなに暗い顔して・・・・・・」

裕子の優しい微笑みを見た友恵は思わず涙をこぼした。

「・・・・・・・・・・・・・私、またお母さんの料理が食べたいよ！」

と友恵は必死に言うが、裕子は首をゆっくりと横に振った。

「ごめんなさいね。それは無理なお願いよ。私の命はもう無いの。命の無いものに料理なんてできないわ。当然ね。」

「・・・・・・・・・・どうしてあんな奴に殺されちゃったのよ！どうして・・・・・どうして！！」

「・・・・・・・・・・・・・それはきっと私に与えられた運命よ。あの時間であの場所にいてしまった私に死神がやってきたのよ。」

裕子はただ、淡々と友恵に自分の『死』を伝える。
すると友恵は強気な顔で裕子に自分の決意を明かす。
「お母さん！私、お母さんの仇、絶対に討つから！それで私、もっともっと強くなるから！」
「・・・・・・・・・そうね。でも、死んじゃだめよ？」
「・・・・・・・・・うん」
友恵は少し不安げな返事をする。
「私の仇を討ってくれるのはいいけれど、あなたが死んじゃったらただの『負け』よ？」
「でも、本当に強い人は命を落としてでも仇をとったりするんじゃないの？」
と友恵が言うと、裕子は首を横に振った。
「いいえ、自分の命を守れない人に、他人の命の仇なんか討てないわ。だからもっと、自分の命を大切にして。そのうえでもっと強くなりなさい！」
「・・・・・・・・・うん・・・・・」
戸惑う友恵は曖昧な返事をする。そんな友恵に裕子はゆっくりと近づき、ギュッと強く抱きしめた。

白い空間の中、抱き合う二人の姿はキラキラと輝いて見える。なぜだろう・・・。

「友恵、死なないで・・・・・・・・・」
「お、お母さん？」
裕子は泣いていた。
「あなたにはまだ、やるべきことがあるでしょ！Kの一員として、まだやるべきことが！」
「・・・・・・・・・」
「行きなさい。あなたは早く行くべきよ！早く目を覚ましなさい！」
裕子がだんだん遠ざかってゆく。

「お母さんも一緒に行こうよ！」
「・・・・・・・・・・・・」
裕子の声が聞こえなくなった。裕子は消える寸前に涙を流しながら友恵に向かって何か悲しい表情で話しかけてきたが、友恵はそれを聞きとることはできなかった。
「お母さぁあああああああん！！」

どこか遠くに消えていってしまった裕子に、その叫び声は届かなかった。
”

地下シェルターの中にある、けが人用のベッドの上で、友恵はようやく目を覚ました。
「・・・・・・・・・・・・夢？」
友恵の顔は涙と汗でいっぱいだった。悲しい夢を見たからだ。
「・・・・・・・・お母さん。お母さん・・・・・・・・・・」

母親が冷凍庫から死体となって出てきたときの事を思い出してしまった友恵は顔を枕にくっつけて、声をあげて泣き始めた。
「うわぁぁぁぁぁぁん！！うわぁあああああああああん！！！！！」

するとシェルターの台所から、佑太がものすごいスピードで飛んできた。
「友恵ちゃん！？どどどうしたん！？」
「うううううううううううう・・・・・・・・・・」
「泣いてるんか？どこか痛いんか？無理すんなや？ワイになんでも言うてくれや！」
必死に友恵のことを心配する佑太を見た友恵は泣くことをやめて、枕とシーツで涙を拭いて顔をあげた。

「・・・・・ううん。大丈夫。ちょっと悲しいことを思い出すような夢を見ちゃっただけ。」
と友恵は泣くことをこらえながら、少しだけ笑みを浮かべる。
「悲しいの？」
「うん・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・よう分からんが、あんま追求せんとくわ。あぁびっくりした。」
佑太は少しほっとしたような表情になる。
「うん、ありがとう。」

佑太は友恵が泣いた理由を深く追求するようなマネはしなかった。
それは彼なりの気遣いなのだろうか。それとも単に友恵が突然泣いたことに驚いて動揺しているだけなのか。とりあえず佑太は何も言わず友恵の前に温かいウーロン茶を用意してくれた。
「・・・・・・・・陽太君達、はよ帰ってくるとええな。」
「そうね・・・・・・・・・・。死んじゃったら何にも意味無いものね。」
「え？」
「ううん。なんでもない。」

そう、死んでしまっては元も子もない。自分の命を守れない人に、他人の命の仇なんか討てるはずがないのだ。
裕子にとって、友恵や陽太たちが死ぬということは『敗北』なのだ。これでは仇を討ったことにはならない。だから生きなければならぬ。
生きて『勝利』をつかみとらなくてはならんのだ！

友恵は、夢枕に現れた裕子の言葉を胸に、ゆっくりと傷を回復しているのだった。

身代わり

豪牙のミサイル攻撃が終わる。やがて、Kと日本の間にある国境を豪牙の戦闘員たちが乗り越えてくる。Kの戦闘員は反撃を開始し、豪牙の戦闘員に好き勝手やらせないようにする。

豪牙戦闘員の数は１０万人。Kの戦闘員の数も１０万人。一見公平な戦いに見えるかもしれないが、豪牙はKに比べてたくさんの兵器や武器を大量に持っているのだ。日本国民のほとんどが支持している豪牙一族が金に悩むことなんてない。兵器や武器が無くなれば買えばいいし、軍事力が無くなれば他から雇えばいい。全く公平な戦いでは無い。圧倒的にKの方が不利なのだ。

だからこそ、陽太と誠は早く大を殺さなければならない。

将棋で言えば陽太と誠は飛車と角。

金や銀で攻め込まれまくっている状態にあるKの手持ちには飛車と角が２つだけ。

これは絶体絶命のピンチ。

だがそこで守りを固めるようなことをすれば終わりだろう。

相手の不意を突くように、その２つの駒で相手の王に攻めればよいのだ。

攻撃こそ最大の防御。

攻めるしかない。攻めて敵よりもはやく詰むしかない。

５月１６日２１時１０分。

豪牙城の上空で飛んでいるヘリコプターから、陽太と誠が城に向か

って投下される。
「うおおおおおおおお！！」
「ぬをおおおおおおお！！！」
雄叫びとともに落下していく陽太と誠。そして、ハングリーブルーの音とともに、豪牙城の天井窓が割れて、戦闘が始まる。

「だ、誰だ！？」
割れた窓ガラスの向こうから、陽太と誠が飛んでくる。
「俺たちはK。豪牙一族をぶっ殺しに来た！」
と誠は言い放った。
「なんだと！？」
豪牙戦闘員は誠に向かって銃を構えた。しかし、その動きは誠にとってあまりにも鈍すぎるものだった。
「遅い！！！！！」
一瞬だけ現れた短刀の刃は一瞬で姿を消し、その戦闘員の首を切り落とした。

すると城の中にものすごい音量の警報が鳴り響き始めた。
「緊急事態発生！緊急事態発生！最上階の大広間に侵入者あり！侵入者は強力な武器を所持している！十分に警戒せよ！」

大広間の巨大な扉の向こうから、たくさんの豪牙戦闘員が突入してくる。
「う、動くな！そのまま地面に伏せろ！」
と戦闘員は言ったが、それを無視して陽太はハングリーブルーを構える。
「伏せるのはお前らだ！死ねぇ！」
１４ｍｍのハングリーブルー弾が戦闘員たちの体を砕いていく。
巨大な銃声が大広間全体に響き渡る。

そして、突入した豪牙戦闘員は数秒ほどで全滅した。

「フン。他愛ない。」

血まみれになった大広間を後にした陽太と誠は、豪牙大のいる当主専用の部屋に向かって走り始めるのだった。

その頃当主の部屋では・・・・・・

かなり焦り始めている大の姿があるのだった。

「く、クソ・・・・・・クソ！クソ！！！・・・・・このままじゃあいつらがここに来ちまうじゃねぇか！なんとかしないと、なんとかしないと！」

魔法道具が収納されたクローゼットを乱暴にかきまわしながら陽太たちとの戦闘にふさわしい物を探しだそうとする大。

しかしそんな都合のよい魔法道具なんてそう簡単に見つかるものではない。

炎を作り出す杖。

強風を作りだすうちわ。

衝撃波を生み出すボール。

言葉だけではすごい道具に聞こえるかもしれないが、ハングリーブルーを持っている陽太と、怒りに満ちている誠の相手をする道具としては非力すぎるものなのだ。

「当主！もう戦うしかありません！あと数秒でここに到着します！」

「うぬぬぬぬぬう・・・・・その扉を早く閉めろ！絶対にこの部屋に入れさせるな！」

「・・・・・は、はい・・・・・・・」

もう逃げ場がないことも分かっている。正々堂々と戦えば大が負け

てしまうことも分かっている。それでも戦闘員たちは大の命令に従い、行動する。

当主の部屋の扉を固く封じ、陽太と誠の侵入を防ごうとする。

しかしそんな扉、陽太たちにとってはただの薄い紙だ。

ハングリーブルーの銃声とともに戦闘員たちの悲鳴と、扉が砕け散る爆音が辺りに響いた。

「ぐわあああああ!!」

「・・・・・・・・・・な、なんて威力だ・・・・・・・」

あまりにもあっけなく砕け散ってしまった扉の破片を、大は呆然と見つめる。

ゆっくりと部屋に入ってくる陽太と誠。

だが陽太達は警戒していた。先日のビデオで大は陽太たちに挑発をしているのだから、当然大には何か作戦があるに違いない。いったい何が・・・・・・・・・・

「春江田大!もう逃げ場はねぇぞ!覚悟しやがれ!」

と陽太は大に向かって言い放った。

「・・・・・・・・・・・・・」

大は何もしゃべらずに下を向いている。

「なに下向いてんだよぉ!」

と言った誠は懐から短刀を素早く取り出して、大に向かって投げ飛ばした。

短刀は大のすぐ隣にあった木の柱に刺さった。

「・・・・・・・・・・・・・」

それでも大は動じない。何かがおかしい。何かがいつもと違う。

それは戦闘員たちすら驚いてしまうことだった。大はさっきまでオ

ドオドしていたのに、現在は下を向いたまま誠の短刀にも恐れずにただ下を向いている。
「・・・・・・・・陽太、警戒しろ。あいつ、何か企んでやがる。」
誠は体勢を低くして、いつでも戦えるようにしている。
「分かってますよ。でもいったいどうするつもりなんだ?」
「さあな。」
「でも土井さん、俺たちには時間がありません。早く殺しましょう!とりあえずそこらじゅうにいるザコからさっさと片付けよう。」
陽太は笑みを浮かべながら真後ろに銃口を向けて発砲する。
「のわあああああ!!」
背後から陽太に攻撃を仕掛けようとしていた戦闘員の体が砕け散る。
「まだまだ!!」
ハングリーブルーを撃ち始めてしまった陽太を止めることなんてできはしない。結果はもう誰もが予想しているものだった。
一瞬にして戦闘員たちは全滅し、部屋には陽太と誠と大だけが残った。
「・・・・・・・・・・待ちくたびれたぜ。お前を殺す日をな!俺は・・・・・・・・・裕子を殺したお前を許さない。俺たち土井家の平和な日常を奪ったお前を許さねぇえええ!!!!」
と誠は叫び、大に向かってロケットのように飛んでいった。
「・・・・・・・・・・・・」
しかし大は全く動揺せず、誠の攻撃をかわそうともしない。それはあまりにも不自然だった。
(ま、まさか!)
そんなとき、誠はあることに気付いた。
「どうしたんだ?土井さん!?」
誠は大のすぐ目の前で止まり、大の表情を覗き込んだ。そこには、人間の顔はなかった。

「に、人形だ・・・・・・・・・」
大はいつの間にか人形と入れ替わっていたのだった。
「人形だと!?」
陽太も誠も驚きを隠せない。

「い、いったいいつ人形と入れ替わったんだ!?」
「分からん・・・・・・・・・。だがこれは・・・・・・・・・・・・」
誠はその人形の正体に気付く。
「なんなんだこれ?」
「これは、爆弾だ。」
「なんだって!?」
「おそらく身代わりに出来る魔法がかかっている人形なんだろう。
それに起爆能力を染み込ませただけだ。」
「さ、最悪だ・・・・・・・・」

大の狙いはおそらくこれだったのだろう。陽太たちをここまで連れてきて、爆弾で一気に吹っ飛ばすといったところだ。

そして、爆弾は何のためらいもなく爆発する。

強烈な爆音と光が豪牙城を包み込んだ。

狭い路地からこんばんわ

人形の形をした爆弾が爆破する。

ガラスが散り、壁が散り、柱が折れて飛んで消える。

やがて炎が城全体に行きわたり、一気に城は地獄になる。

陽太と誠は爆破する寸前に7階の窓から飛び降りて、庭にある巨大なクヌギの木の上に落下した。

「痛ぇ・・・・・・・・・」

背中を強打した陽太だったが、なんとか命拾いした。

「大丈夫か陽太?」

誠は見事に着地してほぼ無傷だった。

振り返るとそこには真っ赤に燃えあがる炎をまとった豪牙城の姿がある。

「なあ土井さん。まだ城の中には戦闘員がいたんじゃねぇのか?」

「そうだろうな。だが大はそんな奴らを巻き込んでまで俺たちを殺そうとしたんだろう。」

「味方も殺しちまうのかよ・・・・・・・・」

「ああ・・・・・・・。あいつの心は人じゃねぇんだ。」

「ところでさ、大は結局どこに行ったんだ?」

「さあな。おそらく東京の街に逃げたんだろう。」

「・・・・・・・・・・」

陽太たちは哀れむような目で、赤く染まっている東京の街の夜空を見上げる。

大は逃げていた。炎に包まれている城を背にしながら。
最悪な野郎だ。

「はぁ、はぁはぁ。へへっ爆破したか！死ね死ね死ね！粉々に砕け散って塵になれ！アッハッハッハッハ！！」
ひたすら逃げる大。別にどこかへ向かっているわけでもない。ただ逃げているだけなのだ。

炎上する東京の街の隙間を抜けてゆき、走る。とにかく走る。

大は卑怯者だ。陽太たちとの戦いから逃げて、味方を殺し、自分だけ逃げるだなんて最悪だ。だからなのか、大には天罰と言うべき出会いが待っていたのだ。
大がビルとビルの間にある狭い路地に差し掛かった時だった。

路地に1人の男が立っていた。
「ん！？・・・・・・・・・き、貴様は！」
その男の顔を見た大は絶望し、後ずさりを始めた。

傷だらけの顔、黒いスーツ、金髪七三、もうお分かりだろう。
「お、小笠原怜次ぃぃぃぃぃ！！！！」
「ふぉんばんわぁ（こんばんわ）！！！」
そう、路地で待ち構えていたのは紛れもなく、小笠原怜次だった。
「な・・・・・お前・・・・・・・・・」
全身の震えがおさまらない大は、まともに言葉を発することすらできなくなっていた。
「ほうひは（どうした）？ほおはあいおは（殺さないのか）？おまへおへひはぼふあおう（お前の敵は僕だろう）？」
「な、何言ってんだよ・・・・・・・。ちゃんと言葉しゃべれよ！！」

大には怜次の言葉を聞き取ることが出来ない。しかし、ものすごい殺気だけは感じてしまう。
だから怖い。意味不明なその殺気が怖いのだ！

「おまへいぼふおえんおをいはいふうひふようはあい（お前に僕の言語を理解する必要はない）。おまえははあほほえひえばいい（お前はただここで死ねばいい）。」

怜次の不気味な笑顔。大はそれを見た瞬間、心の底からこう思った。

『殺される！』と。

大は杖を取り出して、戦闘態勢に入る。
「た、戦うしかねぇか。」
杖を持つその手は震えていた。しかし戦わねばならぬ。生きるために。

「おまへあお（お前など）、ぼふおあいへえはあい（僕の相手ではない）」
「ちっ、何言ってんか分かんねぇんだよ！！」
大は怜次に杖の先端を向けた。
すると杖の先端から青白い光の塊が出現する。直後、塊から細長い光が飛び出し、それが怜次の体を貫いた。
「・・・・・・・・・・」
怜次の体がよろける。
「食らえ食らえ食らえぇぇぇぇ！！！」
次々と放たれる光線が怜次の体を破壊していく。
「・・・・・・・・・・」
怜次の体からどんどん血が吹き出る。ダメージを食らっているのだろう。

「へっ！麻酔効果付きの光線だ！お前は回復能力があるんだろう？だったら麻酔でそれを封じればよいのだ！」
光線に麻酔効果を融合させて攻撃する魔術。これは大が怜次を倒すために開発したものなのである。しかし・・・・・・
「ヒュッフッフッフッフ！！」
「な、何！？」
怜次は笑顔を見せながら傷を完全に回復させてしまう。麻酔の効果なんて全くなかった。
「おまへはこんほんへひいまひがへいう（お前は根本的に間違っている）」
「・・・・・・・・・・？」
大は戸惑っている。やはり何を言っているか分からないようだ。
そこで怜次はポケットから大きな袋を取り出し、その中に入っている数十個のガムを一気に口の中に頬り込んで噛み始めた。すると大の発言がほとんど正常になった。
「クチャ・・・・クチャ・・・・・お前は根本的に間違っているんだ。」
ガムが舌の代わりとなったようだ。
「な、なんだと！？」
「僕は回復能力を得たわけじゃない。『死なない能力』を得たんだ！だから麻酔も光線も全く効かぬ。」
「し、死なないだと！？バケモノ・・・・・・・・・」
大は杖を地面に落とし、また後ずさりを始める。
「僕の予想では豪牙一族は自滅すると思ってたんだ。なぜならお前みたいなのが当主になったから。」
「なに！？この俺様が豪牙一族の当主にふさわしく無いとでも言いたいのか？」
「・・・・・・・豪牙一族に限らず、貴様は人の上に立てるような奴じゃないよね。」
「んだと～！」

大は恐怖を必死に隠しながら、怒りの表情を怜次に見せつける。
「・・・・・・なぜその光線を中川陽太に使わなかったんだ？」
「そ、それは・・・・・・」
「自分から正々堂々戦おうとすることなんてしないからだろ？貴様は逃げて逃げて、逃げるところまで逃げ続けるつもりだったんだろ？無理に決まってんだろ、クッフッフッフッフ！！！お前は人の上には立てない。貴様ほど愚かな人間は久々に見た。僕とここで会ってしまったことを悔やみながら地獄に落ちろ！糞ガキ！」
「・・・・・・や、やめてくれ・・・・・・」
「僕はガキが嫌いなんだ。その声変わり寸前のようなその声色が特に嫌いだ。そんな貴様に女も金も権力も必要ない。貴様に残されているのは死だけだ！」
怜次は一歩ずつゆっくりと大に近づいていく。
大は胸ポケットにあったトランシーバーで戦闘員を呼ぼうとした。
「おい！応答しろ！・・・・・・はやく・・・・・・応答しろぉぉぉ！！！」
戦闘員は誰一人として応答はしない。当然だ。戦闘員たちは皆、城の中で焼死体になってしまっているのだから。
「貴様に権力は必要ない。」
「た、頼む・・・・・・殺すのだけは勘弁してくれ！」
「クッフッフッフッフ。」
「そ、そうだ！・・・・・・1億、1億円の小切手を渡す！これをやるから俺様を見逃してくれ！」
大は内ポケットから1億円の小切手を取り出した。偽物では無い。どこからどう見ても1億円小切手だ。
怜次は笑顔でその小切手を受け取った。
「・・・・・・」
「分かっているよな？これでお前は俺様に手出しをすることはできない。いいな？」
しかし怜次にそんなことが通用するはずもなく、怜次の拳が大に向

かって飛んだ。
「クフフフフフフ！！！」
「ぐ、ぐぉあああ！！」
右のフックを左頬に食らった大のアゴは、右側に大きくずれる。
「貴様に金は必要ない。この小切手はありがたくもらおう。クッフッフッフッフ！！」
「ほ、ほんあ（そ、そんな）・・・・・・・・・・」
アゴがずれてしまった大は、まともに言葉をしゃべることが出来なくなった。
「・・・・・・・・・」
怜次の笑顔がただひたすらに怖かった大。大は誰も助けてくれないこの状況を作ってしまった自分を恨むしかない。
「と、友恵・・・・・・た、助けてくれぇぇぇぇぇぇぇ！！うわあああああああ！！」
大の中にある恐怖は、ついに限界を超えた。大はは跪き、幼い子供のように泣きわめき始める。
しかしそんなことをしても無駄だ。怜次の体勢が低くなる。
「ちっ！キメーんだよガァキィィ！！！」
そして風を斬る音とともに怜次の拳が大の顔面を砕く。
「ブホォォォ！！」
一撃で大の頭は砕け散った。ものすごい血しぶきが舞い上がる。
「邪魔な虫はさっさと消えろ・・・・・・・・」
これは怜次にとっては『虫退治』なのである。殺しですらないのだ。
豪牙大という奴に『殺す』という言葉を使うなんてもったいなすぎるのだ。
血まみれになった大の体に、怜次は巨大なガムをくっつけて、その場を後にした。

「ヒュッフッフッフッフッフ。むひはいひひゅうひょう（虫退治終了）！」

これが、豪牙一族の最期だ。

あいつが我を待っている！！

5月16日23時59分。ゴールド隊は以前富士山の近くにあった基地を破壊されてしまったので、現在は長野県のどこかにある森の地下にある基地に拠点を移していた。しかし、そこにもまた小笠原組の組員たちが侵入してきてしまう。

「た、隊長！大変です！地下4階の廊下の壁を突き破って、小笠原組の組員たちが侵入してきます！」

それを聞いたエデルは驚いた表情を見せる。

「なんだと！？早く食い止めろ！5階と3階にいる戦闘員たちも戦闘に加えさせろ！」

「は、はい！」

（まさかこんなにも早く侵入されるとは・・・・・・）

小笠原組の戦闘力の高さには誰もが驚いてしまう。戦闘要員が多いゴールド隊に対し、個々の戦闘力が高い小笠原組。

小笠原組は基地に侵入してしまえば圧倒的に有利な状況になる。もちろんそれはエデルも把握していた。

「・・・・・・・・・・我が行くしかないようだな。」

エデルは銃を2つ持ち、グレーの戦闘用コートを着ながら歩き始めた。

すると、1人の戦闘員があわてた様子で走ってきた。

「た、大変です！」

「どうしたのだ？」

「豪牙大が死にました！」

「な、なに！？なぜだ？」

「まだ詳しいことは分かっていませんが、小笠原怜次の仕業である

ことは明らかです！」
「そ、そうか・・・・・・・・」
エデルは下を向きながらほんの少しだけ笑みを浮かべた。
「・・・・・・・・？」
その笑みの意味が分からない戦闘員は少しだけ戸惑っている様子だ。
「邪魔者が消えたな。さっさと小笠原組を倒してＫの首を討ちとろうぞ！」
「は・・・・・はい！！」
エデルは再び歩き始めた。激戦が繰り広げられている地下４階の廊下に向かって。

豪牙大の死は、豪牙一族の死だ。そして、日本国の崩壊でもある。
戦争はさらに激しさを増す。

「ここで食い止めるぞ！奴らをこれ以上進ませるな！」
必死に反撃するゴールド隊。しかし、命を惜しまずに次々と飛びかかってくる小笠原組を止めることはできない。
「ぐおおおおおお！！」
接近戦ではナイフを使い、遠距離戦ではやや小型の拳銃を使う小笠原組。武器だけ言えば大した戦力を持っているようには聞きとれないかもしれないが、彼らには驚異的な身体能力が兼ね備えられているため、そう簡単に倒されることはないのだ。
「クソォ・・・・・・・・」
ひたすら強力な武器で反撃し続けるゴールド隊だったが、ついに地下４階の部隊も全滅してしまう。

そのときだった。小笠原組の組員たちの目の前に、グレーの戦闘用コートを着たジュラバヌア・エデルが降り立った。

「それ以上前に進むな。」
２mほどの身長を持つエデルはかなり名の知れている存在だ。小笠原組も当然警戒する。

「こ、こいつは・・・・・・ジュラバヌアエデル！」
「ひるむな！一気にたたみかけるぞ！」
小笠原組員たちは片手にナイフを持ちながら一斉にエデルに向かって飛びかかった。

エデルは滑らかな動きで飛んでくる組員たちの間をすり抜けて、攻撃を回避する。
「遅い・・・・・・遅すぎる。それでは貴様ら、我に触れることすらできぬぞ？」
とエデルは組員たちを挑発するような発言をする。
「・・・・・・・・クソォ・・・・・・皆、銃を構えろ！・・・・・・撃てぇ！！！」
組員たちの銃口から一斉に放たれた銃弾が、エデルに向かって飛んでいく。

しかし、その銃弾がエデルの体に触れることはなかった。エデルはミラーを発動したのだ。

エデルは目にもとまらぬ速さでグロック１７Ｌを構えていたのだ。
「ミラーのエデル・・・・・・・。やはり銃撃は無意味だ。」
「じゃあどうすればいいんだ！接近戦も銃撃もダメなら・・・・・・・」
「や、やばい！くるぞ！」
無駄話をしている暇など無い。エデルは銃撃を開始した。

「ぐわあああ！」

エデルの銃グロック17Lから放たれる銃弾は非常に正確だ。確実に組員たちの両目をとらえる。防弾剤を塗っている組員たちの体にはグロック17Lの銃弾は効かないのだが、目だけは防弾剤を塗ることが出来ないのでどんなに弱い銃でも効いてしまうのだった。

眼球を貫いた銃弾は脳まで貫通し、組員たちの命を奪っていく。

ゴールド隊の基地に侵入した小笠原組の組員たちは5分ほどで全滅した。驚くことに、死体はすべて両目を撃ち抜かれただけで、それ以外の傷は一つも無かったということだ。

エデルは死体となった小笠原組員の持っているトランシーバーを拾い、それに向かってしゃべり始めた。

「小笠原怜次よ、これは我に対する挑発か?それともこの程度で我を倒すことが出来ると本気で思っているのか?」

するとトランシーバーの向こうから怜次の声が聞こえてきた。

「ヒュッフッフッフッフ。」

その笑い声はまるで挑発。

怜次がトランシーバーで話したのはそれだけだった。どうせ何かを話したところで、舌を無くした怜次の言語をエデルが理解することなんてできはしないのだろうから。

しかし、エデルは大体怜次が言いたかったことを理解することはできた。

「フフフフフ・・・・・・。そうか・・・・・・そうか・・・・・・。やはり貴様は我が倒さなければならんのか!受けて立つぞ!我は一歩も引かぬ!小笠原怜次よ!貴様を倒す!!」

エデルの表情が鬼神のようになった。

するとエデルの背後からゴールド隊の隊員が走ってくる。

「た、隊長！東京新宿に小笠原怜次が出現しました！！」
「なんだと！？」
エデルは驚く。
「今のところその場で立っているだけで、何も行動してはいませんが・・・・・・」
「待っているのだ！」
「は、はい？」
隊員は戸惑っている。
「怜次は我が来るのを待っている！」
「ま、まさか！隊長はあんなのと戦うつもりなのですか？おやめください！いくら隊長とて、奴は不死身です！勝ち目なんてありません！無理です！」
「無理？そんなものなどこの世には存在しない！！我は怜次を倒す！それは決して無理などでは無い！」
「し、しかし・・・・・・」
今のエデルに何を言っても無駄だ。エデルはただ、湧き上がる闘志をおさえきれずにいた。
「戦闘機を準備しろ！なんだっていい。とにかくスピードが速い奴だ！」
「分かりました！」
「お前たちは基地を守れ。我が帰るまでだ！」
「・・・・・・必ず・・・・・・生きて帰ってきてください。」
「うむ・・・・・・。あと、リナを宜しく頼む。あいつの怪我はもう治っている。そろそろ復帰させてやれ。あいつは非力だがしっかりとゴールド隊の活躍に貢献してくれるはずだ。」
「はい！」
エデルは戦闘機のある格納庫に向かって歩き始めた。悲しそうな表情をするゴールド隊の隊員たちに背を向けながら。

燃える街の中心部

ゴールド隊の基地の病室にジェインというベテランの戦闘員が入室する。病室にはリナ・カイベルスが1人で窓の外を見ながらぼんやりとした表情をしていた。

「リナ。起きてるか？」
「ええ、どうしたのジェイン？」
「・・・・お前に知らせなきゃならねぇことがある。」
「何？」
「たった今、隊長が1人で新宿に向かった。小笠原怜次と戦うためにな。」
「え！？」
リナは驚きを隠せない。
「俺だって一応止めたんだ。だがあの人は一度決めたことを変えたりすることなんて絶対しない。」
「で、でも・・・」
「分かってる。俺たちだってこのまま何もしないでウジウジと基地にこもっているわけにはいかねぇ。」
「出撃するの？」
「ああ・・・・・・お前も準備しろ。」
「はい。」

リナはベッドから素早く下りて、準備を開始した。

その頃、陽太と誠は、炎に包まれた街の中をひたすら歩き、豪牙大

の行方を追っていた。
「陽太、一度帰ろう。大は見つからん。」
「いや、まだだ。まだあきらめちゃだめだ。」
「そんなに意地になるな。ゴールド隊や小笠原組に遭遇するのだけは避けたいんだ。さっさと帰るぞ！」
「・・・・・・・・」
誠も陽太もこの時はもう諦めかけていた。するとそんな2人の前に、1人の男が現れた。

「誰だ！」
その男は白衣を着ていた。まるで医者か研究員のようにもみえたが・・・・・・
「誰だとはなんだ、私だよ私。」
「ん？・・・・・あ、お前・・・」
良く見てみれば、その男は元神奈川県警署長の南浦大輔だった。
「南浦さん、いったいここで何をしているんです？」
と誠が質問する。
「調査だよ調査。戦況を確かめるためにな。」
「戦況を確かめる？俺はそんなこと命令してないぞ？」
「いやいや、私が独自にやっていることなんだ。いろいろと研究しているのでな。」
すると陽太は大輔の胸ぐらをつかみながら、脅すように話し始めた。
「おいテメェ、いったい何の研究をしてんだ？」
「はい？だから戦況を確かめる研究をだな・・・・・」
「本当のことを言え！戦況を確かめるだけの研究なんて何も実るはずねぇだろ！」
「実ったさ。」
「は？」
陽太は驚く。
「先ほど、そこの路地に豪牙大の死体が転がっていたぞ？」

「な、なんだと!!」
誠も陽太も衝撃を受けた。
「死体のあるところまで案内してくれねぇか?」
「ああ、いいとも。ついてきなさい。」
大輔はゆっくりと歩き始め、誠と陽太はそれについていった。

ついていった先はビルとビルの間に挟まれた薄暗い路地だった。そこには大量の血で全身が赤く染まっていた豪牙大の死体が転がっていた。
「・・・・・・・・・・」
唖然とする陽太と誠。
「この死体、調査する必要がありそうだろ?」
「・・・・・・・・・・・・ああ。」
誠も陽太もただただ驚き戸惑うことしかできないでいる。
「銃でもない何かに頭を砕かれている。こんな殺し方を出来るのは大体限られているだろう。」
「小笠原怜次か・・・・・・・・・」
「おそらくそうだろう。」
自分たちの獲物を横取りされた陽太たちは、底知れぬ怒りを感じつつあった。
「小笠原怜次は今、新宿にいるらしいぞ?」
「・・・・・・・・・・・・・」
「私の予想ではジュラバヌア・エデルも現れるだろうな。」
「・・・・・・・・・・・・」
「さぁて、どうする?中川陽太。土井誠!」
「・・・・・・・・・・」
ひたすらに知っている情報を陽太達に話す大輔。
大が死んだと分かった以上、今の陽太と誠にやるべきことは何一つとしてない。このまま速やかにKの領土に戻るのが一番いいだろう。
しかし・・・・・・・・・

「いくぞ陽太。」
「ああ」
陽太と誠は歩き始めた。
戦場に向かって!!

5月17日午前4時30分。まだ朝日は昇っていないのに、東京は煌々と明るい。
たくさんの死体が転がり、巨大な炎が街を包み、地獄のような光景が広がっていた。
そしてその光景の中心にはたくさんの組員に囲まれた怜次の姿があった。
「・・・・・・・・・・」

火がバチバチと燃える音。
がれきが崩れる音。
風が炎を仰ぐ音。

黙ったまま全く動かない彼らの周りからさまざまな音が聞こえてくる。するとこれらの音を覆い尽くすような轟音が空に響き始めた。

「組長、上空から戦闘機が落ちてきます。」
と桐谷が怜次の耳元で言う。戦闘機はもうすぐそこまで来ていた。
しかし怜次は全く焦る様子もなく、冷静に桐谷に向かって命令を下した。
「・・・・・・・・ぶいほあへ（ぶち壊せ）。」

「はい。・・・・・・・・・ぐぉぉぉぉぉぉ！！」
桐谷は変化（へんげ）してから上を向き、上空から真っ逆さまに落下してくる戦闘機に向かって飛んだ。

そして、桐谷は両手から鋭い爪を出し、強烈な斬撃をその戦闘機に食らわせた。

戦闘機は一瞬のタイムラグの後、巨大な炎をとともに爆破してバラバラになった。

怜次は頭上で爆破したその戦闘機をニヤニヤと見つめながら、大きな声で誰かを呼んだ。
「・・・・・・・・おい！いうんあお（いるんだろ）？」
その戦闘機に誰が乗っていたかなんて、大体想像がつくだろう。

「フフフフフフフ・・・・・・」
コントラバスのように低い笑い声を響かせながら、２メートル以上もある巨人が、炎の中から現れる。
そう、彼こそは・・・・・・
「ジュラバヌア・エデル！！」

エデルの全身から出るオーラが空間の秩序を乱しているので、辺りが少し歪んで見える。
「エデル、１人で来るとはいい度胸だな。」
と桐谷がエデルの背後から言う。
「貴様らこそよく我と戦おうと思ったものだな。」
「・・・・・・・・」
「貴様らなど、我の銃の的（まと）でしかないというのに」
「なんだと！？」
カッとなった桐谷はエデルの背後から斬撃を繰り出した。するとエ

デルは素早く反転し、桐谷の右目に銃弾を食らわせた。
「ぐわぁあああ！！」
血を散らしながら仰向けに倒れる桐谷。

「背後から攻撃しても無駄だ。貴様らは我に触れることなく死ぬのだ。」
「ク・・・・・・クソォ・・・・・・」
桐谷は右目を手で押さえながらもう一度ゆっくり立ち上がり、組員たちに命令を下した。
「全員かかれぇぇぇ！！」
周りにいた小笠原組組員たちが一斉にエデルに向かって飛びかかる。
「フフフフフフ。」
次々と飛ぶ銃弾、ナイフ、血。しかし、それらがエデルの体に命中することは全くなかった。威力の無い銃を立った二つだけ持っているだけの、たった一人の人間に、小笠原組の攻撃は届かない。

驚異的な動体視力。そして反射神経、運動能力。どれをとってもエデルは人並み外れたレベルを持っているのだ。

しかし、小笠原組は簡単に全滅したりするような集団では無い。

エデルの戦闘能力が分かった以上、ただただ突っ込んでいったりすることはしない。
「・・・・・・・・・態勢を立て直す！銃を構えたままエデルを囲め！」
と、桐谷が命令すると組員たちは言われたとおりに行動し、エデルの周りに並ぶ。エデルは無表情のまま周りをキョロキョロと見回す。

（怜次はどこだ？どこに隠れている？）
怜次の姿がどこにもない事に気付いたエデル。しかし彼に怜次を探

している暇など無かった。
「食らえ！」
1人の組員がエデルに向かって野球ボールほどの大きさのカプセルを投げつけた。
エデルは素早くそのカプセルに向かって銃を撃った。するとそのカプセルから粘々とした液体が大量に飛びだし、エデルの体全体を覆った。
「なに！？」
その液体をかわすことが出来なかったエデルの体は、その液体のせいで身動きが取れなくなった。
「粘着液だ。いくらエデルとて、その粘着液からは逃げられまい！」
「・・・・・・・・・」
粘着液はエデルの体にキッチリと絡みついてしまう。
「とどめだ、銃を構えろ・・・・・撃て！」
ミラーのエデルとて、身動きが取れなくなってしまえばまったく戦うことはできない。

エデルはこの上ないピンチに立たされているのだった。エデルはひたすら考えた。この状況を打開するには、打開するには・・・・・・

神罰　1

「死ねぇ！」
粘着液で動けなくなれば、エデルは鏡（ミラー）ではなく、的だ。
機関銃の弾がエデルの体に命中する。防弾剤を塗っているので、すぐに傷になったりはしないが、弾が命中するごとに少しずつ少しずつ防弾剤の効果は薄れていく。

それでもなおエデルはこの状況をどう切り抜けるかを考え続ける。しかし、どうあがいてもこの粘着液が体から離れない限り、この状況を打開することなんてできはしない。もはやエデルに逃げ場など存在しないのだ。
だが、エデルの表情はピンチの表情ではなかった。どこか余裕がありそうな、むしろ『作戦通り』とでも言いたそうな表情をしていた。
するとエデルは手首をねじって、グロック１７Ｌの銃口を右に向けて発砲した。弾が命中した先はワゴン車のエンジン部分だった。

現代の車はガソリンでは動いていない。石油に続く新しいエネルギー『エメネ』がこの世のほとんどの物を動かしているのだ。エメネはほんの少しの火気だけで大爆発を起こしてしまうものだ。

だから、エンジンに銃弾を食らったこの車は、大爆発を起こした。

「うわ！」
「ぬおおお！！」
「・・・・・・・・エ、エメネクラッシュか・・・・・」
エメネが大爆発することを世間ではエメネクラッシュと呼んでいる。

強烈な熱風がその場にいた人々を襲った。同時に、その熱風はエデルの体についている粘着液を溶かしながら吹き飛ばし、エデルの体を解放した。
熱風がおさまる頃には、エデルの体には一滴も粘着液はついていなかった。

「お、おさまったか・・・・・・クソ・・・・・肩をやけどしちまった！」
「おい、エデルの粘着液が無くなっちまってるぞ！」
組員たちは驚き戸惑い、混乱する。すると右目を負傷している桐谷がそれらを一気にまとめ上げる。
「ひるむんじゃねぇ！あわてるな！もう一度態勢を立て直して、しっかりと銃を構えろ。」
と桐谷は言った。それを聞いたエデルは不敵な笑みを見せた。
「フフフフフフ。二度同じ手には乗らぬぞ？」
「分かっている、そんなこと分かっている。」
桐谷は焦っていた。銃弾が当たってしまった右目の痛みのせいでもあるのだが、何より桐谷には２つ目の作戦を持ってはいなかったのだ。

エデルは桐谷に向かってまっすぐに走り始めた。
組員たちがそれを止めるために、行く手を阻む。しかし、エデルを止めることは誰にも出来なかった。

グロック１７Ｌの動きはあまりにも正確で素早いので、エデルに向かって手を差し伸べたとたんに両目が見えなくなり、命を落としてしまう。

「邪魔だぁぁぁぁぁぁぁ！」

怒涛のごとく突進する2mの巨体。
桐谷はそれに向かって渾身（こんしん）の斬撃を繰り出した。

するとエデルは、鋭い爪をむき出しにしながら飛んでくる桐谷の右手に向かって銃弾を二つ飛ばす。銃弾は桐谷の中指の付け根と手首に命中する。
「くっ！・・・・・・・クッソォォォォォ！！」

右手の爪による斬撃を断念した桐谷は、即座に足技に切り替え、大きく飛びあがり、その状態から左足を軸にしながら強烈な右足の回し蹴りを繰り出した。

エデルは素早く立ち止り、その回し蹴りをなんとかかわす。

「フン、蹴り技もできたのか。ん！？」
エデルは桐谷の異変に気付き、2歩ほど後ろに下がった。
「ぐおおおおおおおおおおおおお！キシシシシシシシ！！！」
桐谷の立っている場所のアスファルトがバキバキという音を立てながらヒビを入れていく。

（こ、これは・・・・・・・・。極度の殺気が辺りの空間の秩序を乱している。）
「キィィィィヤァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！」
ものすごい声だった。まるで爆弾のよう。地面が砕け、空間が捻じれる。

「く・・・・・・なんて声だ・・・・・・」
「キュイカカカカカカ！！」

桐谷はものすごいスピードでエデルに向かって飛んだ。銃弾よりも速く、音よりも速く。

エデルはなんとか桐谷に向かって銃弾を飛ばしたが、あっさりとかわされてしまい、強烈な回し蹴りを左の脇腹に食らった。

「グォッ！」

エデルは横に吹っ飛ぶ。しかし、エデルは全く弱る様子も見せずに素早く立ちあがり、狂ったように追ってくる桐谷の方を睨んだ。

桐谷龍次。彼は本物のバケモノのようだ。豹変してしまえばもはや止めることなどできはしない。

エデルはひたすら銃を撃ち続けるが、簡単にかわされてしまう。一瞬にして桐谷とエデルの間合いは２ｍほどになっている。もう終わりか？

桐谷は空中に舞い、右足をエデルの頭に振り下ろした。そのときだった。

突如、空から青白い光線が落ちてきて、桐谷の頭を貫通したのだ。

「ガッ！・・・・・・・・かはっ・・・・・・・・・」

桐谷は白眼になり、真っ逆さまになりながら地面に落下し、息絶えた。

光線を発射したのは、エデルの部下、ゴールド隊の戦闘員だった。近くにあった高いビルの上から光線銃を使ったのだろう。戦闘員たちはパラシュートを使ってそこから降りて、エデルのもとに走ってくる。

「隊長。ご無事ですか。」

とジェインが心配そうな顔をしながら言う。

「ああ、見ての通りだ。」
とエデルは返答したが、わき腹からは血がにじみ出ていた。
「あんまり無事には見えませんけど・・・・・・」
「大丈夫だ!それより、なぜ命令してもいないのに来たんだ?」
「そりゃあ決まってますよ。隊長が放っておけなかったからですよ。」
「・・・・・・・そうか・・・・・・」
エデルはほんの少しだけ微笑んだ。
「ちなみに、さっきの光線銃はリナが撃ったものですよ。」
「そ、そうなのか!?」

するとリナは少し照れた様子で後ろ頭をかきながら微笑む。
「えへへ・・・・・・どうも・・・・・・」
「よくやったぞリナ。」
「あ、ありがとうございます。」
「うむ。だが礼を言うのはまだ早い。」
「え?」
「なぜなら・・・・・・・・・。」

戦闘員たちはエデルの向いている方向へ振り返った。するとそこにはニヤニヤとした表情で立っている小笠原怜次の姿があった。怜次は巨大なガムを噛みながら話し始める。
「クッフッフッフッフッフ。泣かせるねぇ・・・・・・。これが超大型の反政府集団の絆か。だがそんなものがあっても君たちは僕らを倒すことなんてできねぇよ。」
「黙れ。我々は貴様らを倒す。これは我々の目標を達成させるための第一歩だ。」
「クフフハハハハハハハ!」
「・・・・・・・・・・・」
「僕は不死身だ。何をしたって死ぬことはない。」

「・・・・・・・・・・・」
返す言葉も見つからないエデル達だったが、闘志の灯だけは絶やさないようにしていた。
「それでも我々は貴様らを倒さねばならぬ！」
「・・・・・・・・・・・まあいいだろう。受けて立つぞ、ゴールド隊。」
と言った怜次の後ろにまた、３０人ほどの組員たちが歩いてくる。
（まだいたのか。小笠原組もかなり人数をかけているようだな。）
ゴールド隊の戦闘員たちも一斉に構える。

小笠原組とゴールド隊が、ものすごい殺気をまといながら睨みあう。
最強の男小笠原怜次が率いる小笠原組と、最強の男ジュラバヌア・エデル率いるゴールド隊。最強同士が作り出す空間。容赦のない殺気。

誰も邪魔することなどできないはずだった。そうだったはずなのに、その暗黙のルールを容易く破った１人の人間がいた。

「お、おい！あれ見ろよ！」
とジェインが空を指さしながら言うと、一斉に皆指された先にあるものを見た。
「ん？・・・・・・・・・・あ！あいつは・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・！？」
ここにいる誰もが驚いた。空から降りてきたのは紛れもなく、中川陽太だった。

「隊長、ブルーです。中川陽太です！」
「・・・・・・・・・・ああ・・・・・・」

燃える街の中、ものすごいオーラをまといながら現れた陽太。朝日に照らされて輝くその姿はまるで『神』だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

陽太はゆっくりと着地し、先ほどまで睨みあっていたエデルと怜次の間まで歩き、立ち止まった。

「中川陽太・・・・・・・・・・」

『ミラーのエデル』と呼ばれる男がそれを恐れる。

「中川陽太・・・・・・・・・・」

不死身であるバケモノもそれを恐れる。

中川陽太は不敵な笑みを浮かべながら青く巨大な銃を懐から取り出した。

神罰　2

ゴールド隊も小笠原組も、全員陽太を睨んだ。ここにいる誰もが、ここにいる陽太を恐れているからだ。

エデルはゆっくりと銃を構える。

「まさかここで貴様が現れるとはな・・・・・・・・・」

ゴールド隊の戦闘員たちもエデルに続き、銃を構える。

小笠原組も動く。組員たちは一斉に銃を構え、怜次も腕まくりをしながら陽太に向かってゆっくりと歩く。

「クフフフフフフ・・・・・・・・・。」

そして・・・・・・

「かかれぇぇぇ!!」

ゴールド隊と小笠原組はほぼ同時に、陽太に対して一斉攻撃を行った。

小笠原組が３０人ほど、ゴールド隊が５０人ほど。合計８０人。つまり、陽太は８０人もの敵から一斉に攻撃を受けていることになる。

普通の人間ならとっくに死んでいるだろう。だが陽太は普通の人間ではない。中川清という殺人鬼の血が流れている人間だ。

「ん!?」

すると陽太に突撃していった人たちは異変に気付き、一斉に攻撃をやめ、周りをキョロキョロと見回す。

「い、いない?」

攻撃目標である陽太の姿が無い。しかし、どこかへ行ってしまったわけでは無かった。

「上だ！」

陽太は上に大きく飛びあがり、組員や戦闘員たちの視界から消えていたのだ。ただただ空で舞う陽太を見上げながら唖然とする戦闘員と組員たち。陽太はそれらをニヤニヤと笑いながら見下していた。

「へへっ！お前らみてぇなのが何人かかってこようが無駄なんだよ。」

「ま、まずい・・・・・」

陽太は戦闘員や組員たちが集結してしまったところの中心に向かって銃を向け、引き金を引いた。

「ぐわあああああああ！」

「ウワァァァッ！」

真上から放たれた巨大な銃弾は、戦闘員や組員たちの体を貫通し、地面に激突して爆発を起こした。地面のアスファルトは砕け、爆音とともに戦闘員や組員たちの体を粉砕してしまう。

「ひ、ひるむな。まだまだいくぞ！」

爆発で生き残った人たちはまだまだ諦めずに、再び地面に着地した陽太に向かって走った。そんな彼らを見て陽太は、大きく口をあけて笑った。

「クハハハハハハハ！！無駄無駄！何回やったって同じぃ！」

右からはゴールド隊が、左からは小笠原組が突撃してくる。陽太はまず左を向き、小笠原組に向かってハングリーブルーを撃った。

「ぐぁ！」

まるでボーリングのピンのように吹っ飛んでいく組員たち。

陽太はすぐに右を向き、ゴールド隊にも銃弾を放った。

しかし、その銃弾はゴールド隊の戦闘員には命中しなかった。なぜなら、戦闘員たちの背後からエデルがハングリーブルーの銃弾に向かってグロック１７Ｌの銃弾を撃ったからだ。

「ミラーか・・・・・・」

陽太の動きが一瞬だけ止まる。その隙をついて怜次が陽太の背後から間合いを詰める。すると、上空から大量の短刀が降り注いだ。

「何！？」

怜次の全身に短刀が刺さる。短刀を投げたのは誠だった。

「どうだ！」

「・・・・・・・・・」

誠は黒い和服姿でビルの上から怜次達を見下ろしていた。

怜次は平然とした表情で短刀を抜き取り、傷を回復させながらまた陽太との間合いを広げる。

「陽太、ハングリーブルーの本当の力を見せてやれ。」

と誠が言う。

「ハングリーブルーの、本当の力・・・・・・・・・」

ハングリーブルーにはまだまだたくさんの力がある。陽太はそんな力のほんの一部を解放した。

「なんだ！？」

陽太が銃弾を入れ替えると、ハングリーブルーの銃口が大きくなり、銃の表面が虹色に輝き始めた。陽太は小笠原組がいる方向へその銃

を向けて、引き金を引いた。すると・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・・」

強烈な光と鼓膜を破りかねない爆音とともに、怜次を含む小笠原組の組員全員が塵になって消えていった。悲鳴をあげる暇すらなかった。光が消えた頃には組員たちの体は塵すら残っていない状態だった。

「・・・・・・・・・・」

ハングリーブルーから放たれたものはいったい何なのだ？『神の雷（いかずち）』とも言えるその光を見ていた者たちはものすごい恐怖を覚えた。

「な、んだこれは？」

「エメネ砲か？」

「エメネ砲？」

エメネは現代におけるエネルギー資源の中心となっているものだ。原子力よりも強力な上に放射能も出さないエネルギー。エメネレウソンという鉱石から生み出され、人工的に増殖することも可能だ。これがあったからこそ日本の科学技術は進歩したといってもよいだろう。

その技術の力を誠は屋上から眺める。

「世界で最もエネルギーを多く含んでいるエメネ。残念なことにそういったものは大概兵器にも使われるんだ。それで完成したのがハングリーブルーだ。」

と誠が背後から現れた大輔に向かって話す。

「ハングリーブルーはエメネレウソンから出来ているからねぇ。もしかして世界で初めてエメネレウソンを発見した人間って中川清なのか？」

「いや、ハンブルを作った人間は不明なんだ。それに『ハングリーブルー』（ネクラッシャー）という名前も後からついたものなんだ。本当の名前は『最（エメ）

終兵器』だ。」
「・・・・・・・・・じゃあ元々ハンブルはエメネ砲を撃つための銃ということで作られたのか。」
「そういうことだろうな。」

エメネ砲を使うことが出来る銃はおそらく世界中どこを探してもハングリーブルーだけだ。そして、ハングリーブルーを扱うことが許されるのは世界中どこを探しても中川陽太だけだ。

小笠原組が全員消えたことを確認した陽太はゴールド隊の方へ振り返り、再び銃弾を入れ替える。

「や、やばいぞ!ど、どうします隊長?」
ゴールド隊の戦闘員たちは全員慌てふためく。
「・・・・・・・・」
エデルも戸惑っていた。
「隊長!」
「逃げるぞ・・・・・・・」
エデルは迷いに迷った末、逃亡と言う選択をした。

当然のことだ。目の前でたくさんの人がゴミのように死んでいった有様を見て、戦おうと思う者はいない。しかし非常に屈辱的なことでもある。強い敵を前にして逃げるというのは、臆病者のすることだ。だがそれでもエデルは逃亡を命じた。

「退却!退却ぅぅぅ!!」
ゴールド隊の戦闘員たちは大急ぎで退陣していく。

しかし陽太は銃を構えたまま引き金を中々引かない。どうしたのだろうか?

結局ゴールド隊は全員逃げてしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

陽太の背後に誠が歩いてくる。

「陽太、なぜとどめを刺さなかった？」

「・・・・・エメネ砲は3分に一度しか使えないんだ。」

「だったら通常弾で時間を稼げばよかったじゃないか！」

「いいんだ。俺はあいつらに脅威を感じさせたかっただけなんだ。」

「脅威？」

「ああ。小笠原組とゴールド隊は俺と戦いたいから争ってんだろ？俺はそんな奴らに少し恐怖ってものを与えたかっただけさ。」

誠は陽太の考えを理解することはできなかった。陽太はいったい何を求めているのだろうか。

「・・・・・・・・お前が戦いに求めるものはなんだ？」

と誠は陽太に質問する。すると陽太は何の迷いも無くこう答えた。

「楽しさ。」

誠は驚き戸惑った。

「ああ！？」

「エデルと怜次を同時に相手にするなんて全然面白くないだろ？どうせなら1対1で勝負して決着をつけたいだろ。そっちの方が俺は絶対に面白いと思うんだ。」

戦いに、殺し合いに楽しさを覚えてしまうのはバケモノだ。人間は普通そんなことを思ったりはしない。これも、陽太の全身を流れる中川清の血のせいなのだろうか。

「小笠原怜次はまだ生きているだろうな。」
「分かっている。怜次の塵はすげぇ遠くに飛んだはずだ。どこかで回復しているんだろうが、今すぐここで戦おうとはするまい。・・・・・・・・帰ろう。」
「・・・・・・・・そうだな。帰るか」
陽太と誠は辺りを見回し、誰もいないことを確認してからKの領土に向かって歩き始めた。
すると誠の右胸についているトランシーバーから佑太の声が聞こえてきた。

「ど、土井さん、早く帰ってきてくれ！敵がすぐそこまで来ている！！」
「・・・・・・・・なんだと！？そちらには誰がいるんだ？」
「子供たちが１５人と俺と友恵だけです。今は身の回りの物で出入り口を封鎖していますが、突破されそうです！」
「・・・・・・・・そ、そうか、今すぐ戻る。なんとか持ちこたえてくれ！」
「・・・・・・・・はい。」

佑太たちがいるのは非常用の地下シェルターだ。

もし、シェルターの扉を突破されてしまったら・・・・・・・・・・

一難去ってまた一難。陽太たちはまた走り始めるのだった。

弱さと甘さ

この戦争はまだ始まったばかりだ。故に、まだ解決されていない謎も多い。元神奈川県警署長の南浦大輔はその謎を解き明かすべく、さまざまな調査を行っていた。そんな中、大輔は一つ気になる点を見つけた。それはハングリーブルーについてだ。

ハングリーブルーはエメネレウソンという特殊な鉱石でできているエメネ砲を撃つために作られた強力な兵器である。そしてエメネ砲に使われる『エメネ』は日本の技術を急激に変化させたエネルギー資源だ。しかしハングリーブルーは日本の技術が変化する前から存在するものなので、エメネはその時すでに存在したということになる。

大輔はそこにひっかかっていた。なぜ日本の科学技術の進化よりもハングリーブルーという兵器の進化の方が先なのだろうか。普通は科学技術が進化してからそれを兵器として使ったりする人が出てきたりするものだが、ハングリーブルーはそれの全く逆なのだ。

おそらくそれには何か重要な出来事が絡んでいるのではないかと大輔は考えていた。

日本はこの戦争のせいで地獄に変わってしまった。どこを見ても炎をまとったがれきが山のように積まれていて、黒い煤と煙をあげながら死体の匂いを町全体に広げている。

東京はもちろん、福岡、名古屋、大阪、仙台、札幌等も多くの被害

者を出しており、まだまだ戦争は終わりそうにない。
新宿の街の中を大輔はうろうろとする。
「・・・・・・・・暑いなぁ・・・・・・・・。やっぱり水持ってこればよかったなぁ。」
と大輔は独り言を言いながら空を見上げる。
今は朝の7時。黒い煙の隙間からわずかに青い空が見える。
「・・・・・・・・やだねぇ・・・戦争は。」
大輔は空に向かってカメラを向けて、二回ほどシャッターを押した。
すると大輔の背後に大量の塵が集結し始めた。
「ん!?」
大輔はあわてて後ろを振り返る。
大量の塵はゆっくりと人間の形を作ってゆき、やがてそれは小笠原怜次となった。
「ヒュッフッフッフフフフフフ!!」
「小笠原・・・・・・怜次・・・・・・・」
大輔は怖がる様子もなく、鋭い目つきで怜次を睨んだ。
「ようはいわいふもおおおははえう（陽太にはいつも驚かされる）。いふいおもひおい（実に面白い）。」
「・・・・・・・・・・・正直私も驚いているところだ。謎も増える一方だしな。」
「なおほひあんへひへはおひいはい（謎解きなんてして楽しいかい）？」
「ああ、もちろんだ。それが私の趣味だからな。」

怜次の聞き取りづらい言語を、大輔は容易く聞きとってみせた。

「・・・・・・・・・・・・ようはあおほあ（陽太はどこだ）？」

「Kに帰ったよ。仲間がピンチになっているらしい。」

「ヒュッフッフッフ、おまへはかえあはいほは（お前は帰らないのか）？」

「私はもう少し調査をするつもりだよ。」

「おまへ、いふんほいおひおひんはいわひあふへいいほは（お前、自分の命の心配はしなくていいのか）？」

「・・・・・・・・・・なぜだ？」

「ぼふはいますういへもおもへをほおへうほ（僕は今すぐにでもお前を殺せるぞ）？」

と怜次は少し冗談っぽく言う。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

大輔は少し身構えた。

「ヒュハハハハハハ！！ほんはいひんはいふうあ（そんなに心配するな）。いまふうひはほおはんよ（今すぐには殺さんよ）。おまへはほおへんほうあおわっはあゆっふいほほおひへやう（お前はこの戦争が終わってからゆっくりと殺してやる。」

「・・・・・・・・・・それは無理だな。」

「あ！？」

怜次は驚いた表情を見せる。

「君は私を殺す前に陽太に殺されるだろうさ。」

「・・・・・・・・・・」

「私はいろいろと君のことを調べた。そして君の意外な弱点も見つけた。」

「ぼふおやふへん（僕の弱点）？」

「ああ。陽太にあって君に欠けるもの。それは君が陽太とサシで戦えば気付くだろうな。」

「ぼふはないをやっへもひあう（僕は何をやっても死なぬ）そんあ

ぼふいやふへんあお（そんな僕に弱点など）」
「・・・・・・・・まあいいさ。全力で中川陽太に立ち向っていけば分かることさ。私は最後までそれを見届けさせてもらうよ。」
「・・・・・・・・ヒュッフッフッフッフッフ。・・・・・・・・・・なんあはようふわああんは（なんだかよく分からんが）、おまへおおもいほうひひわはへう（お前の思い通りにはさせぬ）。ふびをああっへまっへいうほいい（首を洗って待っているといい）。ヒュッフッフッフッフッフッフハハハハハハハハ！」

怜次は黒い煙の中へ飛び込んでゆき、姿を消した。

「・・・・・・・・・・。」

大輔はまた歩き始め、調査を続け始めた。

5月17日午前8時10分。

陽太たちは南神奈川鉄道を使ってKに入国した。

Kは相変わらず焼け野原になっているのだが、いつもよりも人影が少なくなってしまっていた。

「早くシェルターに行こう！もしかしたら突入されちまったかもしれねぇ。」
「ああ・・・・・・」
陽太も誠もかなり心配していた。もしもシェルターに敵が侵入してしまっていたとしたら、佑太も友恵も子供たちも死んでしまうという最悪の事態もありえる。

陽太も誠も必死になって走った。

１０分後・・・・・・・・・

陽太と誠はシェルターがある建物の前まで来た。物音が全くなく、静かだ。とても嫌な予感がする。

「頼む・・・・・・・・無事でいてくれ・・・・・・・」

みんなの無事を祈りながら、シェルターの中に入っていった。

「あ・・・・・・・・みんな・・・・・・・。」

シェルターの中は大量の死体と血でいっぱいだった。

そして、シェルターの中央には跪いた状態で銃を構えている佑太の姿があった。

「佑太！」

陽太と誠は必死になって佑太に駆け寄る。佑太は全身に銃弾を食らっていたが、なんとか目を開けていることが出来ていた。

「・・・・・・・・・へへ・・・・・・敵部隊を倒すことはできたが、子供らを守ることはできんかったわ・・・・・・・ほんまに申し訳ない。・・・・・・・・・どう詫びればいいんかも分からんわ・・・」

辺りに転がっている大量の死体の半分は、子供たちの死体だった。

「佑太が謝る必要なんて無い。・・・・・・・・にしても酷すぎるな・・・・・・・・・なんてことを・・・・・・・・」

「装備とか武器とかを見る限り、あれはゴールド隊やな。」

「ゴールド隊・・・・・・・・」

陽太は、先ほど殺せたはずのゴールド隊を逃がしてしまったときのことを思い出してしまう。

「あ、あと友恵ちゃんがこのシェルターの奥の台所で倒れているはずや。早く救出してやってくれ。」

「なんだと!?」

誠はあわてて台所へ向かった。

台所には右耳から血を流して倒れている友恵の姿があった。

「お父さん・・・・・・・・・・」

「友恵・・・・・・・・・」

友恵はどうやら何かに強く殴られたような様子だった。誠は素早く友恵に駆け寄り、ハンカチで耳の傷口をふさいだ。

「大丈夫なのか?」

「うん、なんとかね。佑太君が必死になって戦ってくれたの。私は・・・・・・・・・・」

「お前も戦ったんだろ?」

「いいえ・・・・・・・・・私は殴られてすぐに気を失ってしまったわ。・・・・・・・・・だからほとんど戦っていないの。」

友恵は自分を責めていた。全く戦うことなんてできなかった自分を。子供たちを守れなかった自分を。

「友恵、ついて来い。一度今ここにいるやつら全員集合だ。」

と誠は言い残し、台所を後にした。

友恵もゆっくりと立ち上がり、台所を後にした。

シェルターの真ん中に、陽太、誠、友恵、佑太が集まる。

「俺は春江田大を憎む思いが強すぎて周りが見えなくなり陽太とと

もに突っ走ってしまった。本当に申し訳ない。」
誠は陽太たちに向かって深々と頭を下げた。
「謝らんといてください。ワイも覚悟が足らんかったんや。ワイがもっと強けりゃ子供たちを救えたかもしれん。ワイも謝るわ！」
佑太も頭を下げる。
「私がもっと強ければ佑太君に怪我を負わせずに済んだかもしれないし、子供たちを死なせずに済んだかもしれない。私からも謝る。ごめんなさい。」
友恵も頭を下げて謝った。
「・・・・・・・・子供たちをこんな姿にしたゴールド隊に、俺は情けをかけちまった。殺せるところで殺さなかった。考えが甘かった、本当にすまない。」
陽太も頭を下げる。

ここにいる４人全員が頭を下げ、ここにいる全員に謝罪した。

死んでしまった身寄りのないかわいそうな子どもたちの命を奪ったゴールド隊。残酷すぎる。しかしそれが戦争だ。

ここにいる４人がやってしまった過ちの一つ一つが戦争に対する考えの『甘さ』なのだ。戦争で行われる人殺しは犯罪ではない。子供だろうが女だろうが老人だろうが関係なく殺してしまうのが戦争だ。

「みんな頭をあげよう。もう誰も謝るな。そしてこれからは謝らなくてもいいような行動をとれ。今からＫで生き残っているやつらをここに集めて、軍隊を結成する。次の攻撃でケリをつけてやる。」
と誠ははっきりとした口調で言った。

陽太の過去　1

5月17日15時ごろ。

「陽太、軍隊結成の時間まであと4時間ほどある。だから今のうちに仮眠をとっていてもいいぞ。」

と誠が言う。

「ああ、分かった。」

陽太は小さな声で返事をした。

陽太はシェルターに入り、布団にもぐる。

「・・・・・・・・・・・・」

寝ていない日々が長く続き、疲労は溜まっているはずなのだが、陽太はなかなか眠りにつくことが出来なかった。この戦争に対する胸騒ぎの方が睡魔に勝ってしまっているのだろうか、単に不眠症なだけなのか。

「ああもう！眠れねぇ！・・・・・・・・・・なんかいい暇つぶしないかなぁ。」

陽太はシェルターの中を見渡す。すると、一つの小さな本棚に目がとまった。

「・・・・・・・・・本でも読むか。」

陽太は本棚にある本を拝見する。

「ん？これは？」

本棚の一番下にある引き出しのなかに、『南神奈川小学校』と書かれた卒業アルバムがあった。

「・・・・・・・・これでも見るか。」
陽太はその卒業アルバムを手に取り、ホコリを手で払いながら1ページ目を開いた。

「・・・・・・・・うわぁ懐かしいなぁ・・・・・・・・。みんな幼いなぁ。」
あの先生、あの生徒、あの校舎。いろいろなものを思い出させてくれる卒業アルバム。

（あ、これは・・・・・・・・・・）
陽太が目にとまった写真は6年2組の集合写真。ひきつった笑顔を浮かべている小学生だった頃の陽太の隣に、ひときわ可愛らしい女の子がいる。

（早川（はやかわ）・・・・・・・・美菜（みな））
陽太は美菜のことが好きだった。
好きで好きで、『俺は天使のような君が大好きだ！』なんて歯の浮くようなセリフをはいてしまったりもした。
（結局大爆笑されて、恋人にはなれなかったんだよな。友達にはなれたんだけどな。・・・・・・・・・・クソォ、なんであんなダッセーこと言ったんだろ。）
告白のセリフはだいぶ後悔しているのだが、告白したこと自体はそれほど後悔はしていない陽太。なぜなら陽太は本気で美菜のことが好きだったのだから。

しかし、好きだったかたこそ早川美奈は陽太の人生を大きく左右してしまう人物となってしまうのだった。それは小学校卒業後、中学校での事件がきっかけだった。

（あの事件さえなければ俺は少年院なんて行かずにすんだかもしれ

ねぇな。）

『事件』とは一体何なのだろうか。

“３年前

「陽太！私と同じクラスだよ！」

えくぼが可愛らしい早川美菜が陽太に微笑みながら話しかける。

「え！？ほんとに！？」

嬉しさを必死に隠すその純粋な少年中川陽太。

「でもあとは知らない人ばっかりだね。」

「うん。だって南小学校だった人よりも西小学校だった人の方がすごい多いもんね。」

南西神奈川中学校はその名の通り、南神奈川小、西神奈川小だった人たちがやってくる中学校だ。

比較的おとなしい人が多い南神奈川小学校に対して、肉食系で派手な人が多いのが西神奈川小学校だ。

だからなんとなく、嫌な予感はしていた。

２００９年４月８日。

ちょうど入学式から一週間がたったころ。

陽太は殺人鬼の息子であることが原因で、友達が全くできない上に

酷いイジメを受けたりもしていた。
「おい、殺人鬼！」
「・・・・・・」
陽太のあだ名はいつの間にか『殺人鬼』になってしまっているのだが、そう呼ばれた時は絶対に振り向かないと陽太は決めていた。
「無視すんなよ殺人鬼！」
「・・・・・・・・・」
南神奈川小学校にいた頃は、周りにいた人たちがおとなしかったせいかそれほどひどいイジメを受けたりはしなかったのだが、西神奈川小学校から来た生徒は攻撃的なので、イジメの内容はどんどんひどくなっていった。
「おい殺人鬼ってば！」
「・・・・・・・・・・」
「シカトしてんじゃねぇよ！」
1人の男子生徒が陽太に向かって拳を飛ばした。
陽太はその拳を平然とした表情で素早くかわし、男子生徒を睨みつける。
「・・・・・・・・・・」
その男子生徒は陽太の眼力に圧倒されて少しだけ怯んでしまう。しかし、そうなってしまった自分を必死に隠そうと、大きな声で陽太に悪口を言いながら後ずさりをする。
「ちぇっ！お前なんか死ねばいいんだよ！死ね！死ね！バーカバーカ！！」
男子生徒はどこかへ走って行ってしまった。
（あいつビビってやがったな。）
陽太はイジメられているというよりも、恐れられているという方が正しいのかもしれない。

一方、他の女子と比べてひときわ可愛らしい美菜は、元西神奈川小の肉食系男子達の標的になっていた。まあ当然と言えば当然なのだ

が、陽太にとってはとても嫌な状況だった。今まで仲良く関わってきた美菜が、他の男子達と楽しそうに会話するその姿を見た陽太はこの時初めて嫉妬というものを覚えた。

「なぁ、早川は好きな人いる？」
「ええ！？私？・・・・・・・うーん。いるよ。」
「誰誰誰！！？？」
「教えな～い。」
「え～」
男子たちを手玉に取っているかのような美菜のその仕草は、クラス中の男子を虜にしてしまうほどのものだった。

（ちぇっ！何好きな人とか聞いちゃってんの？まさか好きな人がいなかったら告るつもりだったのかよ。まさか美菜ちゃん付き合ったりしないよな？）
陽太は心の中で嫉妬を抱え込む。

しかし、この時はまだ何の変哲もない中学校の風景があった。まあかわいい女の子がいれば肉食系男子が動きだし、猛アタックしに行く。そんなことは中学校ではよくあることだ。大体付き合っても長くは続かないものだったりもする。

この時はまだ・・・・・・・・・

２００８年５月７日。

ゴールデンウィークも終わり、中学校の生活にようやく慣れてきた頃。

ある事件が起こってしまう。

「なあ早川、城嶋(じょうしま)ってヤツ知っているよな？」
と茶髪の男子生徒が真剣な表情で美菜に言う。
「え？城嶋君？・・・・・・・し、知ってるけど。」
美菜は少し戸惑ったような顔をしながらそう答えた。
「城嶋がお前に話したいことあるらしいからさ、放課後に体育館に来てよ。」
「・・・・・・わ、私今日塾があるからさ、早りたいからまた今度ね。」
美菜は少し嫌そうな顔をしていた。
それもそのはず、城嶋は中学1年にして3年生のヤンキーどもを殴り倒してしまうほどの恐ろしいヤンキーであることで有名だ。そんな奴に呼び出されるだなんて最悪だ。いったい何をされるか分かったもんじゃない。

「そんなこと言うなよ。2分か3分で終わる用事らしいからさ。」
美菜はその城嶋という男を恐れていた。絶対に関わりたくはなかった。しかし、なぜか美菜はこの男子生徒の誘いを断りきることが出来なかったのだ。
「・・・・・・・・・じゃあ、放課後に体育館に行けばいいのね？」
「おお！サンキュー！」
男子生徒は張りきった様子で教室から出ていった。
（はぁ、めんどくさいなぁ）
美菜は大きくため息をついた。

5月7日15時40分。放課後の体育館に10人ほどの男子生徒が城嶋康平(じょうしまこうへい)という男を中心にして集まっていた。

「城嶋さん、もう来ると思いますよ。」
「フフフフフ。そうか。」
城嶋は不気味な笑みを浮かべる。

すると体育館の大きな扉がゆっくりと開いた。

「こ、こんにちは・・・・・・」
恐る恐る扉から入ってきたのは紛れもなく美菜だった。

「どうも、俺は城嶋康平っていうもんだ。よろしく。」
「ど、どうも・・・・・・・・は、早川美菜です。」
「今日は美菜ちゃんに言いたいことがあってここに来てもらったんだ。」
挨拶はなぜか丁寧だった。
しかし直後、美菜をたくさんの男子生徒が囲んだ。
「な、なんなんですか!?」
美菜は驚き戸惑っていた。
「なあ美菜ちゃん。俺と付き合ってくれねぇか?」
用件はやはり告白だった。美菜もそれを予想していた。
「・・・・・・・・・・」
美菜は下を向きながら悩む。

しかしこれは悩むフリだった。最初からこんな恐ろしい男と付き合う気など美菜には全くないのだから。
「どうだ?」
周りにいる男子生徒が睨んでくる中、美菜は勇気を振り絞って城嶋の頼みを断った。
「・・・・・・・ごめんなさい!私、他に好きな人がいるんです!本当にごめんなさい!」
「・・・・・・・・・・・」

普通の男子生徒ならこれで諦めてしまい、落ち込んでしまったりもするものなのだが、美菜は大切なことを忘れていた。城嶋は普通の男子生徒では無い。

「おいテメェ、今なんつった？」

1人の男子生徒が美菜の髪の毛をつかんだ。

「痛っ！」

「おい、もう一度言ってみろよ！」

周りにいた男子生徒たちが鬼のような顔をしながら美菜の手足を押さえつけた。

「な、なにするのよ！」

美菜は必死に抵抗するが、全く身動きが取れない。すると城嶋がもう一度、美菜に告白をした。

「俺は君のことが好きなんだ。付き合ってくれないか？」

「わ、私はあんたのことなんか好きじゃないのよ！」

すると城嶋は美菜の腹に強烈なパンチを入れた。

「フン！」

「ウグゥッ！」

必死に男子生徒たちから逃げようとしていた美菜の動きが止まる。

「なぁ、あともう一回だけチャンスをあげるからさ、ちゃんと答えてよ。ちゃんと答えないと、美菜ちゃんボコボコになっちゃうよ？」

「・・・・・・・・・・うう。」

美菜の目からは大粒の涙が流れ出てきていた。それでも城嶋はもう一度同じ頼みごとを繰り返した。

「ラストチャンスだよ？・・・・・俺と付き合ってくれよ！」

手足をおさえられてしまっているこの状況で、もしも『嫌だ』なんて言ってしまったら、間違えなくまたあの強烈なパンチを食らうこ

とになってしまう。美菜の心の中は恐怖でいっぱいになってしまっていた。だから・・・・・・・・・

「・・・はい。」

「もう一度！」

「・・・・・・・・・・・・はい！」

美菜は恐怖に耐えきることが出来ずに、城嶋の告白を受け入れてしまったのだ。

「よぉし。これで俺と君は今から恋人どうしだ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・はい。」

美菜はこの時、城嶋の恋人になった。なってしまった！

（誰か・・・・・・・・助けて・・・・・・・・・・）

美菜の心の叫びは誰にも届かないのだろうか・・・・・・・・・・

陽太の過去　2

２００９年５月８日。朝８時５０分。

たくさんの中学生が校門を通過して教室に向かって歩いている。

陽太も眠そうな顔をしながら１人でゆっくりと歩いていた。すると陽太は、前方に美菜がいることに気付いた。

「お・・・・・・・」

陽太は一度美菜を呼ぼうとしたが、よく見ると美菜は１８０センチほどの身長を持つ坊主の男と手をつなぎながら歩いていたので、言葉を失った。

誰がどう見てもその坊主の男と美菜はカップル。

「あれは・・・・・美菜ちゃんの彼氏なのか？・・・・・・・・彼氏が出来たのか・・・・・・・・・。」

と陽太は独り言を言いながら少しため息をついた。

陽太は何だか悔しい気持ちで胸がいっぱいになった。悲しそうな表情で教室に入っていく。

今日の教室はいつもより騒がしかった。

「なんだ？」

いつもうるさい女子が、いつも以上にうるさい。

一々なんで騒いでいるのかなんて聞きに行ったりはしない陽太だったが、全員が同じ話題を口にしているので、すぐに騒ぎの理由を知ることが出来た。

「早川さんの彼氏って5組の城嶋らしいぜ?今朝手ぇつないで一緒に登校してんの見たか?」

それを聞いた陽太は顔を机に向かって伏せて、寝たふりをしながら悲しんだ。

(はぁ・・・・・・。ついに美菜ちゃんに彼氏が出来ちゃったか・・・・・・)

その直後、陽太は真後ろにいた女子グループで気になる会話を耳にした。

「でもさぁ、美菜ってああいうヤンキーとは絶対に付き合ったりしないとか言ってなかったっけ?」

「うーん・・・・・・・アタシの予想だとねぇ、城嶋は美菜ちゃんを脅したんだと思うよ?」

(脅した!?)

良くないことだとは思いつつも、陽太は自然と耳をそちらに傾けてしまう。

「・・・・脅して無理やり彼女にしちゃったってこと?」

「絶対そうだと思うよ!だってさ、今朝一緒に登校してる時だってさ、美菜はすごい暗い顔してたもん!」

「うーん。気のせいじゃない?美菜は朝弱いし。」

美菜のことをよく知る友人たちの会話を陽太は耳を澄ませながら聞いていた。

話しを聞く限りでは、美菜は城嶋に脅された可能性があるということだ。

(そういえば美菜ちゃんどこ行ったんだろ?・・・・・・・城嶋のところかな?)

陽太は教室を見渡してみたが、美菜の姿がどこにもないので、城嶋のいる5組の教室に行くことにした。

そろそろ朝のホームルームが始まるので、陽太は急いで5組の教室の扉を開けて、美菜を呼んだ。

「美菜ちゃーん!どこ?どこ?」

5組の教室にも美菜の姿はない。すると、扉のすぐ近くにいた男子生徒が陽太に話し始めた。

「早川美菜さんならさっき城島さんと教室を出ていきましたよ。」

「え!?どこに行ったか分かる?」

「・・・・・・・・・分かんないです。」

「そうか、分かった。」

陽太は美菜を探すのをあきらめて、自分のクラスの教室に戻っていった。

時計の針が9時を指した頃、学校にチャイムが流れ、一斉に先生たちが教室に入り、点呼を取る。しかしそれでも美菜は教室には現れなかった。

「早川さん・・・・・・早川美菜さ~ん?・・・・・・・・・・欠席かしら?」

と言いながら担任教師が教室をゆっくりと見渡していると、教室の後ろのドアがすごい勢いで開いた。

「遅れてすみません!」

ドアの向こうから来たのは美菜だった。

「あら、早川さんが遅刻だなんて珍しいわね。」

「す、すみません。いろいろと用事がありまして・・・・・・・・。」

「まあ明日からは気をつけて。座りなさい。」

「はい・・・・・・・」

そう、美菜が遅刻することはとても珍しいことなのだ。

ホームルームが終わった後、美菜はクラスメイト達に囲まれて、なんで遅刻したのかを質問された。

「美菜ちゃん?どうして遅刻したの?」

と1人の男子生徒が話しかけると

「・・・・・・・・・今日必要だった調理実習のエプロンを先輩の友達に借りに行っていたの。」

と美菜は戸惑いながら答えた。男子生徒はさらに質問を続ける。

「も、もしかして先輩って今朝一緒に歩いていた人?」

「ううん。その人は先輩じゃないわ。」

どうやらエプロンを貸してくれたのは城嶋では無いらしい。

すると女子生徒が美菜にさらに質問をした。

「ねぇ、美菜ってあの坊主の人と付き合い始めたの?」

「ええ・・・・・・まあ。」

美菜に彼氏が出来たということを本人の口から聞いたことによりクラス中の男子達が悔しがったりはしゃいだりし始めた。そして、美菜が遅刻した理由は『エプロンを借りに行っていた』で丸く収まりつつあった。

しかし、陽太から見てみれば美菜の発言と行動には矛盾点があった。

美菜は先輩の友人からエプロンを借りに行って遅刻したと言っている。だが先ほど5組の教室にいた男子生徒は陽太に『城嶋さんと一緒に教室を出ていった』と言っている。もしどうしてもエプロンを借りなければならない状況に美菜が置かれていたのだとしたら、彼氏がいる教室とはいえわざわざ5組の教室に行ったりなんてしない

はず。

だから陽太は、美菜が遅刻した理由が『エプロンを借りに行っていた』だけというのは納得いかなかった。『彼氏と会っていた』と言うのが恥ずかしかったのだろうか?それとも、みんなに言えない何かがあったのだろうか?一見大したことではないのかもしれないが、陽太にはなぜかそれが腑に落ちないでいた

「・・・・・・・・・」

いつものように笑っている美菜だったが、陽太にはその笑顔がなぜか真実を隠すベールのようなものにも見えた。

同日、１５時３０分。下校時刻。

美菜は帰りのホームルームが終わるとすぐに教室を出て行き、５組の教室の方へ走っていった。

(美菜ちゃん、彼氏に会いに行くのかな?)

どうしても今朝のことが気になってしまう陽太は、美菜と城嶋の様子を少しだけ観察してみることにした。

美菜が走っていった先は予想どおり城嶋のいる５組の教室だった。

「す、すみません。遅くなりました。」

城嶋に敬語を使う美菜。

「遅いなぁ。もっと早く来なきゃ。さあ帰ろうか。」

「はい・・・・・・・・・」

なんだかとても上から目線で偉そうな城嶋に対し、ぺこぺことしながらひきつった笑顔でそれに対応する美菜。

「・・・・・・・・・」

陽太は黙って追跡を続ける。

美菜と城嶋はゆっくりとした速度で校門を通過し、通学路をゆっくりと歩いていく。

陽太もその2人より50メートルほど後方でゆっくりと歩く。

すると美菜と城嶋は突然、狭い路地に入っていった。陽太は2人を見失わないように少しだけ歩く速度をあげた。

「あれ？こんなところに道あるのか・・・・」

普段誰も使わないその路地に、人が入っていく光景はなんだか不思議だった。

しかもその路地は美菜の家とは逆の方向へ続いている。

城嶋と美菜はいったいどこに向かっているのだろうか？

その路地を抜けた先は、小さな廃工場だった。

何を製造していた工場かなんて誰も知らないが、とても危ない雰囲気のする場所であることは確かだ。

廃工場には城嶋の仲間たちがたくさんいた。

「お、おつかれっす城嶋さん！」

城嶋よりも10センチほど身長が大きい男が何度も何度も城嶋に頭を下げながら挨拶をする。

「ういーっす。」

周りの雰囲気を見る限り、城嶋はこの廃工場に溜まっている不良たちにとってのボス的存在らしい。よく見てみれば2年生や3年生の不良も1年生である城嶋に頭を下げている。

「・・・・・・・・・なんかのどかわいたなぁ、丸尾！飲み物買っ

てこい。」
「はい！」
丸尾と呼ばれている男が城嶋のパシリになり、狭い路地の外に向かって走り始めた。

狭い路地から城嶋たちを監視し続けていた陽太のところへ、丸尾が走ってくる。
（やばい！）
陽太はあわてて近くにあった建物のドアの中へ入った。

「・・・・・・・・・・。」
陽太は丸尾が通り過ぎていったのを確認し、ドアを開けようとした。するとそのとき、陽太は突然背後から眩しい光に照らされた。
「そこで何をしている！」
懐中電灯を持っている太った男が陽太に向かって怒鳴った。どうやらこの男はこの建物の警備員らしい。
「い、いや、あの・・・・・・・・」
特にここで何かをしていたわけではないので、陽太はどう反論すればよいのか分からなかった。だから陽太は勢いよくそのドアを開けて逃げ出そうとした。

しかし・・・・・・・・

ドアを開けた先にはたくさんの不良たちが恐ろしい表情で立っていた。不良たちは陽太を睨む。
「おいテメェ、さっきからコソコソと何してやがったんだ？」
「・・・・・・・・」
どうやら不良たちは追跡されていることに気付いていたようだ。
「おい！お前ら！そいつ早くぶっ殺せ！」
懐中電灯を持っている太った警備員もどうやら城嶋の手下だったよ

うだ。

（・・・・・・・こ、これはやばい。）

逃げ場も無い、助けてくれる人もいない。陽太は崖っぷちに立たされていた。

そんな陽太に追い打ちをかけるように、美菜が余計なことをしてしまう。

「あ、陽太！」

（あちゃぁ・・・・・・・）

美菜は思わず陽太の名前を大きな声で発してしまった。

「ほう、美菜と知り合いなのか。もしやテメェは俺と美菜が付き合っていることに嫉妬しちまって、俺と美菜の後をつけてきたわけか？」

美菜が全く知らない人のフリをしてくれていれば、城嶋にこんな発言をさせずに済んだかもしれない。

「違う、ちょっと道に迷っただけだ。」

無意味な抵抗をしてみる陽太。

「道に迷ってこんなところに来るやつがいるかよ。お前美菜のことが好きなのか？」

「・・・・・・・・・」

城嶋のその質問に全く言い返すことなんてできない陽太は、眉間にしわを寄せながら下を向く。

すると、陽太の真横にいたメガネをかけたインテリっぽい男子生徒が城嶋に話しかける。

「城嶋さん。この人中川陽太ですよ。殺人鬼の！」

「ハハハ！そうか。俺を殺して美菜を奪おうとしたのか？」

と城嶋が言うが、陽太は必死に否定する。
「違う！俺は殺人鬼なんかじゃないし、人を殺して好きな人を奪ったりなんてしない！」
しかしそんな言葉はだれも信用してはくれなかった。

周りにいた不良たちがクスクスと笑う。
すると城嶋が陽太に向かって強烈な蹴りを入れた。
「オルァ！」
「ングァ！」

城嶋の蹴りは見事に陽太の鳩尾（みぞおち）に入る。陽太はその場でうずくまり、立ち上がれなくなった。

「おいおい、一発蹴られて終わりかよ。もっと戦えよ！」

たった一回だけ蹴りを食らったくらいでダウンしてしまうだなんてだらしないにもほどがある。別に再び立ち上がれないわけではなかったが、今の陽太には戦う気力なんてものは存在しなかった。
そして陽太は、今の自分が何よりも醜い負け犬であるということを自覚した。

大好きだった美菜を奪われて、それに嫉妬して、ストーキングして、あげくの果てには捕まって、ここで不良どもにボコボコにされる。

陽太はその日、まるでサンドバッグのように殴られ、蹴られ、振り回された。

美菜は、ボロボロになってゆく陽太をただ見ていることしかできなかった。

同日、１９時００分。
日が沈むと廃工場は真っ暗になって何も見えなくなってしまうので、不良たちはボロ雑巾みたいになってしまった陽太を残し、美菜を連れてどこかへ行ってしまった。

静まり返る廃工場。

陽太はただ、汚い地面に仰向けに寝転がり、暗くなっていく空を見ながら、涙をこぼす。

今までいろいろなイジメを受けてきた陽太は自分の人生に疲れを感じていた。
殺人鬼と呼ばれていた親父を持ってしまったばっかりに、陽太までもが殺人鬼扱いされてしまう。なんて理不尽な世の中だ。

神様、殺人鬼の息子は恋もしちゃいけねぇのか？
俺は一生『殺人鬼の息子』として生きていかなくちゃいけねぇのか？

ああ、そうなのか・・・・・・・・じゃあ俺は！

この時、陽太の心の中にあった何かが、ものすごい勢いで壊れ始めていたのだった。

陽太の過去　3

２年前に父親が死刑台におくられ、４年前に母親が病死してしまったので、陽太は清の友人である家主さんに家賃を肩代わりしてもらいながらアパートで１人暮らしをしていた。

５月９日午前１０時３０分。

学校は今、２限目の真っ最中だ。

しかし陽太は学校にはきていなかった。

全身の傷と心の傷を抱えてしまった陽太にとって、学校に来るという行為は非常にめんどくさいものになっていた。

陽太のことが心配になった美菜が、最近買ったばっかりの携帯電話で陽太の自宅電話に連絡した。

しかし陽太は電話に出ない。

美菜は留守電にメッセージを残しておいた。

「今日陽太の家に行くね。言いたいことがあるの。・・・・・・・・じゃあまたあとで。」

陽太はこの留守電を自宅の布団の中で聞いた。電話に出なかったのはただ面倒くさかっただけだ。

「・・・・・・家に来るのかよ・・・・・・」

何にもやる気が出ない陽太だったが、美菜が家に来るということを知り、たくさんの雑誌や紙くずなどが散らかっている自分の部屋を

掃除しなければならないことに気付いた。陽太の家には普段ほとんど客なんて来ないので、カビがある食べカスやエロ本など、他人に見られたくないものまでたくさん落ちていた。
「くっそーはやく掃除しなきゃ！」
陽太は大急ぎでゴミを回収し、掃除機をかける。

そんなことをしている中、陽太の脳裏に先ほどの美菜の言葉がよぎる。
『言いたいことがあるの』
おそらく、昨日の事件のことが関係しているのだろうが、美菜が陽太に言いたいことなんてほとんど予想できなかった。
陽太の傷だらけな心が、不安で揺れ始める。

同日１６時０５分

美菜は留守電通り、陽太のアパートを訪れた。

インターホンを押すと、げっそりとした様子で陽太が部屋から出てきた。
「まあ、あがって。」
陽太はなんとか美菜が来るまでに掃除を終えることが出来た。
「うん、おじゃまします。」
美菜は丁寧に靴を脱ぎ、陽太の家にあがる。

掃除されて綺麗になっている部屋の真ん中にある、椅子に美菜は腰掛け、陽太はベッドの上であぐらをかいて座った。
「・・・・・・言いたいことってなに？」
陽太はいきなり本題に入った。
「・・・・・・・・・・・・」
美菜は突然うつむいて、非常に悲しそうな顔をする。

「・・・・・・どうしたの？」
陽太は若干不機嫌そうだ。
「・・・・・・・・・・あのね。」
美菜はどうやら泣いている様だった。美菜の目から大量の涙がこぼれ始める。陽太は焦った。
「な、泣いてるの？どうしちゃったんだよ。言いたいことって何なんだよ。」

美菜は、陽太に言いたかったことを、振り絞るように言い放った。
「私が城嶋君と付き合っている間は、私にかかわらないで！」

この一言は陽太に非常に大きなショックを与えた。
「な・・・・・・・」
「私は、城嶋君といても大丈夫だから。」
「だ、大丈夫だと？」

美菜の言う『大丈夫』という言葉は、美菜が城嶋と一緒にいることを我慢している証拠だった。美菜は決して城嶋のことが好きで付き合っているわけではないのだ。

「美菜ちゃんは城嶋のことが好きで付き合ってんじゃないのか？」
「・・・・・・・・・・・・」
美菜は言葉を詰まらせる。
「まさか脅されたのか？」
「・・・・・・・・・うん。」
「じゃあなんで関わらないでくれだなんて言うんだ！？なんでそんなのを黙って見ていなくちゃいけねぇんだ！？」
陽太の声はだんだん大きくなっていった。

「私は陽太をこの問題に巻き込みたくないのよ。」

「え？・・・・・・・・・」
城嶋を憎んでいるのは陽太だけではない。城嶋を憎む気持ちは美菜も同じはずだ。どうせなら一緒に協力して城嶋を倒すという方法で解決してしまえばいいのに、美菜は陽太がこの問題に関わってくることを拒んだ。なぜだろうか。
「・・・・・・・・・これは私が陽太に言う最初で最後のお願い。」
「そ、そんな・・・・・・関わらないでだなんて。」
「受け入れられないかもしれない。でもね、城嶋君と付き合っていても、私の本当に好きな人は陽太だけだから。」
「あ！？」
陽太は驚いて、ベッドの上で思わず立ち上がってしまった。
「小学校の時に陽太が私に『俺は天使のような君が大好きだ！』って言ってくれたでしょ？」
「あ、ああ。」
「実はね、私本当はものすごくうれしかったの。だって私も陽太のことが好きだったから。」
「そ、そうだったのか・・・・・・。」
驚きとともに嬉しさが陽太の心に舞い降りる。
「だから、私のお願い聞いてくれる？」

関わらいでくれと言うのが美菜のお願いだ。本当に好きな相手にそんなお願いをするだなんておかしいとは思った。だが陽太は美菜のお願いを受け入れた。なぜなら、陽太は美菜のことが好きだから。

「分かったよ。」
「・・・・・ありがとう。」
「でも！俺はずっと美菜ちゃんのことが好きだから！」
「ええ、私も陽太のことが大好きよ。だから必ずいつか結ばれると信じてる。」

美菜は涙を拭き、陽太の後ろ頭に手を添えて、そっと口ずけをした。
「・・・・・・・・・・。」
これが正真正銘、陽太のファーストキスだった。

このキスは、再び結びあうあえることを誓うキスでもあった。

いつか必ず、陽太と美菜は結ばれる。だって2人は両想い。両思いなのだから。
いつか来るその日のために、今は耐えなくてはならない。いつまで耐えなくてはならないのだろうか。

この日を境に、陽太と美菜は全く会話することはなかった。

会話どころか、あいさつすらしなかった。

なぜだろうか?

美菜はなぜ陽太と関わらない方法をとってしまったのだろうか。

こんなもの、お互いに辛いだけではないか。

なぜだろうか?

陽太の過去　４　～自分のために～

陽太と美菜はそれから2年間、会話をすることもあいさつを交わすことも全く無かった。

２人をつなぐものは、もう一度結ばれたいという『望み』だけ。

そしてその望みをまるで踏みにじるかのように、城嶋は美菜の横を歩く。

好きでも無い男と一緒にいなければならない美菜の心にも、それを見た陽太の心にも、少しずつ少しずつ不満が積もってゆく。当然だ。

それでもなお二人はその不満を我慢し、今日という日を迎えてしまう。

２０１１年５月４日。午前１０時。

学校は祝日で休みだ。

いい天気だったので、布団を干したりする人や、ジョギングをする人もいたが、陽太は薄暗い部屋で布団をかぶり、まだ眠っていた。

すると、陽太の家の電話がベルを鳴らし始めた。

「・・・・・・んーなんだよ・・・・」

気持ちよく眠っていたのに、突然起こされた陽太は、不機嫌そうな表情と声で電話に出た。

「はい・・・・」
すると電話の向こうから、男性の声が聞こえてきた。
「君が中川陽太君だね？私は君に良いことを教えてあげたりもする『何でも屋』だ。」
（・・・・・・・は？）
自分は寝ぼけているのではないかと思った陽太は一度目を強くこすり、もう一度受話器に向かって話し始めた。
「あの・・・・・・・・電話番号を間違えていませんか？」
「ええ！？そんなはずはない！君は中川陽太君だろ？」
「は、はい・・・・・そうですが。あなたは誰ですか？」
「私は『何でも屋』の者です。」

陽太はますます不機嫌になる。なぜなら、これはどう考えてもイタズラ電話としか受け取れないからだ。
（・・・・イタズラだ・・・・・・とりあえず切るか）
陽太はためらうこともなく電話を切った。

しかしその直後、再び電話が鳴り始めてしまう。
「ああ！？またかけてきやがった。」
イライラしながら陽太はまた電話に出る。

するとまた先ほどと同じ男が電話の向こうこら話しかけてきた。
「切るなんて酷いねぇ。俺は君にいいことを教えてあげようと思って電話したのに。」
「どうせ通販とかだろ？今忙しいんだよ！じゃあな！」
と陽太は怒鳴り、電話を切ろうとした。その時・・・
「早川美菜についてのこともかなり知っているぞ？」
とその男が言い、陽太は驚いてもう一度受話器を耳に近づけてしまった。

「今なんつった!?」
「早川美菜についてのことも知っていると言った。どうだ?興味があるだろう?」

見ず知らずの男から聞かされることなんて、どうせ危ないモノに決まっている。だが、そういったリスクを背負うだけで美菜のことを知ることが出来るのなら、怪しい奴の話でも聞いておいた方がいいかなと陽太は思った。
「ああ、興味がある。なんか知っているのか?教えてくれ!」
「フヘヘヘヘヘ。まぁ、そうお焦りになんな。まずどこから話そうかねぇ・・・・・・・」
「焦らすんじゃねぇ、さっさと話せよ。」
電話の男の挑発的な笑い声が、陽太をイライラさせる。
「早川美菜が好きな人は君だ。これは紛れもない事実だ。だが早川は好きでもない城嶋という男と付き合っている。そこまでは君も知っているね?」
「ああ。」
「早川美菜は脅されて城嶋の恋人になっているんだよ。」
「それも知っている。」
「ほほぉ・・・・・・」
何だか人を馬鹿にするような口調で淡々と話す男。
「じゃあ早川がなぜここ数年ぐらい君と関わろうとしないのか分かるかい?」
「・・・・・・・詳しくは分からないな・・・・」
「城嶋に脅されてそうさせられたに決まってんだろ!?」
「な、なんだと!?」
陽太は驚く。
「ムッフッフフフフ。じゃあ君はどうすればいいと思う?」
「・・・・・・・・分からねぇ。」
「ムフフフフフ。頑張らなくっちゃねぇ。」

陽太は電話の男の奇妙な態度のせいで、イライラが増す。
「お前・・・・・俺をバカにしてんのか？」
「いやいやそういうわけじゃないよ？じゃあ君にいいことを教えてあげるよ。君が最も幸福になれる方法。ムフフフフフ」
「・・・・・・・・・なんだよ。早く言えよ。」
電話の男は少しだけ間を開けた後、恐ろしい口調でこう言い放った。
「城嶋を殺せばいいんだよ。」
陽太の心にあったイライラは、電話の男のこの発言で、一瞬にして驚きに変わった。
「こ、殺すだと！？」
「そうだ。中川陽太君。君にはそうするだけの資格と才能を持っている。」
「そんなこと、しちゃいけねぇに決まってんだろ？」
陽太の言っていることは常識的に正しいことだ。
だが電話の男はさらに陽太の常識というものを揺さぶる。
「城嶋が憎くないのか？」
「憎いよ！だけど・・・・・・・」
どんなに城嶋が憎くても、人殺しは犯罪だ。人として絶対にやってはいけない行為だ。
「あの二人は恋人なんてものじゃない。早川が完全に城嶋の奴隷になっちまっている。」
「み、美菜ちゃんが奴隷に！？」
陽太は驚きとともに、城嶋への憎悪が増す。
「一度奴隷になっちまったら逃げることなんてできはしないさ。」
「そ、そんな！逃げられないわけないだろ！？逃げようと思えばいくらだって・・・・・」
「城嶋にはたくさんの舎弟がいる。その舎弟たちの目を盗んで逃げようだなんて不可能にもほどがある。早川は一生城嶋のもとで暮ら

すことになるのさ。」

「そ、そんな・・・・・・・」

電話の男の言っていることは大袈裟な上に少し嘘が混じっているような感じもするが、美菜への恋心と城嶋への憎悪で頭の中がいっぱいになってしまっている陽太にとって、その電話の男の話はとても衝撃的なものとなってしまっていた。

「何人敵がいようが君は全員ぶっ殺すことが出来る。君はそれだけの戦闘能力を持っている。俺は知っているぞ?」

なぜこの男が自分の戦闘能力を知っているのだろうかと疑問に思った陽太は一つ質問をした。

「・・・・・・・・・あんた誰だ。」

「俺か?そうだなぁ・・・・・・・・。君が城嶋を殺して突き進んでいけばいずれ出会う人間さ。」

「・・・・・・・・・・・・」

陽太はずっと城嶋への憎悪を心にしまいこんでいたのだが、電話の男の話術でその憎悪を引き出されてしまっていた。そして・・・・・

「もう一度聞く。城嶋が憎いかい?」

「・・・・・・・・・・・・

まるで人間の考えでは無い。憎いから殺すだなんて最も愚かな者がすることだ。だが陽太はそんな愚かな自分に気付かない。陽太の心には、城嶋を殺して美菜を救出した自分しか映っていない。

そして・・・・・・・・・・

同日午後3時ごろ。

かつて陽太が城嶋たちにボコボコにされた場所でもある廃工場に、今日も城嶋たちは集まっていた。
城嶋の隣には美菜もいた。

そこに、足音も立てずに陽太が現れる。
「あ？何だ？」
城嶋が陽太の存在に気付き、陽太に向かって歩き始める。

周りにいた城嶋の舎弟たちも城嶋に続く。
「何の用だ？」
「・・・・・・・・・・」
陽太は下を向いたまま黙り込み、全く動かない。
「・・・・・・・・・」
美菜は心配そうな目で陽太を見つめる。

「チッ・・・・・・・・・。お前らこいつボコしとけ。」
と城嶋は陽太に背を向けて、舎弟たちに命令した。
「へい。」
舎弟たちは一斉に陽太を囲む。直後一斉に陽太に向かって殴りかかった。

そのとき！

殴りかかっていった舎弟たちは一斉に真後ろに吹っ飛んだ。吹っ飛んだというより、吹っ飛ばされた。

「ん！？」

ものすごい音がしたので城嶋は驚き、もう一度陽太の方を向く。すると城嶋は、奇怪なオーラを放っている陽太の姿を見て恐怖を覚えた。

「なんだよソレ！」

「・・・・・・・・城嶋・・・・・オレハキサマヲユルサナイ。」

まるで陽太の姿はバケモノだ。

城嶋は思わず後ずさりを始めてしまう。

「な、なんだお前！？」

陽太が狂っているのは城嶋への憎悪が大きいからだ。

すると美菜が陽太に向かって走り始め、廃工場の中に美菜の声が響いた。

「陽太！！」

美菜の声を聞いた陽太は我に返った。

「・・・・・・・・美菜。」

数年ぶりに美菜が自分の名前を口にしてくれた喜びが陽太の胸いっぱいに広がる。

しかし直後、美菜は陽太の顔面にビンタを食らわせた。

「！！！」

突然ビンタを食らったせいで驚きの表情を浮かべた陽太に、美菜は怒鳴り散らした。

「関わらないでって言ったのに！どうして！！」

「俺は美菜を助けたかった、ただそれだけだ。」

陽太は自分が思っていたことを率直に伝えた。『美菜を助けたい』と。だが、美菜にとっては陽太がこう思ってしまうことが一番最悪

なのだった。
「陽太が城嶋君に復讐することを避けたかったから、関わらないでって言ったのよ！」
「は！？」
「陽太が城嶋君に復讐なんてしたら、間違えなく陽太は城嶋君を殺しちゃう・・・・・」
「そんな・・・。どうしてそう決めつけるんだ！？」
確かに陽太は城嶋を殺すつもりでここに来たのかもしれない。だがなぜ美菜はそうなることを予想することが出来たのだろうか。それは・・・・・・。
「陽太が、殺人鬼の息子だからよ！」

ショック、絶望、失望、憎悪。

これらすべてが陽太の心を覆い尽くした。この時、二人の間にあった、結ばれたいという『望み』は完全に消えた。

「・・・・・・・・・そうかい。君もそう言うのか。俺はやっぱり殺人鬼の息子か。」
陽太は美菜を押しのけて、城嶋に向かって再び歩き始めた。

「陽太！やめて！」
という美菜の希望に対して、陽太は恐ろしい表情で応答した。
「・・・・・・・俺は殺人鬼の息子だ。だから俺の血液には殺人鬼の血が混じっている。だから、こんな俺が君みたいな子と結ばれたりしちゃいけねぇんだ。」
「そ、そんな！」
「美菜、俺は君のためには戦わない。自分のために戦う。これは復讐なんかじゃない。俺が城嶋を殺したいから殺す。だから、さようならだ美菜。」

これが、陽太と美菜の最後の会話だった。
「陽太！！」

そして、陽太は1つの爆弾のように暴れまわった。

城嶋も城嶋の舎弟も、陽太の爆風に巻き込まれていく。

もうどうでもよかった。美菜のために戦おうとしていた陽太だったが、もうどうでもよくなった。とりあえず城嶋が憎かったから城嶋を殴った。城嶋の舎弟たちも殴った。
そんな陽太を見た美菜は、悲しい気持ちになり、泣き崩れる。

もう二人が結ばれることはないのだろう。

しかし陽太はもう一つ重要なことを忘れている。それはあの電話の男の事だ。あの男の電話がなければこんな結末は生まなかっただろうに。
いったいあの男は誰だったのだろうか。

1時間後、警察が廃工場に現れて、陽太は少年院へと吸い込まれていくことになってしまう。”

陽太の夢がここで終わった。ーーー

現在は２０１２年5月１７日１８時５０分だった。

「卒業アルバムを見ているうちに寝ちまったのか・・・・・・・・・。いやな夢だった。」

卒業アルバムに写っている美菜の顔を少しだけ眺めてから、陽太はゆっくりとアルバムを閉じた。

このアルバムには封印してしまいたい過去が詰まっていた。

好きだった女を裏切り、自分の憎悪のために戦ってしまった陽太。

あの時から、陽太の人生は狂い始めていたのだ。

陽太はＫのためでも、誠のためでも、友恵のためでも、美菜のためでもなく、ただ自分のために戦うのである。これからもずっとそうなのだろう。

すると、喫茶ねこばばの外から誠の声が聞こえてくる。

「陽太！もう集結するぞ！お前もくるんだ！」

もう間もなく、Ｋの軍隊がこの喫茶ねこばばの前で結成する。

「さあ、いくか。」

陽太はゆっくりとベッドから降りて、一階へ降り、喫茶ねこばばの正面玄関の扉を開けて、外へと出ていった。

Ｋが本格的に動き始める。陽太はただ戦う。自分のためだけに。

デメリット

Kがついに武装を開始する。

「豪牙が消滅した今、我々Kに戦う理由なんて無いのかもしれん。だが、まだ我々に安らぎは訪れぬ！ゴールド隊と小笠原組を倒さなければ我々の完全勝利にはならない！今回の攻撃でケリをつける！みんな覚悟はいいか！？」

という誠の言葉の直後、Kの軍人たちが歓声をあげる。

「うおおおおおおおお！！」

Kの軍隊はまず二手に分かれて行動を開始した。

一つは『鉄道組』と呼ばれ、南神奈川鉄道を使って出陣し、新宿を目指す。これには誠と3千人の軍人たちが参加する。

二つ目は『飛行船組』と呼ばれ、大型の飛行船で新宿を目指す。これには陽太と友恵と2万人の軍人たちが参加する。

どちらにも参加しない軍人たちは増援部隊としていつでも出陣できるように準備をしつつ、女、子供、老人などを守るためにKの領土に残ることになった。

どちらも目指す場所は激戦区である新宿だ。新宿で再び集結し攻撃を開始することが誠たちの狙いだった。

二手に分かれるメリットとしては、全滅しにくいということがあげられる。飛行船が撃墜されたらその時点で全滅ということになってしまうというのはとても残念だ。だから気付かれやすい鉄道組をおとりにすることで、飛行船組を効率よく新宿に上陸させることが出来るのだ。

しかし、鉄道組が必ずと言ってよいほど攻撃を受けてしまうということがこの作戦のデメリットなのである。南神奈川鉄道は新宿駅に

つながっているので、鉄道が動いているという情報が新宿に伝達されてしまう。だから気付かれやすいのだ。しかも鉄道組の人数は飛行船組に比べて格段に少ない。なので鉄道組は誠を中心にしてうまく戦わなければならないのだ。

新宿は日本領土内でもっとも過激な戦いが行われている場所だ。小笠原組とゴールド隊が現在も激しい戦いをくりひろげている。しかもどさくさにまぎれて豪牙一族の残存兵力が東京に集結し、参戦してきたらしく、以前よりもさらに激しい戦いが繰り広げられているのだという。

そして今、Kがこの戦争に参戦する。
いったいどこまで激しい戦争になってしまうのだろうか。

5月17日19時32分。K国軍出陣開始。

大きなエンジン音を鳴らしている巨大な飛行船に、陽太と友恵は乗り込もうとする。すると2人の背後から誠が明るい表情で話しかける。

「2人とも。新宿でもう一度会おうな！」
陽太と友恵も明るい表情でそれに答える。
「おう、土井さんも元気でな。」
「無理しないね。お父さん。」
2万人の軍人たちを乗せた飛行船に陽太と友恵は乗り込み、大きなエンジン音とともに飛行船が宙に浮かんでいく。

誠は浮かんでいく飛行船を真剣な表情で見つめる。
「俺たちもいくか。」
飛行船組と新宿で再開するために、鉄道組も行動を開始する。

３千人の軍人を乗せた１７両編成の鉄道が出発する。
誠は一番後ろの車両に乗る。
南神奈川鉄道はＫの国民たちによって改造されているので、ものすごい馬力を持っていたり、防弾機能が付いていたりもするのだった。
時速２００キロ位のスピードで移動する南神奈川鉄道。
車内はあまり緊張している様子では無かった。
車窓からはかつて『神奈川県』と呼ばれていた県の街並みが広がっていた。
「土井さん、疲れているんでしょうから眠っちゃって構いませんよ？」
と２０歳くらいの男性隊員が誠の事を心配する。
「そうかい。じゃあそうさせてもらうよ。」
誠は電車の椅子のリクライニングを下げて、椅子の下にある薄い毛布をかぶった。眠りにつく前に誠は隊員たちに少しだけ注意事項を伝えておく。
「トンネルが見えてきたら戦闘の準備を開始しろよ。あのトンネルはＫと東京の境目だからな。」
「了解です。」
「それじゃあ・・・・・・・・・・おやすみ。」
誠は眠りについた。
電車内は戦場に行く軍人たちが乗っているとは思えないほど落ち着いた雰囲気があった。
車窓の風景には、電車が新宿に近づいていくにつれてビルが増えて

いった。そのビル一つ一つは黒く焦げていて、ボロボロになっている。

１９時５９分。

誠たちを乗せた電車は、ついにトンネルに差し掛かろうとしていた。

「全員武装！構えろ！」

トンネルを抜けた先は激戦区である新宿だ。一気に車内の緊張感が高まる。

「土井隊長！起きてください。もう間もなくトンネルです。」

「う、うーん。」

誠は寝起きが悪い。しかも何日も眠っていなかったせいか、いつも以上に寝起きが悪くなっているのだった。

「しっかりしてくださいよ隊長！」

「ああ分かっている。トンネルまであと何メートルだ？」

「あと３キロほどです。」

「まだ距離があるじゃないか。」

「いえ、我々は現在時速２００キロで走行しております。もう数十秒ほどでトンネルに入ります。」

「・・・・・・・・・」

誠は眠いせいか、機嫌が悪かった。

だが直後、誠の眠気を一瞬で吹き飛ばす出来事が起こった。

ドシャァァァァァァァァ！！！！！

すべての車両が時速２００キロのスピードから一気に時速０キロまで落ちた。

「うわあああ！」

軍人たちも誠もシートベルトなんてしていなかったので、全員前方

へ吹っ飛び、壁にたたきつけられた。

「な、何が起こったんだ!?」

一番後ろに乗っていた誠たちは何が起こったのか分からない。

すると、誠の胸についていたトランシーバーから運転手の声が聞こえてきた。

「痛ぇ・・・・・た・・・・・大変・・・・・です・・・・・隊長!」

運転手はどうやら怪我をしてしまったようだ。

「おい大丈夫か!?いったい何があった!?」

「ひ、人です。人が飛び込んできたんです。」

誠は驚いた。

「人が飛び込んできただと?ならなぜ電車があんなふうに突然止まるんだ。」

と誠が質問すると、運転手は怯えたような声で答えた。

「あ、あの男・・・・・・・・。笑いながら、こちらに突っ込んできたんだ・・・・・・・・。そしたら、車両が・・・・・・・・・・・。」

誠は先頭車両に向かって走り始めた。

「お、おい運転手!あんた今どこにいるんだ?ちゃんと運転席にいるのか?」

運転手は周りをキョロキョロと見渡す。すると、『4両目』と書かれた札が運転手の目に飛び込んできた。

「いいや。・・・・・・・俺は・・・・・・・4両目まで吹っ飛ばされた。」

「は、はぁ!?」

誠は驚きながら車内を走り続ける。そして、誠は5両目まで走った時に信じられないといった表情になってしまった。

運転手は決して運転をさぼっていたわけではない。４両目まで吹っ飛ばされたのでもない。

「こ、これはいったい！！」

なんと、１、２、３両目はペシャンコにつぶれてしまい、４両目の車両と一体化してしまっていたのだった。
そして誠は、下半身が無い状態で目を開けながら死んでいる運転手に駆け寄った。
「・・・・・・・」
死に絶えた運転手が見ている先は『４両目』と書かれている札だった。

いったい何があったのだろうか？
誠はペシャンコにつぶれてしまった原因を探るべく、前３両の様子を見た。

「・・・・・・・・・・。」
先頭の様子を見る限りではトンネルまであと３メートルほどのところで何かにぶつかったようだった。

だが壁にぶつかったわけではない。爆弾が爆破したわけでもない。
誠は先頭車両の壊れ方を見て一瞬で犯人を当てて見せた。
「小笠原怜次・・・・・・・・」
誠の背後にはガムを噛みながらニヤニヤと笑う金髪七三の狂人が立っていた。

「クッフッフッフッフ！防弾対策をしている鉄道だと聞いていたからパンチくらいじゃ壊れないと思っていたんだけど、まさかこんなにペシャンコになっちゃうとはねぇ。」

3つの車両をペシャンコにした犯人は怜次だった。
怜次がトンネルの前に立ち、先頭車両に強烈なパンチを入れたのだった。

あまりにも強烈なパンチだったので、その衝撃は1両目だけでは足りず、2両目3両目までもを食いつくしたのだ。

「よりによって貴様が現れるとはなぁ。」
鉄道組は必ずと言ってよいほど敵と遭遇する。それは鉄道組全員が知っていることだった。だが誰に遭遇するかは誰にも予想はできなかった。怜次に遭遇してしまったのは不幸中の不幸だ。

「悪いが君たちにゃ死んでもらうしかないな。クフフフフフ！」
「・・・・・・・・・・・・最悪だ。」
誠は歯を食いしばりながら態勢を低くして身構える。

すると怜次はキョロキョロと辺りを見回し始めた。
「陽太はいないのか？」
怜次はどうやら陽太を探しているようだった。
「ああ。ここにはいない・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
怜次は少しがっかりしたような表情になる
「ここは俺たちだけで何とかするしかない・・・・・・・・・いくぞみんな！」
と誠が周りにいた軍人たちに言う。
「はい！」
軍人たちも一斉に怜次に銃を向けた。
しかし不死身である怜次にとっては、銃を向けられるという行為は何も恐れることでは無かった。
「そんな銃でこの僕を倒せるのかい？」

「いや、倒せるとは思わねぇ。だがな、ここを通るためには貴様が邪魔なんだ。」
「クフフフフフ。逃げるのか？戦うのか？」
もう遭遇してしまったのだから仕方がない。戦うしかないのだろう。だが誠は迷っていた。今ここで怜次と戦ってしまったら間違えなく死者が出てしまうだろう。しかし・・・・・・
「ああ・・・・・・戦うぞ。全員構えろ！」
後方車両にいた軍人たちが誠の背後に集結し、一斉に銃を構える。
「撃てぇ！」
大量の銃弾が怜次の体めがけて飛び始めた。
怜次は銃弾を食らいながらもニヤニヤと不気味な笑みを浮かべていた。そしてその笑みは銃撃が終わってもなお消えることはなかった。
「クッフッフッフッフッフ。なぜ戦う？僕を倒せないのは分かっているだろう？」
「ああ、分かっているさ。」
「ならなぜだ？なぜ無意味と分かっているのに戦う？」
「・・・・・・同じ・・・・・・Kの仲間のためだ！」
と誠が言うと、怜次は大きな声をあげて笑い始めた。
「クハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」
「！？」
怜次が突然笑い始めたので、軍人たちも誠も戸惑いを隠せなかった。
「仲間のためだとぉ！？クハハハハハハ！なるどなぁ。貴様らしい甘ったるい考えだ。だから貴様は鉄道で来たんだろ？」
「・・・・・・・・・・？」
「何も言わずにわざと危険な役にまわって娘や仲間を守りたかったのだろう？」
「・・・・・・・・・・その通りだ・・・・・・」
鉄道組は飛行船組以上に危険で、大きなリスクを背負うことになる。
誠はあえてそれを友恵たちには言わず、自分だけで背負ってしまっ

ていたのだった。怜次は見事にその誠の考えを当てて見せた。
「クフハハハハハ！甘い！甘すぎるぞテメェ！しかも勘違いしている所がまたなんとも愚かだ。」
「勘違い？」
「そうやって命を張って戦っていることで、仲間や娘を守っているつもりなのだろうが、それは勘違いだ。貴様の仲間や娘はきっと不幸になるぞ？」
「なんだと・・・・・」
「よく考えてみな。君がやっていることは仲間や娘のためにはなっていないはずだ。」
「・・・・・・・・・・・・」
誠は仲間や友恵を死なせたくないからあえて危険な鉄道組に参加することにした。しかし、それは本当に仲間のためになっていることだろうか？誠はもう一度深く考えてみる。

「貴様の娘、土井友恵の家族はもうお前しかいないのだろう？じゃあお前が死んだらあの娘は一人ぼっちということになるんじゃないか。クフフフフフ。」
「・・・・・・・・・・・・」
友恵や仲間を死なせたくないという思いが強かった誠だったが、ここにきて、自分が死ぬことで友恵や仲間に不幸を与えてしまうということに気がついた。ここで死んでしまったら鉄道組に参加した意味がなくなってしまうと誠は思い始めていた。誠は短刀に手を伸ばす。

すると、怜次の表情が突然真剣になり、バケモノらしい顔つきに変わった。
「だがな！貴様が娘や仲間のために戦っていることも、死ぬわけにはいかないと思っていることも、それら自体が全部無意味だ。僕の知ったことじゃない。僕はただひたすらに貴様らを殺すだけだ。貴

様も、貴様の娘も、仲間も、中川陽太も、全員死ぬ。この僕の手によってだ。クワァアハハハハハハ！！」

と大笑いした怜次は誠に向かってミサイルのように飛んでいった。

「何！？」

誠はあわてて短刀を抜き、怜次の体を真っ二つに切り裂いた。

しかし、怜次は不死身だ。一瞬にして怜次は元の姿に戻り、再び誠に向かって飛んでいく。

周りにいたKの軍人たちももう一度銃撃を開始する。

あともう少しで新宿にたどり着けたのに、誠たちは巨大すぎるくらい巨大な壁にぶち当たってしまうのだった。

もう逃げ場はない。生き延びて新宿に行くか、この場で死に絶えるか。誠たち鉄道組に残された道はたったのそれだけしか無いのだった。

死なない能力

怜次が軍人たちの頭上を走りながら手足を振り回し、ものすごいスピードでキックやパンチを繰り出す。

直後、軍人たちは何が起こったのかも分からずにバタバタと地面に倒れ死んでいった。

「クソォ・・・・・・・・」

必死に仲間を守ろうとする誠だったが、怜次のスピードについていくことが出来ない。

誠も普通の人間のレベルと比べれば戦闘力が高く、攻撃スピードはかなり優れている方なのだが、怜次はそれらを上回る戦闘能力を持っているのだった。

防弾機能付きの鉄道車両を3台いっぺんに破壊するほどのパワー。誠ですらついていくことが出来ないほどのスピード。そして、どんな攻撃を食らってもすぐに回復してしまう能力。

怜次はもう『強い』とかいうレベルをはるかに超えてしまっている。

怜次に武器を向けるということは『戦いを挑む』ということではない。『死に急ぐ』ということだ。

ここにいる2千人以上のKの軍人たちも、誠も、それに気付くことが出来ないでいた。

「どうした?その程度か?」

怜次の表情は余裕に満ちていた。
一方、誠は息を切らしながら険しい表情を浮かべていた。
「・・・・・・黙れよバケモノ。」
「クフフフフフ。周りを見てみなよ。」
「・・・・・・・・・・!?」
誠は首を振って周りを見渡す。先ほどまで周りにいた2千人以上もいる軍人たちが、全員地面に倒れて動けなくなってしまっていた。
「仲間を守るとか言っちゃってさぁ、結局守れてないんだよね。甘いというのはそういうことだ。自分の未熟さが分かったか?」
「・・・・・・・・・・ああ、良く分かったさ。正直、自分の技術ならどんな敵が来たって大丈夫だなんて思っていた。未熟だったよ。お前が現れるなんて予想もしていなかった。こんな俺が仲間を守るだなんて口にするべきじゃなかったのかもしれねぇ。」
「・・・・・・・・・・・・」
「だが、もう過去に戻ることなんてできはしないんだ。こうなってしまった以上、進み続けるしかないんだ!小笠原怜次、俺は未熟かもしれねぇが、お前を倒せないとは思っていない。お前の思い通りにはさせねぇ!」
と誠は叫び、怜次に向かって走り始めた。
怜次も誠に向かって走り始める。
そして、誠の短刀と怜次の拳(こぶし)が爆発音を立てながら激突する。地面の石や砂がこの激突の衝撃で宙に舞い、誠と怜次を包み込む。
正面からぶつかり合い、短刀と拳が火花を散らし、殺意と殺意が激突した瞬間だった。
殺意だけは誠の方が上回っていたのかもしれない。しかし、短刀は怜次の拳に砕かれて、誠は右肩に強烈なパンチを食らった。

「ぐわあああああああ！！！」
誠の肩は砕け散り、血しぶきとともに右腕が地面に転がり落ちる。
「クフフフ！まぁだまだぁぁ！！！」
怜次はよろけている誠の体に向かってさらにパンチを繰り出そうとする。
その瞬間、誠は素早い動きで地面に伏せるようなポーズをとりながら新たに懐から短刀を取り出し、怜次の両足首をその短刀で切断した。
「どうだ！」
「ん！？」
踏ん張りがきかなくなった怜次はバランスを崩し、地面に転がる。
誠はその瞬間に追い打ちをかければよかったのだが、右腕を落とされた痛みに耐えられず、一度後方に下がり、怜次との間合いを取った。
「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・どうした小笠原怜次。さっきの余裕はどこ行った？」
怜次の足はすぐに元通りになったが、怜次の表情からは笑顔が無くなっていた。
「・・・・・・・・・・・・この僕を左手一本で倒すつもりなのか？」
「へ・・・・・・・・・そうするしかねぇだろうが。」
「クフフフフ。なら来いよ。」
「・・・・・・・・・・・ああ、言われずとも行くさ。」
右腕を落とされて弱っている誠には、長い時間戦い続ける事は不可能だ。だから誠は一つの賭けに出た。
誠は左ポケットに手を突っ込み、普段使っている短刀とは違う、緑

色の短刀を取り出した。そして怜次に向かった歩き始める。
「ん？なんだその短刀は？」
「お前を・・・・・・お前を殺すために作った・・・・・・・・・特別な短刀だ。」
「特別な短刀？」
怜次の表情がますます険しくなる。

誠は突然加速し、一気に怜次との間合いを縮め、緑色の短刀で怜次の胸に斬撃を食らわせた。

怜次は右肩から左わき腹にかけて深い傷を負った。
だが、どんなに深い傷を負っても死なないのが怜次だ。どうせすぐに回復して元通りなのだろうと思うかもしれない。

しかし、怜次の傷は回復しなかった。

（・・・・回復しない！？）
「・・・・・・・・フッ。」
怜次は驚くような表情を見せ、誠は少しだけ笑みを浮かべた。

「いったい何をした？」
「・・・・・・へへ・・・・だから言ってんだろ？これは特別な短刀だ。」
「ん！？緑色では無くなっている！？」

先ほどまで緑色だった短刀が、普段と同じ銀色に戻ってしまっていた。

「そうだ。さっきの緑は麻痺剤の色なんだ。さっきの斬撃でお前の体に麻痺剤を打ち込んでやったのさ！」

「ほぉ・・・・・どうりで傷が回復しないわけだ。しかも、体が動かない・・・・・・。」
「お前の回復能力は完全に封じてやった。もうお前は不死身では無い！死ねぇ！！」
誠は左手の袖口から大量の短刀を取り出し、怜次に向かって投げた。
短刀は怜次の顔や胸など数か所に刺さった。
「・・・・・・クフフフフ」
怜次は敗北を感じているのだろうか、普段とは違う奇妙な笑みを浮かべながら、全身から噴き出る血を眺めながら地面に倒れた。
（勝った・・・・・・・・・？）
誠は大量の血を地面に流しながら全く動かなくなった怜次の様子をじっとうかがう。

「・・・・・・・・・・・」
すると、誠のケータイが懐で鳴った。陽太からの電話だった。
「もしもし。」
「もしもし？土井さんか？俺たち飛行船組は間もなく新宿の上空だぜ？鉄道組は大丈夫か？」
「・・・・・・・・今な、小笠原怜次と戦っていたところだ。」
と誠が言うと陽太は驚いた。
「お、小笠原怜次だと！？で、大丈夫だったのか？」
「３千人取られた、生きているのは俺だけだ。」
「・・・・・・・・そうか・・・・・それは残念だ。」
「ああ・・・・・・・・。今から俺だけでそちらに向かう。あと１５分もあれば到着できるだろう。」
「そうか。俺たちはあと５分で目的地に着く。ついたらまた電話するからな。それじゃあ」
「おう。またあとでな。」
誠は電話を切り、トンネルに向かって歩き始めた。

その時・・・・・・・・

「ん！？」

誠はものすごい殺気を感じ、素早く後ろを振り返った。

「クッハッハッハッハッハ！！」

「小笠原怜次！？・・・・・・・・なぜだ・・・」

それは紛れもなく、小笠原怜次だった。

先ほど負った深い傷も綺麗に回復している上に、先ほどまで失いかけていた余裕の表情も元通りになってしまっていた。

「・・・・・・・・１０年くらい前に、この僕と戦ったのを覚えているかい？」

と怜次は誠に質問する。

「・・・・・・・・・・・・ああ。」

誠は思い出す。１０年前、中川清と協力して怜次と戦った時のことを。

何度攻撃をしても蘇ってしまう怜次に対して、清は一つ特殊な銃弾を使った。それは、毒薬を混ぜた銃弾だ。毒を使うことで怜次の回復能力を妨げることが出来ると清は思ったのだろう。

確かに怜次は毒弾を食らった直後に倒れて、動かなくなった。

だが現在、怜次はこうして生きている。

それは、怜次の体には毒も麻酔も効かないということの証明でもあった。

「確かに毒や麻痺剤が体中を回っているときは回復能力が使えなく

なる。だが、１０年前の時の戦いも、今の戦いも、僕は流血をしている。毒や麻痺剤はその流れ出る血とともに体外へ排出されてしまうんだよ。」

「・・・・・・なんだと？」

「貴様はさっき、僕に麻痺剤を打ちこんだ後、大量の短刀を僕に投げつけたよな？悪いがそれは僕の回復時間を短縮したことになっちまったんだ。」

傷口が多ければ多いほど毒や麻痺剤の排出速度は上がる。少し考えれば分かることだったのかもしれない。しかも誠は１０年前毒を食らっても死ななかった怜次の姿を見ていたにもかかわらず、麻痺剤が有効だと思いこんでしまっていたのだ。

「くそぉ！」

誠は自分のツメの甘さを感じた。

「清も貴様も一つ勘違いしていることがある。」

と怜次が恐ろしい表情で言うと、誠は怯え始め、後ずさりを始めた。

「・・・・・・な・・・なんだ？」

誠の声は震えていた。

「僕が持っているのは回復能力じゃない。『死なない能力』だ。」

「し・・・死なない・・・・・能力・・・・・・・・だと？」

反則だ。反則的すぎる。

どんなに努力を重ねても、どんなに知恵をしぼっても、こんな反則野郎を超えることなんて不可能だ。

怜次の圧倒的な強さと、絶対的な力の差を感じた誠はただ、立ち尽くすことしかできないのであった。

土井　誠

5月17日20時30分。

陽太たち飛行船組を乗せた飛行船が、真っ暗な新宿の夜空に侵入してくる。

飛行船の窓からは真っ赤な炎と真っ黒な煙があがっている地獄のような東京の風景が見えた。

「東京の上空です！地上にはゴールド隊、小笠原組、豪牙一族残存兵らが交戦中です。我々も参戦します。飛行船から爆撃を仕掛けます。そして、爆撃終了後に歩兵部隊の投下にうつります。」

と指令席から作戦説明の放送が入る。飛行船内にいる軍人たちは一斉に動き始め、戦闘の準備を開始し始める。しかし、陽太は大きな声でその軍人たちの行動を中断させた。

「まだだ！まだ攻撃しちゃだめだ！」

武器を持ってしまえば戦闘開始の準備は万全なのだが、まだKは攻撃を開始してはならない。なぜなら、まだ陽太は誠たち鉄道組と連絡が取れていなかったからだ。

「陽太、電話つながった？」

「クソォ・・・・・・・ダメだ。」

何度も何度も誠のケータイに電話をかけていた陽太だったが、誠は全く電話に出てくれないので、大きな不安と嫌な予感が陽太の脳裏をよぎる。

「陽太、もしかしたらお父さんたちトンネルに入っているのかもしれないよ？だってトンネルには電話はつながらないじゃん。」

と友恵が陽太を励ますように言う。

「・・・・・・・・・・だといいんだがなぁ。」

陽太たちは、早く攻撃を開始したいわけではない。ただ誠たちの無

事を確認したいだけなのだ。連絡をとり、一言でも声が聞ければ安心できる。

電話に出てほしい。電話に出てくれ。陽太たちはひたすら願った。

すると、陽太たちの願いが届いたからなのか、その願いにこたえるように誠が電話に出てくれたのだった。

「あ！土井さん！？無事ですか！？答えてください！もしもーし！」

「・・・・・・・・・・」

ノイズがひどく、誠の声を聞きとることが出来ない。

しかし陽太は何度も何度も誠に呼びかける。

「土井さん！土井さん！・・・・・・・・・・土井さん！無事なら返事してください！」

「・・・・・・・・・・よ・・・・・・・・・・・・陽太か？」

ノイズとノイズの間から、小さな小さな誠の声が聞こえてきた。

友恵も軍人たちも陽太も、ほんの少しだけホッとする。

「お父さん！無事でよかった。」

「本当だよ、土井さん。電話がつながらないから不安で不安でしょうがなかったよ。」

飛行船内は安心ムードに包まれ初めていた。しかし、これはつかの間の安心にすぎなかった。

「・・・・・・・・・・・・悪い・・・・・・・・・・・・・・・・・・。俺は・・・・・・・・・・・無事じゃ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・無い。」

「え！？」

安心は一気に消え去り、不安が飛行船内を包み込む。

「お父さん！？今どこにいるの！？」

と友恵が質問すると、誠はゆっくりとした口調で答えた。

「トンネルの・・・・・・・・・・・・・・・前だ。」
「トンネルの前だと!?まだトンネルに入ってないのか?いったい何があったんだ!」
「フハハ・・・・・・・・・・・笑うなよ?泣くなよ?怒るなよ?俺は今なぁ・・・・・・・・・・小笠原怜次と戦ってんだよ。」
「な・・・・・・な・・・・・なんだとぉ!?」

飛行船内の不安は、絶望へと変わっていった。
「・・・・・・・・・・・・今こうやって話ししている間に・・・・・・・・・・・あいつはどんどんこちらに近づいてくるんだよ。・・・・・・・・・・・・短刀はあと一つ。もう全身ボロボロだ。」
陽太のケータイから聞きとった限りでは、誠の闘志は伝わってこない。もうボロボロな上に、武器もなく、ただただ殺されるのを待っている誠の姿しか陽太には想像できなかった。
「あんた死ぬ気じゃねぇだろうな!」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
誠はまた黙りこむ。
「土井さん!あんたにはこれだけの多くの軍人と、たった一人の娘を守り抜く義務があるんだぞ!それなのにあんたは死ぬ気なのか!?」
無理なことを言っているということは陽太自身も分かっていた。だが、こう言ってやるしかないのだ。

誠も自分の背負っているものの重大さには気付いていた。だが、無理なものは無理なのだ。どうあがいても怜次には勝てない。努力とか才能とか以前に、怜次に戦いを挑んでしまったこと自体が大きなミスだ。

「死にたかねぇよ!俺は死にたくない!・・・・・・・・・・だって・・・・・・・・・・・俺はまだ、何もしてねぇじゃねぇか!!」

誠の声が急に大きくなる。すると、陽太はそれ以上に大きな声で誠に向かって怒鳴った。
「だったら戦い抜けよ!!!」
「!?」
「守り抜くのがあんたの義務なんだ!だったら最後まで戦えよ!弱音なんか吐くんじゃねぇ!俺たちは・・・・・・・・・俺たちは!!・・・・・・・・・・・・あんたの最期を・・・・・・・・・胸に刻みつけるぜ。」
陽太の目からは大粒の涙がこぼれ始めていた。歯を食いしばり、胸を張り、最後まで戦えと誠に言い放った陽太の姿を見て、友恵も軍人たちも涙をこぼす。

「・・・・・・・・・・・・・・・陽太。」
「・・・・・・・・・・・・なんだよ。」
「感謝するよ。本当に・・・・・・・・・・・・。君は本当に・・・・・・・・・・・清そっくりだ。・・・・・・・・・・・・・・・それじゃあ・・・・・・・・・・・また今度な。」
と誠は言った後、ケータイを地面に置いたまま立ち上がり、トンネルの前に立ちはだかる狂人に向かってゆっくりと歩き始めた。

「最後の電話はそれでいいのかい?クフフフフフ。」
傷一つ負っていない怜次はまだ余裕の表情を浮かべていることも出来てしまう。
「ああ。十分だ。」
「それで?貴様はまだ戦うのか?それとも諦めて切腹するか?さぁどうする?」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
何度も言うようだが、怜次は不死身だ。麻痺剤も毒も効かない最強のバケモノだ。戦いを挑むことは死に急ぐということだ。戦うこと

自体がミス。努力したって無駄。才能なんてクソでしかない。

だが！それでも！

誠は上体を低くして、戦闘態勢を取った。

それと同時に誠は懐から『エメネ』と書かれた鉄球を取り出した。

（これだけは使いたくなかったんだがな。）

「爆弾か？」

「ああそうだ。」

誠はもうろうとする意識の中、必死になって怜次に向かって走っていく。最後の短刀と、最期の爆弾を持って。

まず誠は怜次に向かって短刀を飛ばした。短刀は怜次の左胸を貫通した。

直後、誠は怜次に向かって体当たりを仕掛けると同時に、爆弾についている鉄のピンを抜き取った。

「・・・・・・・・・・・・・」

青白い強烈な光が誠と怜次を包み込む。

（兄さん、あんたの望み通り、豪牙一族はおそらく滅びるだろうさ。だが許してくれ、俺の手によって滅んだわけではないんだ。まあ詳しい話はそっちでするか。・・・・・・・裕子、お前が死んでから、俺は毎朝壁に短刀を刺しまくってしまうほど精神が崩れたし、友恵もトラウマを抱えちまったよ。でもな、今は友恵も元気にやってるし、あの憎き春江田大も死んだ。まあこれもそっちで詳しく話すよ。友恵、お前にはもう謝ることしかできない。裕子が死んでか

ら俺はお前を守るって自分に決めていたんだ。信じてくれるかい？本当だよ。だからお前は、生きてくれ。たとえこの世界が炎に包まれようが、お前だけは生き残れ。・・・・・そして陽太、さっきも言ったが、お前には感謝している。お前はやっぱり清の息子だ。素晴らしい素質を受け継いだよ。友恵を、みんなを・・・・・よろしく頼む。清、俺はもしかしたら、最期の最期でお前を超えたかったのかもしれねぇな。だからあんなバケモノに戦いを挑んじまったんだろうな。お前には話したいことがたくさんある。今、そっちに行くよ。・・・・・・・・・・・・・・・みんな、すまない！だが、これが・・・・・・・・・・・・・・・俺の・・・・・・・・・・・・・・・最期だ。）

「じゃあな・・・・・・みんな！」

誠は消えていく自分の体を見つめる。

青白い光が無くなる頃には、誠の体は完全に消えてしまっていた。誠の体は風になり、魂はどこか違う場所にいったのだろう。これが、土井誠という男の人生の最期だ。

だが・・・・・・・やはり怜次は死んでいなかった。

怜次の体は、目にも見えない塵一つから回復し、あっという間に元通りになってしまったのだ。

そして、完全に回復した直後、怜次は土井誠の最期を腹の底から笑ったのだ。

「クッハッハッハ

この狂人は、誠の必死さに、哀れさに、無様さに笑っているのだろう。

限りなく絶叫に近い高笑いが、陽太のケータイにも聞こえてくる。

「ク・・・・・・クソォォォ！！！」

陽太は力いっぱいケータイ電話を地面にたたきつけてから涙を拭き、2万人の軍人たちに命令を下した。

「攻撃開始の準備だ！奴らを皆殺しにするぞ！塵も残すな！！」

陽太は怒り狂っていた。

友恵は呆然とした表情で跪いた直後、泣き崩れた。

軍人たちは悲しい気持ちを胸にしまいこみ、準備を開始する。

新宿駅につながるトンネルに、南神奈川鉄道の音が響くことはなかった。

代わりに、トンネルには怜次の高笑いが延々と響き続けてしまうのだった。

指揮無きK飛行船

5月17日21時07分。

Kの飛行船は地上から攻撃を受け始めてしまう。

「緊急事態発生!緊急事態発生!!」

Kの飛行船内が騒がしくなる。

誠が戦死してしまったことによるダメージとショックを受けてしまったK軍たちは、悲しみと憎しみを抑えながら、次の作戦にうつらなくてはならないのだった。

しかし、指揮官がいなくなってしまったKに行動力があるはずもなく、地上から攻撃を受けてしまうのだった。

「ミ、ミサイル攻撃です!衝撃に備えてください!」

「・・・・・・・・・クソォ!」

ものすごい爆発音と衝撃が飛行船内に響き渡る。

「きゃあ!」

友恵は壁にたたきつけられる。

「大丈夫か?うわ!」

友恵に駆け寄ろうとした陽太だったが、飛行船が大きく揺れているせいで、自由に身動きが取れない。

「ミサイルは新宿駅から発射されています。ミサイルの威力といい、飛距離といい、トップクラスです。おそらくゴールド隊の仕業です。」

と情報官から連絡がある。

このままでは撃ち落とされてしまうと思った陽太は、操縦席にいる

人たちに向かって命令を下した。
「こちらも反撃を仕掛けないといけねぇ。爆撃だ！爆撃のボタンを押してくれ！」
「了解です！」

飛行船から大量の爆弾が飛び出していく。

「爆弾が地上で爆破したのを確認したら、地上戦を仕掛ける。みんな、パラシュートの確認をしてくれ。」
Kの軍人たちは自分の背中にパラシュートがあることを確認しつつ、爆弾爆破の報告を待つ。

そして、5秒ほどの沈黙の後、爆弾爆破の報告放送が飛行船内全体に流れた。
「全弾爆破！全弾爆破！」

本来ならばこの後、軍人たちを地上へ放って、地上戦を仕掛ける予定だ。しかし、急遽陽太はそれを中止した。
「待て！まだ行くな！」
「は、はい？」
ここにいる誰もが驚いた。
それも当然だ。たった今、はっきりと大音量で『全弾爆破』という放送が流れたにもかかわらず、突然その後の作戦を中断してしまうのだから。

「陽太？どうしたの？」
友恵が心配そうな表情で陽太に話しかける。
すると陽太は操縦席にいる男に向かって真剣な表情で質問をした。
「なあ、あの爆弾は何秒くらいで地上に到達するか知っているか？」
「えっと・・・・ジェットがついているので・・・確か１０秒で

す。」

「そうだろ?今は明らかに5秒くらいで爆破しただろ?おかしい、明らかにおかしい!」

陽太の中にある何かがそう叫んでいる。

何かが危険を察知しているのだった。しかし・・・・・

「しかし、10秒というのはあくまで目安です。東京の高層ビルとかに当たった可能性もありますし、現在は少し風が強いです。心配は御無用なのではないでしょうか?」

と操縦席の男は言う。

「そうよ陽太、心配しすぎよ。」

と友恵も言う。

陽太は別に指揮官になったわけではないので、軍人たちは忠実に陽太の言ったことに従ってはくれない。全員がそれぞれの意見を出し合って決まっていく作戦で、Kは動いているのだった。

「わ、分かったよ。地上兵を投下しよう。」

「了解。地上兵投下!」

飛行船の後方にある滑走路から、次々と軍人たちが地上に向かって放たれる。

恐ろしいものなど何もないと言わんばかりの表情で、真っ赤に燃える東京に落下していく軍人たちを、陽太は飛行船の窓からじっと見つめていた。

「・・・・・・・・・・」

何か嫌な予感がする。

陽太は何か重要なことに気付けていないような気がしてならなかった。

「まずは１００人の地上兵を投下しました。その１００人から着地の連絡が入り次第、次の地上兵を投下します。よろしいですね？」

「ああ、分かった。」

陽太はやむおえないと言った表情で返事をする。

その直後だった。

先ほど投下された１００名の地上兵たちのうちの１人が、あわてた声で飛行船に緊急連絡をしてきた。

「た、大変です！狙撃されています！地上兵が次々と撃ち落とされています！」

「なんだと！？」

陽太はもう一度、落下していく地上兵たちを窓から見てみる。

肉眼で確認できる限りでは、新宿駅からやや大型の銃で狙撃されているようだった。

「着地できそうか？」

「ま、まだ分かりませんが、銃弾の命中率は非常に高いです。おそらく地上に着地するのは困難なのではぐわぁあああああ！！」

どうやらその軍人も撃たれてしまったようだ。

「・・・・・・・・・あいつだ。」

陽太の予感が的中してしまう。

「陽太？あいつって誰？」

「街の黒い煙で視界が悪い上に、風も強いという最悪の状況下で、あの狙撃技術。間違えねぇよ。地上兵たちを狙撃しているのは、ジュラバヌア・エデルだ。」

「ええ！？」

「さっきの爆弾も、やっぱり撃ち落とされたんだ。だから５秒で爆

破報告があったんだ。」

１００人の地上兵は一瞬にして全滅した。

「クソォ・・・・・・どうすればいいんだ・・・・・・」

爆撃もできなければ、着地することもできない。しかし誠の死を無駄にしないためにも逃げる事はできないＫは必死にどうすればよいかを考え続ける。

そんなことをしている間に次々とミサイルが飛んでくる。

「うわああ！こりゃあまずい・・・・・・」

「火災発生！火災発生！」

新宿駅から放たれるミサイルが飛行船を食い始める。時間がない。

２１時３０分。

新宿駅には１０００人以上ものゴールド隊戦闘員たちが集まっていた。

そして、対空ミサイルとグロック１７Ｌの超強力改造銃を使って飛行船に攻撃を続けているのは、ジュラバヌアエデルただ一人。それ以外の戦闘員たちはエデルに敵を近づけさせないためにボディーガードをやっていた。

「さあ、Ｋはもう動けまい。さあどうする？中川陽太。」

とエデルは少しだけ笑みを浮かべながらコントラバスのように低い声で言う。

陽太は揺れる飛行船の中で目を閉じながら考え込んでいる。

ゴールド隊の攻撃を回避して、うまく地上に降り立つにはどうすれ

ばよいのだろうか。しかも指揮官のいないせいで、不安定になりかけているKの軍人たちを束ねるにはどうすればよいのだろうか。
そんなことを考えている間に飛行船はどんどん崩れていく。
そして・・・・・・・・・

陽太はゆっくりと目を開いて、答えを出した。

答え

「フフフフフフ。さあ陽太、どうするんだ?そこで全滅するか?それとも他に何か作戦でもあるのか?」
エデルは不敵な笑みを浮かべながら飛行船を見上げる。
すると、エデルの背後から1人の老人が現れた。
「エデル殿、新型の銃の使い心地はいかがかな?」
「ムバトラさん。あなたには感謝する。素晴らしい銃だ。」
この老人の名はアル・ムバトラ。エデルの銃を作っている職人だ。
毎日毎日暗い部屋にこもって銃を作っているせいか、ムバトラは顔が青白い。おまけに髪の毛は肩の位置まで伸びているので、なんとなく不潔な感じのする老人である。

「グロック17Lの超強力改造銃だ。以前から使っていたグロック17Lより何十倍も威力が増したはずだ。」
「うむ。だがこれはもはやグロックではないな。」
「ハハハ!そうかい?なら、エメネグロックとでも呼ぼうか?」
「・・・・・・・・・・・・・・・」

グロック17Lは元々射撃大会とかに使われる銃なので、威力があまり無く、命中率だけが高い銃なのだ。ムバトラによって改造されて生み出されたエメネグロックは、その名の通り、エメネを銃のボディや銃弾に埋め込んだので、命中率重視だったグロック17Lに、破壊力が加わったのだ。

エメネは他の金属などに強度を与えることが出来る。だからあらゆる兵器の威力をあげるのには非常に便利な物質と言えるだろう。

「まあ頑張りたまえ。」

ムバトラはそう言い残してどこかへ消えてしまった。

すると、突然ゴールド隊の戦闘員たちが慌ただしくなる。

「た、大変です！飛行船から１０機の小型戦闘機が発射されました！」

という報告があったにもかかわらず、エデルは冷静だった。

「うむ、そうか。なら撃ち落とすまでだ。対空ミサイルの準備をしろ！」

「了解！対空ミサイル準備！」

ゴールド隊戦闘員たちは、大急ぎで対空ミサイルの準備を開始する。

その直後、ひとりのゴールド隊戦闘員があわてた様子でエデルに報告した。

「なんだ！？・・・・・・・・エデル隊長！何かがこちらに向かってきます！」

「向かってくるだと？落下してきているということか？」

「は、はい。」

「爆弾か何かか？」

「いいえ・・・・・違います。あ・・・あ・・・・あれは！！」

戦闘員たちは一斉に上を見上げる。

真っ赤に燃える街に照らされて、朱色になっている夜空にある黒い光。その光はだんだんと地上に近づき、その姿を現す。

「あ、あ、あれは・・・・・・・」

あれは爆弾ではない。ゴールド隊にとって、さらに恐ろしいモノだ。

コードネームは『ブルー』。Ｋの切り札。殺人鬼、中川清の息子。

「け・・・『Ｋのブルー』だぁあ！！！！」

その名も、中川陽太。

陽太がおとりになって１０機の子機を発射させたのではない。１０機の子機をおとりにして陽太を発射させたのだ。

飛行船の中で、深く考え、悩み、努力した結果出た答えがこれだ。

『この俺中川陽太があいつらをぶち殺す！だから他の連中は飛行船にある子機で俺を援護してほしい！』

正式に陽太が指揮官と決まったわけではないので、全員が陽太の言うことに従ってくれるはずは無い。だから陽太は自らを犠牲にして、Ｋの軍人たちを上司部下の関係としてではなく、同じＫの仲間として従わせたのだ。

陽太がそれだけ頑張っているのに、自分らが何もしないわけにはいかない。何かしなければ、とＫの軍人たちに思わせたのだ。

「ぐおおおおおおおおお！！」

陽太はものすごいスピードで落下しながら、懐に手を突っ込み、ハングリーブルーをとりだした。

夜空から落ちてくる陽太を、ゴールド隊の戦闘員たちは唖然とした様子で見上げていた。しかし、その中で唯一エデルは陽太から向けられた異常な殺気に気付くのだった。

（この殺気は！・・・・・・・まさか！）

エデルの目だけはしっかりととらえていた。陽太の持っているハングリーブルーが虹色に輝いていることにだ。

そして、陽太が今エデル達に向けて何をしようとしているかも大体想像がついた。エデルはあわてて戦闘員たちに命令を下す。

「逃げろ！逃げるのだ！」

「に、逃げる？いったいどういうことですか！？」

戦闘員たちが驚いてしまうのも無理はない。だが、今のエデルに理由を説明している暇など無かった。

「とにかく逃げるんだ！この場を離れろ！散れぇぇえ！」

エデルらしからぬ大きな声での命令。間違えなく強大な危険が迫っているということだけは戦闘員たちに伝わった。

しかしその直後、朱色になっている夜空が突然青白い光に包み込まれてしまうのだった。青白い光は戦闘員たちの目をくらませると同時に、痛みすらをも感じさせない速さで彼らの命を奪っていった。そのあとに響いた爆音は真っ赤に燃える大地を歪ませた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・ま、まさかいきなりエメネ砲を撃ってくるとは思わんかったぁ・・・」

間一髪といったところでエメネ砲を回避したエデルは、新宿駅の外にあるがれきの陰に寄りかかり、おさまらない動悸を必死におさえようと努めていた。

するとがれきの陰から陽太が現れ、エデルの眼前に堂々たる態度で立った。

「ジュラバヌア・エデル！覚悟！」

と陽太はエデルにハングリーブルーを向けながら言い放った。エデルは恐ろしい表情で陽太を睨みながら懐に手を突っ込む。

「・・・・・中川陽太・・・・・。我がこんなにも恐ろしいと思った敵は貴様だけぞ。いざ尋常に勝負！」

ムバトラによってエメネグロックと名付けられた銃を2つ構えたエデルは、まるで恐れなど知らぬとでも言いたそうな顔をしていた。

空にはたくさんの子機が飛んでいた。エデルも当然それには気付いているのだが、今は眼前にいる中川陽太にしか興味がないのだろう。ただ陽太を睨み、殺意をむき出しにしているのだった。

「ヲォォオオオオオオオオオオオオ！！！」
陽太は雄叫びをあげながらエデルに向かって走った。そして走りながらエデルに向かって銃弾を放った。

エデルは必殺技でもあるミラーでその銃弾を撃ち落とす。
その時陽太はあることに気がついた。
「ん！？まさか・・・・・・」
エデルの銃の威力が以前戦った時よりも増しているということだ。
ハングリーブルーほどではないが、拳銃の中ではかなりのトップクラスに入るほどの威力にまで進化していた。

だが、それでも陽太の足は止まらない。銃を撃ち続け、どんどん間合いを詰めていく。ミラーは間合いが狭ければ狭いほど繰り出しにくくなる技だ。当然陽太はそれを理解したからこの戦法に出たのだろう。

だがだが、『ミラーのエデル』という呼び名が出来てしまうほどの男に、この戦法は通用しなかった。

陽太がエデルとの間合いを2メートル位まで詰めた時、なんとエデルはそこでもミラーを繰り出し、成功して見せたのだ。
「まぁだまだ！」
陽太は驚いたりうろたえたりする様子など全く見せずに、ハングリーブルーを素早く懐にしまい、右足を大きく振り上げた。
「ん！？」
陽太が突然攻撃方法を変えたので、エデルは少し驚いたような表情になったが、飛んできた陽太の右足を軽やかなステップでひらりとかわした。だが陽太の攻撃はそれでも終わらない。陽太は次々とエデルに向かってパンチやキックを繰り出した。

だがそれは無駄なことである。エデルの動体視力は飛んでくる銃弾を見切ることが出来るほどまでに発達している。故に、キックやパンチなど簡単に見切られてしまうのは当然だ。陽太の勢いのある攻撃に圧倒されかけていたエデルだったが、ここにきてエデルは自分のペースをつかみ始めているのだった。

（フフフフ。キックやパンチなどをいくら繰り出したとて、我はミラーの使い手ぞ？そんなものなどきかぬわ！）

するとエデルは、陽太のパンチをするりとかわしながら、ひざ下まで丈のあるロングコートを脱ぎ、陽太の視界を遮った。

「何！？」

ほんの一瞬だけ陽太の動きが止まる。

「ここだぁ！」

直後、陽太の顔面にエデルの強烈な空中回転キックが炸裂した。

「ぶふぁあ！」

ロングコートの布越しに食らったエデルのキックは見事に陽太の鼻に直撃した。

ロングコートは宙に舞い、陽太はものすごいスピードで吹っ飛ばされ、がれきの山に突っ込んだ。

「フフフフフフ・・・・・」

エデルは不敵な笑みを浮かべながら着地し、宙に舞っていたロングコートを片手でキャッチし、もう一度着直した。

「ク・・・・・クソォ・・・・・」

陽太は頑丈な男だ。一発顔面を蹴られたくらいで戦いに負けたりなどしない。陽太は鼻の骨を砕かれたようだったが、奇跡的に怪我はそれだけのようだ。がれきをかき分けて、もう一度エデルの眼前に立つ。

「頑丈だな。あのキックを食らっても気絶すらしないとは。」

「うるせぇ！テメェのキックなんて小笠原怜次のパンチに比べれば

クソだ！」
「なんだとぉ？」
先ほどまで不敵な笑みを浮かべていたエデルだったが、怜次と比べられたことで、鬼のような表情に変わった。
「怒ったか？怒れよ！・・・・・そうでなくっちゃ楽しくねぇぞ！テメェ、ゴールド隊の頭なんだろ？だったらもっと怒れよ！」
と陽太は言った。
それを聞いたエデルは驚いた。
（戦いに楽しさを求めているのか！？フフ・・・・・こいつ・・・・・形は人間だが、中身は立派なバケモノだ！）
「フフフフフ。そうかい。言われずとも我は怒っているぞ。かかってこい。この戦いを、楽しませてやるよ、バケモノ。」
とエデルは陽太に言い放った。

エデルは陽太にバケモノと言ったが、戦いを楽しもうとしているのはエデルも陽太も同じ。エデルの心も十分バケモノだ。

「オルァア！」
陽太は素早く懐からハングリーブルーを取り出し、エデルに向かって銃口を向けようとした。

その時、陽太はエデルが自分よりも先に銃を構えていることに気づいた。
「先手、とったぞ！」
エメネグロックから放たれた銃弾は陽太の心臓をめがけて飛んできた。
（何！？）
陽太は素早い動きでその銃弾をかわそうとするがかわしきれず、右腕にその銃弾を食らってしまう。
「ぐわあああああ！」

陽太が着ていたロングコートは防弾機能が付いていた上に、体には防弾剤が塗ってあったのだが、エメネグロックの銃弾はその防弾機能らを突破して見せた。以前エデルが使っていたグロック17Lの銃弾ではありえないことだ。

「エメネによって加工された銃弾だ。貴様の防弾剤など簡単に突破するぞ。」

「クソォ！」

陽太は右腕の痛みに耐えながら、左手でハングリーブルーを構えて、エデルに向かって銃弾を放った。

「無駄だ。」

しかし、いともたやすくミラーで回避させられてしまう。

「ダメか・・・・・・」

「どうした？中川陽太、そんなものでは、全く楽しめんぞ？」

「・・・・・・・・・・クッソォォォォ！」

陽太は悔しがるような表情でエデルを睨む。

「貴様、誰にケンカを売ったか分かっているのだろうな？」

ジュラバヌア・エデル。

彼こそが、世界有数の超大型戦闘屋集団、反政府組織ゴールド隊の頂点に立つ者なのだ。

陽太はそんなものにケンカを売ってしまったのだ。無謀な事をしてしまったのかもしれない。

だが陽太は全く後悔はしていなかった。なぜなら、エデルにケンカを売らなければ、Kはただの敗戦国になってしまっていたからだ。

これは試練だ。強大な敵を倒さねばならないという一つの大きな試練だ。

（そうだ。まだ戦いは終わってねぇ！俺の心臓はまだ動いてる！な

んだ、まだ右手に銃弾食らっただけじゃねぇか。まだまだいける。いくぞ！）

エデルを倒せなければ、Kの勝利はあり得ない。

陽太の心には不安などひとかけらも存在しなかった。

答え（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます！

感想を書いてくれるとありがたいです。お願いします！！！

勝つか死か

『ミラーのエデル』を倒すにはどうすればよいのだろうか。
陽太は右手の痛みに耐えながら、必死に考える。
「・・・・・・・・・銃弾は跳ね返され、格闘技も見切られちまうのか・・・・・・・・・。どうすれば・・・・・・」
すると陽太は、頭上を飛んでいる大量の子機の存在に気がついた。
（そうか！子機（あれ）を使えばいいのか！）

先ほど陽太と一緒に発射された１０機の子機には、機関銃が搭載されていた。陽太はどうにかしてあの子機たちに、銃を撃たせるタイミングというものをつかませたかった。すると、エデルが陽太に笑いながら話しかける。
「フフフフ、どうしたのだ？来ないのならこちらから行かせてもらうぞ？」
エデルはエメネグロックを陽太の方に向け、引き金を引いた。
「クソォ！」
陽太は素早くがれきの陰に飛び込み、銃弾を回避した。
「逃がさん！」
陽太が隠れた巨大ながれきに向かって、エデルは全速力で走り、陽太に追い打ちをかけようとする。その瞬間、エデルの背後から一機の子機が低空飛行をしながら近づいてきた。
「撃ち殺せ！」
陽太ががれきに隠れたことにより、子機が機関銃を撃ちやすくなったのだ。子機に乗っていたパイロットはその瞬間を見逃さなかった。地面スレスレを飛びながら、エデルに向かって機関銃を撃った。
「なにぃ！？」
エデルは驚きつつも素早く１８０度反転し、大量に飛んでくる機関銃の銃弾に対して二つのエメネグロックでミラーを発動した。突然

の出来事であったが、エデルは確実にそのミラーを成功して見せた。
するとその直後、光のような速さで陽太ががれきの陰から飛び出し、エデルに向かってハングリーブルーの銃弾を放った。
「食らえぇえ！」
「ん！？」
エデルが陽太の方へ振り返った時にはすでに、ハンググリーブルーの銃弾は発射されてしまっていた。エデルはミラーを発動することはできなかったのだ。しかし、ハングリーブルーの銃弾はエデルの長い髪の毛をかすめただけで、エデル自身に大したダメージを与えることはできなかった。
（チッ、はずしたか。）
たった一回のチャンスを逃してしまった。もし今ハングリーブルーの銃弾がもう少しだけ低い位置を飛んでいたら、確実にエデルに命中していただろう。
「フフフフ。惜しかったなぁ。決定的だったなぁ。フフフフフフ」
エデルの不気味な笑みは、どこかホッとしているようにも見える。決定的なチャンスをものにできなかった陽太にかかるダメージは大きい。
「クソォ。」
だが、また振り出しに戻ってしまったかと思われたその時、陽太とエデルの頭上に、大量の子機が集結した。
「まだ何か企んでいるのか？・・・・・・・・ん？」
子機はジェッドを真下に向けて一度空中に静止し、その直後、地面に向かって垂直に降下し始めた。
「垂直着陸か・・・・・・・・」
１０機の子機はエデルと陽太の間に着陸しようとしていた。
「させるか！」
と言ったエデルはその子機に向かってエメネグロックを向けた。すると陽太はエデルのその隙を逃さずに、エデルに向かってハングリ

ーブルー弾を放った。
「今度こそ！」
「ぐはぁあ！」
ハングリーブルーの銃弾はエデルの左わき腹に命中した。エデルはよろける。
そして、その間に１０機の子機たちは着陸に成功する。子機から降りてきたパイロットたちは一斉にエデルに向かって銃を向けた。
「エデル！今度こそ終わりだ！覚悟しろ！」
１１対１ではさすがのエデルも苦戦を強いられる。しかも、空にあるＫの飛行船からはＫの軍人たちがパラシュートをつけて降下してきていた。エデルは完全に包囲された。
するとエデルは歯を食いしばりながら、陽太たちの方を睨んだ。
「・・・・・・・つまらん・・・・・・・。我は陽太とサシの勝負を挑んだはずなのに、なんだこれは・・・・・・・。１１対１だとぉ？ふざけるな。」
エデルの怒りは完全に限界を超えた。
「お、おい・・・・・・。エデルの様子が・・・・・・おかしいぞ？」
陽太を含めた１１人のＫ軍はエデルの異変に気付いた。
エデルの目つきは明らかに先ほどとは違い、殺気に満ちていた。その殺気は、Ｋの軍人たちを飲み込んでしまいそうなまでに禍々しく、臆してしまいそうになった。
「我は中川陽太と戦っている。邪魔をするな・・・・・・・。邪魔をするなぁ！！邪ぁ魔ぁをぉするなぁあああああああああ！！」
エデルの絶叫とともに放たれるエメネグロックの銃弾は、一弾一弾確実にＫの軍人たちの心臓を貫いていく。
「ぐわぁ！」
「ウワアアア！」
「くそぉおおお！」
バタバタと倒れていく軍人たちを見た陽太は、あわててハングリー

ブルー弾をエデルに向かって放った。
ハングリーブルー弾はエデルの頭に飛んでいったが、エデルは素早い動きで首を右に傾けて、その銃弾をあっさりとかわした。
「な、なんだと？」
あまりにもあっさりと銃弾をかわされてしまったので、陽太は驚きを隠せなかった。

気付いてみれば陽太以外の軍人たちは全滅。
しかも、先ほど飛行船から飛び出して、降下中だった軍人たちまでも全員撃ち落とされてしまったのだ。
「なっ・・・・・・・・・。」
呆然と立ち尽くすことしかできなくなった陽太の背後に、地上兵として活躍するはずだったKの軍人たちの死体がボトボトと落ちる。
「フフフフフフフフフフフフ・・・・・・・・。フフハハハハハハハハハ！！！」
陽太に向けられたエメネグロックの銃口。
（終わった・・・・・・・・）
敗北を目前にした陽太に、もはや戦意というものは存在しなかった。

そして、大量のエメネグロック弾が陽太の体に向かって飛んでいく。
右肩、左わき腹、左肩、右わき腹、右耳など、体のあちらこちらに銃弾を食らった陽太は、ついに地面に倒れ込んでしまう。
「ク・・・・・・・ソ・・・・・・・・・・」
奇跡的に心臓に命中していないのではない。エデルは陽太の心臓を狙わなかったのだ。なぜだろうか。今ならとどめをさせたはず。なのに、エデルはとどめを刺さなかった。
「フフフフフフ。」
エデルの体の周りから禍々しいオーラが消えると同時に、エデルはエメネグロックを懐にしまった。
「こ、殺せよ・・・・・・・・。オメェの勝ちだ・・・・・・・・・

殺せ・・・・・殺せ・・・・・クソォ・・・・・・」
こんなにも自分が無様だと思ったのは陽太にとっては人生2度目だ。いっそのこと殺してもらいたかった。しかし、エデルはニヤけながら首を横に振った。
「今回はサシの勝負では無かったからな。我は正々堂々貴様に勝ちたかった。今回は生かしておいてやる。フハハハハ！」
と言い残し、エデルはどこかに向かって歩き始めた。
「なんだと！？・・・・・・・ふ、ふざけるな！・・・・・・・・・ま、待てぇ！」
陽太の叫びはエデルには届かず、エデルはどこかに行ってしまった。

「・・・・・・・・・・」
後に残ったのは、Kの軍人たちの死体と大量に負ってしまった傷。
そして、大きな恥、むなしさ。
（正々堂々勝負しなかったのは俺の方だ。なのに・・・・・・、なのに俺はこんな姿になって・・・・・・。しかも、情けをかけられた・・・・・・・・。クソォ！クソォ！）
「クソォオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

ハングリーブルーを持たされた意味だとか、誠が死んでしまったことだとか、努力する姿勢だけで軍人たちを従わせようとしていた自分だとか、何もかもが嫌になった。何のために戦っていたかすらも見失いかけてしまっていた。

自分のために戦っていたんじゃないのか？
本当に心の底から『自分のために戦うんだ』と思っていたのだとしたら、もっと正々堂々戦えたはずだ。
後悔と、憎しみと、絶望感で頭の中がいっぱいになってしまった陽太は、うずくまったまま動けなくなってしまった。動けないという

よりは、動きたくなくなってしまったと言った方が正しいか。

すると、陽太の頭上からパラシュートにぶら下がりながら降下してくる友恵の姿があった。

「陽太！」

陽太は友恵の声に気付いていたが、うずくまったまま返答しない。

「陽太！陽太！」

友恵は着地し、素早くパラシュートを体から外して、急いで陽太に駆け寄る。

「大丈夫？怪我してるよ？陽太！陽太！」

友恵は心配そうに何度も何度も陽太の名を呼ぶ。すると陽太が小さな声で友恵に返答した。

「大丈夫だよ・・・・・・・・・うるさいなぁ・・・・・・・・・」

「え？」

いきなりうるさいとか言われてしまったので、友恵は驚いた。

「俺なんか、Kの先頭に立っちゃいけねぇんだ。土井さんのやっていた『指揮官』っていうのはなぁ、俺なんかがやるモノじゃねぇんだよ。」

少し怒っているような口調だった陽太に対し、友恵は戸惑いながら質問をする。

「なっ・・・・・・・いきなり何言ってんの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・少し黙っててくれよ・・・・・・・・・・・・・うるさいぞ・・・・・・・・」

「なんで・・・・・怒ってるの？」

「怒ってなんかいないよ・・・・・・・・・・・・。」

陽太はうずくまったまま友恵に反論する。

「怒ってるじゃない。」

「怒ってねぇよ！！」

陽太はつい怒鳴ってしまった。友恵は陽太のことを心配してくれていたのに、陽太は友恵を傷つけてしまったのだ。陽太は怒鳴った後

で、自分が怒鳴ってしまったことを後悔した。
「・・・・・・・・・・ごめん。」
友恵はすぐに陽太に謝った。
「俺こそごめん。」
陽太も友恵に謝った。しかし相変わらずうずくまったままだ。
「・・・・・・・・・」
「俺は怒っていたんじゃない。俺は・・・・・・・・・・」

陽太は確かに怒ってはいなかった。だが陽太は、うずくまって涙を隠しながら友恵に『俺は泣いていたんだ』なんてとてもじゃないが言うことなんてできはしなかった。
「・・・・・・・・・もういいわ。分かったから。何があったかは後で聞くから、今から少し応急手当するから、そのままじっとしててね。」
「ああ。」

最悪な上陸作戦となってしまったことは間違えない。誠が死に、陽太も大きなダメージを負ったのだから。

失いたくないモノを失い、負いたく無いモノを負ったといったところだろう。

だが、Kはまだ戦争に負けたわけではない。いずれまた、怜次ともエデルとも戦う時が来るだろう。

陽太は心に刻みつつ、自分の涙に誓った。『次に彼らと戦う時は、勝つか負けるかではなく、勝つか死ぬかを賭ける。』と。

戦争の陰に潜む大きな影

陽太との戦いを終えたエデルは、新宿駅より西を目指して歩き続けていた。しかし・・・・・・

「ぐはぁ！」

エデルは口から血を吐きながら地面に倒れてしまう。先ほどの戦いで傷を負ったのは陽太やKの軍人たちだけでは無い。エデルも左わき腹に深い傷を負っていた。エデルは朦朧（もうろう）とする意識の中、懐からトランシーバーを取り出し、リナやジェインを含む部隊と連絡を取った。

「・・・・・・・・新宿駅から西に3キロ歩いたとこまで来てくれぬか？歩けなくなってしまった。おそらく出血がひどいせいだ。」

とエデルが言うと、トランシーバーの向こうからリナがものすごいあわてた様子で話してきた。

「だ、大丈夫ですか隊長！しっかりしてください！」

「大丈夫だ。早く来てくれ。」

エデルとて人間だ。血が無くなれば弱るし、傷を負えば痛みを感じるのである。

するとそこに、人間ではない奴がやってきた。

「ヒュフフフフ。ういぶんほぶああはははいはええう（ずいぶんと無様じゃないかエデル）！」

「そ、その声は・・・・・・・」

舌が無いせいでまともな言語をしゃべることが出来なくなってしまっている狂人。誠を殺したバケモノ。地面に這いつくばっているエデルの目の前に、小笠原怜次が現れた。

「ヒュフフフフ。」

「き、貴様ぁ・・・・・・・・・南神奈川鉄道を襲撃していたのではないのか？」

ゴールド隊の情報機関は優秀だ。怜次がＫの領土に乗り込んで南神奈川鉄道を襲撃したことなども、エデルにはしっかりと知らされているのだった。

「ああ、あんあへふほう（あんな鉄道）、いっひゅんへほおぼひへやっはは（一瞬で滅ぼしてやったさ）。」

「・・・・・・・・・・・・土井誠も殺したのか？」

「ヒュフフフフフ。もひおんは（もちろんさ）。ぶあまあっはおぉ（無様だったぞぉ）。いふいほっへいあっは（実に滑稽だった。）ヒュフフフフフ。」

「・・・・・・・・・・・・」

エデルはゆっくりと立ち上がりながら、エメネグロックを取り出そうとしたが、左わき腹の痛みに耐えきれず、また地面に倒れてしまった。

「クソ・・・・・・・・・」

「ヒュハハハハハ！なんあなんあ（何だ何だ）！へめえもぼおぼおやええは（テメェもボロボロじゃねぇか）！あんいなえようはいあはへをはへはんあ（なのになぜ陽太に情けをかけたんだ）？」

「・・・・・・・・・・・フッ・・・・・・・・・さぁな。」

『戦いをもっと楽しみたかったから』と答えるのが正しかったのかもしれない。だがエデルは、そんなバケモノじみたセリフを、この怜次の前では吐きたくなかった。

「あんへんひお（安心しろ）。いまほほえへめぇをほおひはいわひええ（今ここでテメェを殺したりはしねぇよ）。まぁへえへえなはまあはふへいふうおをばはいへぇいまっへいえばいい（まぁせいぜい仲間が助けに来るのをバカみてぇに待っていればいい）。ヒュハ

ハハハハハハ！」
と怜次が笑う。
するとエデルは一つ怜次に質問をした。
「貴様こそ今ここで・・・・・我に情けをかけたではないか。いったいなぜ殺さぬ？今ここで我を殺せばよかろうに。」
「ヒュフフフハハハハハハハ！ひをおほえあんほおはふお（死を恐れないその覚悟）、すばあひいほおもうお（素晴らしいと思うよ）。えもぼふはへめぇをほほえはほおはあい（でも僕は、ここでは君を殺さない）。ほんあほほひあわぼうふおぷあんわあいあひいあっひゃうはあえ（そんなことしたら僕のプランは台無しになっちゃうからね）。」
「プラン？貴様はいったい何のプランを立てているというのだ？」
「ほほえわいわん（ここでは言わん）。あはほおうひわはう（だがそのうち分かる）。はおひみいひへほうおいい（楽しみにしておくといい）。ヒュハハハハハハハハ！」
と言い残し、怜次はどこかに向かって歩き出し、がれきから舞い上がる黒い煙の中に消えていってしまった。

（プランだと？我々はあいつの手の平で踊らされているのか？）
怜次のプランとは一体どんなものなのだろうか。エデルは嫌な予感がしてならなかった。
するとエデルの背後からジェイン達の部隊が走りながらやってきた。
「隊長！大丈夫ですか？」
「あ、ああ。わき腹の傷から出血がひどいんでな、とりあえず止血を頼む。」
「分かりました。ロングコート脱がせますね。」
ジェインは持っていたポーチから包帯とガーゼを取り出し、エデルのグレーの戦闘用ロングコートを丁寧に脱がせた。
ロングコートの下は血まみれだった。ジェインの周りにいたゴールド隊戦闘員たちはその血を見て、少し言葉を失った。

「隊長・・・・・・・・・・。少し休んでいた方がいいと思いますけど？」
「・・・・・・・・・・そうしたいのだがな、そんな暇は我には無い。」
とエデルが言うと、戦闘員達の間からリナが大きな声でエデルに怒鳴った。
「ダメです隊長！休んでください！そんな傷で戦われても、自分の命が危うくなるだけです！」
他の戦闘員たちも同じことを思っていた。
「し、しかし・・・・・・・・・」
「俺たちに任せて、隊長は少し休んでください。これはリナだけでなく全員からのお願いです。」
とジェインも言う。
エデルは自分のわき腹の傷を見つめる。自分では大した傷では無いと思っていたのだが、予想以上に出血がひどい。やはりこれもハングリーブルーの威力のせいなのだろうか。
「休めと言われても、いったいどこで休めば良いのだ？」
「この近くにジェイン部隊のテリトリーがあります。そこに行きましょう。水と食料も確保できています。」
「そうか、なら皆の言う通り、休ませてもらおうか。」
「・・・・・・・・・ありがうございます。」
リナは少し安心したような表情になった。

だが直後、エデルは意識を失ってしまった。
「た、隊長！」
「・・・・・・・・・・」
ジェインはあわててエデルの呼吸の確認をする。
「息はしている。おそらく衰弱状態にあるのだろう。リナ、先にテリトリーに戻って栄養剤の注射の準備をしておけ！」
「はい！」

リナはテリトリーのある方向に走っていった。
戦闘員たちはエデルの2メートルの巨体を、3人がかりでテリトリーまで運んでいくのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・

同日23時50分。飛行船の窓から南浦大輔が、燃える東京の街を眺める。

そして大輔は、中川清が言ったこの言葉を思い出す。
『これからこの国が崩壊していくっていうのに、いったいどうしてそれを黙って見ていられるんだ!!』

清の死刑に立ち会った大輔はこの言葉をオンタイムで耳にしていた。
世間には広まることはなかったが、清の言ったことは正しかった。

日本は完全に崩壊している。
それはこの東京の景色を見れば一目瞭然。もはやここは国ですらない。

「・・・・・・・中川清・・・・・・・。お前はあの時すでに、こうなることを知っていたのかい?」
と大輔は今は亡き清に問いかけてみる。
おそらく清はこうなることを予想していたのだ。
豪牙が日本を統治する事に対し、まずKが反発し、次にゴールド隊が反発する。その二つの集団が動き始めれば間違えなく小笠原組が邪魔をしてくるだろうと予想していたのだろう。

だとしたら7年前、清が人殺しをしていた理由は何だ?

『いいか陽太?あの人たちを殺さないとこれから日本は大変なことになるんだよ?』

と陽太に対して毎日のように言っていた清だったが、『あの人たち』とは一体誰をさすものなのだろうか。陽太はなぜか全く覚えていない。

大輔は過去の事件のデータをくまなく調査し、清に殺された人たちの共通点を探した。しかしその調査が実ることはなく、真相には一歩も近づくことさえできなかった。被害者には共通点がない。

だが大輔は一つ大きな確信があった。それは『清はこの戦争の結末までもを知っていた』ということだ。

この戦争の陰には恐ろしい何かが潜んでいるに違いないと大輔は予想していた。

戦争の陰に潜む大きな影（後書き）

感想かいてください。
お願いします。

激戦　1

陽太は全身のあちらこちらに銃弾を食らっていたので、陽太の体はボロボロになっていた。だがそのボロボロになってしまった体から流れ出る血を、友恵がなんとか止めてみせた。
「はい終わり！一応止血だけは完了したわ。」
「すまない。」
陽太は申し訳なさそうに友恵に謝る。
「まったく・・・・・・どんだけあんたは頑丈な体してんのよ。これだけ銃弾を食らって生きているなんて奇跡よ。」
友恵は少し呆れた様子だった。
「そうか？・・・・・・・・・さて、これからどうするかなぁ。」
「・・・・・・・・・・」
陽太はゆっくりと立ち上がり、これからどのようにしてKの軍隊が行動するかを考えようとした。だがその前に陽太は自分が指揮官でないことに気が付いた。
「そうだった・・・・。俺は指揮官じゃないんだ。俺が決断することじゃないな。」

指揮官は部下たちの信頼が無くてはならない。今の陽太は信頼されるといった要素がない。仲間を置き去りにして命がけで飛行船から飛び降りて、エデルにケンカを売り、しまいには命を落としそうになってしまった。そんな陽太が仲間に信頼されることなどまず無いのだ。
だから陽太は自らを指揮官に向かない者としたのである。
だが友恵は一度首を横に振り、陽太を説得し始めた。
「陽太、私は陽太が指揮官で良いと思うよ。」
「なんでだ？」
「・・・・・・・・お父さんもそう言ってたの。自分が死んだら陽

太が指揮官だって言ってたの。」
友恵の言っていることは事実だった。
確かに誠は昔、“自分の後継ぎは陽太だ”と言った。だが陽太はどうしても自分が指揮官になることが許せなかった。
「ダメだよ。土井さんがそう言っていたとしても、俺には指揮官なんてものは向いていない。周りを見ずに、バカみたいに突っ込んでしまうような人間に、指揮官なんてものが務まるはずがない。」
と陽太は言った。だがそれでも友恵は、陽太が指揮官になることを勧めた。
「さっき、そのバカみたいに突っ込んでいく勇気が周りにいた軍人たちを熱くしたんじゃない！元々Kなんて政府に反発するために作られた小規模な集団よ。ご立派な指揮官なんて必要ないわ。私たちに必要な指揮官はあんたみたいなまっすぐな人よ！」
「・・・・・・・で、でも・・・・・・」
陽太は戸惑いを隠せなかった。
「陽太さ、小笠原怜次と戦っているお父さんに“戦い抜けよ”って言ってくれたでしょ？結果的にお父さんは死んじゃったかもしれないけど、あんたのあの言葉に詰まっている揺るぎない闘志がお父さんの心までもを動かしたのよ。だからお父さんはお父さんらしくあの世に逝けたのよ！」
小笠原怜次と戦っている時点で誠の死は決まっていた。それでも誠は部下のため娘のために戦っていた。結局誠は怜次の前に倒れ、手も足も出ないといった状況まで追い込まれてしまった。だが誠は逃げながら死ぬということはしなかった。なぜならそれは、陽太が誠に『戦い抜けよ！』と言ったからだ。陽太が誠にそう言わなければきっと、誠は最後まで戦い抜いて死ぬことはなかっただろう。
しかし、全力を尽くしたとはいえ、“誠が死んでしまった”ということは変えられない。そのせいか、友恵の目からは大量の涙があふ

れてきてしまう。
「友恵・・・・・・・・・・」
「Kや私たちのために尽くして戦って死ぬ。それが・・・・・・・・・・お父さんの・・・・・・・・・・生き様だったのよ！」
（どうして死んじゃったの？まだ１４歳の私を残して、先にあの世に行っちゃうなんて。）

友恵には母親も兄弟も親戚もいなかった。だから友恵を育ててくれていたのは誠だけだった。その誠がいなくなってしまったのだから、友恵はもう一人ぼっちになってしまったのである。
「あれが・・・・・土井さんの生き様・・・・・か。」
「だからその生き様を『Kの勝利』につなげるのは、陽太なのよ！陽太しかいないのよ！」

自分に指揮官という重要な役が務まるのかという疑問は陽太の心に残ったが、涙ながらに自分を指揮官にしようとする友恵を見て、ついに陽太の心が動いた。

「・・・・・・・・・・・・貸せ！」
「・・・・・・？」
陽太は友恵の右肩についていたトランシーバーを取り、K軍全員に向けて話し始めた。
「Kの軍人全員に告ぐ。たった今より、この作戦の指揮はこの俺中川陽太が取らせてもらう！ついてきてくれなんて言わねぇ。だがKの目標は豪牙一族を滅ぼして日本という国を手に入れることであり、俺たちは同じ目標を持っている仲間だ！だから誰が指揮官になろうがやることは決まっている。」

『俺が指揮官になってもいいんですね？』なんてことを言ってしまえば間違えなく士気が下がってしまうし、不満を持つ人も出てきた

かもしれない。だからこそ陽太はそんな弱気なことを言わなかった。それが陽太という男だ。Kの軍人たちは何の不満も持たずに一瞬にして陽太の部下となった。

「中川陽太指揮官！ご命令を！」

と1人の部下が言う。そして、陽太は堂々たる態度でK軍全員に命令を下した。

「目標は小笠原一族、ゴールド隊、豪牙一族残存兵の三つだ！これ以上奴らに好き勝手やらすんじゃねぇ！地上兵は銃、剣、爆薬などすべてを持って飛行船から降りてこい！総攻撃だ！総攻撃を仕掛ける！」

大地に響き渡るようなその命令は、部下たちの心にまでも響いた。

「了解（イエッサー）！」

陽太はまず、東京を占拠しようと考えていた。

現在日本で一番の激戦区となっている東京を占拠することが出来れば、もっとも効率よく敵の戦力を殺ぐことが出来ると考えたからだ。しかし、それは当然簡単なことではないし、Kの軍勢では少し厳しいかもしれない。個々が強い小笠原一族の組員たちや、数が多いゴールド隊の戦闘員、卑怯さとしつこさを持っている豪牙一族の戦闘員たちなど、さまざまな敵を皆殺しにしなければならないのだ。

そして何より、ジュラバヌア・エデルと小笠原怜次を倒さなければならない。

非常に厳しい戦いが予想される。

だが現在、東京以外の場所では激戦が終わり、豪牙一族の敗北といった形で終結を迎えてしまっており、そこで生き残ったゴールド隊と小笠原組の兵力はここ東京に集結しつつあるのだった。

つまり、東京を占拠できれば日本を占拠したも同然、この戦争の勝者になれるのである。

だがそんなことはこの戦争の中で戦っている者は全員承知していることだ。

そんな時だった。

全滅寸前の豪牙一族が、とんでもない作戦を開始してしまうのだった。

激戦　2

豪牙大が死んでからというもの、豪牙一族は衰退する一方である。おまけに大が豪牙城を爆破してしまったので、本拠地となる場所はもはや無いに等しい。

誰もが豪牙の敗北を予想していた。

しかし、豪牙一族はまだあきらめてはいなかった。なんと、新しい当主を任命させ、新体制でこの戦争に参加することを明らかにした。

「新しく豪牙一族の当主になった、豪牙拓朗（ごうがたくろう）だ。よろしく頼む。」

拓朗は豪牙一族の遠い親戚であり、豪牙大が死んだ時に当主になる予定だった人物なので、今こうして当主となった。今年で４０歳になる拓朗だったが、精神年齢はまるで子供。自分勝手な振る舞いが目立ってしまう人間だ。

身長は１７０センチとやや小さめだが、体重は１３０キロ。そうつまり『デブ』である。そして肩まで伸びている、無駄に長い髪の毛はなんとなく不潔感をもたらしている。

池袋にある小さな地下シェルターの中。ここは元々詐欺師などが集まる業者が使っていた場所だったらしく、出入り口はそう簡単には見つけられないようになっていた。やや狭いのが難点だが、基地を失ってしまっている豪牙一族にとっては快適な場所となっている。

拓朗は、たくさんの戦闘員たちの前にあるソファーに座りながら、現在の豪牙一族の状況についてこう語った。

「フーン。まぁ今の豪牙はあんまり良い状態では無いよね。でも僕ちゃんはね、豪牙はこの戦争で負けることはないと思うんだよ。」

明らかに衰退している豪牙の状態を見たとは思えない発言だった。
しかし、拓朗には豪牙一族を勝利に導く秘策のようなものがあったのだ。一体それは何なのか？1人の豪牙戦闘員が質問する。
「・・・・・お言葉ですが拓朗さま。なぜこの状況でも我々が負けないと言いきれるのですか？」
すると拓朗は誇らしげな顔でこう答えた。
「僕ちゃんたちには科学力というものがあるからだよ。」
「か、科学力！？」
豪牙の戦闘員たちは皆驚いてしまった。豪牙一族といえば魔法を使う一族として有名だったというのに、ここにきてなぜか『科学』という言葉が出てきたのだから。
「拓朗様？我々は魔法を使う一族ですよ？なのになぜ科学の力で戦わなくてはならないのですか？」
と1人の戦闘員が質問した。その直後、拓朗の様子が豹変した。拓朗は突然ソファーから立ち上がり、怒り狂ったような表情になった。
「なぜぇ？君は僕ちゃんのやり方が気に入らないのかねぇ？」
それに驚いた戦闘員はあわてて謝り始めた。
「も、申し訳ありません！そんなつもりは微塵もありません。」
必死に謝った末、なんとか拓朗の怒りを鎮めることが出来た。拓朗はもう一度ソファーに座る。
「魔法なんてね、攻撃を防いだり、杖を使って火の弾を出したりすることくらいしかできないのですよ。僕ちゃんたちには日本を変えてしまうほどの科学力を持ってるんだから、そっちを使わなくっちゃ。」
歴史上豪牙一族は『何か特別な魔法を使って、科学を進歩させた。』となっている。さらに、ロチェル病の感染を止めたのも魔法の力だと言われていた。だがこの拓朗の発言と比較すると矛盾が生じてしまう。

魔法というものが、攻撃を防いだり火の弾を出したりするためだけの物だとしたら、日本の科学技術は一体どのように進歩したのだろうか？そして、ロチェル病の感染をどのようにして止めたというのだろうか？

質問したいことは山積みなのだったが、先ほどのように拓朗が怒ってしまっては手がつけられなくなってしまうので、戦闘員たちはあえてその質問を飲み込んだ。

そのときだった。今ここに、豪牙一族が誇る科学の結晶とも言えるモノが現れた。

「見よ！これが豪牙一族の切り札！科学の結晶だ！」

と言って拓朗は、戦闘員たちの背後にある扉を指さした。戦闘員たちは扉の方へ振り返る。するとその扉の向こうから、１人の男が現れた。

そしてその男を見た戦闘員たちは皆、混乱するほどまで驚いた。

「あ、あなたは！・・・・・・・・どうしてここに！？」

「あなたは死んだはずだ！何で生きているんだ！？」

その男の正体は、以前豪牙城を爆破して逃げて、逃げた先で怜次に殺されたはずの、豪牙大だった。

「だ・・・・大様がなぜ生きておられるのだ？」

大は何も言わずに、ただ無表情のまま拓朗を見つめている。

拓朗は笑いながらこの状況の説明をする。

「フヒヒヒヒ！そう、彼は豪牙大。僕ちゃんの遠い親戚。元豪牙一族の主（あるじ）。確かに彼は死んだ。ぼろ雑巾のように死んだ。でもね、僕ちゃんたちの科学力が、彼をもう一度生きる道に引きずり戻したのですよ！」

拓朗は、大が死んだ時の様子をしっかりと見ていた。そして、怜次に殺された大の死体を回収し、何か得体のしれない物でその死体を蘇らせたのだ。

だが今の大に以前のような図々しさは無くなっていた。
「大様？いったいどうされたというのですか？」
「・・・・・・・・・・・」
大は何も答えない。これにも訳があった。
「豪牙大はもう僕ちゃんにしか従わないただの抜けがらなんだよ。そうだなぁ・・・・・・・・・たとえば・・・・・・・・・・・・・・・。」
「ん？」
すると拓朗は、大の目の前にいる戦闘員を指さしてこう言った。
「大よ！その戦闘員を殺せ。」
「何だと！？」
戦闘員たちは皆驚いた。すると大は軽くお辞儀をしてからその戦闘員の顔面を殴った。
「ぐわあああああ！」
その戦闘員は鼻血を出しながら壁に強くたたきつけられる。直後、大は懐から刃渡り３０センチほどのナイフを取り出し、その戦闘員の左胸を貫いた。
「・・・・・・・・・ほ、本当に殺しやがった。」
戦闘員が１人死んだ。そんな光景を目の当たりにして拓朗は満面に笑みを浮かべる。
「フヒヒヒヒヒヒ。な？いいだろ？いいだろ？僕ちゃんの思い通りに動いてくれるんだ。だから、僕ちゃんの思い通りに動かない戦闘員ちゃんたちはこの戦闘員みたいにぶッ殺しちゃうからね？」
まるで人に甘えるかのようなその口ぶりには、強烈な殺気を感じた。だから戦闘員たちはあわててその場に座り込み、土下座をする。
「な、何なりとご命令を！豪牙拓郎さま！」
服従しなければ殺される。失敗すれば殺される。
戦闘員たちは精神的に追い込まれていた。
だがそうでなくては、そうでなくては豪牙の勝利はあり得ない。

非人道的な作戦を始めなければ、豪牙一族はこの戦争では生き残れない。だから生き残るためにはなんだってやってしまう。たとえ命をもてあそぶようなことでもだ。それが豪牙一族のやり方なのだ。そして豪牙一族は『蘇生者』と呼ばれる戦闘員を大量に作り出したのだ。

5月18日、午前2時。池袋に、大量の蘇生者たちが出現した。

その情報をいち早く察知したのはゴールド隊だった。

すぐさまそこにゴールド隊の戦闘員が池袋に向かう。

「池袋に200体以上の豪牙戦闘員を確認しました。」

「豪牙だと?もう一度調べ直せ!」

「し、しかし・・・・・・・・・」

「いいからもう一度調べろ!あり得ないんだよ!もう全滅しかけているような集団が、200人もの戦闘員を突然出現させるだなんて!もう一度調べろ!」

ゴールド隊の戦闘員が驚いてしまうのも無理はない。豪牙は全滅寸前の集団だ。兵力はもはや100にも満たないほどにまで落ちていたという情報が出回っていた。しかし、突如200人もの戦闘員らが池袋に集まったとなれば、不自然に感じるだろう。

「了解です。もう一度調べます。」

ゴールド隊の情報部はもう一度調査を開始したが、そんなことをしている間に、ゴールド隊とその謎の戦闘員たちは遭遇してしまうのだった。

「いたぞ!あれだ!」

あちらこちらをさまようように歩いている謎の戦闘員を見つけたゴールド隊の戦闘員たち２４０名は、一斉に銃を構えて突撃する。そして気付く。謎の戦闘員の正体はやはり豪牙一族だったということにだ。

「や、やはり豪牙一族だ！なぜだ？なぜあんなに戦闘員がいるのだ！？」

ゴールド隊は少々戸惑っていたが、もう四の五の言っていられないのでとりあえず攻撃を開始した。

「撃てぇ！」

機関銃の銃声が響き始める。その時だった。

「フヒヒ。銃なんて撃っても無駄だよぉん！」

どこからか拓朗の声がする。

機関銃の銃弾は、豪牙戦闘員の体に命中したが、銃弾は体の表面ではじかれて、全くダメージを与えることはできなかった。ゴールド隊戦闘員たちは驚き戸惑う。

「銃が効かないだと？」

「そうだよ。彼らは戦争のために生まれてきたモノだ。銃も効かなければ、戦闘能力も高いんだよ。」

蘇生者たちの体は銃弾が貫通しないほどまでに硬く出来ている。しかも動きも早く、体力もある。戦争のために生まれてきた人間型兵器。こんな兵器を作ってしまえるのも豪牙一族の科学力のおかげなのである。

「貴様は誰だ！隠れていないで出てこい！」

拓朗とはまだ面識がないゴールド隊は、辺りをキョロキョロと見回しながら声のする方を探る。

「僕ちゃんを見つける前に君らは死んじゃう運命だよ。ホレ。」

と拓朗が言うと蘇生者たちは、ものすごいスピードでゴールド隊の戦闘員たちに近づき、ナイフと銃で攻撃を開始した。

「うわあああああああ！」

そして池袋の街の一角に、ゴールド隊戦闘員たちの血しぶきが舞っ

た。

「殺せ～♪殺せ～♪コーローセェ～♪フヒヒヒヒヒヒヒ。」

拓朗は次々と死んでいくゴールド隊の戦闘員たちを見て、子供のようにはしゃいでいた。

そして、そんな拓朗を見て、蘇生者では無い豪牙戦闘員たちは全員こう思った。

（狂ってやがる！）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4129u/

Kのブルー

2012年1月8日12時49分発行